

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査

第3集

1977

福岡県教育委員会

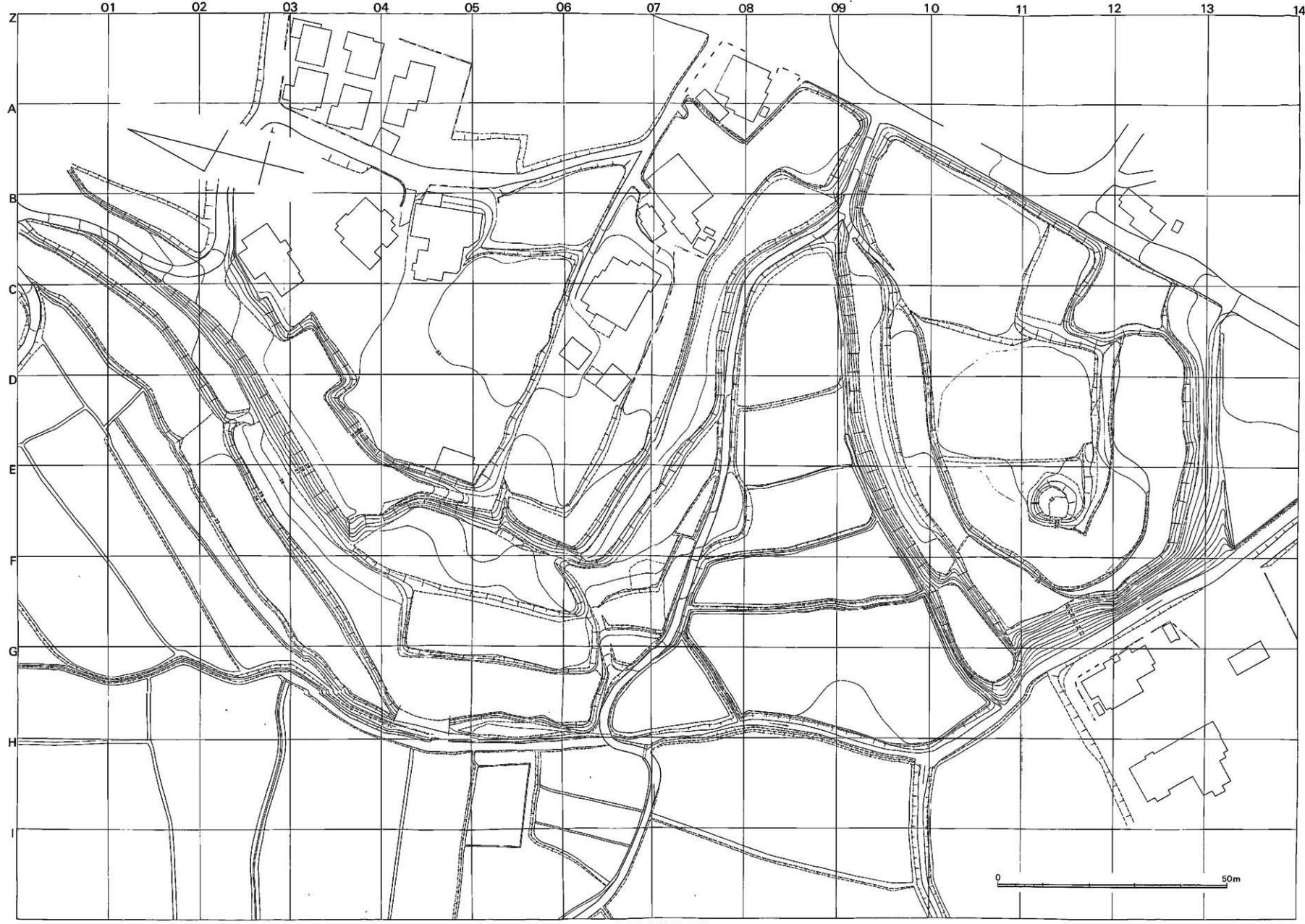
山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第3集

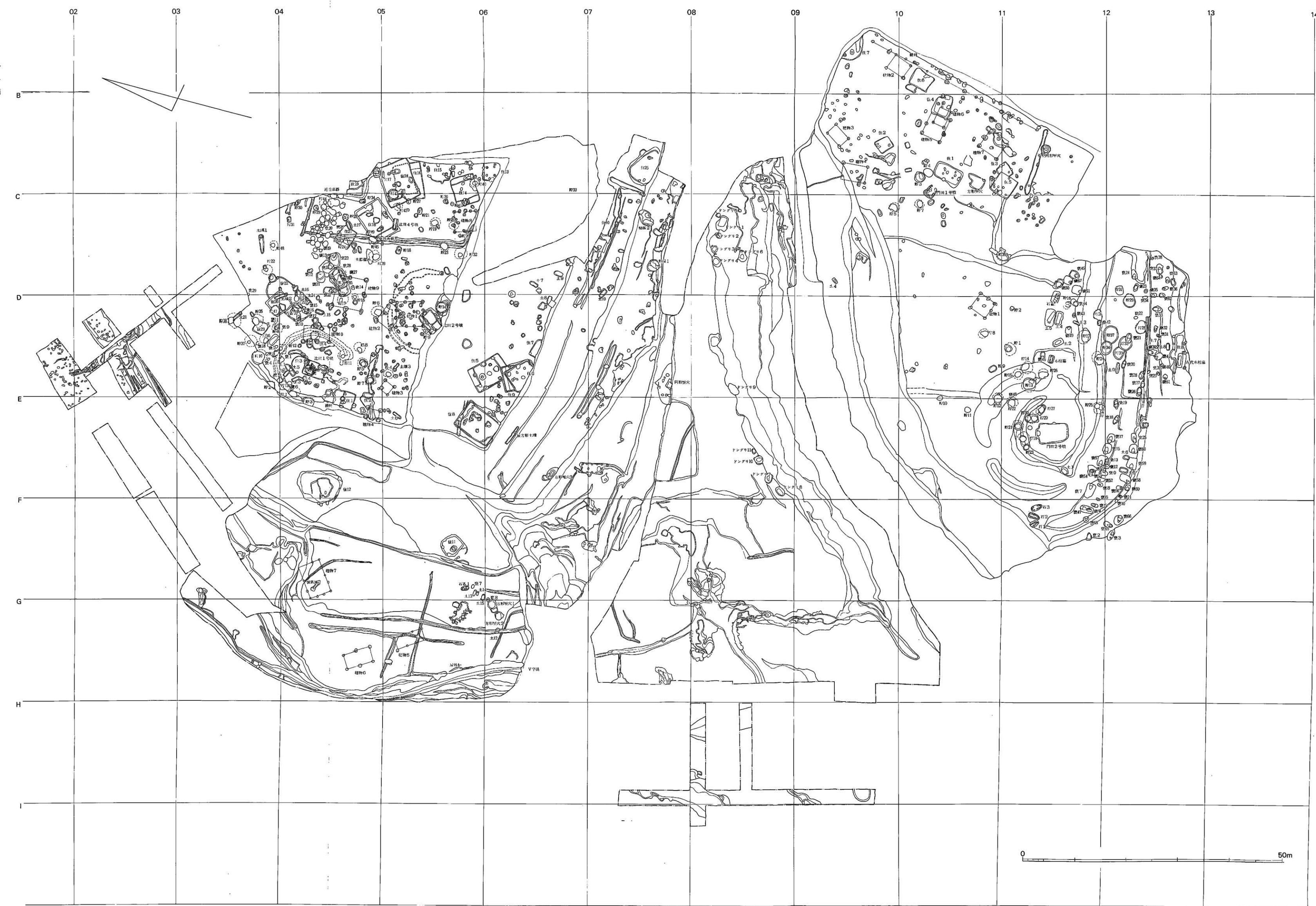
付 図

1977

福岡県教育委員会



門田道跡調査地区全図 (1/1500)



山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査

第 3 集

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて、昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車両基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、春日市と筑紫郡那珂川町所在の遺跡群についてのもので『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集に続く3冊目のものであります。

発掘調査の記録としては決して満足のいくものではありませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対し、一層のご理解とご協力をいただければ幸いです。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮により本書を発刊することができましたことを、心から感謝申し上げます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例　　言

1. 本書は、昭和46年11月22日から昭和49年9月17日までに福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関工事局から委託されて、山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した3冊目の報告書である。
2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I-1	柳田 康雄
I-2	丸山 康晴
II-1	井上 裕弘
II-2・3	木下 修
II-4	柳田 康雄・井上 裕弘
	木下 修・佐々木 隆彦
	宮崎 貴夫・丸山 康晴
II-5	柳田 康雄・井上 裕弘
	木下 修・藤瀬 権博
II-6	宮小路 賀宏・井上 裕弘
	木下 修
II-7	大澤 正巳
II-8	井上 裕弘
III-1・2・3	井上 裕弘
III-4	井上 裕弘・木下 修
III-5	井上 裕弘
IV	佐々木 隆彦

3. 門田遺跡出土の人骨鑑定には九州大学医学部永井昌文教授、材質同定には九州大学農学部松本局教授、鉄滓分析・執筆には新日本製鐵大澤正巳氏の協力を得た。
4. 掲載の写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりであるが、一部写真撮影・執筆には、宮小路賀宏・石丸洋・藤瀬権博・丸山康晴氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、井上裕弘があたった。

本文目次

I	序文	1
II	門田遺跡・門田地区の調査	11
1.	調査の経過	11
2.	立地と環境	23
3.	先土器時代の調査	24
4.	弥生時代の遺構と遺物	37
5.	古墳時代の遺構と遺物	102
6.	歴史時代の遺構と遺物	126
7.	門田地区出土鉄斧及び羽口先端溶着鉄斧の調査結果	163
8.	おわりに	174
III	下原遺跡の調査	177
1.	調査の経過	177
2.	遺跡の立地	177
3.	遺構と遺物	178
4.	包含層出土の遺物	186
5.	まとめ	192
IV	油田遺跡の調査	197
1.	はじめに	197
2.	位地と環境	197
3.	調査の経過	198
4.	調査概要	198
5.	遺構	199
6.	遺物	199
7.	その他の遺物	201
8.	所見	202

I 序 文

本文目次

1. 調査の経過	
(1) はじめに	1
(2) 昭和49年度の調査	4
2. 周辺遺跡の調査	7
(1) ウトロ遺跡の調査	7

図版目次

本文対照頁

図版 1 門田遺跡全景航空写真（カラー）（柳田康雄撮影）	1
2 (1) ウトロ前方後方墳・ウトロ遺跡周辺航空写真（柳田撮影）	7
(2) ウトロ遺跡遺構（丸山康晴撮影）	7
3 (1) ウトロ遺跡・壺棺（木下修撮影）	8
(2) ウトロ遺跡出土壺棺（石丸洋撮影）	9

挿図目次

第 1 図 山陽新幹線の路線と博多車両基地の位置（佐々木隆彦作成）	5
第 2 図 山陽新幹線博多車両基地付近地形図及び遺跡分布図 （日本国有鉄道原図 木下修作成）	折込み
第 3 図 ウトロ遺跡地形実測図（柳田康雄・木下修・宮崎貴夫 ・丸山康晴・小田雅文実測、丸山製図）	7
第 4 図 ウトロ遺跡壺棺出土状態実測図（宮崎・丸山・小田実測、丸山製図）	8
第 5 図 ウトロ遺跡出土壺棺実測図（丸山実測、製図）	9

表 目 次

表 1 山陽新幹線関係遺跡一覧表（井上裕弘作成） 折込み

図版 1



門田遺跡全景航空写真（1972年8月）

I 序 文

1. 調査の経過

(1) はじめに

本書は、下原遺跡（第28～31地点）・門田遺跡（第22～27地点）・油田遺跡（第32-1地点）の発掘調査報告書である。

下原遺跡は、昭和46年11月22日から昭和47年2月29日まで発掘調査を実施した。新幹線関係発掘調査初年度の調査である。

門田遺跡は、第19地点から第27地点におよぶ南北の2つに分かれた舌状台地とその間の谷部の低地から構成されているが、本報告書に掲載するのは第22～27地点として登録されていた南台地の遺跡のうち、弥生時代墳墓を除いた全遺構である。門田という所は大正4年に広形銅矛が1本発見されているところから、遺跡の重要性を考え国鉄との交渉にもこのことを主張し、昭和47年には予備調査を実施した。結局、結果は予備調査も承諾しない地主がいたために、もっとも重要な地点は予備調査ができず最終調査地点となった北台地の中心部にあり、重要な墓塚が発見された時は保存交渉もできないほど車両基地の工事は進み、設計変更の余地は全くなかった。南台地も北台地と同様な遺跡の構成をしているが、北台地と比較すると内容面において劣るところがあるが、両者は同一遺跡として相互に補い合うところが多い。

油田遺跡は、第32地点として登録されていた水田面に隣接する段丘の東斜面にある墓地遺跡である。宅地造成で遺構の大半は破壊されていたと思われるが、国鉄側の手違いで遺跡として追加されていたにもかかわらず、工事が先行し、一部の調査しかできなかった。調査は昭和49年5月23日から6月1日の間実施した。

下原遺跡・門田遺跡（第22～27地点）・油田遺跡関係の調査関係者は次のとおりである。

日本国有鉄道下関工事局

昭和49年度

福岡工事事務所	所長	海原正二
	次長	浦水彰明
	総務課長	脇勉

序文

	設計協議第2係長	吉上	岡野	才光夫
	停車場課長	高石	原倉	計優夫
	同補佐	今川	川信	信優夫
	同係長	石倉	倉信	博優夫
	南福岡工事区長	福永		
	同助役			
福岡県教育委員会				
総括				
	教育長	森西	田村	實郎
	教育次長	古川	太善	久（昭和47年度）
	文化課課長	森英	川井	俊（昭和48年度）
	同	藤井		
	同	菅井		功（昭和49年度）
	同課長補佐	今井	岩井	隆男
	同	姫川	一郎	博一
庶務				
	庶務係長	前田	栄浩	一郎
	同	小川	一	實一
	主事	植田	一	七
	同	藤井	一	史一
	同	吉村	一	功（昭和47～48年度）
発掘調査				
	課長技術補佐	藤井	田岡	史郎
	調査係長	松岡	久郎	宏郎
	技術主任	電木	小路	雄一
	技師	宮下	田中	修二
	同	柳井	上木	彦治
	同	木佐	木下	哲夫
	同	佐々木	木池	治
	同	小宮	崎井	貴康
	嘱託	櫻井		
	調査員			

埋蔵文化財包蔵地発掘調査及び報告書作成委託契約書

日本国有鉄道山陽新幹線建設事業地区における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査及び報告書作成作業の実施に関する委託（以下「作業」という。）について、受託者福岡県知事 亀井光（以下「甲」という。）と委託者日本国有鉄道下関工事局福岡工事事務所長 海駿正二（以下「乙」という。）との間に次のとおり委託契約を締結する。

（総則）

第1条 甲は、乙の山陽新幹線建設事業地区における埋蔵文化財の発掘及び報告書作成について別紙実施計画書に従い作業を実施するものとする。

（期間）

第2条 甲は、昭和49年4月1日から作業に着手し、昭和50年3月31日までに作業を完了するものとする。

（費用）

第3条 乙が甲の作業に要する費用として甲に支払う金額は、金140,663千円とする。

2. 乙は、前項に定める金額を四半期ごとに甲の請求により支払うものとする。

（作業の実施）

第4条 甲は作業の実施について、乙の施行する山陽新幹線建設事業の工事工程に支障のないよう努めるものとする。

2. 甲は作業の実施にあたっては、作業箇所に作業表示旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

（作業日誌）

第5条 甲は、発掘の実施中において、作業日誌を作成するものとし、乙はその提出を求めることがある。

（出土品の取扱い）

第6条 発掘された出土品の処理については、甲・乙協議のうえ、甲が乙の名において法令の定めるところにより処置するものとする。

（中間報告）

第7条 乙は必要と認められる場合は、甲に対し業務の進行状況について報告を求めることができる。

（決算及び精算）

第8条 甲は、作業が完了したときは、作業に要した費用について、決算を行ない決算書を提出するものとする。

2. 乙は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき第3条に約定した金額内に

序 文

おいて、甲と協議してすみやかに精算するものとする。

(発掘調査報告)

第9条 甲は、作業が完了したときは発掘調査概報を添え、発掘作業完了報告書を乙に提出するとともに、乙の名において発掘調査報告書を文化庁に提出するものとする。

(その他)

第10条 この契約に定めのない事項又は契約の条項について、疑義又は変更の必要が生じた場合は、甲・乙協議して定めるものとする。この契約の証として、この証書2通を作成し、甲・乙なつ印して各自1通を保有する。

昭和49年4月1日

甲	福岡県知事	危	井	光
乙	日本国有鉄道下関工事局 福岡工事事務所長	海	原	正二

(2) 昭和49年度の調査

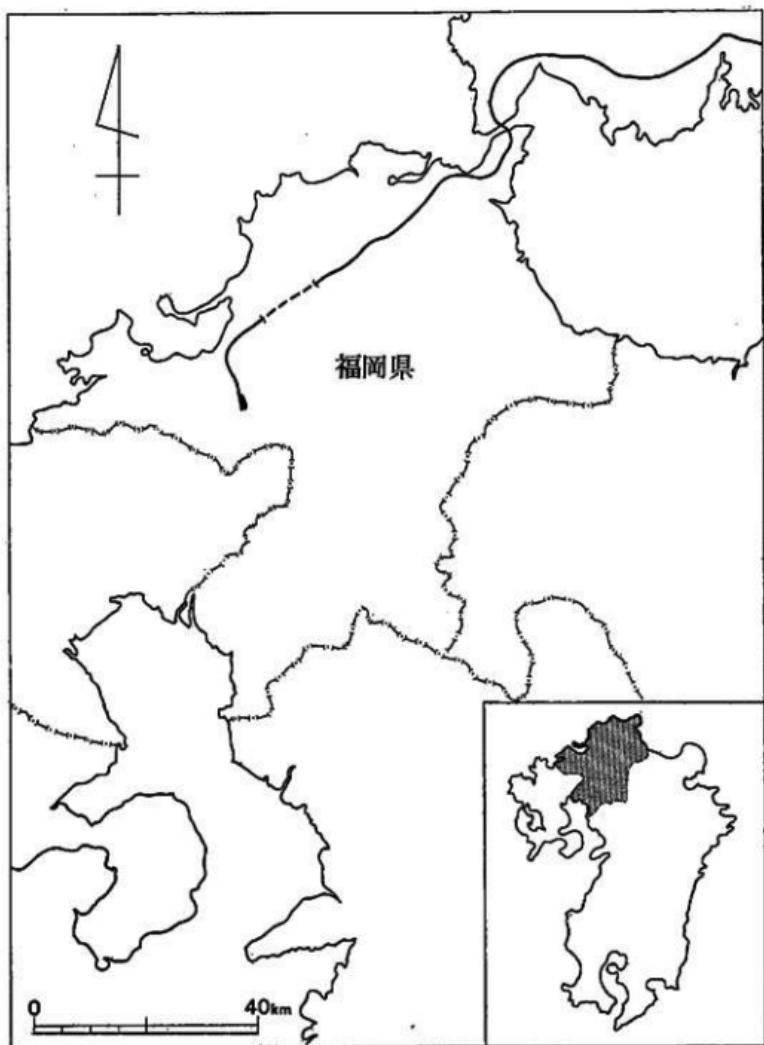
本年度の調査は、前年度の継続として門田遺跡の谷間の地区を4月1日から実施した。同時に若宮地区では、新幹線関係の変電所と職員住宅が建設されるため田尻遺跡に追加された第6-1地点の調査も4月9日から6月18日まで実施した。門田遺跡の谷間は西側に開けて水田となっているが、この地区はすでに門田の台地と同じ高さに埋立てられ、雨期には冠水し排水に苦労した。第6-1地点もすでに工事が着工されており、一部削平されたうえボダで盛められていたために、この整地層の除去に困難であった。5月23日からは第32-1地点の調査を実施した。この地点もまた一方的に工事が先行したために一部削平されたり、側道の砂利の下になってしまった。このように、国鉄も博多開業がせまるにしたがって、文化財保護を無視した行為が目立ち、文化財行政の貧困さを思い知らされることが多かった。

6月には門田のG6地区で弥生後期の6基からなる墓地群が検出され、多数の玉類が出土した。6月から調査を開始した門田地区では、予想どおり壺棺墓群と貯蔵穴群が検出され、壺棺墓からは貝鏡も発見された。

11月25日、第33-1地点の調査再開。原古墳群の下から発見された壺棺墓群の調査である。当初壺棺墓群の規模はさほどに思われなかったが、調査が進行するにしたがって数を増し、170基以上に達した。さらにその中には2基の大形の墓域があり、重要性が考えられることから、文化課では国鉄に対し側道の一部設計変更による原遺跡保存の交渉を行なうことになった。

国鉄との原遺跡保存対策会議は2回実施されたが、結論が出ないまま49年度を終った。しかし、ここで原遺跡保存に対する、国鉄側担当者の前向きの姿勢は大いに感じられた。

(柳田康雄)



第1図 山陽新幹線の路線と博多車両基地の位置 (1/1,000,000)

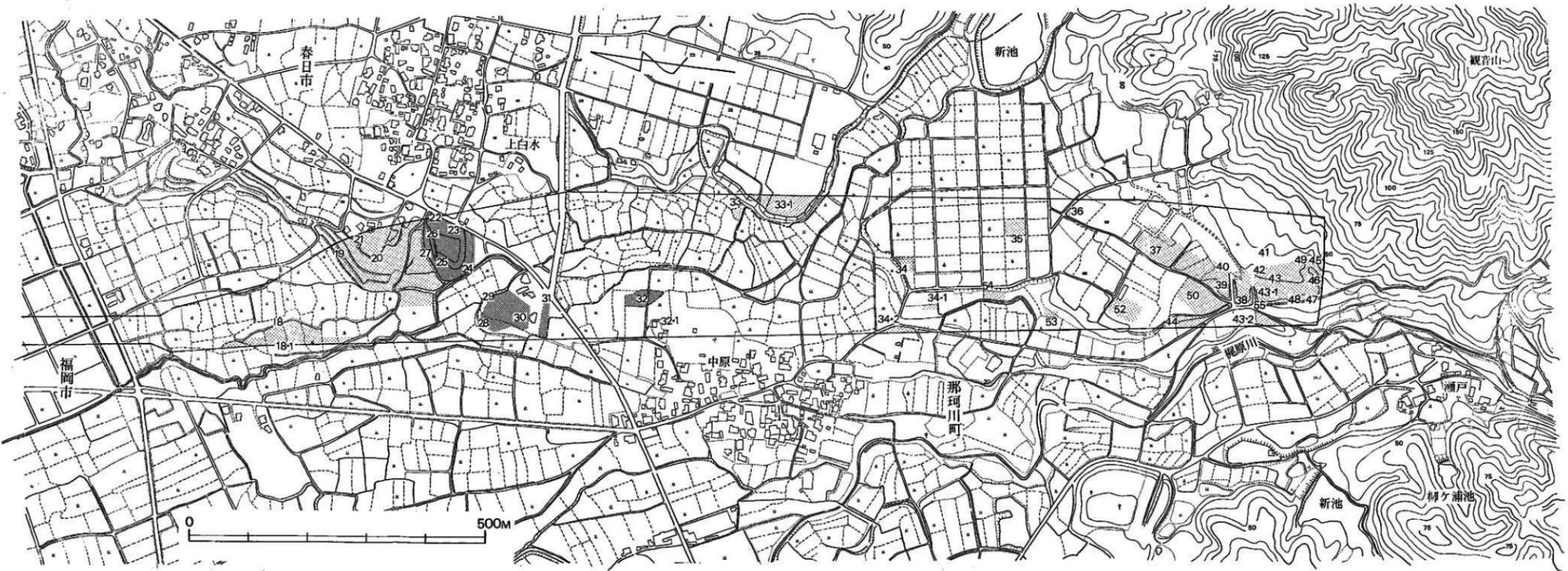
表 1 山陽新幹線周辺跡一覧表

地番番号	遺跡名	所在地	内 容	調査終了面積						備 考
				45年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	
3	小田山墓地	穂手塚町中山	近世墓地							
4	下松尾墓地	〃	近世墓地							
5	京尾遺跡	宍木	中世紀遺構							
6	若宮条塚	若吉町	条里遺構	229						
6-1	〃	金丸	近世墓地							調査前に工事のため改葬。
6-1'	田尻遺跡	金丸、水原	古墳・歴史時代：住居跡	2,035		3,000				
6-2	別当塚	竹原	古墳	146						遺構・遺物なし。
6-3	八幡塚	〃	古墳	16			300			
7	杉園遺跡	光明寺	古墳時代：散布地							遺構なし。
8	柏原郡久山町山田			100						裏差の結果、余量ではなかった。
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～彌生時代：住居跡8軒、円形遺構、溝状遺構		790					
18-1						2,100	1,000			昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱。
18-2	"	"								
19-27	門田遺跡	"	先土器～彌生時代：住居跡、貯蔵穴・施設跡、石棺墓・土器窓・古墳5基							昭和49年度に、門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱。
28-31	下屋遺跡	"	古墳時代：住居跡	2,784						
32	柏田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690					
32-1	"	"	古墳時代：斎場墓			300				
32-2	久保遺跡	"						700		
33		春日市上白水			197					
33-1	原古墳群	"	円墳3基・墓葬8基・土壇墓4基		1,725	800	400			一部保存。
	原道跡	"	縄文時代早期・弥生時代施棺墓							
34	筑紫郡那珂川町中原		弥生時代：散布地		135					遺構・遺物なし。
34-1	島ノ原遺跡	"	先土器・縄文時代：散布地		267					
34-2	"	"			288					別府大学に調査委嘱。
35	"	"	中世：散布地		200					
36	"	"	近世：道標（かんのん道）		—					
37, 39	井手ノ原遺跡	"	中世：方形区画構・溝状遺構	1,814	1,515	1,500				
50, 55	"	"								
38-40, 43	糸崎山古墳群	中原支群	古墳跡	707	6,400	220				
45-49, 51	"	"								
43-1	深原遺跡	"	縄文時代：石核鉋32基・円形窓穴遺構		1,840	2,540				昭和47年度は、別府大学に一部調査委嘱。
43-2	"	"			140					
46-1	"	"					1,021			
44	"	"	中世：散布地		271					
52	"	"	中世：散布地		452					
53	"	"	古墳勢跡：散布地		123					遺構なし。
54	"	"	弥生・古墳時代：散布地		150					
54-1	"	"	古墳時代：散布地		95					
合 計				5,305	14,369	14,829	15,900	6,270	1,721	

註 1. 地点番号1~2は北九州市教育委員会、9~17は福岡市教育委員会が調査を担当した。

2. 略語以外の付帯語記にかかる調査地点は上記に含めてある。

3. 施設欄に(--)で示したものは、査定額としてあげないが当該年度に調査したことを示す。



第2図 山手新幹線博多車両基地付近地形図及び道路分布図(1/5000) ■印は本報告書掲載道路を表す。

2. 周辺遺跡の調査

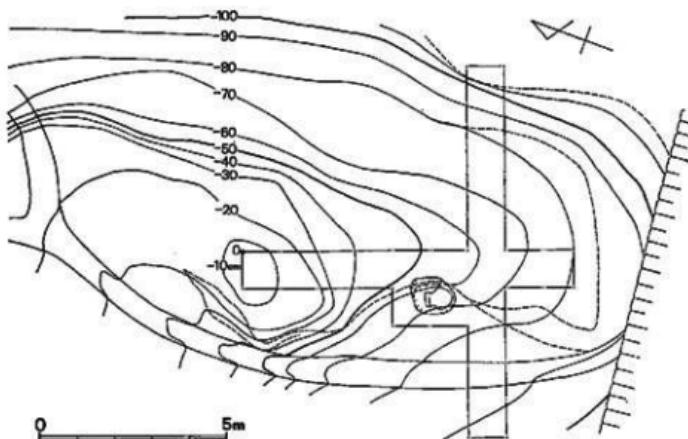
1. ウト口^{ヲト}遺跡の調査

(1) 調査の経過

この遺跡の調査は、昭和50年7月1・2日におこなった。現地は丘陵上で雜木林であるが、宅地造成等の開発が近年急速におこなわれている地域で、山陽新幹線博多車両基地の東側にある。福岡県教育委員会がおこなった分布調査の際、落葉に埋もれた壇枠が上部を削平された状態で露出しており、土取りがすぐ裏まで迫っていた。このため急速造構の調査をおこない記録したものである。期間や遺構周辺の状態で最小範囲の記録にとどめた。

(2) 遺跡の立地(図版2、第2・3図)

この遺跡は、福岡県春日市大字上白水字ウト口に所在する。福岡平野に突出した春日丘陵は南へのびて筑紫山地へ連なる。この春日丘陵の奥、福岡平野の最奥部那珂川中流域を西に見る標高50mの舌状丘陵に位置する。西方300mの地点には那珂川の支流押原川が形成した河岸



第3図 ウト口遺跡地形実測図(1/150)

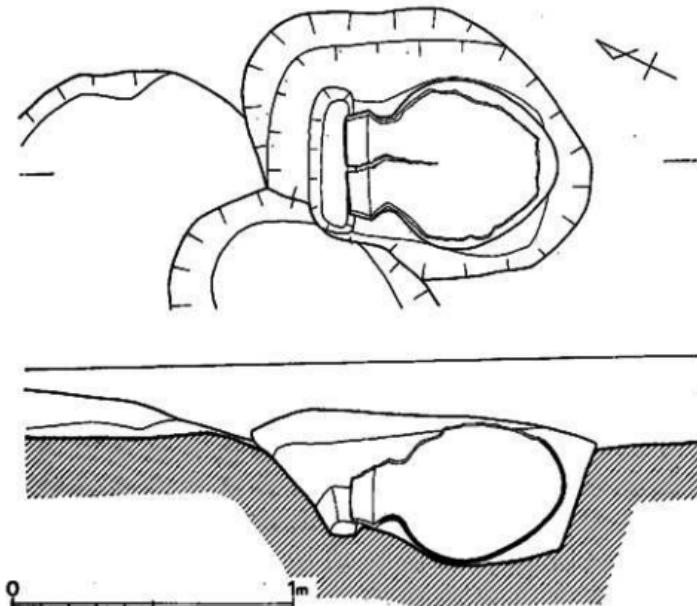
序 文

段丘上に、弥生時代中期の壺形墓群遺跡、古墳時代前期の原古墳群があり、南には櫻枝状に隣接する舌状丘陵上にウト口前方後方墳がある。北には同様な丘陵西斜面にウト口瓦窯跡群が確認されている。さらに舌状丘陵を1つはさんだ北側の独立丘陵上には天神山前方後円墳がある。その独立丘から東方へは天神山小水域も存在している。

(3) 遺構と遺物(図版3、第4・5図)

遺構 この舌状丘陵には先端部の尾根上に低墳丘の古墳3基が確認されている。その最も南にある古墳の墳丘外と思われる所にこの遺構はある。尾根線より若干西へよった地点で、西へゆるやかに傾斜する斜面であるが、周囲は雜木林であるため微細な地形の変化はわからない。南側は土取りのため大きく削られ垂直に10m程の崖面をなす。

壺棺は、長径115cm×短径95cmの不整橢円形を呈する掘り方の中にはほぼ水平に埋置されており、主軸はN 27° Wである。口縁部の前面には底面10cm×45cmの長方形の掘り方があり、木蓋を使用した痕跡が明瞭である。西側の落ち込みは立木を掘ったときのものと思われ、掘り方の



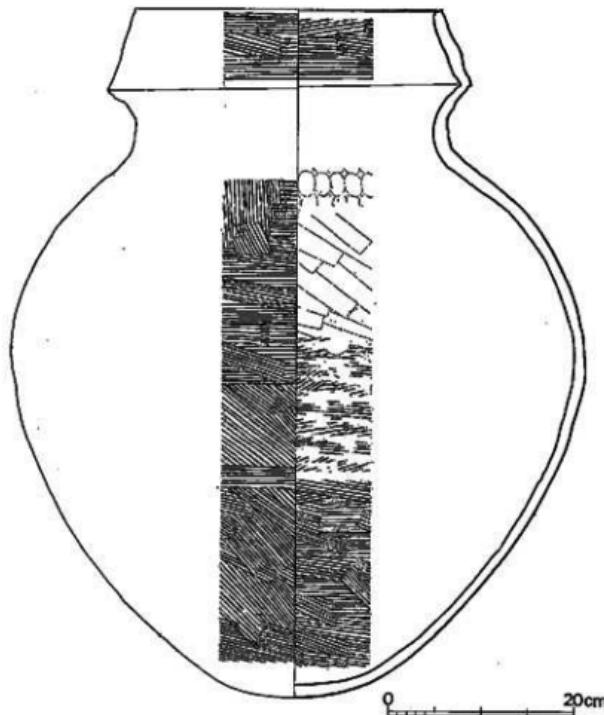
第4図 ウト口遺跡壺棺出土状態実測図(1/20)

序文

一部が攪乱を受けていた。また口縁部から胴部まで破壊されていて、全体的に30cm以上の削平を受けたと思われる。トレンチでは盛土や削り出しの形跡は認められなかった。

遺物 遺物は棺に使用された壺のみである。口径32.8cm、器高73.6cmを測る大形の土器である。下部口縁は大きく外反しながら立ちあがり、反転して上部口縁は大きく内反する。上部と下部の接合部は器壁が最もすくになり、若干外に突き出た感じを残す。上部の中位下でふくらみ、口唇部はゆるやかに内傾する平坦面をなす。頸部はやや内傾し、ゆるやか肩をもち胴部へ移行する。胴部は中央よりやや上位で最大径を測る。胴部中央からやや直線的に底部へ移行し、底部はかなりフラットな丸底を呈する。

口縁部は内外面とも刷毛目を施し、外面は全体的に刷毛目を施している。肩部付近は継方向を主とし、肩部から胴中央部にかけては横方向、胴中央部から底部にかけては斜方向の刷毛目



第5図 ウトロ遺跡出土壺概観図(1/6)

序 文

を施すが、脛下半部の接合部には7条を1単位とする刷毛目帯をめぐらす。内面は頭部と脚部の接合部に指頭・指腹による圧整形の跡がみられ、脛部上半は右下から左上への時計回り方向のヘラケズリ、脛中央部から脛下半中位にかけては横方向の刷毛目の後、横方向時計回りのヘラケズリを行っている。脛部下半から底部にかけては横方向を主とする刷毛目を施している。脛下半の接合部には指腹による横ナデをおこなっている。胎土は大粒の石英粒を多く含み、焼成は良く淡い黄褐色を呈するが、内面は部分的に淡い赤褐色を呈する。

壺棺に伴う遺構は調査範囲の中では確認できなかった。今後の広範囲の調査をまたねばならないが、この1基の単独墓とは考え難く、周囲に土塚墓・石蓋土塚墓・箱式石棺墓などの埋葬遺構の可能性を想定させる。

また、北側に低墳丘の墳墓が知られているから、筑紫野市岬山遺跡や久留米市瓢箪山古墳などの例にみられるごとく墳丘外に造られた埋葬遺構の可能性もあり、北側の墳墓との関連で把えうるものかもしれない。蓋は日常使用したものでなく、埋葬用に読えたものであろうが、内面下半部は刷毛目をおこない上半部はヘラケズリの技法を用いている。この蓋の時期は4世紀後半である。

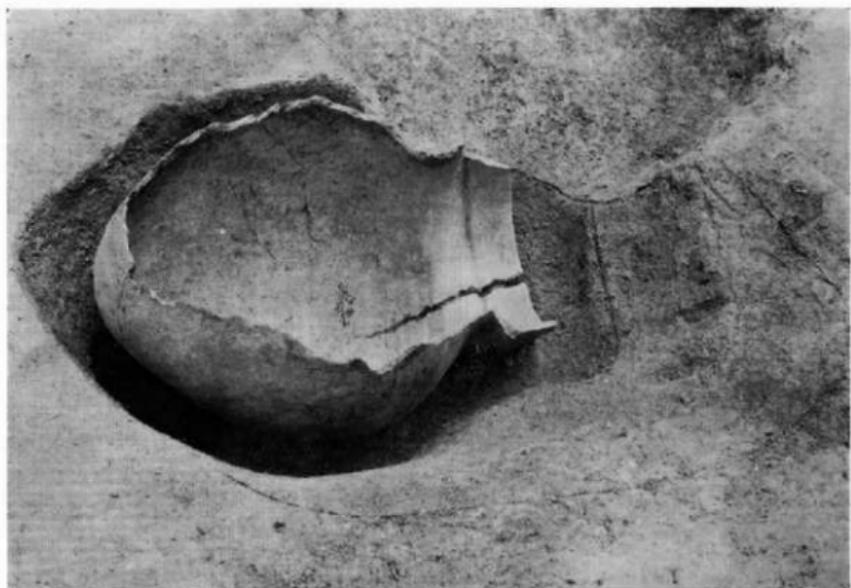
(丸山康晴)



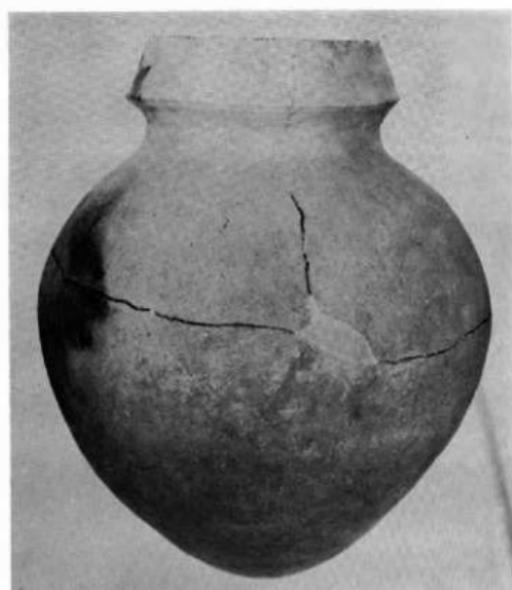
1 ウト口前方後方墳・ウト口遺跡周辺航空写真



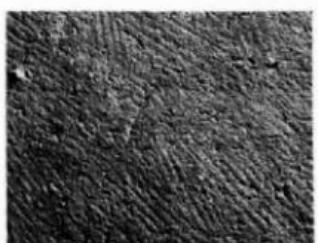
2 ウト口遺跡遺跡



1 ウト口遺跡・壺棺



2 ウト口遺跡出土壺棺



a. 腹部外面刷毛目



b. 腹部内部刷毛目

Ⅱ 門田遺跡・門田地区の調査

春日市大字上白水字門田

本 文 目 次

1.	調査の経過	11
(1)	調査区域の設定	13
(2)	発掘調査の経過	14
2.	立地と環境	23
3.	先土器時代の調査	24
(1)	調査の経過	24
(2)	層位	25
(3)	遺物の分布状態	26
(4)	遺物	28
(5)	小結	35
4.	弥生時代の遺構と遺物	37
(1)	袋状竪穴	37
(2)	竪穴住居跡	90
(3)	包含層出土の遺物	93
5.	古墳時代の遺構と遺物	102
(1)	門田1号墳	102
(2)	竪穴住居跡	103
(3)	不整円形竪穴	112
(4)	溝状遺構	113
(5)	包含層出土の土器	113
6.	歴史時代の遺構と遺物	126
(1)	木棺墓	126
(2)	土塼墓	135
(3)	欄列	135
(4)	獨立柱建物跡	137

(5) 穴住居跡	143
(6) 方形穴造構	148
(7) 包含層出土の遺物	151
7. 門田地区出土鉄滓及び羽口先端溶着鉄滓の調査結果	163
8. おわりに	174

図 版 目 次

本文参照頁

図版 1 (1) 門田遺跡周辺航空写真 1972.9 (井上裕弘撮影)	11
(2) 門田遺跡航空写真 1972.9 (井上撮影)	11
2 (1) 昭和47年度・門田地区の予備調査航空写真 (井上撮影)	14
(2) 昭和47年度・門田地区の予備調査航空写真 (井上撮影)	14
3 (1) 昭和47年度・辻田地区的予備調査航空写真 (井上撮影)	14
(2) 昭和47年度・辻田地区的予備調査航空写真 (井上撮影)	14
4 (1) 伐採後の門田遺跡航空写真 1973.9 (井上撮影)	15
(2) 伐採後の門田遺跡航空写真 1973.9 (井上撮影)	15
5 (1) 昭和48年度・門田地区的調査航空写真 (井上撮影)	15
(2) 昭和48年度・辻田地区的調査航空写真 (井上撮影)	15
6 (1) 昭和48年度・谷地区的調査全景 (井上撮影)	16
(2) 昭和48年度・谷地区C 9区で検出された遺物 南から (井上撮影)	16
7 (1) 昭和48年度・谷地区的調査全景 (井上撮影)	16
(2) 昭和48年度・辻田地区的調査全景 (井上撮影)	16
8 (1) 昭和49年度・谷地区的調査全景 (井上撮影)	17
(2) 昭和49年度・谷地区的調査全景 (小池史哲撮影)	17
9 (1) 昭和49年度・門田遺跡全景航空写真 西から (北澤廣撮影)	17
(2) 昭和49年度・門田遺跡全景航空写真 南から (北澤撮影)	17
10 (1) 昭和49年度・門田地区的調査航空写真 (北澤撮影)	17
(2) 昭和49年度・辻田地区的調査航空写真 (北澤撮影)	18
11 (1) 昭和50年度・辻田地区的調査航空写真 西から (井上撮影)	18
(2) 昭和50年度・辻田地区的調査航空写真 東から (井上撮影)	18
12 (1) 門田地区全景航空写真 (井上撮影)	20

	(2) 門田地区A・B・C10~12区発掘区全景航空写真(井上撮影)	21
13	(1) 門田地区C・D・E・F10~13区全景航空写真(北澤撮影)	21
	(2) 門田地区C・D・E・F10~13区発掘区近景航空写真(北澤撮影)	22
14	(1) 先土器時代発掘区全景 東から(木下撮影)	24
	(2) 先土器時代発掘区全景 北から(木下撮影)	24
15	(1) B 4 区西壁(木下撮影)	25
	(2) B 1 区西壁(木下撮影)	25
16	(1) 遺物出土状態(木下撮影)	26
	(2) 遺物出土状態(木下撮影)	27
17	包含層出土先土器時代の遺物(木下撮影)	28
18	門田地区出土先土器時代の遺物(木下撮影)	34
19	(1) 袋状竪穴群全景 北から(木下撮影)	37
	(2) 袋状竪穴群近景 南から(木下撮影)	37
20	(1) 3号袋状竪穴(木下撮影)	44
	(2) 4号袋状竪穴(木下撮影)	51
21	(1) 5号袋状竪穴(木下撮影)	51
	(2) 9号袋状竪穴(木下撮影)	54
22	(1) 11号袋状竪穴(宮崎賀夫撮影)	54
	(2) 12号袋状竪穴(佐々木隆彦撮影)	56
23	(1) 13号袋状竪穴(宮崎撮影)	56
	(2) 13号袋状竪穴土層断面(宮崎撮影)	59
24	(1) 17号袋状竪穴(宮崎撮影)	63
	(2) 20・27・30号袋状竪穴(宮崎撮影)	69
25	(1) 18号袋状竪穴内土器出土状態(佐々木撮影)	67
	(2) 21号袋状竪穴(木下撮影)	71
26	(1) 22号袋状竪穴と合口壺棺(佐々木撮影)	71
	(2) 24号袋状竪穴土層断面(宮崎撮影)	73
27	(1) 24号袋状竪穴(木下撮影)	73
	(2) 13・26号袋状竪穴(宮崎撮影)	75
28	(1) 26号袋状竪穴(宮崎撮影)	75
	(2) 27号袋状竪穴(宮崎撮影)	75
29	(1) 29号袋状竪穴(宮崎撮影)	77
	(2) 31号袋状竪穴(宮崎撮影)	77

30	(1) 32・33号袋状竪穴(木下撮影)	77
	(2) 34号袋状竪穴(御田康雄撮影)	77
31	(1) 36号袋状竪穴(宮崎撮影)	81
	(2) 34・37号袋状竪穴(御田撮影)	83
32	(1) 3・5号竪穴住居跡 北から(井上撮影)	90
	(2) 3号竪穴住居跡 北から(井上撮影)	90
33	1・2号袋状竪穴出土土器(石丸洋撮影)	37
34	3・12・26号袋状竪穴出土土器(石丸撮影)	46
35	17号袋状竪穴出土土器(石丸撮影)	64
36	17・18・24号袋状竪穴出土土器(石丸撮影)	67
37	(1) 3号袋状竪穴出土の石器(木下撮影)	51
	(2) 袋状竪穴出土の石器・土製品(木下撮影)	54
38	(1) 包含層出土の石器(木下撮影)	94
	(2) 包含層出土の石器・土製品(木下撮影)	94
39	上 1号墳と住居跡(櫻井康治撮影)	102
	下 破壊された石室(櫻井撮影)	102
40	(1) 2号竪穴住居跡 東から(井上撮影)	103
	(2) 2号竪穴住居跡 南から(井上撮影)	103
41	(1) 2号竪穴住居跡内土器出土状態 東から(井上撮影)	104
	(2) 2号竪穴住居跡内甌と付近土器出土状態 東から(井上撮影)	104
42	(1) 2号竪穴住居跡内甌と土器出土状態(井上撮影)	104
	(2) 2号竪穴住居跡内甌(井上撮影)	104
43	(1) 2号竪穴住居跡内土器出土状態(井上撮影)	104
	(2) 2号竪穴住居跡内鉄錆出土状態(井上撮影)	104
44	2号竪穴住居跡内出土土師器(石丸撮影)	105
45	2号竪穴住居跡内出土土師器・須恵器・砥石・鉄錆(石丸撮影)	109
46	(1) 5号竪穴住居跡 東から(井上撮影)	109
	(2) 5号竪穴住居跡 北から(井上撮影)	109
47	(1) 8号竪穴住居跡 南から(木下撮影)	110
	(2) 8号竪穴住居跡内土器出土状態(木下撮影)	110
48	包含層出土須恵器(石丸撮影)	113
49	(1) 木棺墓付近全景 南から(木下撮影)	126
	(2) 木棺墓全景 南から(木下撮影)	126

50	(1) 遺物の出土状態（木下撮影）	127
	(2) 八稜鏡出土状態（木下撮影）	127
51	(1) 土師器出土状態（木下撮影）	127
	(2) 鉄釘出土状態 西壁側（木下撮影）	127
52	(1) 八稜鏡（石丸撮影）	128
	(2) 鉄製紡錘・刀子（石丸撮影）	128
53	木棺墓出土土師器（石丸撮影）	129
54	鉄釘、瓦・鉄滓（木下撮影）	130
55	(1) 1号土壙墓 東から（木下撮影）	135
	(2) 2号土壙墓 東から（木下撮影）	135
56	(1) 棚列・庄居跡・掘立柱建物跡群全景航空写真（井上撮影）	135
	(2) 1号竪穴住居跡 東から（櫻井撮影）	143
57	(1) 4号竪穴住居跡 西から（木下撮影）	146
	(2) 4号竪穴住居跡 北から（木下撮影）	146
58	(1) 6号竪穴住居跡 南から（木下撮影）	148
	(2) 6号竪穴住居跡 東から（木下撮影）	148
59	(1) 方形竪穴遺構全景 東から（櫻井撮影）	148
	(2) 方形竪穴遺構内土器出土状態（櫻井撮影）	149
60	1・4号竪穴住居跡内出土土師器・鉄器・磁器（井上撮影）	147
61	(1) 方形竪穴遺構出土土師器・磁器（井上撮影）	150
	(2) 包含層出土瓦（井上撮影）	151
62	包含層出土瓦（井上撮影）	151
63	包含層出土土師器（石丸撮影）	152
64	包含層出土白磁・青磁A類（井上撮影）	154
65	(1) 包含層出土青磁C類（井上撮影）	157
	(2) 包含層出土青磁D類・E類（井上撮影）	159
66	(1) 包含層出土青磁F類（井上撮影）	159
	(2) 包含層出土近世火舎・古鉢（井上撮影）	161
67	鉄滓の顕微鏡組織①（大澤正巳撮影）	165
68	鉄滓の顕微鏡組織③（大澤撮影）	165
69	鉄滓の顕微鏡組織④（大澤撮影）	165
70	鉄滓のB 6-1の Electron Probe Microanalyser 写真（×700）	165

挿 図 目 次

第 1 図	門田出土広形銅矛実測図（糸山吉藏氏所有原図、高田弘信製図）	12
第 2 図	門田遺跡調査地区全図（日本国有鉄道原図、井上裕弘作成・製図）	折込み
第 3 図	D13区発見の斂棺墓群（櫻井康治撮影）	14
第 4 図	谷地区C 9区出土の遺物集積状態（井上撮影）	16
第 5 図	谷地区発見のドングリ貯蔵穴（井上撮影）	16
第 6 図	2列に並んだ斂棺墓群（北澤廣撮影）	17
第 7 図	辻田地区住居跡・近世墓群（井上撮影）	19
第 8 図	鉄戈を副葬した24号斂棺墓（井上撮影）	19
第 9 図	貯蔵穴群の発掘風景（木下修撮影）	22
第 10 図	遺構配置図（柳田康雄・井上・木下・佐々木藤彦・宮崎貴夫・三津井知廣・ 高田実測、高田製図）	折込み
第 11 図	旧地形図（柳田・井上・木下・佐々木・宮崎・三津井・高田実測、 高田製図）	折込み
第 12 図	門田地区東西・南北トレンチ土層断面図（木下・宮崎・高田実測、高田製図）	折込み
第 13 図	先土器時代の調査風景（木下撮影）	25
第 14 図	B 4～B 1区西壁・C 4～A 4区北壁土層断面図 (木下・高田実測、高田製図)	26
第 15 図	遺物出土分布図（木下実測、製図）	27
第 16 図	包含層出土の石器実測図(1)（木下実測、製図）	29
第 17 図	包含層出土の石器実測図(2)（木下実測、製図）	30
第 18 図	包含層出土の石器実測図(3)（木下実測、製図）	31
第 19 図	門田地区出土の石器実測図(1)（木下実測、製図）	33
第 20 図	門田地区出土の石器実測図(2)（木下実測、製図）	34
第 21 図	1号袋状竖穴実測図（櫻井実測、丸山康晴製図）	37
第 22 図	1号袋状竖穴出土石器実測図（宮崎実測、製図）	38
第 23 図	1号袋状竖穴出土石器実測図（木下実測、製図）	39
第 24 図	2号袋状竖穴実測図（櫻井・桑田和義実測、丸山製図）	40

第 25 図	2号袋状竖穴出土土器実測図(1)(吉崎実測、製図)	41
第 26 図	2号袋状竖穴出土土器実測図(2)(吉崎実測、製図)	42
第 27 図	2号袋状竖穴出土土器実測図(3)(吉崎実測、製図)	43
第 28 図	2号袋状竖穴出土土器実測図(4)(吉崎実測、製図)	44
第 29 図	2号袋状竖穴出土石器実測図(木下実測、製図)	44
第 30 図	3・4・5号袋状竖穴出土土器実測図(木下・吉崎・桑田実測、丸山製図)	45
第 31 図	3号袋状竖穴出土土器実測図(1)(吉崎実測、製図)	47
第 32 図	3号袋状竖穴出土土器実測図(2)(吉崎実測、製図)	48
第 33 図	3号袋状竖穴出土土器実測図(3)(吉崎実測、製図)	49
第 34 図	3号袋状竖穴出土土器実測図(4)(吉崎実測、製図)	49
第 35 図	3号袋状竖穴出土石器実測図(木下実測、製図)	50
第 36 図	5号袋状竖穴土層断面図(野村俊一実測、丸山製図)	51
第 37 図	5号袋状竖穴出土土器実測図(宮崎実測、製図)	52
第 38 図	6・7号袋状竖穴実測図(佐々木・野村・小林美孝実測、丸山製図)	53
第 39 図	8号袋状竖穴実測図(佐々木・桑原博実測、丸山製図)	54
第 40 図	8号袋状竖穴出土土器実測図(木下実測、製図)	54
第 41 図	9・10・11・17号袋状竖穴実測図(吉崎・三津井・桑原実測、丸山製図)	55
第 42 図	11号袋状竖穴出土石器実測図(木下実測、製図)	56
第 43 図	12号袋状竖穴出土石器実測図(高田実測、丸山製図)	56
第 44 図	12・22号袋状竖穴実測図(木下・三津井実測、丸山製図)	57
第 45 図	13・18号袋状竖穴実測図(佐々木・野村・小林実測、丸山製図)	58
第 46 図	13号袋状竖穴土層断面図(野村実測、丸山製図)	59
第 47 図	13号袋状竖穴出土土器実測図(木下実測、製図)	60
第 48 図	14・15号袋状竖穴実測図(高田実測、丸山製図)	61
第 49 図	8・12・13・14号袋状竖穴出土土器実測図(吉崎実測、製図)	62
第 50 図	17号袋状竖穴土層断面図(吉崎実測、丸山製図)	63
第 51 図	17号袋状竖穴出土土器実測図(1)(吉崎実測、製図)	65
第 52 図	17号袋状竖穴出土土器実測図(2)(吉崎実測、製図)	66
第 53 図	17号袋状竖穴出土土器実測図(木下実測、製図)	67
第 54 図	18号袋状竖穴出土土器実測図(1)(吉崎実測、製図)	68
第 55 図	18号袋状竖穴出土土器実測図(2)(吉崎実測、製図)	69
第 56 図	16・19・20・21号袋状竖穴実測図(木下・吉崎・行田裕美実測、丸山製図)	70
第 57 図	21号袋状竖穴土層断面図(行田実測、丸山製図)	71

第 58 図	23・24・25号袋状竪穴実測図（寺村・横尾一作・石原道洋・高橋和子実測、丸山製図）	72
第 59 図	24号袋状竪穴出土石庵丁実測図（木下実測、製図）	73
第 60 図	26・27・31号袋状竪穴実測図（宮崎・高田実測、丸山製図）	74
第 61 図	28・29・30号袋状竪穴実測図（宮崎・三津井・丸山実測、丸山製図）	76
第 62 図	32・33号袋状竪穴実測図（木下・丸山実測、丸山製図）	78
第 63 図	34・35号袋状竪穴実測図（桑田・松村恵司実測、丸山製図）	79
第 64 図	19・20・22・24・26・30・35・36号袋状竪穴出土土器実測図 （宮崎・丸山実測、宮崎製図）	80
第 65 図	35号袋状竪穴出土敷石実測図（木下実測、製図）	81
第 66 図	36号袋状竪穴出土石斧実測図（木下実測、製図）	81
第 67 図	36・37号袋状竪穴実測図（丸山・関口宏一・白石勘実測、丸山製図）	82
第 68 図	袋状竪穴への道標定図（宮崎作成、高田製図）	折込み
第 69 図	袋状竪穴の面積と深さの関係図（宮崎作成）	85
第 70 図	3号住居跡全景（井上撮影）	90
第 71 図	3号住居跡出土土器実測図（宮崎実測、製図）	90
第 72 図	3・5号住居跡実測図（宮崎・三津井・桑田実測、高田製図）	90
第 73 図	3号住居跡出土石鐵実測図（木下実測、製図）	90
第 74 図	7号住居跡実測図（井上・桑田実測、高田製図）	92
第 75 図	包含層出土弥生式土器実測図（宮崎実測、製図）	93
第 76 図	包含層出土の土製品実測図（木下実測、製図）	93
第 77 図	包含層出土の石器実測図（1）（木下実測、製図）	94
第 78 図	包含層出土の石器実測図（2）（木下実測、製図）	94
第 79 図	包含層出土の石器実測図（3）（木下実測、製図）	98
第 80 図	包含層出土の石器実測図（4）（木下実測、製図）	98
第 81 図	門田1号墳石室実測図（櫻井実測、高田製図）	103
第 82 図	2号住居跡実測図（市川富久実測、高田製図）	104
第 83 図	2号住居跡内遺物分布図（井上作成、製図）	折込み
第 84 図	2号住居跡出土土師器実測図（1）（井上実測、製図）	105
第 85 図	2号住居跡出土土師器実測図（2）（井上実測、製図）	106
第 86 図	2号住居跡出土土師器実測図（3）（井上実測、製図）	107
第 87 図	2号住居跡出土須恵器実測図（井上実測、製図）	108
第 88 図	2号住居跡出土砥石・鉄鎌実測図（井上実測、製図）	109

第 89 図	5号住居跡出土須恵器実測図(井上実測、製図)	110
第 90 図	8号住居跡実測図(木下・三津井・渡辺和子実測、高田製図)	110
第 91 図	8号住居跡出土土器・石器実測図(木下実測、製図)	111
第 92 図	不整円形竪穴実測図(櫻井実測、高田製図)	112
第 93 図	不整円形竪穴出土須恵器実測図(井上実測、製図)	112
第 94 図	包含層出土の須恵器実測図(1)(藤瀬謹博実測、製図)	114
第 95 図	包含層出土の須恵器実測図(2)(藤瀬実測、製図)	116
第 96 図	包含層出土の須恵器実測図(3)(藤瀬実測、製図)	117
第 97 図	包含層出土の須恵器実測図(4)(藤瀬実測、製図)	119
第 98 図	包含層出土の須恵器実測図(5)(藤瀬実測、製図)	120
第 99 図	木棺墓実測図(木下実測、製図)	127
第 100 図	八稜鏡実測図(宮小路賀宏実測、製図)	128
第 101 図	木棺墓出土鉄器実測図(木下実測、製図)	128
第 102 図	木棺墓外出土土師器実測図(木下実測、製図)	129
第 103 図	鉄釘の出土状態と木棺の大きさ(木下作成)	130
第 104 図	木棺墓出土鉄釘実測図(丸山実測、製図)	131
第 105 図	木棺の復原図(木下作成)	133
第 106 図	木棺墓出土瓦実測図(木手下掘)	134
第 107 図	出土土師器の法量図(木下作成)	134
第 108 図	5・6号土墳墓実測図(佐々木・丸山実測、高田製図)	136
第 109 図	横列実測図(木下・宮崎・市川・桑田・三津井・渡辺・佐藤実測、 高田製図)	折込み
第 110 図	1・2号建物跡実測図(三津井・桑田実測、高田製図)	138
第 111 図	3・4号建物跡実測図(市川・三津井・渡辺実測、高田製図)	139
第 112 図	5・6号建物跡実測図(宮崎・三津井・桑田実測、高田製図)	140
第 113 図	7号建物跡実測図(井上・木下・三津井実測、高田製図)	143
第 114 図	1号住居跡実測図(櫻井・渡辺実測、高田製図)	144
第 115 図	1・4・6号住居跡出土土師器・青磁実測図(井上実測、製図)	145
第 116 図	4号住居跡実測図(三津井実測、高田製図)	146
第 117 図	1・4号住居跡出土刀子・砥石実測図(井上実測、製図)	147
第 118 図	6号住居跡実測図(木下・桑田実測、高田製図)	148
第 119 図	方形竪穴造構出土土師器・青磁実測図(井上実測、製図)	149
第 120 図	方形竪穴造構出土土師器・青磁実測図(井上実測、製図)	150

第 121 図 包含層出土の瓦拓影図（井上手拓）	折込み
第 122 図 包含層出土の土師器実測図（井上実測、製図）	153
第 123 図 包含層出土の土師質・瓦質土器実測図（井上実測、製図）	155
第 124 図 包含層出土の白磁・青磁実測図（井上実測、製図）	156
第 125 図 包含層出土の青磁実測図（井上実測、製図）	157
第 126 図 包含層出土の青磁・陶器実測図（井上実測、製図）	158
第 127 図 包含層出土の古錢拓影図（井上手拓）	161
第 128 図 包含層出土の近世火舎実測図（井上実測、製図）	162
第 129 図 羽口実測（井上実測、製図）	165
第 130 図 Feo-Anorthite-Sio ₂ 系状態（大澤正巳作成）	171

表 目 次

表 1 包含層出土の石器一覧表（木下修作成）	28
表 2 先土器時代の石器グリッド別一覧表（木下作成）	32
表 3 春日・那珂川地区先土器時代遺跡地名表（木下作成）	36
表 4 門田地区袋状窓穴一覧表（宮崎貴夫作成）	折込み
表 5 門田遺跡出土グリッド別石器・土製品一覧表（木下作成）	96
表 6 I 類須恵器一覧表（藤瀬強博作成）	122
表 7 II 類須恵器一覧表（藤瀬作成）	123
表 8 III 類須恵器一覧表（藤瀬作成）	124
表 9 その他の須恵器一覧表（藤瀬作成）	125
表 10 土師器法量表（木下作成）	130
表 11 鉄釘一覧表（久山康晴作成）	132
表 12 横列計測表（高田弘信作成）	135
表 13 1号建物跡計測表（高田作成）	137
表 14 2号建物跡計測表（高田作成）	137
表 15 3号建物跡計測表（高田作成）	141
表 16 4号建物跡計測表（高田作成）	141
表 17 5号建物跡計測表（高田作成）	142
表 18 6号建物跡計測表（高田作成）	142
表 19 7号建物跡計測表（高田作成）	142

表 20	門田地区出土磁器点数と比率（井上裕弘作成）	160
表 21	古鉄計測表（井上作成）	161
表 22	供試鉄滓の履歴及び調査項目（大澤正巳作成）	164
表 23	化学分析結果（大澤作成）	168
表 24	分光分析結果（大澤作成）	169
表 25	$\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$ の比率（大澤作成）	170
表 26	$\text{Fe}^{\#}$ の数値（大澤作成）	171

付 図 目 次

付図 1 門田遺跡地形図（大久保設計実測、高田製図）

付図 2 門田遺跡造構配置図（柳田・井上・木下・佐々木・小池・宮崎・櫻井・肥山・
池辺・桑田・渡辺・高田・市川・石田・三津井・丸山・森田・鐵笠・川道・福宮
・高橋・新井・小林・行田・寺村・小谷田・湖口・桑原・横尾・興口・齊藤・高
橋・長谷川・石原・高田実測、高田製図）

II 門田遺跡・門田地区の調査

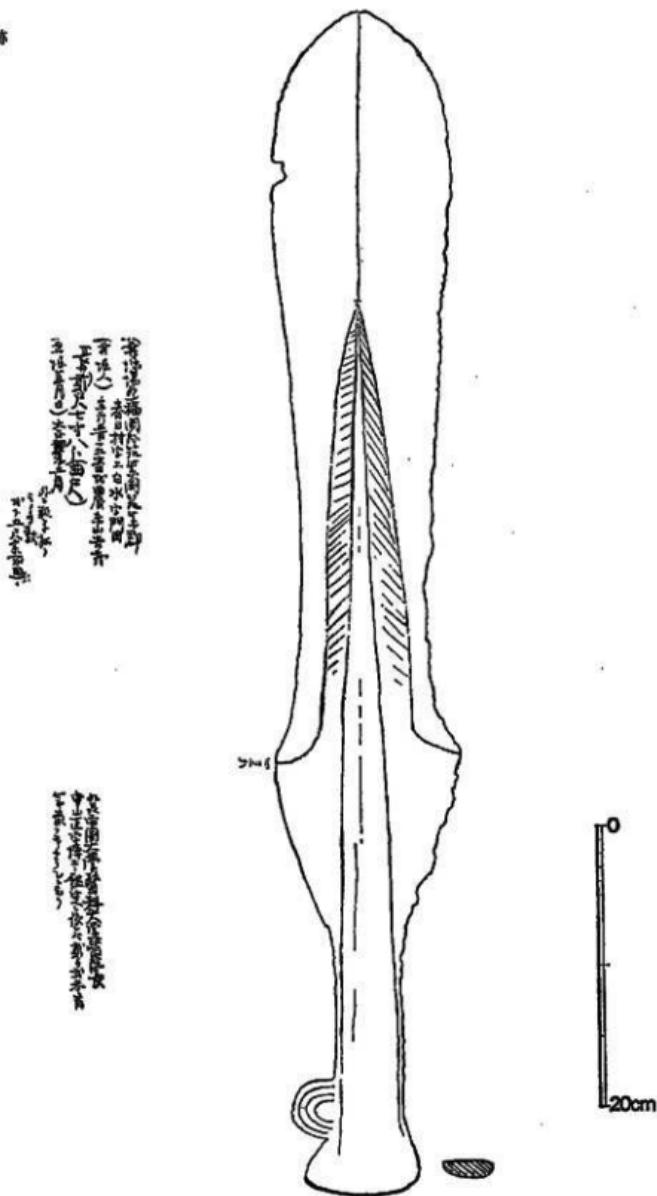
1. 調査の経過

門田遺跡の発見は、大正4年2月糸山吉蔵氏所有の水田を同氏が地下げされた折りに、水田下約1.5mの所から広形銅矛1本が発見されたことにはじまる。このことはすでに中山平次郎氏により報告され、その出土状態は『単に地中に横に埋没し窯器等の伴出物無かりし由』とされている。その銅矛は『広鉢銅鉗として尋常の形式を具へ、研磨の迹無く錆盡しの體なり。拓本によれば長さ二尺八寸、幅鉗端最広部に於て四寸三分、本鉗六、十一高橋健白君論文第一図と同形にして、袋部鉗方の紐状突起又彼物と全く同形なり。』と記されている（註1）。しかし、その現物は現在、所在不明である。近年、春日市中央公民館長の亀井勇氏が大正5年に京都の医師が預っていたという預り証と銅矛の実測図（第1図）を糸山氏宅より入手された。同氏は、その後その行方を調査されたが明らかにできず、現在、医師の残した実測図のみである。今回、亀井氏の依頼をえて掲載できることになった。それによると計測値は、長さ二尺七寸二分、矛先最大幅四寸二分とされていて、中山氏とわずかに異なる。

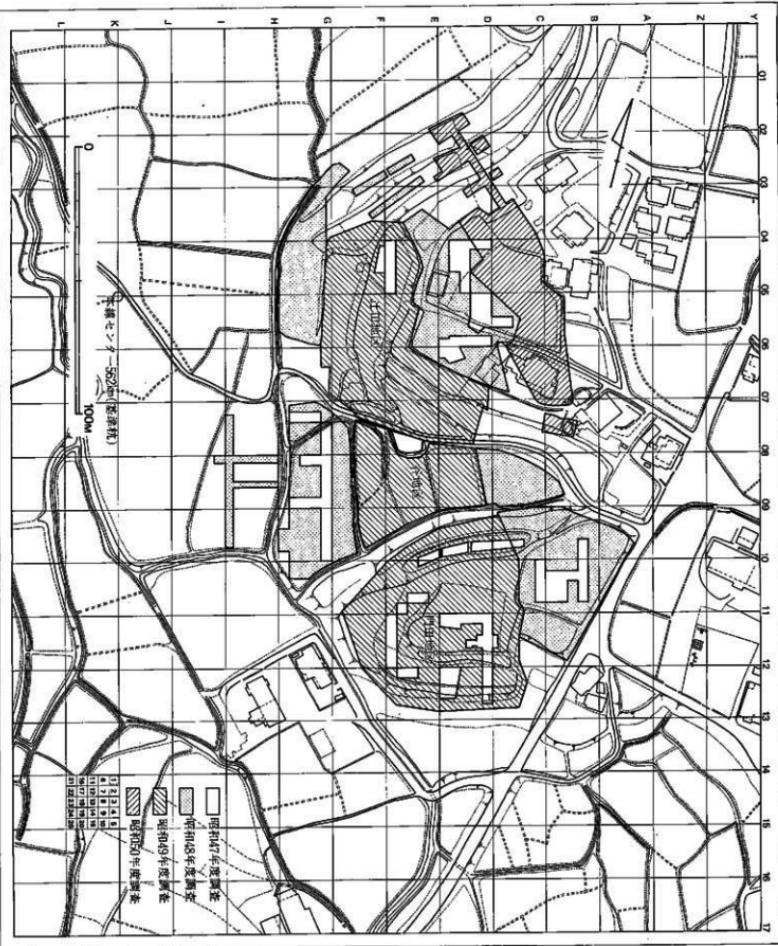
また、中山氏はこの地域一帯から弥生式土器・鹽檜・須恵器・瓦等が採集されることや、古墳の存在もすでに指摘されている。これが、門田遺跡がひろく知られるようになったはじめである。

本遺跡は、山陽新幹線関係埋蔵文化財地点番号の第19～27地点およびその周辺にあたり、谷を挟む2つの台地一帯の約32,000m²にまたがる大遺跡である。北から辻田地区・谷地区・門田地区と呼ぶ（第2図）。昭和47年、遺跡の規模・性格を知るために予備調査を行った（註2）。その結果、全城から遺構・遺物が多数発見され、先土器時代から中世にいたる大複合遺跡であることが明らかになった（註3）。

従って、本調査には少なくとも3年の日時が必要と考えられるに至った。また、当時教育委員会は保存問題も含め、国鉄側と数回にわたり協議した。その結果、車輌基地の設計と工事を一部変更して、新幹線開業当初に最小限必要な西側10線分に当る部分と東側の一部を、48年度に、中央部と側道は50年度までに本調査を終了するということとなった。切完的な調査を嫌っていた調査担当者としては懐念であった。このような分割調査は、調査の進行の過程で多くの弊害を引き起していった。なお、門田地区の発掘調査関係者は下記のとおりである。また、発掘調査並びに整理にあたっては、春日市・那珂川町在住各位の協力を得た。謝意を表する。



第1図 門田出土広形劍 (1/4)



第2図 丹波道篠崎町水系図 (1/500)

庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主 事	小川 浩一郎
		同 植田 實	
		同 加藤 俊一	
		嘱 托 吉村 源七	
調査担当者		技術主査 霍久 刷郎	
		技 師 横田 康雄	
		同 井上 裕弘	
		同 木下 修彦	
		同 佐々木 隆史	
		同 小池 瀬哲	
		嘱 托 岩瀬 正信	
		同 宮崎 貴夫	
調査員		横井 康治	
調査補助員	肥山 正秀・池辺 元明・渡辺 和子		
	桑田 和義・高田 一弘・市川 富久		
	石田 広美・三津井 知廣・丸山 康晴		
	森田 徹・織笠 昭・川道 寛		
	稻富 裕和・高橋 龍三郎・新井 真博		
	小林 美孝・行田 裕美・野村 俊一		
	小谷田 政夫・湖口 淳一・桑原 隆博		
	横尾 一作・関口 宏一・青藤 祐司		
	高橋 和子・長谷川 豊・石原 道洋		
	高田 弘信		

(1) 調査区域の設定

調査地区的区割りは、日本国有鉄道山陽新幹線本線センター 562 km の基準杭を基点とし、北に100m、南に240m、東に240m、西に40mの範囲にセンターに平行の20m方眼のグリッドを設定した(図2図)。南北に2ケタの数字を、東西にアルファベットを与えた。さらに、20mのグリッド内を検出された遺構と遺物の照合が的確にできるように、1辺4mの方眼で区切り、25の小地区を設定した。小地区には数字を与え、北東隅を1とし、南東隅を5として西方に行くにつれて数字が増大することとした。従って、小地区的呼称は、例えばK15-1(第2図斜線部分)と表示するようにした。本線センターは磁北に対して西偏14°である。標高点は、日本国有鉄道が設定した BM-No. 6 : 22,716m を原点とした。

門田遺跡

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和47年度の予備調査を含め、4次にわたり、50年10月で完了した。ここでは、年度毎の概略を記す。また、今回報告する門田地区の調査経過（弥生時代の墓地関係遺構の調査は除く）は日誌をくりながらたどってみたい。

昭和47年度の調査（昭和47年7月14日～10月2日）

32,000m²にわたる大遺跡であると同時に、広形銅矛の出土が伝えられている重要な遺跡であるため、予備調査を行ない遺跡の実態を把握する必要性があった。

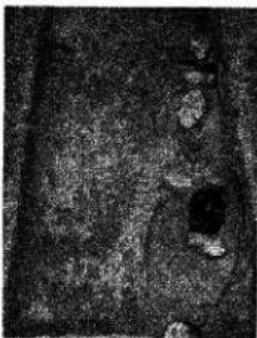
調査は、グリッドに平行のトレチを各所に設定して発掘にかかり、遺構の発見された所から一部拡張し、4,500m²を調査した（図版2・3、第2回）。その結果、門田地区のC11・D12から弥生時代前期の竪状空穴3、D12・13、E12から中期の窓棺墓20、中期～後期のものと思われる土墳墓1・石棺墓2・石蓋土墳墓1が群集して発見された。B11・E12からは、すでに破壊されていた古墳1基と、円墳状の墳形を残した古墳（E12・13）の周溝を検出した。B11からは中世の竪穴住居跡1と掘立柱建物跡群が発見された。

谷地区のG8～10からは溝状遺構が検出され、溝内から縄文時代後期～弥生時代前期の土器類・木器類・流木・植物種子など多量に出土した。また、流れ込みと思われるナイフ形石器・刃器・削器・細石刃・細石刃核・石鏃・爪形文土器など先土器・縄文時代の遺物が混在していた。

辻田地区のD5からは、弥生時代前期～中期の窓棺墓・土墳墓群、D5・E5から中期の竪穴住居跡、D6・7から後期の竪穴住居跡が発見された。また、D5・6からは古墳2基が破壊された状態で、さらに中世の掘立柱建物跡群が検出された。

遺物は、先土器・縄文時代の遺物として、ナイフ形石器・刃器・削器・細石刃・細石刃核・石斧・石鏃・爪形文土器・夜臼式土器など多數、弥生時代の遺物としては、弥生式土器多數と鉄鏃・管玉・石斧・石廻丁・石ノミ・抉入石斧・砥石などの石器類・不明木器など多數が出土した。古墳からは勾玉・管玉・小玉・丸玉など玉類をはじめ、刀子・鉄鏃などの鉄器類、さらにE11・12の古墳の周溝からは円筒埴輪片なども発見された。また、B11の中世の竪穴住居跡や土墳内から骨董・土師器などが出土した。

今回の予備調査によって、この門田遺跡が、先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代にわたり連續として形成された濃密な大複合遺跡であることが判った。それは、今回



第3回 D13区発見の窓棺墓群

設定した全てのトレンチから遺構・遺物が検出されたことがそれを物語っている。とりわけ、本遺跡の主体は弥生時代前期～後期へと連続的に展開する集落と墓地群の相互関係が重層的にとらえられる可能性をもつ重要な遺跡であるということであった（註4）。

従って、本調査には少なくとも3年の日時が必要と考えられるに至り、保存問題も含め、国鉄と数回にわたり協議を重ねた。その結果、保存問題については、本遺跡が基地の入口部にあたるため、また、設計変更した場合、現在の中原集落全域がかかってしまうということなど設計上極めて困難であるとされた。従って車両基地の設計と工程を一部変更して、開業当初に最小限必要な西側10線分と東側1線分を48年度に、中央部と側道は50年度までに本調査を完了するということになった。

昭和48年度の調査（昭和48年8月22日～12月26日・昭和49年2月4日～3月31日）

調査は遺跡の南東部（谷頭地区も含む）と北側の台地の中央平坦部にあたる東側建設線地区、谷頭口部と北側台地の西端にあたる開通時に必要な西側10線地区の全面発掘調査を建設線に沿ったかたちで実施した（図版4～7、第2図）。なお、本調査にあたり、前年の予備調査で、この遺跡が各時代の遺構をもち、かつ広大なものであることを考慮して、調査の万全を期すために発掘調査指導委員会を設置した。また、調査期間が年度末までの7ヶ月間に限られたために、門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱し、辻田地区先土器時代包含層の調査に、佐世保市文化科学館と平戸市教育委員会から調査員を派遣して援助をいただいた。予備調査での予想どおり、先土器・縄文時代の遺物をはじめ、弥生・古墳・歴史時代の各種の遺構・遺物が検出され、大複合遺跡であることが裏付けられた。

門田地区A11・B11で先土器時代の包含層が確認され、ナイフ形石器、断面が三角形を呈す磨製石器をはじめ、細石刃・細石刃核多数が層位的に検出された。B11からは弥生時代前期の竪穴住居跡1とB11、C10・11から袋状竪穴5基が発見された。B10～12では古墳時代後期の竪穴住居跡2、B11からはすでに破壊された古墳1基が発見された。また、当初古墳として知られていた2号墳については平安博物館に委嘱したもので、墳丘は後世の破壊によりかなり原形を崩され、各所に盗掘の跡がみられた。調査の結果、周溝外側で約27mを測る円墳で、南に向かって開口する單室の横穴式石室を持つ古墳であることが判った。石室の大半は後世の開墾・盗掘により破壊されていたが、玄室からは直刀・鉢・刀子・鎌・馬具・金環・銅鏡・管玉・ガラス玉をはじめ、須恵器・土師器の土器類多数が副葬されていた（註5）。また、A11・B12からは、前年の予備調査で検出された中世の竪穴住居跡を含め、3軒と掘立柱建物跡数棟が発見された。

谷地区のB9・C9・D9からは西走する低平なU字状の溝状遺構が、F8～10・G9～10からは北走する溝がそれぞれ発見された（この溝は、後に前記の溝と同じであることが判った）。また、この北走する溝の北端に、新たに作られたV字溝が続き、辻田地区西側縦をめぐる。低平なU字状の溝は、弥生時代前期から古墳時代前期の長い期間にわたって使用されたもの

門田遺跡

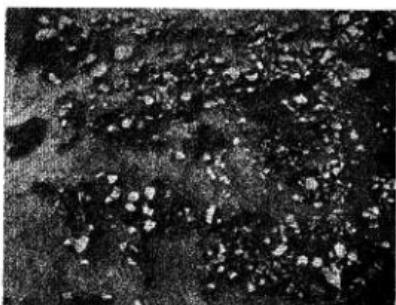
のである。北側に続くV字溝は、弥生時代前期末に作られ、すでに中期には埋没していた溝であった。特にB9・C9の溝内からは整理箱200箱以上におよぶ弥生式土器・土師器・磁器・瓦器・瓦・石器・木器(平張・又鋸・鉗・木臼・台付槽・杓子・不明木器)・漆木・種子等多数が検出された(第4図)。

さらに、B9・C9・D9のU字状をなす溝の北辺から内側にかけて、ドングリ(カシ類)を貯蔵した竪穴6基が検出された(第5図)。時期は弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に属するもので、現在、国内で最も新しい例であり重要な発見であった。

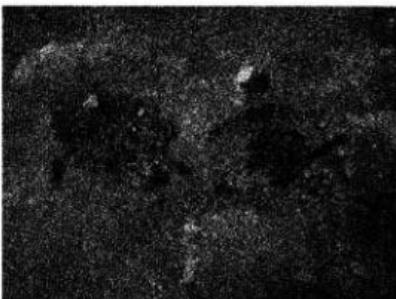
辻田地区のD4～6からは弥生時代前期の袋状竪穴15基が、D5・E5からは中期の竪穴住居跡4、D6・7、E6・7からは後期の竪穴住居跡3軒が発見された。また、D4・D5からは、前期から中期にわたる窓檻墓6基と土壙墓5基が群集して検出された。これは、すでに予備調査で確認されていた窓檻墓群の南端部を形成するものであることが判った。

D7からは、前記した弥生後期の住居跡と複合して古墳時代前期の竪穴住居跡1、D5・6、E5からは中世のものと思われる掘立柱建物跡群や柵列が発見された(註6)。

今回の調査の成果は、予備調査で予想されたとおり多くの先土器・縄文時代の遺物をはじめ弥生・古墳・歴史時代にわたる多くの遺構・遺物が発見されたことと同時に、A11区で、一部残存する先土器時代の包含層を好み得たこと、F10区で底部のある爪形文土器の良好な資料2個体分が発見されたことにもある。また、この遺跡の主題である弥生時代の遺構・遺物は調査地区全域から発見された。門田地区からは前期末の住居跡と袋状竪穴群、さらに辻田地区でも14基の袋状竪穴群をはじめ、中期・後期の住居跡群や前期から中期の窓檻墓・土壙墓群が発見され、両地区にそれぞれ並行して集落・墓地が形成されていたことが判った。それはまた、両地区を地形的に区分する谷地区に、低平な溝とV字溝が辻田地区を取り囲むように走り、両地区をさ



第4図 谷地区C9区出土の遺物集積状態



第5図 谷地区発見のドングリ貯蔵穴

らに独立させていることとも一致することであった。

昭和49年度の調査（昭和49年4月1日～11月8日）

調査は、前年度調査した東側建設線と、西側10線地区に挟まれた建設線11～26線地域の全面発掘調査を実施した（図版8～10、第2図）。この地区は、門田地区、谷地区のほぼ中央部と辻田地区の南・西斜面にあたる。今回の調査地域は、今後予想される九州新幹線および夜行列車運行に伴う予備車両基地ということであった。しかし、実際は工事工程等の都合と称して、調査地区ぎりぎりまでブルドーザーが走り、周囲を埋立てたために調査地区は谷間となり雨期には貯水池という感を呈した。從って排水と堆土の連繋にかなりの時間を費す調査となってしまった。また、谷地区では周囲を埋立てられたため、一部未調査地区を残す結果になるなど、分割調査の弊害がはやくも出た年度であった。今年度の調査でも、前回と同様、先土器時代から中世までわたる各種の遺構・遺物が発見された。

門田地区D11～13・E11～12からは弥生時代前期の袋状空穴30基が検出され、前回までに調査されたものを含めると総数37基を数えることになった。その中には、前期の合口窓棺墓1基が発見されたものもあり、貯蔵穴の再利用として珍しい例であった。C～F12・13からは弥生時代前期の窓棺墓・木棺墓がそれぞれ1基、中期～後期の窓棺墓68基、後期の石棺墓5基・石蓋土壙墓1基・土壙墓1基が群集して検出された。

特に、窓棺の埋葬方向が台地の南斜面に対して、平行に墓壙を掘り、西から東の方向に2列に規格性をもって埋葬されていたことは興味深かった（第6図）。また、59号と65号窓棺墓からは、貝網が発見されたり、全体に入骨の保存の良いものなどがあり入骨の実測にかなり時間を費した。D13からは、古墳時代後期の住居跡を切って、釘を使用した箱形の組合せ木棺墓が検出された。棺外からは多数の土師器が、棺内には八稜鏡1・鉄製紡錘1、棺上に刀子がそれぞれ隔離されて出土した。

谷地区では、昨年の谷頭部で確認された西走する低平なU字状の溝と、谷開口部で検出された北走する溝に連続する溝が発見された。昨年度のB9・C9地区ほどではないが、多量の弥生式土器・土師器・石器・木器等が出土した。

また、谷頭地区と同様、溝の北側縁に沿ってドングリを貯蔵した空穴が5基発見された。これで昨年の6基と合せて11基になった。とりわけ、10号貯蔵穴は遺存状態が良く、ドングリ（イチイガシ）が2斗4升も包蔵されていた。上面には小枝を交互に組



第6図 2列に並んだ窓棺墓群

門田遺跡

んだ状態で蓋をし、その下面に木葉をかぶせ、その下にドングリを貯蔵するという状態で検出された。また、溝内最下層から多量に発見された細石器類は、G 9・10地区で発見されたものと同じで、二次堆積のものであるが、資料としては貴重であった。

辻田地区E 5・F 6からは、弥生時代前期・中期の竪穴住居跡がそれぞれ1軒。中期の住居跡から鉄斧が検出されたことは重要である。F 6・7, G 7では後期の甕棺墓2・石蓋土壙墓1・土壙墓3が群集して発見された。昨年D 4・5区で発見された墓地群とは異なり、これで辻田地区に2つの墓地群が存在していたことになる。そのうちの1号甕棺墓からはガラス小玉12個、石蓋土壙墓からガラス小玉180数個と数百の泡玉、また1号土壙墓からはガラス小玉800個、3号土壙墓からは勾玉1個とガラス管玉3個、ガラス小玉1個がそれぞれ発見された。このように6基という数少ないグループの大半が、多量の玉類を副葬していたことは、少なからずこの時期の本遺跡の特定集団を構成するグループであり、重要な発見であった。また、F 5で検出された製鉄炉跡の発見も貴重のことであった(註7)。

今回の調査の成果は、遺構は伴わないが多量に発見された先土器・縄文時代の遺物類もさることながら、門田地区南斜面で発見された弥生時代前期から後期にわたる甕棺墓(そのうちの2基から貝刺が発見されている)・木棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓群、台地のほぼ中央部で検出された30基の袋状竪穴群、谷地区で発見された弥生時代終末から古墳時代初めにわたる5基のドングリを貯蔵した竪穴、辻田地区で発見された前期と中期の住居跡、多くの玉類を副葬した後期前半の甕棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓群からなる特定小グループの発見、また、中世のものと思われる住居跡・掘立柱建物跡・製鉄跡などがある。

昭和50年度の調査(昭和50年5月22日～10月15日)

調査は、東側側道建設予定地で、門田遺跡としては、最後に残った遺跡のほぼ東北部(辻田地区の一部)の全面発掘調査を実施したものである(図版II, 第2図)。この地区は地形から見て、最も条件のよい地点であったが、昭和47年度の予備調査の際、用地買収の都合で発掘ができなかつた。これが最後に大きな悔いを残すことになった。この地区には甕棺墓群が存在することから、工事用の第1線を一筆変更し、とにかく博多開業に合わせるよう調査に時間のかかる地区を後に回し、予備調査で大半の調査を終了した地区に工事用第1線を計画したものであった。調査を始めることにしたものの、耕土する土砂の置場として計画していた北側の低地は、すでに国鉄側によって埋められ、橋を張られたため、北側斜面の調査を完了して後、ここを土砂捨て場にするしかなかつた。

調査の結果、台地平坦部全域から弥生時代前期の袋状竪穴35基が検出された。これで昭和48年度に調査した15基を含めると、この辻田地区で総数50基となる。また、今回の調査では竪穴内に含まれる穀類、その他の植物性食料の存在を明らかにするため、プラント・オーパール分析の藤原宏志、花粉分析の安田齊彦、木炭分析の西田正規の諸先生に参加していただいた。なお、

竪穴内土壤の水洗を行い、米・豆・木の実をはじめ多くの植物性食料の存在が明らかになったことは大きな成果であった。

今回検出された弥生時代の竪穴住居跡は8軒で、前期2・中期2・後期4である（付図2）。これで前回までに発掘された7軒を含めて15軒になつた。とりわけ、後期の住居跡からは、刀子・鉤・鎌などの鉄製品をはじめ、石庖丁も出土した。また、さらに東側の用地外に、この期の住居跡群が拡大する可能性をもつことが判った。

昭和48年度の調査のD5区で検出された墓棺墓・土塚墓群のつづきの墓地群が、台地中央平緩部から発見された。墓棺墓21・木棺墓1・石蓋土塚墓1・土塚墓7で、前回と同様、台地全体が後世の削平をかなり受けているため、特に西端部の土塚墓群は上部を欠失しているもののが多かった。時期は前期末のもの3基で、他は主に中期後半に属し、一部後期初頭のものもあった。とりわけ、台地中央部で検出された23号・24号・27号墓棺墓から鐵劍3、鐵戈2（1つは有柄鐵戈）、青銅製鏡先1が発見されたことは大きな成果である。

しかし、一部盗掘を受けていたので副葬品のすべては明らかでないが、鐵劍・有柄鐵戈（朱塗りの柄の付いた痕跡あり）を出した24号墓棺墓は（第8図）、墓壙が $3m \times 2.5m$ 、深さ2mと大きく2つの大きな壺を合せた合口壺塚であった。内部は真赤に水銀朱が塗られ、下壺の中位には直径15cm前後の二つの円弧が一部で重った状態で確認できた。多分、銅鏡の副葬もあったことを示すものと思われる。また、23号墓棺墓の盗掘坑覆土中から出土した青銅製鏡先が、この壺塚に副葬されたものであれば、管見する資料中もっと古い時期（中期後半）のものとなるなど、貴重な資料の発見であった。今になって、この地点が予備調査できていたらと悔まれる調査であった。



第7図　辻田地区住居跡・近世墓群



第8図　鐵戈を副葬した24号墓棺墓

門田遺跡

B 5・6、C 5・6からは古墳時代前期の所謂ベット状遺構をもった大型の竪穴住居跡4軒が検出された(第7図)。これは前記した弥生時代後期の住居跡群に連続する時期のものであり、多くの土器類、刀子・鎌をはじめとする鉄製品が出土した。

また、墳丘・周溝が完全に失われ、石室の石材もかなり除去された古墳2基が発見された。中世のものとしては、4間×5間と2間×2間の掘立柱建物跡2棟と火葬墓がある。他に、台地中央東側に群集して近世墓41基(第7図)が検出されたことも貴重な発見であった(註8)。

今回の調査の成果は、弥生時代前期から後期にわたる壇塚墓・木棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓群、とりわけ、中期後半の壇塚墓3基から鉄劍3、鉄戈2(1つは有柄鉄戈で、現在のところ日本で唯一の例)、青銅製鋏先1が発見されたことは大きな成果であった。昨年発見された後期前半の特定小グループの墓地群と同様、この墓地は本遺跡をも含めたこの地域集団の指導的立場にあった集団の墓といえよう。

また、台地平坦部全域から発見された前期の袋状竪穴群からは、多くの土器・石器類をはじめ、米・豆・木の実などの植物性食料の発見、敷度にわたる破壊盗掘を受けた古墳2基の発見、中世のものと思われる掘立柱建物跡群・火葬墓の発見、台地中央東側に群集して発見された41基の近世墓群などがある。

最終調査となった今回の調査では、それまでの数次にわたる分割調査の弊害を少なからず克服するため、遺跡における遺物の分布をドットすることにより、遺物の動態、さらには人間の行動形態にまで追うひとつの試みを行った。また、当時の人の形質調査をはじめ、自然環境復原の作業として花粉分析・プラントオバール分析を実施したことでも今回の調査の重要な点といえる。

門田地区的調査経過

ここに報告する門田地区的調査は、昭和48・49年度の2年次にわたって調査されたものである。また、49年に並行して調査された弥生時代の墓地群については別に報告する予定である。ここでは、墓地群の調査を除き作業の進行状況を日誌でたどってみたい。

昭和48年

12月4日 門田地区A10・11、B10~12、C10~12区の表土剥ぎを開始する。

12月10日 谷地区的調査と並行のため、表土剥ぎが遅れている。

12月20日 表土剥ぎがほぼ完了し、遺構の検出をはじめる。

12月25日 住居跡などのプランが確認されはじめる。

12月26日 今日で発掘を中止し、冬休みに入る。

昭和49年

2月4日 作業を再開する。住居跡内を掘りはじめる。

2月7日 2号住居跡が掘り終り、多くの完形の土器が検出された。3号・4号・5号住居跡

も並行して掘りはじめる。

2月8日 2号住居跡の清掃と写真撮影を行う。

2月12日 3・4・5号住居跡もほぼ掘り上ってくる。2号住居内出土の土器群の平面図をとりはじめる。

2月13日 朝から3・4号袋状竪穴の発掘をはじめる。3・5号住居跡の写真撮影を行う。

2月15日 4号住居跡の写真撮影を行う。4号住居跡の北側に、さらに1軒住居跡があることが確認される。

2月25日 ほぼ遺構が検出し終ったが、まだA10・B12区あたりに遺構らしきものが存在するので、再度、清掃をはじめる。

2月27日 A10区から住居跡1軒と、B12からは溝状遺構と不整円形の竪穴が検出されはじめる。

3月5日 完全に遺構が掘り上がる。午後から全体写真をとるため、清掃をはじめる。

3月6日 午前中で清掃が終り、午後、写真撮影を行う。天候が悪くあまりよくなかった。

3月8日 航空写真をとるための清掃を行う。

3月9日 航空写真をとる。

3月10日 割付けを開始する。

3月12日 実測を開始する。谷地区の調査が忙しくなり、大半は谷地区的調査にはいる。

3月20日 平面実測が終了、午後エレベーションをとりはじめる。

3月23日 エレベーションが終る。

3月25日 旧地形の測量を開始する。

3月31日 門田地区A10・11、B10～12、C10～12区の調査が全て終了する。

6月14日 門田地区C・D・E・F10～13の伐採を開始する。

6月18日 C11・12区の方から表土剥ぎを始める。

6月25日 予備調査で確認された箱式石棺の抜き跡・土壙墓・石蓋土壙墓を検出した。

6月27日 D10～12、E10～12区の表土剥ぎがほぼ完了し、遺構検出にかかる。

6月28日 D10・11区には目立った遺構ではなく、柱穴と思われる小ピットが多数検出されたにすぎない。

7月1日 D13・E13区の東側と、C14・D14・E14地区は豪棺墓も少なく、竹根が多いので今日から小型ブルドーザーにより表土剥ぎを行う。

7月3日 E12区の門田2号墳付近には、多数の近世墓の掘り方に混じって袋状竪穴らしきものが数個確認されるようになる。

7月6日 表土剥ぎの終ったC13・D13・E13・F12区を清掃し、遺構の検出にかかった。この日で豪棺墓総数40基となる。弥生前期の袋状竪穴群と重複している豪棺墓もあるので豪棺墓

門田遺跡

群全体の露出を先に行い、墓地群の写真撮影終了後に袋状竪穴群の発掘にかかることにした。

7月22日 D12地区の墓地群と重複していない袋状竪穴の発掘をはじめる。

7月25日 夏休みで学生が多くなり、

8・12・13・14・17号袋状竪穴を今日
から一齊に掘りはじめる。

7月31日 調査中であった22号袋状竪
穴内の底部近くから前期の合口壺棺墓

1基が発見された。これは貯蔵穴の再
利用として珍しい。また、この日から
ほとんど遺構の検出されていないC10

・11、D10・11、E10・11区の地形測
量も開始した。



第9図 袋状竪穴群の発掘風景

8月5日 12・13・20号袋状竪穴を清掃し、写真撮影を行う。今日から個別袋状竪穴の実測を
開始する。

8月9日 16・24・25・26号袋状竪穴を掘りはじめる。

8月19日 袋状竪穴群もほぼ掘り上る。壺棺墓群もほぼ検出し終ったので、この日から壺棺墓
個々の発掘をはじめる。

8月29日 D13区の斜面から竪穴住居跡と重複して歴史時代の木棺墓が発見される。

9月7日 棚内から八駒鏡や鉄製紡錘が検出される。

9月17日 門田地区全体の航空写真撮影を行い、この日で、弥生時代の墓地群を除き写真・実
測の全てが終了する。

(井上裕弘)

註1 中山平次郎「副鉗頭剣発見地の遺物追加(上)」『考古学雑誌』8-10 1918 中山平次郎「新発見
の副鉗」『考古学』1-5・6 1930

2 調査の中途で、地元の古志の延から広形鏡子の出土地点が今回の対象地域からはずれているらしい
ことが判った。従って、中山平次郎氏の記された出土地点を詳細に検討した結果、古志の話と同一
の地点であることが明らかになった。我々の誤認であった。しかし、遺物の分布状態や内容からみ
て銅矛の出土地点も門田遺跡として包括できると思われる。

3 井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告」福岡県教育委員会 1973

4 註3と同じ

5 甲元寅之・松井忠春「門田2号墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育
委員会 1976

6 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1975

7 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1975

8 小池史哲編「昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1976

2. 立地と環境

遺跡は福岡県春日市大字上白水字門田及び辻田にまたがり、面積約32,000m²に及ぶ。

背振山系に源を発する那珂川が山あいを抜け、後野・道善あたりから川幅を広げ、流れもゆるやかになる。日佐あたりまでは右岸を中心に冲積地を、以北は御笠川とともに肥沃な福岡平野を形成する。遺跡はその那珂川が梶原・瀬戸を抜けて来る梶原川と合流する下片瀬から東方約1kmの春日丘陵上に位置する。遺跡の東側は県道を挟んで上白水の集落となり、集落の周辺は整然とした水田が広がっている。

春日市・那珂川町にまたがる50万m²に及ぶ広大な新幹線車両基地は、上白水・中原の集落を避けるようにして建設された結果60ヶ所の遺跡を破壊した。門田遺跡はその車両基地の入口部に当っていた。

地形からすると、遺跡は中位段丘Ⅱ面に該当する（註1）と思われる。標高33m前後で、同じ段丘端部には北方向では日拝塚古墳をのせて、南方へ続いている。門田遺跡の南方600mに位置する原遺跡はその地質から中位段丘Ⅰ面に、西に接する柏田遺跡は低位段丘上の遺跡である。

遺跡は2つの台地と、台地に挟まれた谷（水田部）より成る。北から辻田地区・谷地区・門田地区と呼ぶ。辻田地区はD5・D6区が最も高く標高33mが巡る。北方へ緩く傾斜し、32mで平坦部を形成する。台地の西側は3段、谷側は2段と削平された高低差1~2mの段差をもち、段々畝状を呈す。F6区では弥生時代の住居跡、後期の墳墓群が発見されたので、この地区は本来の台地傾斜のままであると考えられる。この地区的標高が26m、台地端部が23mで水田面から緩やかにあがっていたことが判る。この台地の“へり”を巡るV字溝の意味も立地によるものかもしれない。

谷地区は両台地間にあり、扇状を呈す。谷頭の幅は16m、開口部は80mに達す。この谷頭からは絶えず潤水があふれ、谷開口部で、門田地区西端を巡る水流と合流し、北へ流れる。H区のトレンチ調査では3m掘っても砂層が続き河道であったことが判っている。門田地区は台地中央部で標高31mを測り、北側に広い平坦面を形成する。谷側、西側とも崖状を呈し、水田に落ち、辻田地区の台地のあり方と異なっている。東側は県道によって切られているが、遺跡東側のトレンチ調査により、台地端部として大過ないことが証明されている。

この2つの台地を形成する地質は白色粘土層、いわゆる八女粘土層と呼ばれる土層で、上部の暗褐色粘土層とは凹凸の多い不整合面で接している（第12図）。しかし門田地区東側では白色粘土層は見られずマンガンを含んだ鷺色土層を持って形成され、その上部には砂礫層が堆積し、洪積世に部分的に水で洗われていたことを示し、複雑な様相を呈している。

門田遺跡

門田遺跡の周辺、つまり春日市周辺は須恵・岡本遺跡を中心に“奴国”ないし“弥生銀座”と呼ばれ、広形銅戈の鉄型と銅鐸を出土した大南遺跡（註2）をはじめ、伯玄社遺跡、一の谷遺跡など著名な遺跡が集中する。これらについては第1集（註3）に詳しいので再述しない。

門田地区で確認された遺構は先土器時代から歴史時代にわたる。先土器時代はB11区に細刃器の包含層が確認された。縄文時代の遺構・遺物は認められない。弥生時代に入ると住居跡2軒、袋状竪穴37基の住居関係の遺構と、南斜面を中心に窓檻墓67基・石蓋土墳墓1基・箱式石棺墓5基・土墳・木棺墓8基の墓地群を形成する。古墳時代は台地中央に周溝径27mの円墳（門田2号墳—1973年平安博物館調査、1976年第1集に報告済）と東斜面に石室の抜き跡のみの古墳の2基の他、竪穴住居跡3軒と溝状遺構が検出された。歴史時代の遺構は東側に集中している。竪穴住居跡3軒・建物跡7棟・柵列・方形竪穴跡・不整円形竪穴跡各1と溝状遺構1本で、その他に多数の柱穴群がみられる。

（木下 修）

註1 古川博哉「板付上巻本編2-1地形・地質」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』35 1976

2 1976年 春日市教育委員会調査

3 井上裕弘「I-3春日・那珂川地区的遺跡の環境」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会 1976

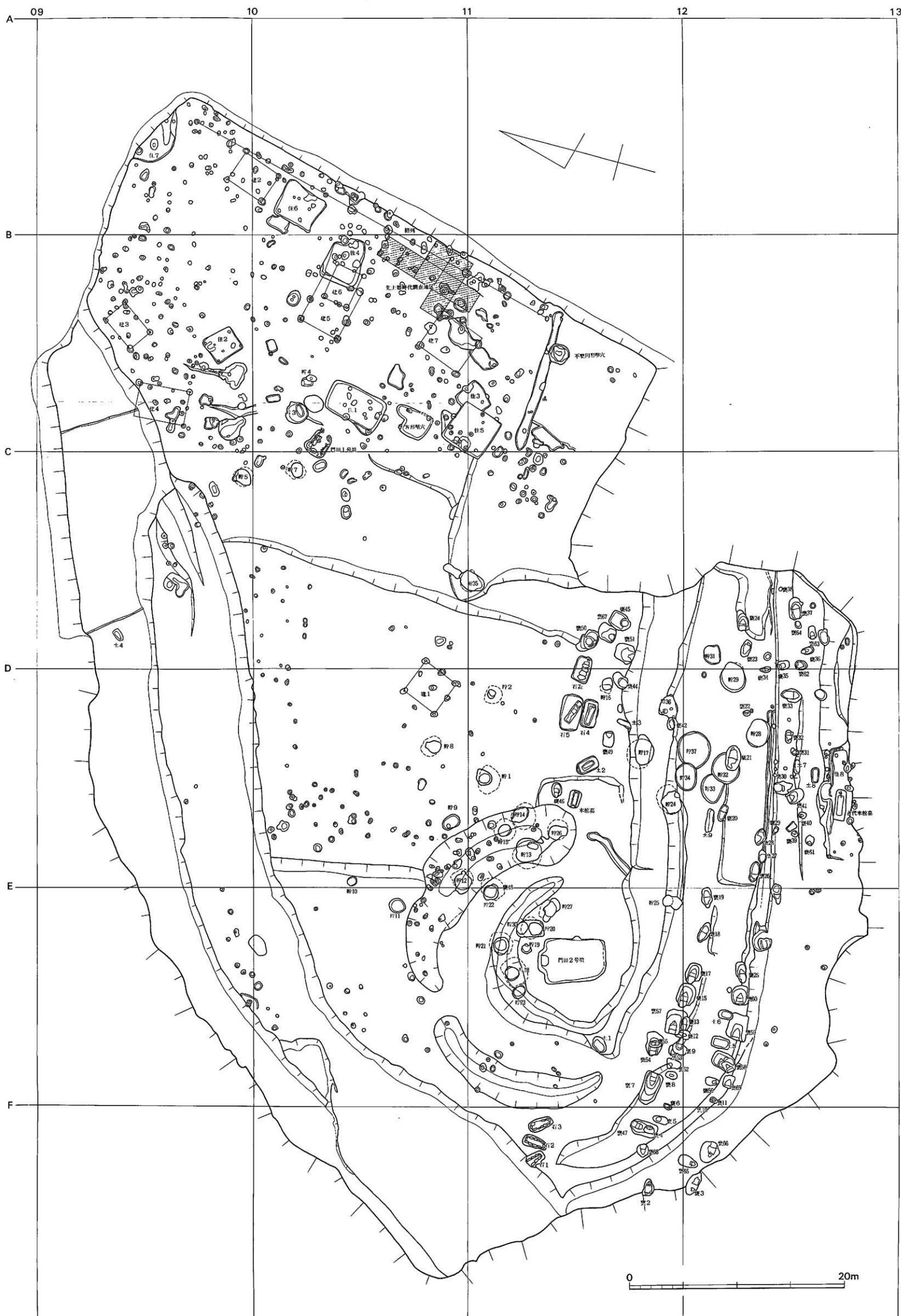
3. 先土器時代の調査

(1) 調査の経過

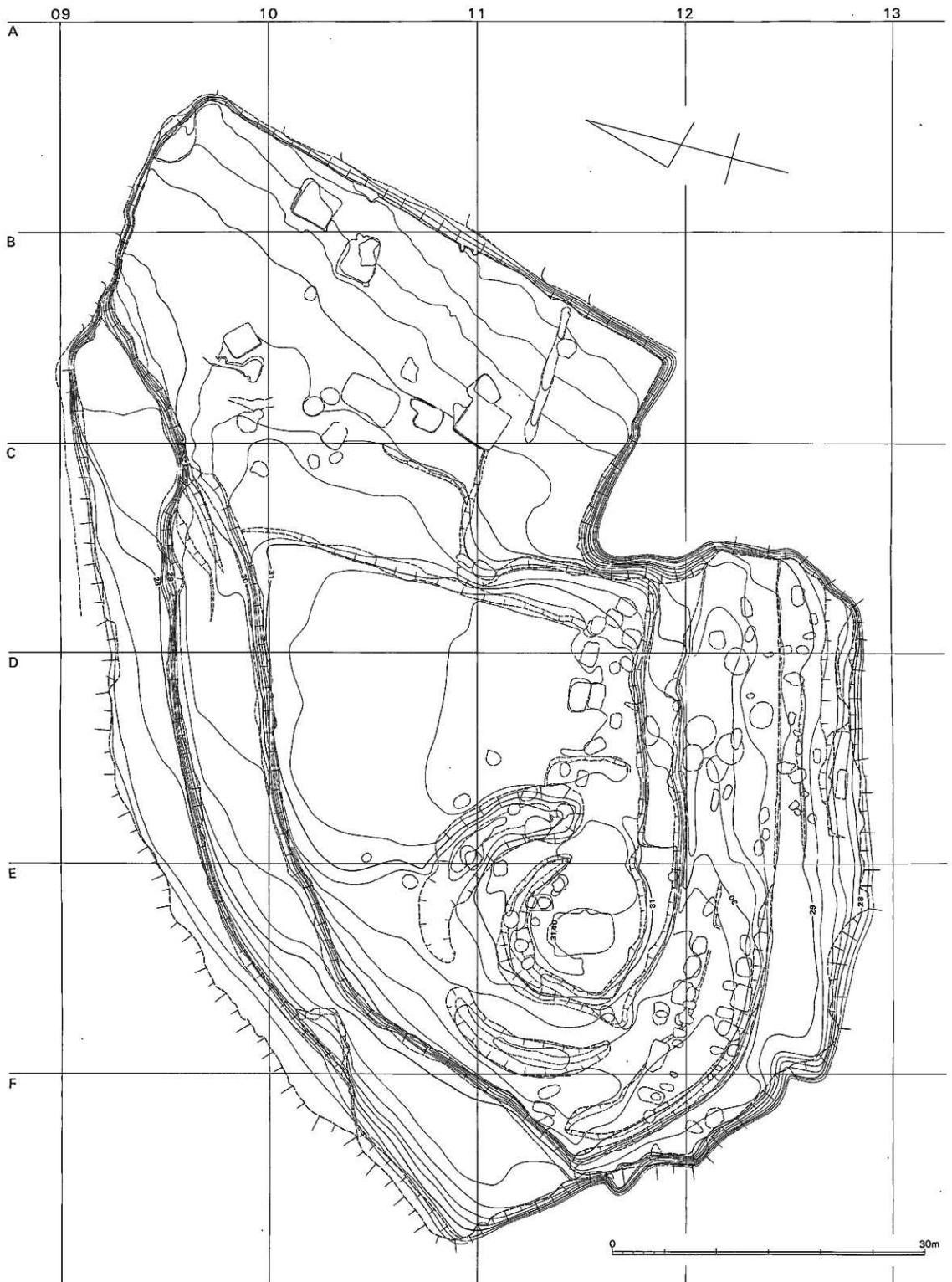
門田遺跡の調査は47年度から50年度の4ヵ年にわたりて行なわれ、それに伴い先土器時代の遺物が発見された。以下、年度ごとの成果は以下のとおりである。

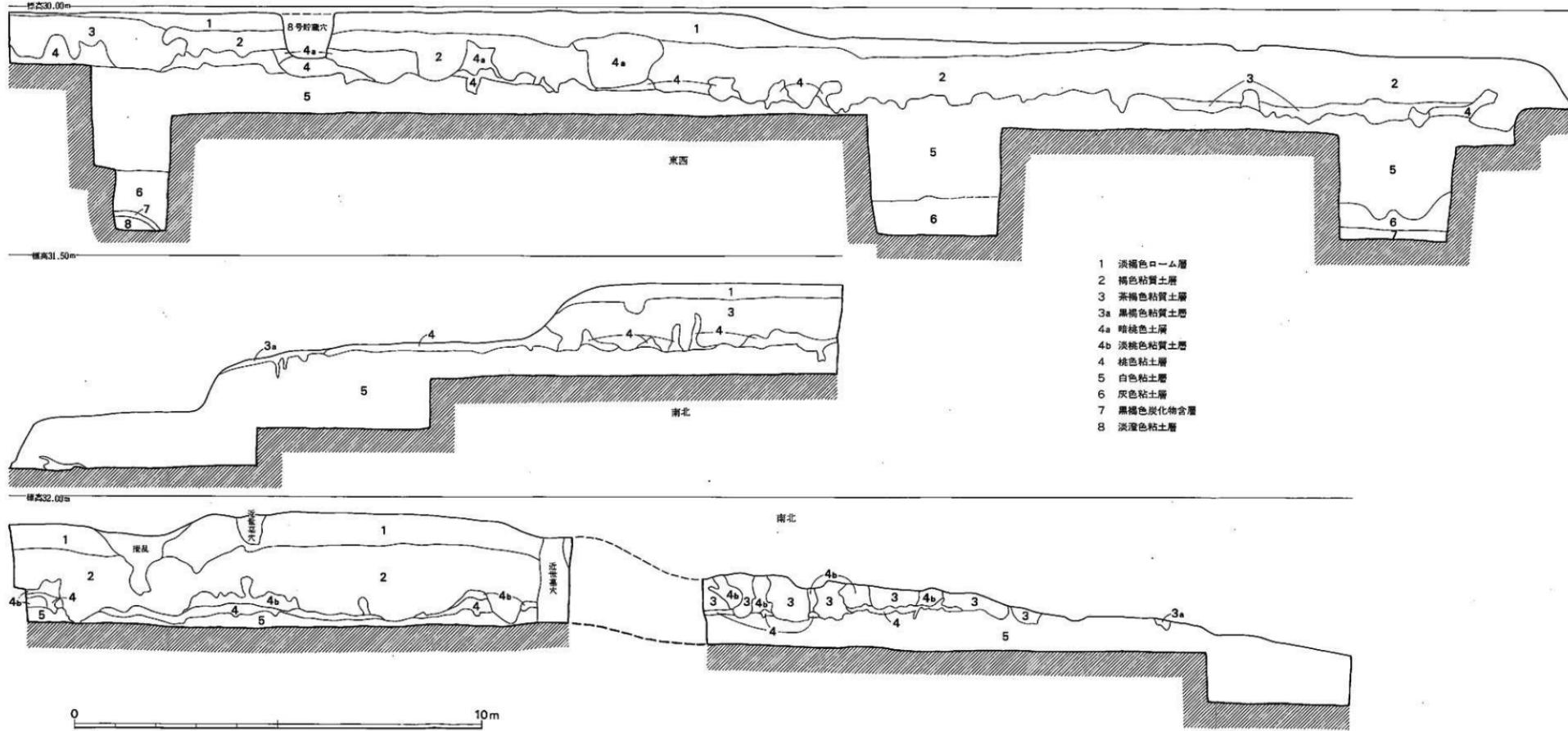
47年度の調査 谷地区の予備調査でG10区の溝状遺構内よりナイフ形石器・細石刃核・細石刃・削器や爪形文土器が弥生時代の石器・土器と混在し、流れ込んだ状態で出土した。その結果、門田地区・辻田地区に先土器時代の生活跡が存在した可能性が強くなった。

48年度の調査 B11区の弥生時代から歴史時代にわたる遺構検出中に細石刃核、細石刃が出土する。画面作成後に下部の土層の調査を行ない先土器時代の包含層を確認した。一方、谷地区では溝状遺構の最下層を中心に多量の細石刃核・細石刃・ナイフ形石器をはじめとする先土器時代の遺物が出土した。また、F10-24区より爪形文土器の底部が発見された。辻田地区にも上部遺構の調査中に先土器時代の遺物が出土したので、佐世保市文化科学館久村貞男、萩原博文（平戸市教育委員会社会教育課）両氏に調査を依頼した結果、すでに包含層が削平されてしまっていることが判明した。



第10図 門田地区遺跡配置図 (1/200)





第12図 門田地区東西・南北トレンチ土層断面図 (1/80)

49年度の調査 門田地区D11-13, E11-13区を中心とする調査では26号袋状豊穴中に細石刃核が出土したが、下部の調査では生活跡は発見されなかった。谷地区D・E9区は溝状遺構最下部より石器が出土した。辻田地区でもE5区より数点の細石刃核が出土したが再堆積であった。

50年度の調査 辻田地区C5, D5区の弥生時代の遺構埋土中より細石刃核・細石刃・ナイフ形石器が出土したが包含層は確認できなかった。

以上のように門田遺跡の先土器時代の遺物は門田地区、谷地区、辻田地区全域にわたって出土したが、門田地区東側の狭い範囲に包含層が確認されたのみであった。今回の報告は門田地区のみに限って行なう。

包含層の調査は49年3月13日から22日まで行なった。A11・B11区の道路脇で上部遺構の調査中に細石刃核・細石刃・剣片がまとまって出土した。因而の作成後台地の傾斜に沿って $2 \times 10m$ のトレンチを、東側に $2 \times 4m$ 、西側に $2 \times 2m$ の拡張区を設けた(第10図)。東側よりAT, BT, CTとし、内を $2 \times 2m$ の小区に分けた。発掘面積は $32m^2$ である。

(2) 層位(図版15, 第14図, 付図1)

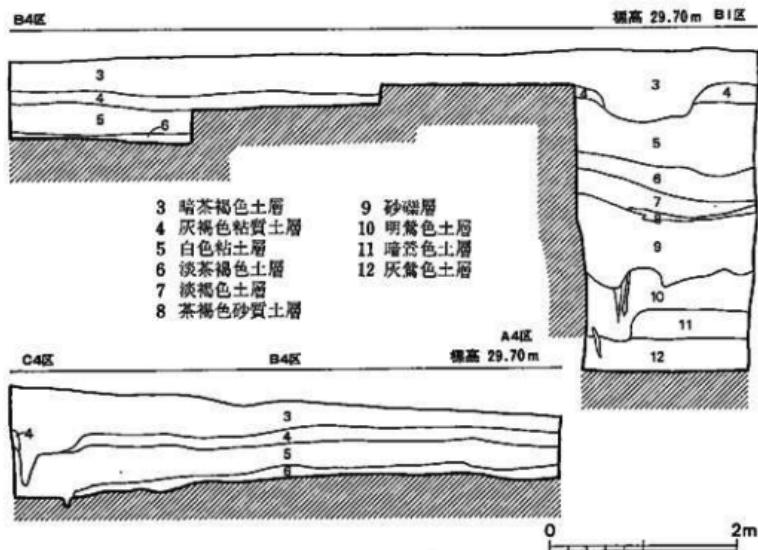
門田地区は門田2号墳の頂部で標高33mを測るが、古墳の周辺で31mのコンタが巡る。西側は台地の削平などもあり、若干傾斜が急である。東側は30.5mのコンタが示すように、広い平坦部を形成している。B11地区では30.5mのコンタが台地の削平面に沿って走り、台地が西から東に傾斜していることが判る。台地の東側は限道によって切られ2m前後の段を有する。調査は全体を6層まで掘り下げ、B1区のみ堆積状態確認のため-3.5mまで深層削りをした。

土層の堆積は(第14図)1層が表土層(約25cm)、2層が褐色土層(約15cm)で、先土器時代の調査時にはすでに除去されている。3層(30~40cm)は暗茶褐色を呈すローム層で、下部になると若干明るく、粘性が強くなる。東側になるほど薄くなっている。細石刃核・細石刃・スパール・使用痕のある剣片・剣片が出土した。第4層(20cm)は若干白色粘土が混ざった灰褐色粘土層で上半部に細石刃・剣片が出土した。なお、上部遺構の柱穴壁中、4層下部よりナイフ形石器2点が出土した。第5層は60cmと厚い白色粘土層で(3層と同様に東西断面では東側になるに従って薄くなっている)B1区上部よりナイフ形石器の基部1点のみの出土をみ



第13図 先土器時代の調査風景

門田遺跡



第14図 B4～B1区西壁・C4～A4区北壁土層断面図 (1/60)

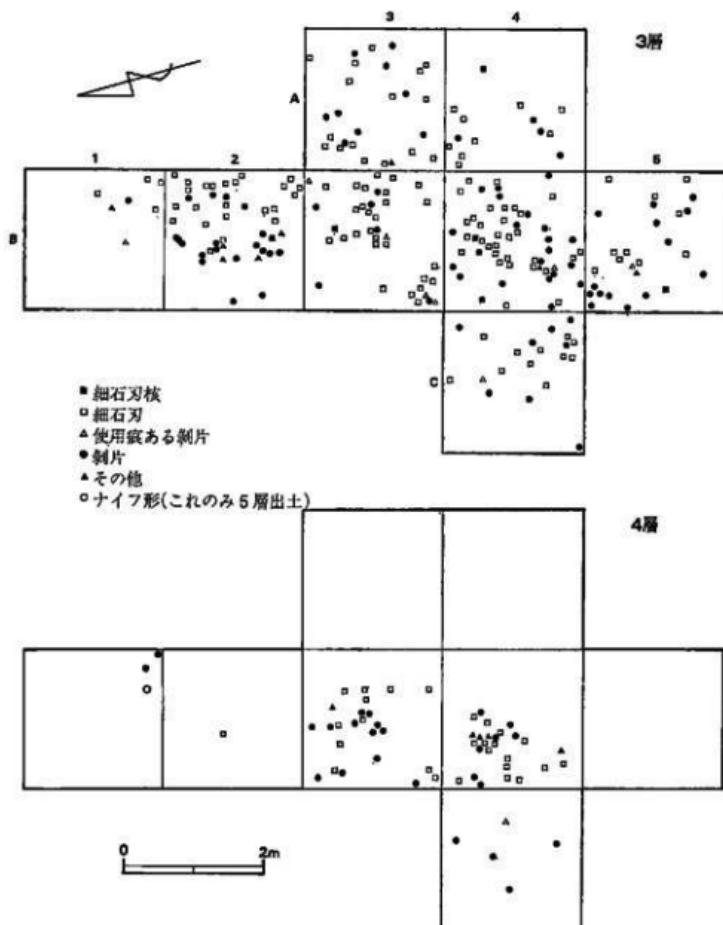
た。この5層以下は何ら遺物は出土していない。6層(20～30cm)は淡茶褐色土層で若干砂質で、7層(15～30cm)は淡褐色土層、8層(10cm)は茶褐色の砂質土層である。9層は60～70cmと厚く堆積し、部分的に砂と粘土の互層をなす砂礫層を成す。

10層(30cm)は軽石を含んだ明鶯色土層で、11層、12層とも同じ成分だが色調を異にしている。12層は充堀していないが、ボーリングより80cm以上は続くようである。10層～12層は九州大学浦田英夫教授から、八女粘土層に対比されるだろうという教示をうけ、9層の砂礫層の存在から、門田地区が洪積氷に水に洗われていたことが証明された。門田地区調査後、遺跡の東側を1.5mほど掘り下げる機会があったが、その結果水田床土以下はすべて砂層であり、この部分が谷部にあたることが判った。従って、門田地区東側の道路で切断された部分から台地はあまり延びないことが窺われた。

(3) 遺物の分布状態

前述のように遺物は3層と4層上部ならびに5層に出土した。グリッド別出土数は表1のとおりであり、第15図は3層と4層の遺物分布図である。それによれば3層の遺物分布はB2区

55点、B3区41点、B4区66点、B5区30点とB2～5区に集中してみられ（特にB2～B4区で全体の出土量の61%強を占める）、周辺になるとB1区8点、C4区18点と少なくなる。器種別のバラツキはなく部分的なまとまりも観察されない。4層上部になると遺物は減少し、



第15図 遺物出土分布図 (1/80)

門田遺跡

細石刃・剝片などがB3, B4区に集まって出土するが、細石刃核はみられなかった。5層からナイフ形石器がB1区に1点のみ出土したので4層の分布図に含めている。

この分布図より径10mを超えない生活の場が想定されるが、期日の関係でその範囲を把握できなかった。

(4) 遺物

a. 包含層の出土石器

包含層から出土した石器は3層256点、4層65点、5層1点の322点である。3層、4層上部の細石刃文化層と5層のナイフ形石器の二枚の文化層に分けられる。グリッド別の出土数は表1のとおりである。

石材は磨製石器の他は、大部分黒曜石であるが、剝片の中には安山岩もある。

細石刃核（第16図1～5） すべて3層出土である。いずれも半舟底形細石刃核で唐津周辺に出土するものと類似している。1～3は背面に自然面を残す。上面観はいずれも背縁をもつことから1～3が三角形、4～5が菱形を呈す。打面調整は4を除き側面側から行なわれた後に剝石刃剝出面側から行なっている。4は楕円形打面側面が切られていることから核打面再生剝片を取ったままの姿であろう。

側面調整は下方向からが大部分であるが、2の右側面のみが打面側から行なっている。特に背部に自然面を残さない細石刃核4・5の側面調整の方が丁寧に行なわれている。打面の長さは2が17mmと最も短かく、平均19.5mmである。黒曜石製。

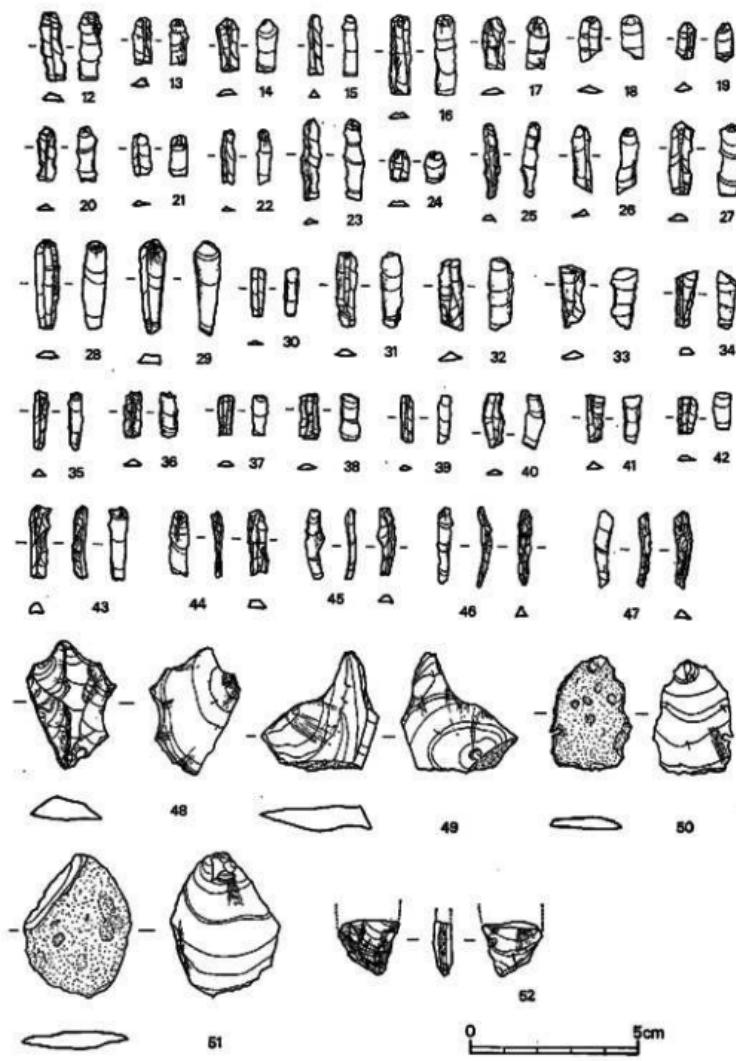
細石刃（図版17、第17図12～45） 3層164点、4層28点の計192点出土した。完形品はなく頭部と中間部で9割を占める。刃部の刃こぼれは20・25に見られる程度である。幅は4～6mmが大部分で、29が頭部で7mmと最大幅を有している。これらの細石刃の中に側面調整の痕跡を残す資料が17点、全体約1割存在する。その内訳は左側面部10点(23・44)、右側面部7点(19・

表1 包含層出土の石器

		細石刃核	細石刃	スイカパレル	使用済用剝片	スピボール	打石面剝再生成	剝片	ナイフ形石器	石核	その他
3層	A3区		18					10		1	
	A4区	1	10					4			
	B1区		5		1		1	1			
	B2区	1	33			2	1	17			
	B3区	1	32	1	3			4			
	B4区	1	43		1	1		20			
	B5区	1	13		1	1		14			
	C4区		10		1			7			
	小計	5	164	1	7	4	2	77	0	1	1
4層	B1区								2		
	B2区			1							
	B3区			12				1	16		
	B4区			15			3		9		
	C4区					1			4		
5層	B1区									1	
	小計	0	28	0	1	3	1	31	1	0	1
	合計	5	192	1	8	7	3	107	1	1	1



第 16 図 包含層出土の石器実測図(1) (3/5)



第 17 図 包含層出土の石器実測図(3) (3/5)

41・43)である。黒曜石製。

石核打面再生剝片(第16図6・7) 3層に2点、4層に1点の計3点出土した。6と7で6は細石刃剝出面と反対側に自然面を残す。

スパール(第17図46・47) 断面三角形を呈し稜の両側に側面調整痕を有する。細石刃剝出の第1打によって生じる剝片で46は完形品である。細石刃剝出第1スパールと仮称する。

スクレイパー(第16図8~10、第17図48~50) いずれも剝片の一部に調整を加え、刃部を形成している。50は円礫から薄く剝された剝片を利用したもので刃部以外は原面を残している。11は台形状を呈す剝片で使用による刃こぼれが観察できる。

磨製石器(図版17、第18図) 玄武岩製で、丸ノミ状の石器である。磨耗がはげしいが、刃部周辺は磨いた痕跡がみられる。長さ10.2cm、幅5.1cm、厚さ2.9cm、重さ192gを計る。

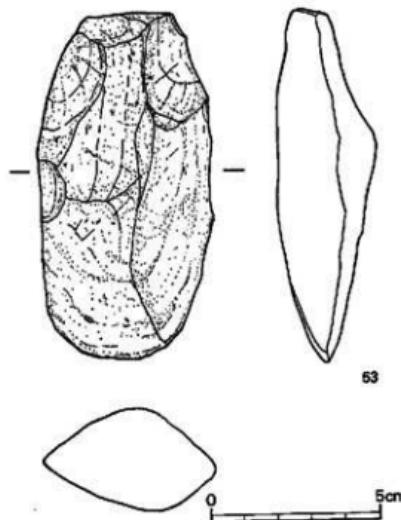
ナイフ形石器(第17図52) 5層から出土した唯一の石器である。基部のみであるが、縱長剝片を利用して、左側辺は主要剝離面から直角に近い刃溝し加工を施している。黒曜石製。

b. 門田地区出土の石器

B11区を中心とする上部造構の調査中にも先土器時代の遺物が発見されている。遺物は包含層が確認されたB11区に圧倒的に多く、全55点中、34点と60%を占め、次いでE12区、A11区に若干出土する。地区別、器種別の出土量は表2の通りで参考に各地区、辻田地区の数量もあげておく。

細石刃核(第19図54~60) 9点出土した。いずれも黒曜石を利用している。

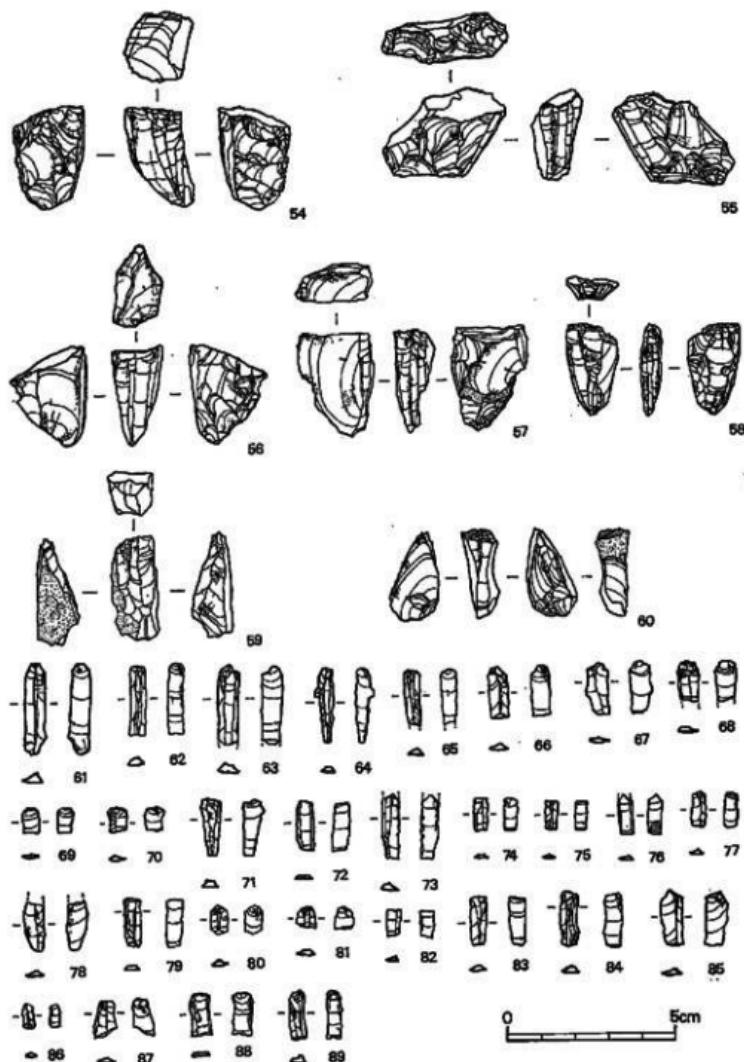
形態から4つに分けられる。I類(54・56・57)は包含層出土の細石刃核と類似するもので、54の上面觀は方形を呈しているが、側面の調整刻離は背縁側から丁寧に行なわれている。図示しなかったが、細石刃剝出と同様の打面調整を行なっているものもある。II類(55)は側面が細石刃よりも長いもので、先底に近いものである。打面調整は細石刃剝出側から行なわれている。III類(59)は円礫から剝出された方柱状に近い剝片を利用したもので、左側面は



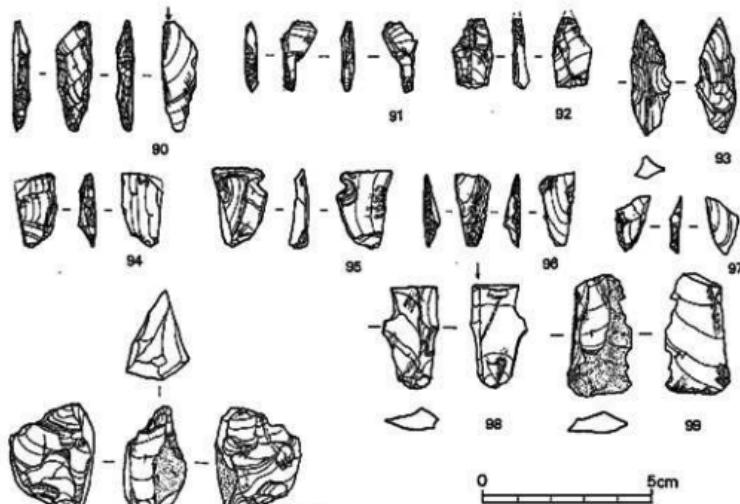
第18図 包含層出土の石器実測図(3)(3/5)

表 2 先土器時代の石器グリッド別一覧表

器種		細石刃核	細石刃	ナイフ	形石器	合形石器	形様器	彫器	磨器	その他	合計
グリッド											
門 田 地 区	A	10									—
	11	1	1	2		1				5	
	12									—	
	B	10			1					1	
	11	5	27		1	1	34			—	
	12		1		1		2			3	
	13			1			1			5	
	C	11	1				1			12	
	12									3	
	13									5	
地 区	D	10				1	1			3	
	11									1	
	12	1	1				2			2	
	13									3	
	E	11								3	
	12	1	5	1	1		8			1	
	13									4	
	F	11								—	
	12									—	
	その他									1	
小計		9	35	3	2	3	1	2	55		
谷 地 区	B	9			1	2				3	
	C	9	3	2	3	1	10	5	4	28	
	D	9	3	14	9	1	4	2	4	37	
	E	9	13	7	7	2	4		2	35	
	10	1	4	2	1			1	9		
	F	8	1					1	2		
	9	26	52	1		1	1		81		
	10	26	13	12	2	5	1	4	63		
	G	8	1	3	1				5		
	9	19	8	1		1	1	2	32		
その他	10	3		1		1		1	6		
	11	1							1		
	H	9							—		
小計		97	103	38	8	28	10	19	303		
※ 剣片・削片は時期を明確にできないので除いてある。											
小計		23	16	12	1	6	2	15	76		
合計		129	154	53	11	37	13	36	433		



第 19 図 門田地区出土の石器実測図(1) (3/5)



第20図 門田地区出土の石器実測図(2) (3/5)

自然面がそのまま残る。打面は非常に小さい。IV類(58・60)はいずれも残核である。

細石刃(第19図61~89) 全部で32点出土した。細石刃の部位は頭部16点、中間部12点、尾部3点。完形品1点である。幅は86を除いて4~6mmの間におさまる。64は左側面部から剝出され、84は右側面部から剝出されている。

ナイフ形石器(第20図90~93) 4点出土した。90・92は柱穴の壁について出土したもので、その時の出土層位は4層の下部にあたる。

90は綫長剝片を利用し、基部は尖る。先端部主要剝離面に縦状剝離痕があり、彫器とし再利用したものかもしれないが先端部への衝撃でできたとも考えられる。91は基部の破片で左側辺に刃溝し加工を行なっている。92は左側辺上部に刃溝し加工がみられるのでナイフ形石器であろう。いずれも黒曜石製。

台形石器(第20図94~97) 95を除いて刃器状の剝片を利用したものである。94は右側辺上部に刃溝し加工をしているが、左側辺は切断されたままで、刃部は刃とぼれがみられる。96は両側辺に、また97は基部まで刃溝し加工をおこなっている。97は94・96と異なり小形斜刃である。いずれも百花台タイプの台形石器である。95は刃器片を利用し、基部側のみに刃溝し加工をおこなっている。黒曜石製。

彫器（第20図98） 縦長剝片を利用し、折断面を打面として彫刻刀面を作りだしている。主要剝離面にはパルプが残る。黒曜石製。

使用痕のある剝片（第20図99） 縦長剝片のパルプ側を折断した剝片である。左縁辺に刃こぼれが認められる。

（5）小 結

近年、福岡県内でも大規模な開発行為に伴う発掘調査によって皮肉にも良好な先土器時代の遺跡が発見されている。門田遺跡をはじめ、蒲田遺跡・諸岡遺跡・峰山遺跡などで現在88ヶ所を数える。春日市・那珂川町周辺では、福岡市田佐原遺跡・春日市柏田遺跡・那珂川町立石遺跡など10ヶ所が確認されている。出土遺物などは表3の通りである。

門田地区の包含層の調査により次の二点が明らかになった。1つは細刃器の文化層とナイフ形石器の文化層が層位的に分けられること、2つはいわゆる半舟底形細石刃核を有する文化層が確認できたことである。

細刃器とナイフ形石器は佐賀県原遺跡（註1）、福岡県筑紫野市峰山遺跡（註2）では台形石器などと共に出土し、唐津周辺では採集品とともに共伴関係が考えられている（註3）。一方、長崎県福井洞穴（註4）では細石刃核の形態変化が層位的に把えられているがナイフ形石器・台形石器は共伴せず、福岡県諸岡遺跡でもナイフ形石器の文化層に細刃器は出土していない。門田遺跡の結果を合わせても基本的に細刃器とナイフ形石器は共伴しない（註5）と考えてよいであろう。

細石刃核に残された痕跡（打面の長さ、細石刃長、側面調整など）から、半舟底形細石刃核について述べたことがある（註6）。半舟底形細石刃核と舟底形細石刃核の大きな相違は打面長と細石刃長に集約される。前者は打面長が細石刃長の%近くの値を示し、後者は打面長が細石刃長とはほぼ同じか、それを凌駕する。それは細石刃核が細石刃の量産化と規格性を示した姿であろう。また縦的には福井4層に代表される半円錐形細石刃核と2・3層の舟底形細石刃核の間に位置するものと言える。

門田遺跡出土の先土器時代の遺物は表2に示した通りである。谷地区ではC～E9区の谷頭に近い地区とF10区の門田地区寄りに細石刃核・細石刃・ナイフ形石器などの多量の遺物が発見されている。しかし、門田遺跡ではB11区を中心とする狭い範囲にしか包含層は認められなかった。このことは台地上が後世にかなりの削平を受け包含層が消滅したものと思われ、門田地区東側斜面のみが削平をまねがれたと解釈せざるを得ない。

門田遺跡の先土器時代はひとつ門田地区のみで語られるものではなく、辻田地区、谷地区の報告の折に詳しく述べてみたい。

（木下 修）

門田遺跡

表 3 春日・那珂川地区先土器時代遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	立 地	出 土 遺 物	備 考	文 献 (註)	
1	日 佐 原	福岡市南区・日佐原	台 地	ナイフ		7	
2	天神池前	春日市上白水・天神池前	丘陵	マイクロコア		8	
3	柏 田	" "	柏田	窓高地	" マイクロブレイド	9	
4	門 田	" "	門田	台 地	ナイフ・トラピーズ・トラピゾ イド・マイクロコア・マイクロ ブレイド・グレーヴァー・スク レイバー	包含層 確認	10
5	原	" "	原	" トラピーズ・マイクロブレイド		11	
6	白 水 池	春日市上白水		ナイフ		12	
7	赤 井 手	春日市小倉・赤井手	台 地	ナイフ		13	
8	鳥 ノ 島	那珂川町中原・鳥ノ島		" ナイフ			
9	立 石	" "	立石	" ナイフ		14	
10	深 原	" "	深原	扇状 台 地	ナイフ・マイクロコア	15	

- 註 1 杉原莊介・戸沢克則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』4-4 1971
- 2 横昌信他「峰山遺跡」『福岡県文化財調査報告書』51 1973
- 3 富樹憲次・戸沢克則「唐津周辺の細石器 I ~ III」『考古学手報』14・16・18 1962~3
- 4 鈴木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1 1965
- 5 山口謙治「板付周辺遺跡調査報告書 (2)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』31 1975
- 6 木下修「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3 増山開 1976
その他の47~50年度の「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」に年度毎の概略を記載
- 7 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』12 1971
- 8 説久順郎・柳田康作他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』1 福岡県教育委員会 1976
- 9 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
- 10 註 6 と同じ
- 11 1975年 福岡県教育委員会調査
- 12 註 7 と同じ
- 13 1976年 福岡県教育委員会調査 佐々木隆彦氏教示
- 14 1973年 採集
- 15 1976年 福岡県教育委員会調査

4. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 袋 状 穴

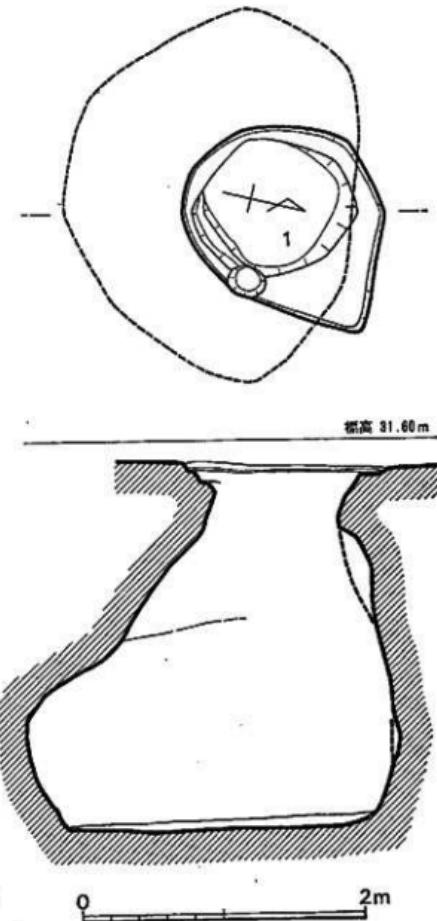
1号袋状竪穴（第21図） 床面は円丸多角形を呈する。最大径は床面より約50cm上にあり、約2.70mである。入口は北寄り中央部に位置する。東西壁面は弯曲しながら入口にのびるが、北壁は垂直状に、南壁は床面より約70cmで脛が大きく弯曲し、さらに直線的に入口にのびる。この竪穴には、広い所で50cm、狭い所で8cm、深さ約7cm程の平坦な不整形の掘り方がある。蓋受け等の上部施設であろう。

遺物は前期末の壺3、甕3個が出土し、その内5個が床面の壁際より出土した。また、焼き米数点が検出された。

出土遺物（第22・23図）

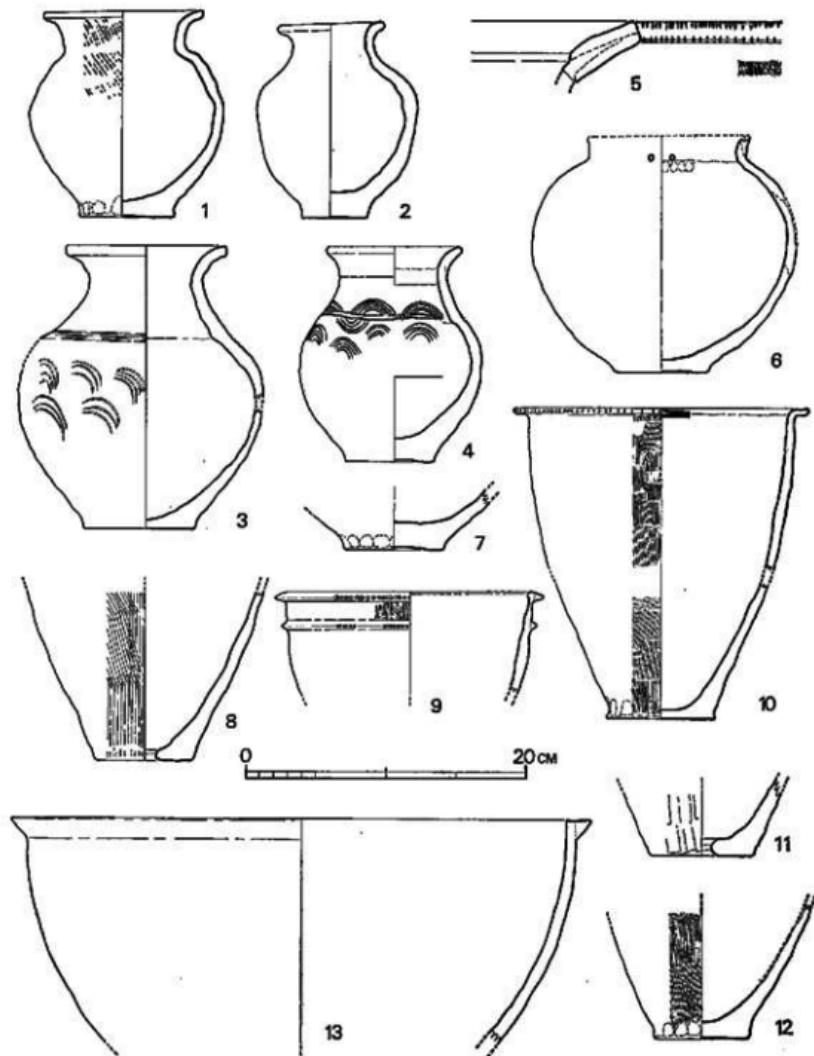
出土土器には壺・無頸甕・甕・浅鉢型土器がある。そのうち完形小形壺2・4、脣の一端を欠失する小形甕3、甕10が床面付近から出土し、上層には、完形小形甕1がみられた。

壺形土器（第22図1～6） 1は外傾する頸部からさらに屈曲する口縁で、脣中位に張りを持ち、割合口徑の広い小形甕である。器面はヘラ調整されるが、



第21図 1号袋状竪穴実測図 (1/40)

門田遺跡



第22図 1号袋状整穴出土土器実測図 (1/4)

体上半にはハケ目が残り、粗雑なつくりである。色調は黄褐色で焼成良好。2～4は肩から頸部、口縁への反転がなめらかな曲線を描くもので、いずれも器面は丁寧にヘラ研磨され、焼成良好でつくりはわりと洗練されている。2は胴径に対して器高の高いもので、色調は赤橙色を呈する。3は頸部境界に三条の沈線をめぐらせ、その下に3～4弧のヘラ先重弧文を描く。色調は明茶褐色を呈する。4は球状胴部で、口縁部境界にはわずかに段がつく。頸部区分に二条の沈線がめぐり、上に4弧5個、6弧4個、下に3弧4個、4弧5個、5弧2個、6弧2個の計22個のヘラ先重弧文を配する。色調は明黄褐色で、器表面の一部にススが付着している。5は大形壺の口縁部破片で、口径不明。内外面とも段がつく。外面は細かいハケ調整のあと横ナデ、内面はヘラ調整される。色調は赤味の強い赤褐色で、焼成普通。6は上半部大半を欠失する無頸壺で、体部は球状を呈し口縁はわずかに外傾する。器表面は風化し剥落部もあり調整不明瞭、内面は指整形のあとヘラ調整される。色調は淡黄灰色で焼成はあまり良くない。なお5を除いていずれも黒斑がみられる。

変形土器（第22図9・10）9は断面三角形の口縁で胴部の凸沿とともに刻みを施す。器表面は横ナデ仕上げであるが、口縁下には縦位ハケ目が残る。内面はナデ仕上げ。色調は黒ずんだ茶褐色で、焼成はあまり良くない。10は口縁が強く折れ、上方は平坦に近づき逆L字型になったもので、わりと細かい刻目を施す。外面は繊細な縦位ハケ、口縁はハケのあと横ナデ、内面は指整形のあとナデ仕上げ。

浅鉢形土器（第22図13）断面三角形の口縁で上方は平坦になっている。外面は風化し調整不明瞭、内面は指ナデのあとヘラ調整される。口縁はハケのあと横ナデ仕上げ。色調は赤味おびた赤褐色で、焼成普通、体上半にススが付着している。

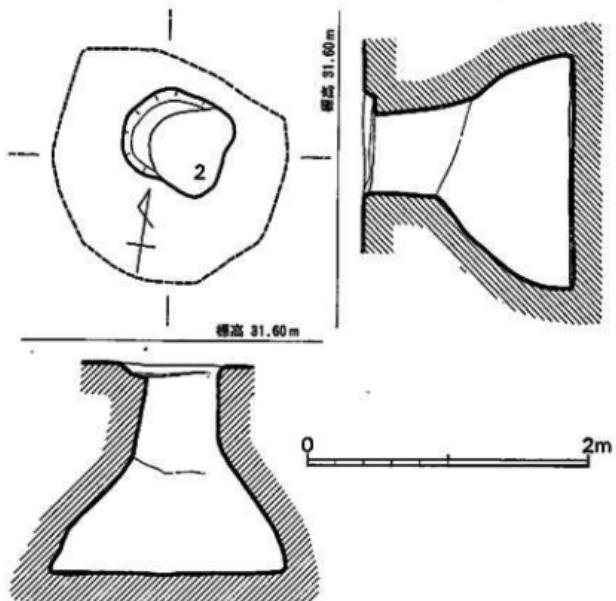
底部（第22図7・8・11・12）7は壺か浅鉢の底部で下面は上げ底氣味である。内外面ともナデ仕上げ、外下端には指痕が残る。色調は紫色がかかった淡赤褐色、焼成はあまり良くない。内面が黒く変色している。8・11・12は壺の底部で、8・11は焼成後に穿たれたコシキである。11は器表面をヘラ状器具による押圧整形し、12の底下面にはハケ痕がみられる。色調は8が黄味がかかった赤褐色、11は外面暗茶褐色、内面明褐色、12は外面淡赤褐色・内面明褐色を呈する。8は内面にスス、12は一部にススが付着している。

石錐（第23図）黒曜石製の打製石錐で、やや粗い調整剝離を施している。裏面に一部自然面が残る。長さ1.8cm。

2号袋状竪穴（第24図）床面は圓丸多角形を呈する。最大径は床面にあり、1.66mを測る。入口は約60cmと小さく、北壁中央部にある。深さ1.5mのフラスコ状を呈する竪穴である。遺物は埋土中より壳形の甕2個が入れ子の状態で出土した。



第23図 1号袋状竪穴出土石錐実測図
(1/2)

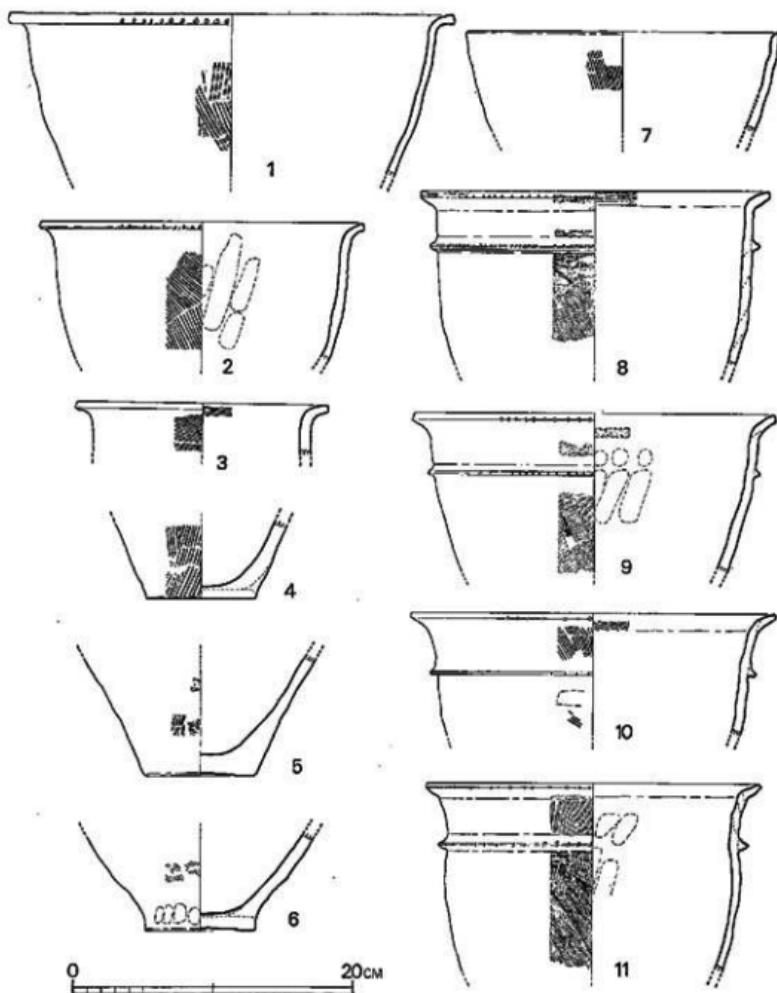


第24図 2号袋状竖穴実測図 (1/40)

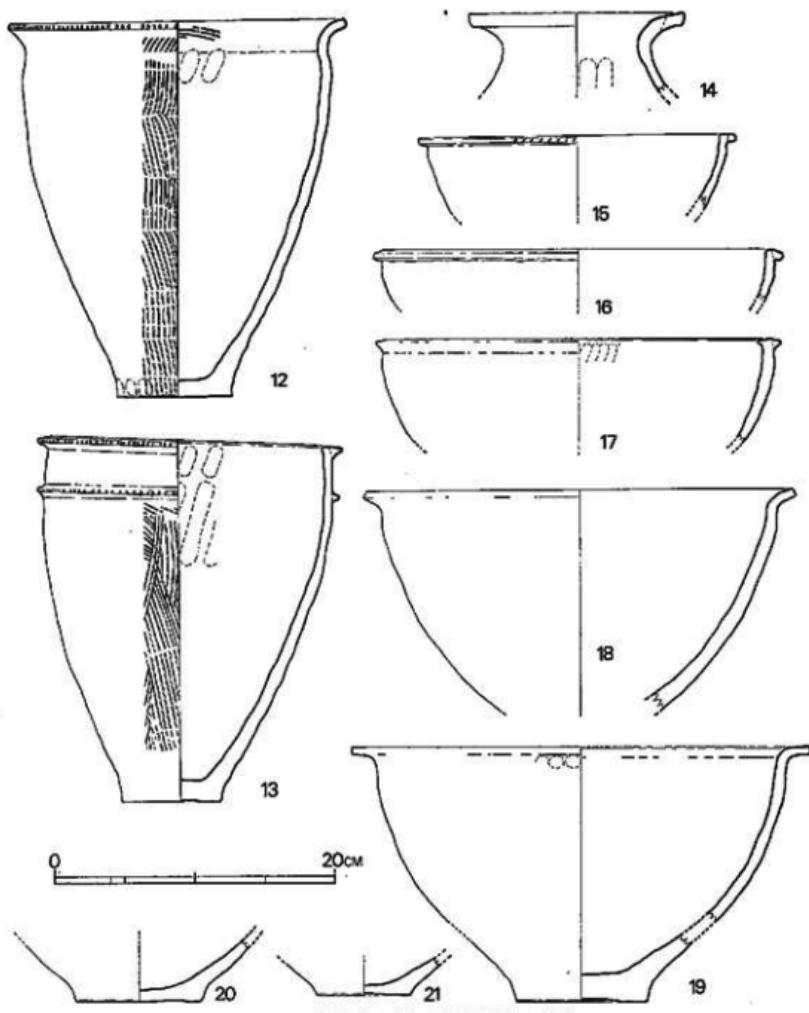
出土遺物 (第25~29図)

土器の出土量は門田地区の袋状竖穴群の中で一番多いが、その殆んどは破片で完形品は変形土器12・13の2個体にすぎない。それは床面から約65cm前後の位置に横転し13が12に捕入された状態で出土した。また、床面付近から出土したものは、高8、浅鉢15~17、底部5・21などがある。

壺形土器 (第26図~28図14・22・23・24) 14-24は小形壺、22-23は比較的大形のものである。14は強く外彫する口縁部端片で、断面は口縁内面までヘラ調整される。色調は明黄褐色で焼成は普通。24は頸部と肩部との境に一条の沈線をめぐらし、その上下に3・5弧の貝殻施文による重頭文を描く。器表面はヘラ研磨されるが一部ハケ目が残り、内面には指痕が残る。色調は淡黄灰色で、焼成は普通。胎土には石英粒の他にわりと雲母を含む。23は大形壺の体上半部破片で、胴はあまり張りをもたず、口縁は肥厚され口唇下端には刻目を有する。器表面は風化し部分的に剥落する。外面は縱位ハケのあとヘラ磨き、口縁は横ナデされるが内面に横位ハケ目が残り、内面は指整形及びナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈する。22は張りをもつ肩部と頸



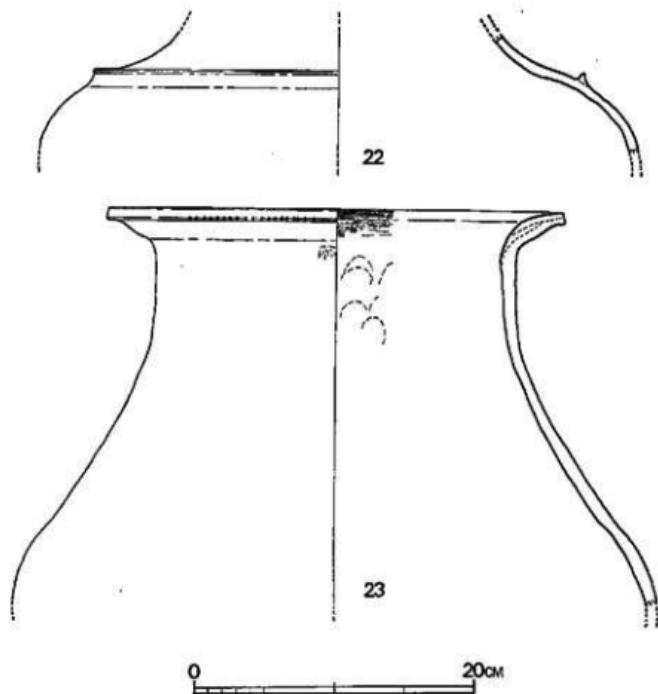
第25図 2号袋状窓穴山土土器実測図(1) (1/4)



第 26 図 2号袋状竖穴出土土器実測図(2) (1/4)

部との境界に先端を丸くおさめた貼付三角凸帯をめぐらすもので、形態的には新しい要素をもち、中期的形態に近づいたものといえる。外面はヘラ磨き、内面は一部ヘラ調整される他はナデにて仕上げる。色調は黄褐色で焼成普通。

瘦形土器（第25・26図1～3・7～13） 1・2・3は如意状口縁で刻目を有するもので、1・2は体部がふくらみをもってすぼまり、12は体上半がわりと張りをもつものである。口縁は横ナデにて仕上げるが、12の内面にはハケ目が残る。色調は1が淡黄灰色、2は外面暗褐色・内面黄褐色。1・2・12はいずれも二次的に火をうけたためか器表面は部分的に剥落している。3は如意状口縁で刻目をもたぬもので、口径は比較的小さい。色調は外面暗茶褐色、内面明褐色を呈し、焼成は甘い。8～11は如意状口縁で胴部の突唇とともに刻みをもつものである。外面はハケ調整されるが、部分的にナデられすり消される。口縁は横・斜位のハケのあと横ナデにて仕



第27図 2号袋状懸穴山土器実測図(3) (1/4)

円筒造跡

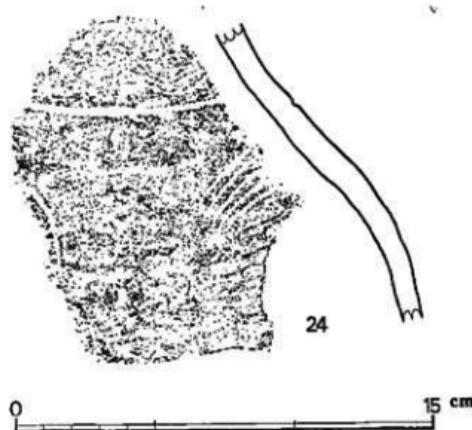
上げられるが、8の内面はハケのまま放置される。色調は8が暗茶褐色、9は外面淡茶褐色、内面黄褐色、10は暗茶褐色、11は淡茶褐色を呈する。焼成は8が良好で他は普通。13は断面三角形の口縁で肩部の凸帯とともに刻目を有するもので、口縁上方は平坦に近づいている。外面はハケのあと部分的にナデ、内面には指痕が残る。色調は淡茶褐色で焼成は良好。7は深鉢形のもので、外面は斜位ハケをナデ消し、内面は指整形のあと丁寧なナデにて仕上げる。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は不良。

浅鉢形土器（第26図15～19） 15～17は口縁の断面が逆L字状あるいはさらに内面に突出部をもつもので、15は口唇部に刻みを施し、16の口縁は若干なれ下り気味である。15は口縁の内面及び上方が横位ハケの他はヘラ研磨。16は休上端にハケ目が残るが、他はヘラ研磨。17は口縁から内面にかけ指横ナデ、外側はヘラ調整。色調は15が淡黃灰色、16は赤味もつ黃褐色（淡黃褐色）。17は明赤褐色で焼成はいずれも良好。18・19は如意状口縁の浅鉢で、器表面はヘラ研磨され18はハケ目がわずかに残る。内面は18がヘラ調整、19がナデにて丁寧になされる。色調は18黄褐色、19は外面茶褐色・内面黄褐色で、いずれも焼成良好。18には黒斑がみられる。

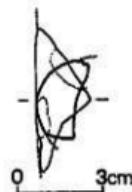
底部（第25・26図4～6、20・21） 4～6は壺の底部で5・6の下面は若干くぼむ。5・6は斜位ハケをナデ消し、6は内面を指整形のあとヘラ調整する。4は下面をヘラ調整し、他はナデにて仕上げる。色調は4黄味もった茶褐色、5黄褐色、6淡黄褐色で、焼成はいずれも普通。4の内面にススが付着している。20・21は壺か浅鉢の底部で、両者とも下面が若干くぼむ。外面は21ヘラ磨き、内面は両者とも指整形のあとナデ仕上げ。色調は黄褐色、焼成は普通。

石斧（第29図） 玄武岩製の太形船刃石斧の小破片である。

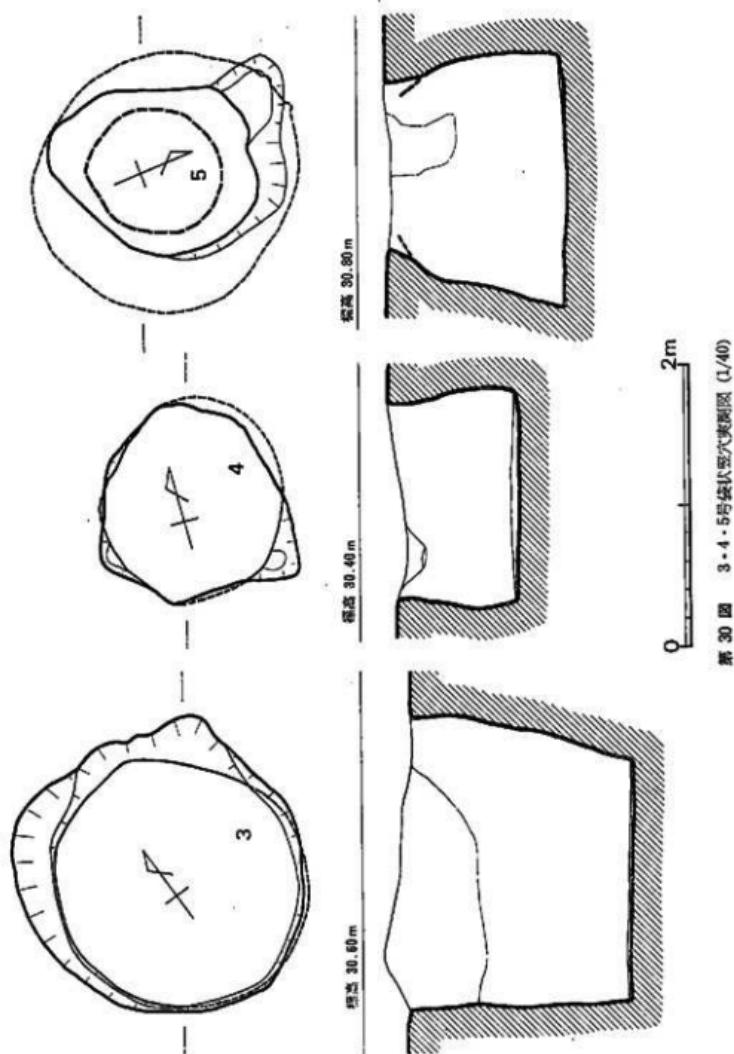
3号袋状竪穴（図版20-1、第30図） 4号貯蔵穴に北接した竪穴で底面形態は、径2m内外と大きな円形を呈す。南壁は底面から垂直に立ち上がり、北壁はやや内湾みである。白色粘土層を1.1m程掘り込み、現在深さ1.56mを計る。上辺は径2m強と広く、



第28図 2号袋状竖穴出土土器実測図(4) (1/2)



第29図 2号袋状
穴出土石器実測図
(1/2)



新30図 3・4・5号塗灰型穴巻割図 (1/40)

門田遺跡

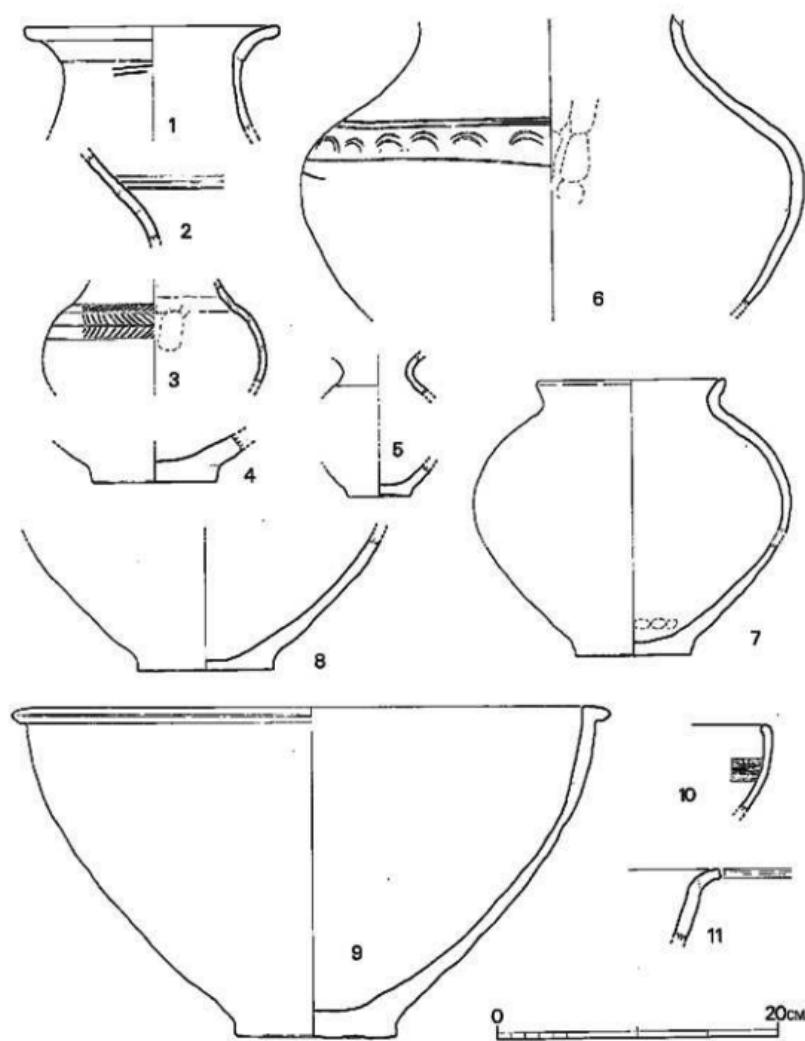
削平されているものと思われる。上面から1mほど下の北壁側に白色粘土層の無遺物層が堆積しているので壁が崩壊したのであろう。遺物は床面南東直上に壺形土器・甕形土器や太形始刃石斧・磨石・石製円盤・縦型石點が放棄された状態で出土した。

出土遺物（第31～35図）

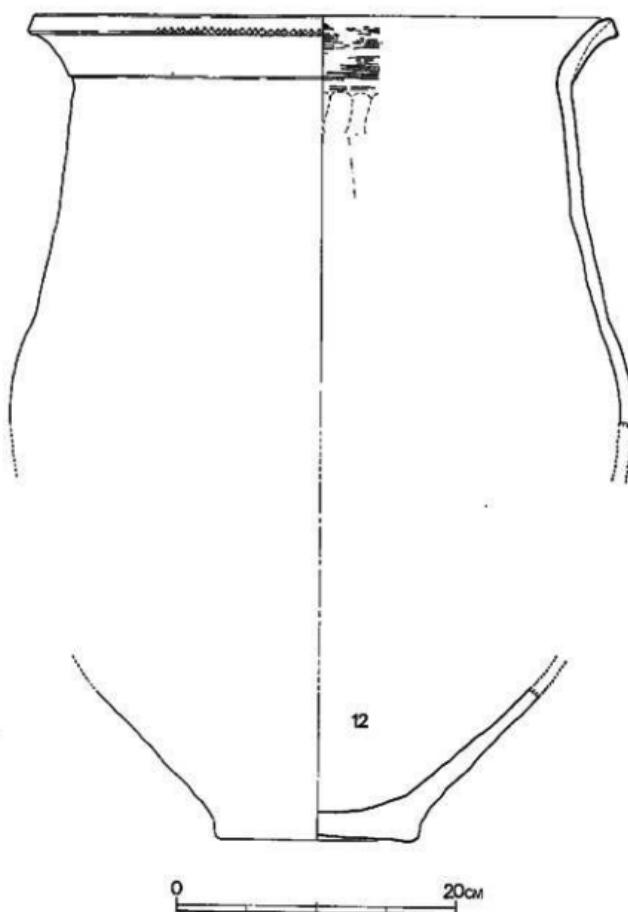
出土土器量では2号竪穴につき、東部グループでは一番多いものである。光形近くまで破片がまとまつたのは7の無頸壺ぐらいで、他は殆んどが破片で竪穴が放棄されたあと一括廃棄された状態で出土した。

壺形土器（第31・32・34図1～3, 5～7, 12・19） 1は口縁が肥厚され段がつくもので、頸部上端にみられる二条の沈線様のものは文様であるのか不明。2は頸胴部区分として三条の沈線がめぐるが風化し器表面は剥落しており、肩部の文様の有無は不明。1と2は淡黄褐色の色調で焼成普通、同一個体と思われる。3は球状の胴部上半にわりと端整な羽状文を描くもので四条の沈線で区画している。外面は横ヘラ磨き、内面には指痕が残る。色調は茶褐色で焼成普通。器表面は風化をうける。5はミニチュア壺の破片で胴大半を欠失しているため、器高の復原ができない。頸胴部区分に一条の沈線、底下面は若干くぼむ。色調は赤褐色、焼成は普通。19は小形壺の頸胴部破片で、区分に一条の沈線。その下に4弧の貝殻重弧文を描く。外面ヘラ磨き、内面に指痕が残る。淡赤褐色の色調で、焼成普通。6は口縁と胴下半以下を欠失するもので、肩部は張りをもつ。区分沈線は二条になつたり三条になつたりする。重弧文は2・3弧である。色調は明黄褐色、焼成は普通。胎土には石英粒の他にわりと雲母を含む。12は胴中程を欠失する大型壺で、口縁は肥厚され段を有し口唇下端に刻目を施す。胴はあまり張りをもたず、頸部からの移行はスムーズで、また底下面は若干くぼむ。外面ヘラ磨き、口縁内面には、横位の粗いハケ、内面には指痕が残る。明黄褐色の色調で、焼成普通。器表面は風化をうけ部分的に黒ずんでいる。二次的火変のためか。7は胴の一部欠損した無頸壺で、胴中程が張り出し、口縁は外反し穿孔はない。形態的には広口壺に近い。外面ヘラ磨き、口縁横ナデ、内面は上端をヘラで調整し他はナデ仕上げ、内底面には指痕が残る。色調赤褐色で、焼成普通。

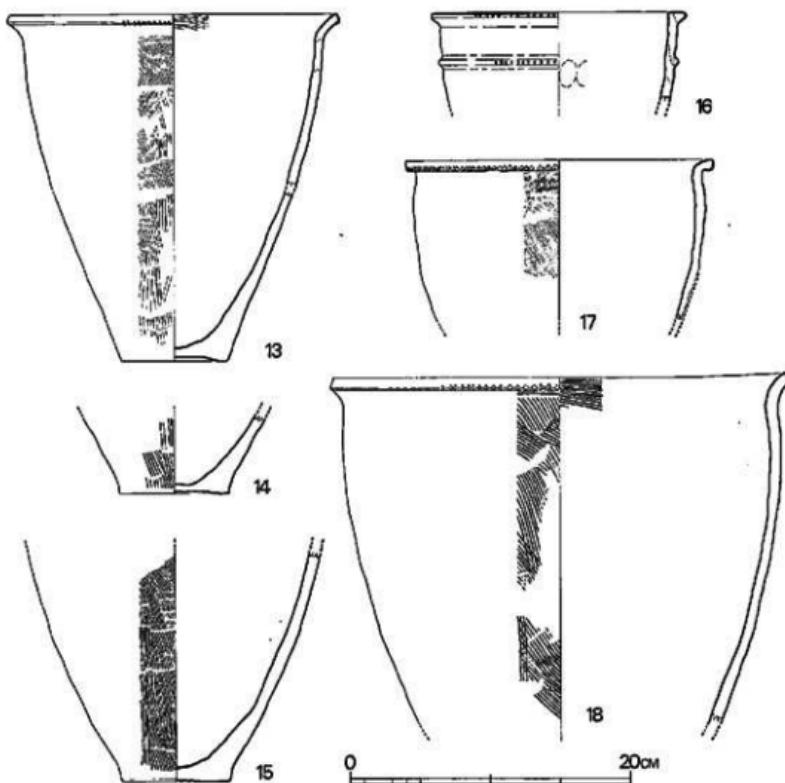
甕形土器（第33図13・16～18） 13・18はゆるやかに外壁する如意状口縁で口唇下端に刻みを施す。13はあげ底気味の底部である。外面は斜位ハケ、内面は指整形のあとナデ、口縁は内面横位・斜位ハケで、外面は横ナデ仕上げ。器表面は二次的に火をうけたためか、剥落しもろくなっている。色調は13黄味おびた赤褐色、18黄褐色で、焼成はあまり良くない。18の胴部には黒斑がみられる。17は口縁が強く折れるもので、口唇下端に刻目をもち、胴はふくらみを有する。外面ハケ、内面ナデにて仕上げ、胴下半は剥落している。色調は赤味もつ黄褐色。焼成はやや悪い。16は断面三角形の口縁で胴部の三角凸帯とともに刻みを付す。口縁上方は平坦。器表面は、口縁上方に深いハケ目が残る他は、ナデにて平滑に仕上げる。内面に指痕残る。色調は外面暗赤褐色で、内面淡赤褐色を呈し、焼成は普通。



第 31 図 3号袋状空出土器実測図(1) (1/4)

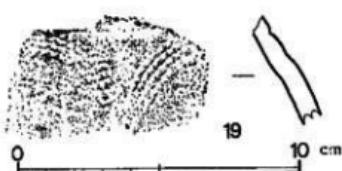


第 32 図 3号袋状竖穴出土土器実測図(3) (1/4)



第33図 3号袋状竪穴出土土器実測図(3) (1/4)

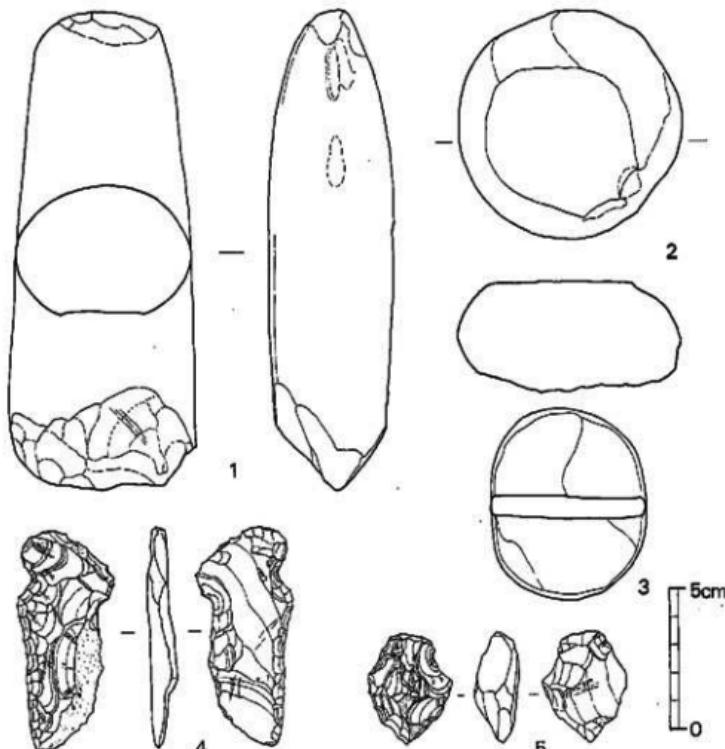
浅鉢形土器（第31図9～11）9は断面三角形の口縁で、若干たれ下る。器表面は風化し亀甲状に剥落している所もある。外面は上半横ヘラ磨き、下半は丁寧な指横ナデ。内面は底面が指ナデの他は横ヘラ調整される。口縁はナデ。色調は淡黄灰色で焼成普通。10は楕状を呈し、口唇部は丸くふくれる。器面は体下半が縦位ハケのあとナデ、体上半から内面上半にかけ横ナ



第34図 3号袋状竪穴出土土器実測図(4) (1/2)

テ。下半は指ナデ。内面中程に淡い横位ハケ調整がみられる。色調は淡黄褐色、胎土は石英粒がわりと少なく、焼成は良好である。11は如意状口縁で口唇部にはヘラ先による淡い凹線がはいる。外面は風化し調整不明瞭、口縁横ナデ、内面は指整形のあとヘラ調整される。色調は明黄褐色で焼成普通。

底部（第31・33図4・8・14・15） 4・8は蓋か浅鉢の底部で平底。4は外面ヘラ調整、内面ヘラ調整及びナデ。色調は赤味をおびた黄褐色で焼成普通。8は外面ナデ、内面は指整形及びナデ。内底面に酸化鉄（？）が付着しておりその上部は黒ずんでいる。色調は明黄褐色、焼成普通。14・15は碗の底部で下面は若干くぼむ。色調は14明黄褐色、15はハグ色に近い明茶褐色。焼成は14不良、15普通。14は風化し器面が剥落している。
（宮崎貴夫）



第35図 3号袋状竪穴出土石器火照図 (1/2)

石器（第35図1~5） 1は今山産玄武岩の太形地刃石斧の完形品で全長17cm、厚さ4.4cm、重さ890gを測る。全面研磨され、頭部には敲打の痕跡が残る。刃部は使用によって欠損した後、下方向からの剝離を加え二次的な打製の刃部を作り出し、再利用している。2は凝灰岩製の磨石。周辺の1%に磨痕がみられる。厚さ4cm、径8cm。3は扁平な磨製円盤状石器で、谷地区に4点ほど出土している。特に側面部の研磨は丁寧、凝灰岩質。4は安山岩製の縦形石匙。縦長削片を利用し、打痕部は切断している。全長の1%のところに両側面から調整を加え、“つまみ部”を形成する。刃部は左側面のみに表・裏方向から調整剝離を加えている。右側面には自然面が残る。長さ7.6cm、幅0.9cm。5は比較的薄い黒曜石の削片を用い、主要剝離側から中心部に向って剝離を加えている。左側面は擦器の刃部に類似する。（木下修）

4号袋状堅穴（図版20-2、第30図） 3号袋状堅穴とよく似ているが小振りである。底面は径1.3mの円形を呈し、壁面の立ちあがりは若干内灣ぎみである。白色粘土層を直接掘り込み、深さ93cmを測る。上面は広く開口しているが、本来の姿ではないだろう。遺物はほとんどなく、壺形土器の小破片が出土したにとどまった。

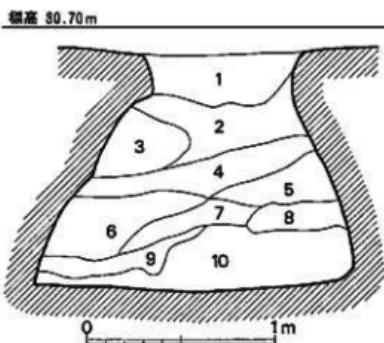
5号袋状堅穴（図版21-1、第30・36図）

C10区に検出された堅穴で、底面は円形を呈す。断面図では両壁とも内湾ぎみに立ちあがるが、調査中に口辺上部が崩壊してしまったので、本来はフランコ状である。底面径1.85m、深さ1.28mを測る。堆積土の10層は若干炭化物を含んだ黒褐色軟質土層で、2層に壺・鉢などの土器および黒曜石の削片の出土をみた。

出土遺物（第37図）

出土土器には壺（コシキ）・鉢・ミニチュア壺などがあるが、完形品は壺（コシキ）2のみである。

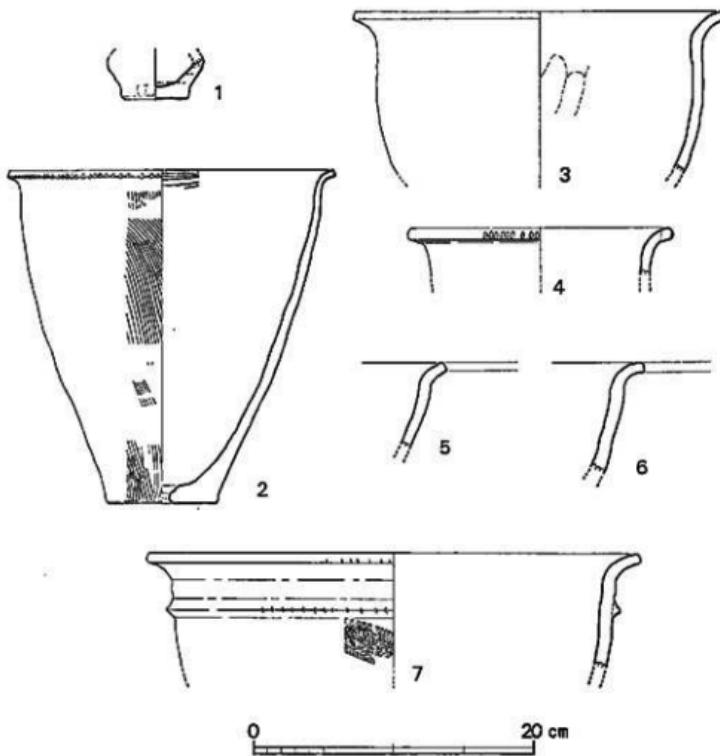
壺形土器（第37図1）ミニチュア壺の体下半破片で、底面はわずかにくぼむ。外面は指整形のあとヘラ磨き、下端に指痕が残る。内面は指ナデ。色



第36図 5号袋状堅穴断面図 (1/30)

土層名

- ① 茶褐色土層
- ② 明褐色ブロック・炭化物層在黒褐色土層
- ③ 黄褐色粘性硬質ブロック層
- ④ 明褐色粘質土層入黄褐色硬質土層
- ⑤ 黑褐色土層入黄褐色軟質土層
- ⑥ 赤褐色軟質土層
- ⑦ 明褐色ブロック混入赤褐色軟質土層
- ⑧ 明褐色ブロック混入・炭化物層在赤褐色土層
- ⑨ 黑褐色土層在黄褐色軟質土層
- ⑩ 炭化物層在黑褐色軟質土層



第37図 5号後伏室穴出土土器実測図(1/4)

調は黒褐色で、胎土には石英粒の他にわりと雲母を含み、焼成はあまり。

壺形土器（第37図2・4・7）2は如意状口縁で刻目を有し、底部は焼成後に穿たれコシキとされ、器内は薄手のつくりである。外面は縦位ハケを上端部分はナデ消し、内面は指整形のあとナデ仕上げ、口縁内面は横位ハケ調整される。器表面は二次的に火をうけ、もろくなってしまい、ススが付着する。色調を茶褐色で、焼成やや不良、腹部に黒斑状のものがみられる。4は如意状口縁で太めの刻目を有し、口縁が横ナデの他縫面はナデにて平滑に仕上げられる。風化をうける。色調は暗茶褐色で焼成普通。7は胴部の三角凸帯とともに刻目を有する如意状口縁のもので、3号窓穴出土のものと同類である。外面は胴下半斜位ハケ、上半から口縁内面まで横ナデ

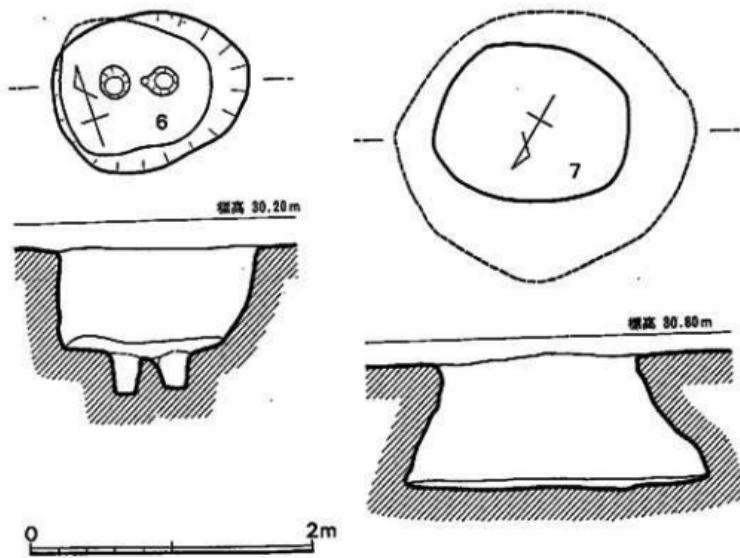
仕上げ。内面は指整形のあと丁寧なナデ仕上げ。色調は淡赤褐色で焼成はあまり良くない。

浅鉢形土器（第37図3・5・6）いずれも如意状口縁のもので、3は体部がふくらみをもつ。外面から口縁内面まで横ナデ、内面は指ナデ。色調は淡黄褐色で、焼成不良。器面は風化をうける。5は口縁を浅いハケ状のもので横ナデし他はナデ。色調は淡赤褐色で焼成やや悪い。6は口縁がナデの他ナデ、色調はハグ色に近い茶褐色で、焼成は普通。（宮崎貴夫）

6号竪穴（第38図）4号住居跡の北西側に、他の袋状竪穴と離れて存在する小形の竪穴で、上辺は長径1.4m、短径1.1mの長円形を呈す。底面は径1m前後の楕円形を呈し、西壁側は垂直に近く立ちあがる。白色粘土の床面から深さ30cm内外のピットが掘り込まれている。ピットは円形で径20cmほどである。遺物は何ら出土していない。

7号袋状竪穴（第38図）白色粘土層を掘り込んでいた。上辺長円形、底面潤丸多角形を呈す袋状竪穴である。西・北壁側は底面から鋭く内傾し、10~20cm上で段を持つのに対し、南・東壁側は緩く立ちあがる。深さは1mに達していないが、5号袋状竪穴との位置関係からみて、本来的に浅いものだったと考えられる。遺物はまったく出土していない。

（木下 健）



第38図 6・7号袋状竪穴実測図 (1/40)

門田直輔

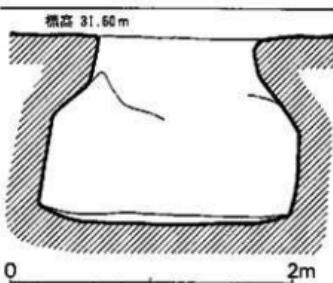
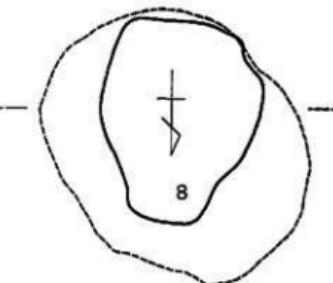
8号袋状竪穴（第39図） 底面が梢円形の整穴で、内壁は中程から強く内傾する袋状を呈し、床面は中央にむかってゆるやかにくぼむ。上部は削平をうけ口辺は不整形であるが、現状から入口は南西に片寄っていたと思われる。竪穴内埋土は、下部二層がわりと水平に堆積しており、上部は壁の崩壊土を混じながら埋没していったことが観察される。出土遺物は、上層から壺・変形土器の細片が数点出土し、土製筋轡車1がみられたただけである。

出土遺物（第40、49図1・2）

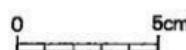
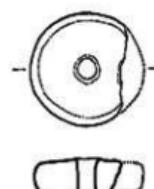
土器は上層から出土し、いずれも小破片ばかりである。1は壺の底部破片と思われ、下端には指痕が残る。色調は明茶褐色で焼成はあまり良くない。2は壺の頸部破片で区分に二条の沈線がはいる。外面は風化をうけ調整不明瞭、内面は横位の指ナデ。外面黄褐色、内面赤褐色の色調で、焼成不良。この他に壺・浅鉢の小破片が出土した。

筋轡車（第40図） 土製の筋轡車で一辺を欠く。径4.1cm、厚さ1.3cm。黄褐色を呈し艶有。

9号竪穴（図版21-2、第41図） 底面は長梢円形で、壁断面は逆台形状を呈する。現在の深さは約20cm程しかなく、面積1.23m²の小形の整穴で、所謂袋状竪穴とは別物と考えられよう。床面西側の小穴は当竪穴の時期より新しく、上部から掘り込まれていることが確認されている。出土遺物は黒曜石1片だけで、時期のきめてを欠く。



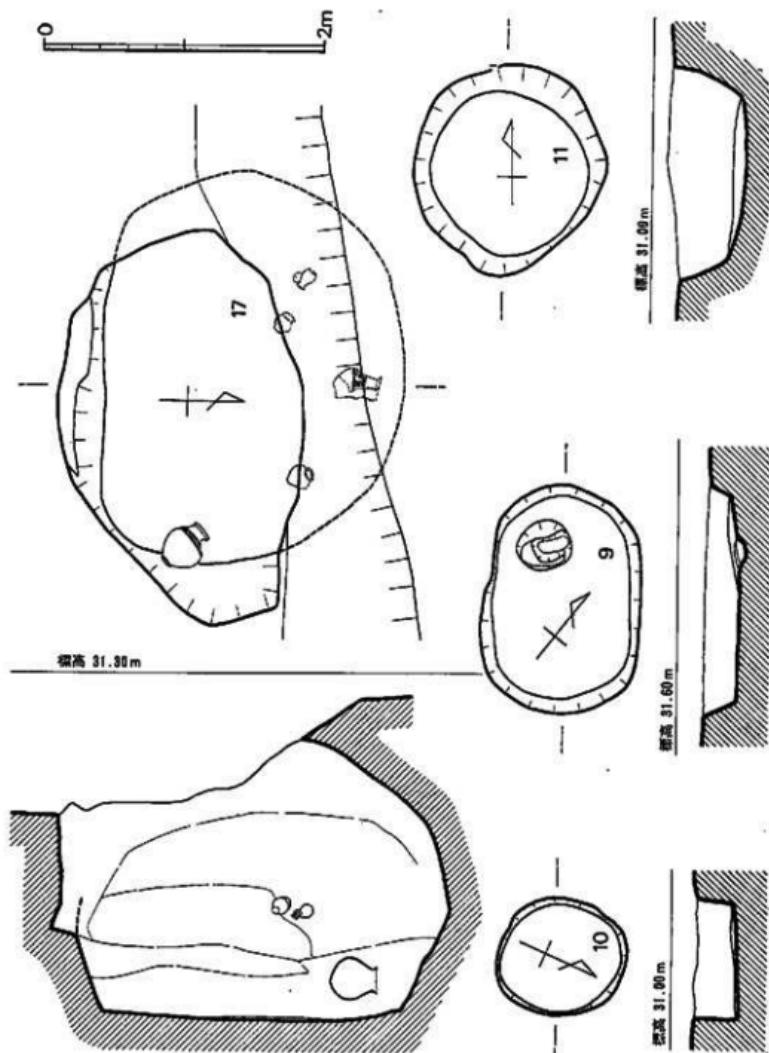
第39図 8号袋状竪穴実測図 (1/40)



第40図 8号袋状竪穴出土土製筋轡車実測図 (1/2)

10号竪穴（第41図） 床面が円形をなす浅い小形のもので、いわゆる袋状竪穴と別のものであろう。遺物は全く含まれておらず、時期の判定はできない。

11号袋状竪穴（図版22-1、第41図） 床面は円形をなし10号のように浅くて小形であるが、壁面は若干瘤鉢状の床面からゆるやかに立ちあがる。北壁は口辺部で垂直となる。遺物は埋土中より黒曜石の剝片鐵の片脚が出土している。



第 41 図 9・10・11・17号縦状空洞剖面図 (1/40)

門田遺跡

出土遺物

石器（第42図） 片割のみの破片で、縦長削片を利用している。第一次剝離面のバルブは基部側で、抉りは深い。黒曜石製。（丸山康晴）

12号袋状豊穴（図版22-2, 第44図） 門田2号墳の周溝によって口辺が削平されているが、現状での平面及び床面形態は不整円形を呈する。この貯蔵穴は、トンネル状の横穴で22号貯蔵穴に続いているが、用途は明らかでない。出土遺物は、中形の壺形土器1、小形の壺形土器1が床面から浮いた状態で出土している。

出土遺物（第49・43図）

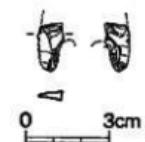
床面から浮いた状態で完形壺形土器3・6が出土し、他に壺・壺形土器の小破片及び底部4・5がみられる。

壺型土器（第49図3・6） 3は口縁が強く屈曲し、頸頭部境界付近には淡い段がつき、体部はいびつで対称でない。頸部の一部にハケ目が残るところから、外面はハケの後横ヘラ磨きされたものと思われ、口縁は横ナデ、内面は指ナデ。色調は赤味をもつ黄褐色で焼成不良。器面は風化をうけてもろくなっている。6は頸部、口縁への反転はなめらかで、器肉は薄く端整な姿である。口縁は肥厚され段を有し、球状の肩部と頸部との区分として三条の沈線がめぐる。口縁は外下方が指整形され、そのあと内面まで横ナデ。外面は横ヘラ磨き、内面は上半が指整形のあとナデ、下半は丁寧にナデ仕上げられる。色調は明茶褐色で、焼成は軟質で、器表面は風化をうける。

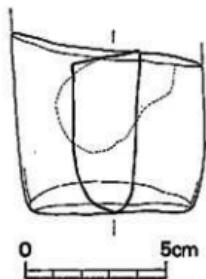
底部（第49図4・5） 5は壺の底部片と思われ、下面は若干くぼむ。外面はナデにて平滑に仕上げ、内面は指整形及びヘラ調整。色調は淡茶褐色で、焼成普通。4は壺の底部で、外下端は指整形される。色調は赤味もった黄褐色で、焼成はやや悪い。

石斧（第43図） 玄武岩製の石斧の破片で、刃部は欠損した後、磨いた可能性がある。側面は丸味を持ち、明瞭な棱は有さない。（佐々木隆彦）

13号袋状豊穴（図版23、第45図） 床面プランは不整円形を呈する。下部地山の灰白色粘土層（八女粘土）まで掘り込んで造られ、現在の深さ2.25m、底面積5.54m²を測る大形の豊穴である。内壁は崩壊がはげしく、旧状の壁面は床から30~70cm程しか残存しておらず、また上部は門田2号墳の東側周溝によって削平され、口辺はかなり大きくなっている。床面東側に段をもつ隅丸長方形の土壙が存在する。長径約1m、短径約0.5m、深さ約20~30cmを測る。この土壙からは出土遺物もなく、当豊穴の機能に関連するものとして掘り込まれたのか、その性格と

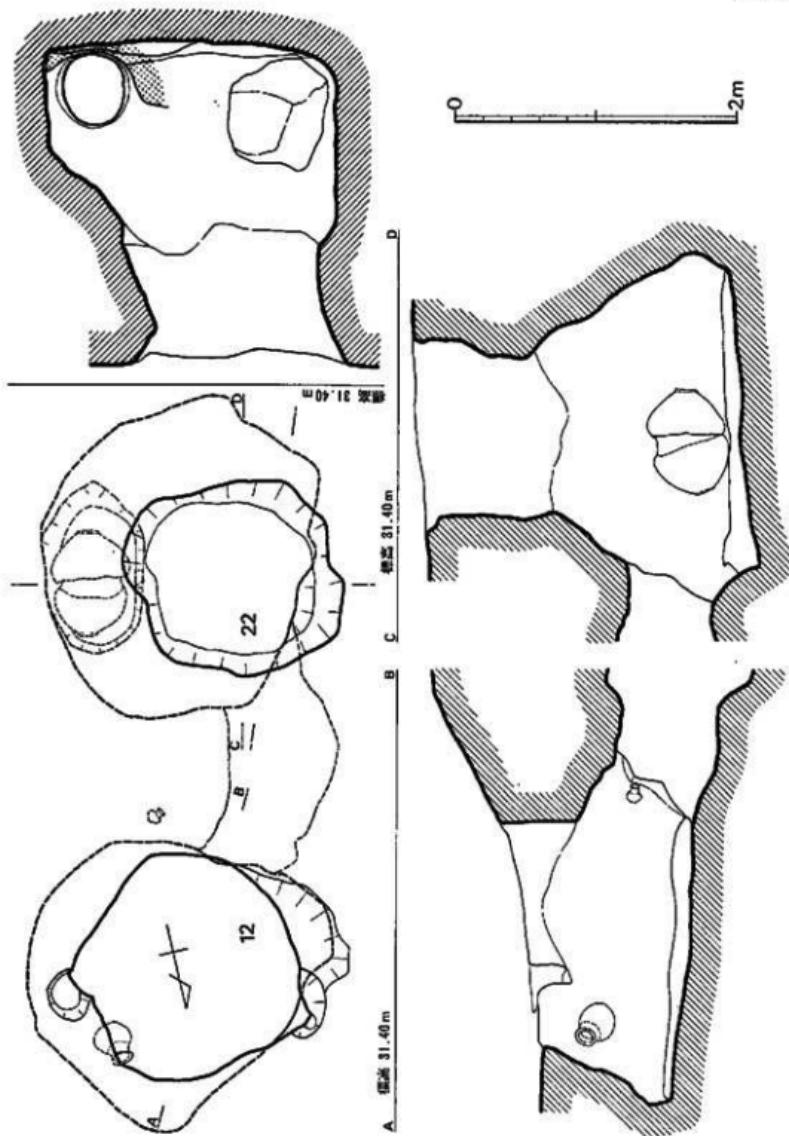


第42図 11号袋状豊穴出土石器実測図 (1/2)

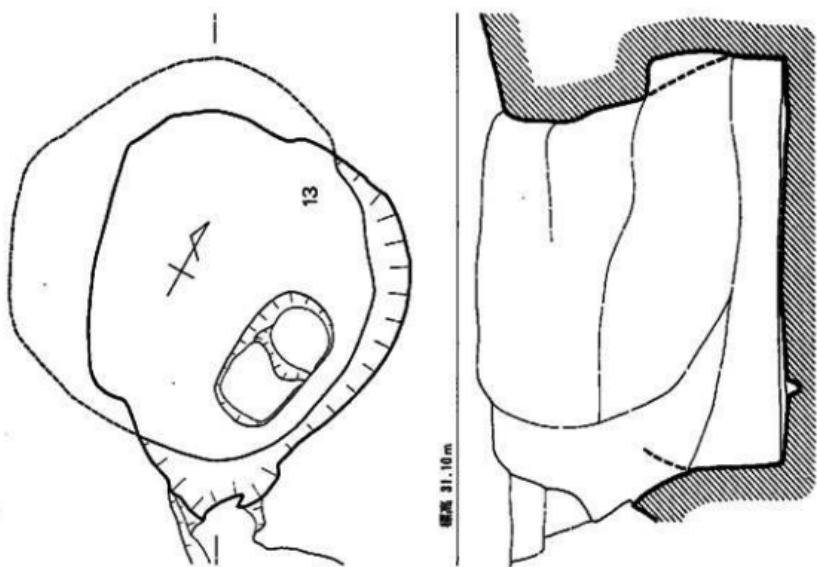
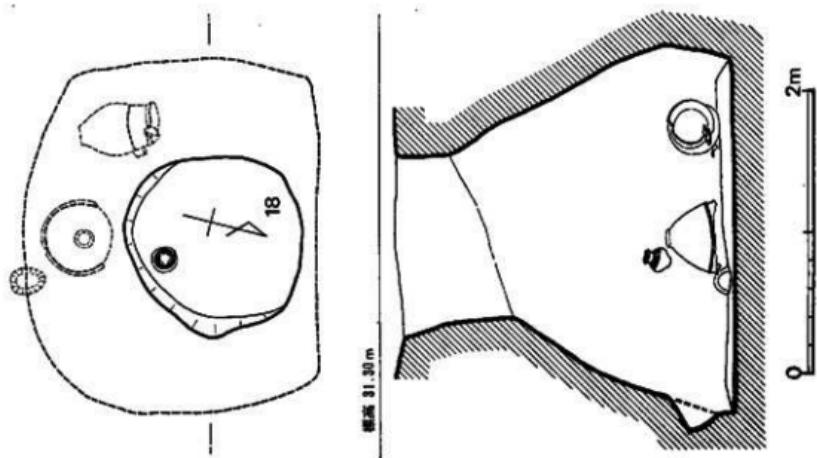


第43図 13号袋状豊穴出土石器実測図 (1/2)

門田遺跡

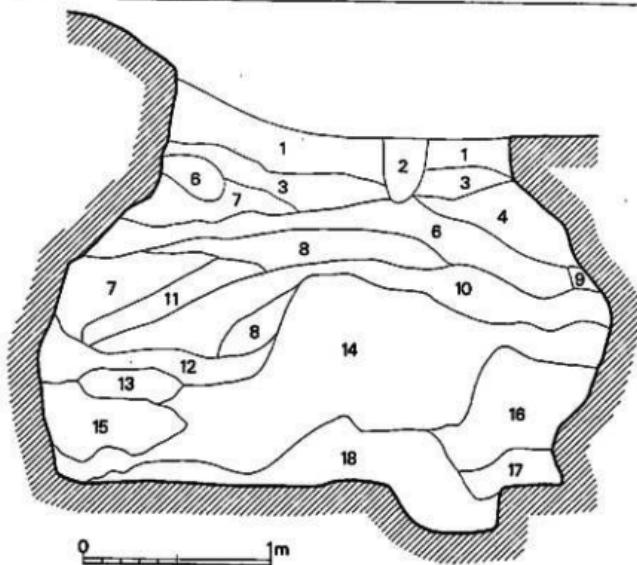


第44図 12・22号塚状形六葉構造 (1/40)



第45図 13・18号袋形窓穴遺跡図 (1/40)

標高 31.40m



第46図 13号袋状空穴土層断面図 (1/30)

土層名

- | | |
|--------------------|---------------------|
| ① 茶褐色土層 | ⑨ 灰白色粘質ブロック混入茶褐色土層 |
| ② 暗褐色土層 | ⑩ 黄褐色粘質ブロック混入淡褐色土層 |
| ③ 暗茶褐色土層 | ⑪ 淡灰白色粘質ブロック混入茶褐色土層 |
| ④ 黄褐色粘質ブロック混入茶褐色土層 | ⑫ 淡灰白色粘質ブロック混入茶褐色土層 |
| ⑤ 黄褐色粘質ブロック混入褐色土層 | ⑬ 淡黄褐色粘質ブロック混入褐色土層 |
| ⑥ 黄褐色粘質ブロック混在褐色土層 | ⑭ 明褐色粘質ブロック混入褐色土層 |
| ⑦ 黄褐色粘質ブロック混在淡褐色土層 | ⑮ 明茶褐色粘質土層 |
| ⑧ 黄褐色粘質ブロック混在褐色土層 | ⑯ 淡褐色土層 |
| ⑪ 明茶褐色土層 | ⑰ 明褐色粘性硬質土層 |
| ⑫ 黄褐色粘質土層 | |

ともに明確でない。しかし土層の堆積状態は、整穴の廃棄と同時の埋没を示しており、新たに掘り込まれたものではないことは明瞭である。最下層(18)には上部地山の明褐色土の堆積がみられるところから、上部壁面の崩壊の後に放棄されたものと思われる。また中間層(10~12)には、下部地山の灰白色粘土層の混入が認められ、層位の逆転が認められる。

遺物は完形壺形土器と壺底部片が上層から出土しており、また底面西側に炭化材が出土して

いる。土器は竪穴が放棄されかなり埋没した段階に投入されたものである。

出土遺物（第49図7・8）

7・8は上層から出土したもので、他に下層から小土器片が1片出土している。7は完形の小形壺で肩部に張りをもつ口縁は頬顎形に開く。底面は上げ底底味である。器内は薄い。頬顎部区分に一条の沈線があげられ、その下にはヘラによる羽状文が描かれる。口縁は横ナデ、外面ヘラ磨き、内面指整形及びナデ。色調は淡黄褐色で焼成は不良。器面は風化をうけもろくなっている。8は下端が丸味をもつ壺の底部で外面は風化をうけ調整不明瞭、内面指ナデ、底下面ヘラ調整。色調は淡茶褐色で焼成はあまり良くない。

石錐（第47図） 乳白色を呈す黒曜石製の石錐。先端部を欠く。基部は浅い抉りがあり、調整は入念に行なわれている。

14号袋状竪穴（第48図） 底面は北東側辺が、わりと直線的で他はいびつな円形を呈する。西側の壁面及び床面の一部を15号袋状竪穴によって切られており、14号の方が古いことがわかる。上部は門田2号墳の東側周溝によって削平され、口辺は不整橢円形で大きくなっている。しかし、現状でも入口部は北東側に片寄り、内壁は北西側にくいこむ袋状を呈している。床面の中央より北側には、斜めに掘り込まれた小穴が1個ある。

遺物は、床面直上に窓形土器底部片と下層に窓形土器破片の2個体分の遺物が出土しただけである。

出土遺物（第49図9・10）

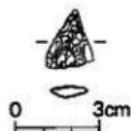
当竪穴からは、2個体分の窓形土器の出土をみただけである。9は口縁と底部破片から図上復原したもので、10は窓底部で床面直上から出土した。

9は短かい如意状口縁で太めの刻目を施し、安定した平底がつき、板付Ⅱ式でも古手の特徴を残すものである。口縁外面は指整形のあと横ナデ。胴部は縱位にナデで平滑に仕上げる。内面は口縁が丁寧にナデられ、他は指整形及びナデ。色調は外面褐色、内面赤褐色、焼成普通。内壁にスグが著しく付着している。10は平底の窓底部で、器面は外面ハケ、内面ナデにて調整される。色調は淡赤褐色で、焼成はやや悪い。黒斑がみられる。

15号袋状竪穴（第48図） 底面はいびつな円形で、口辺は橢円形を呈する。上部は門田2号墳周溝によって削平されている。入口部はほぼ中央に位置していたと思われる。床面北東側には不整形の浅い凹みがみられるが、性格は不詳。

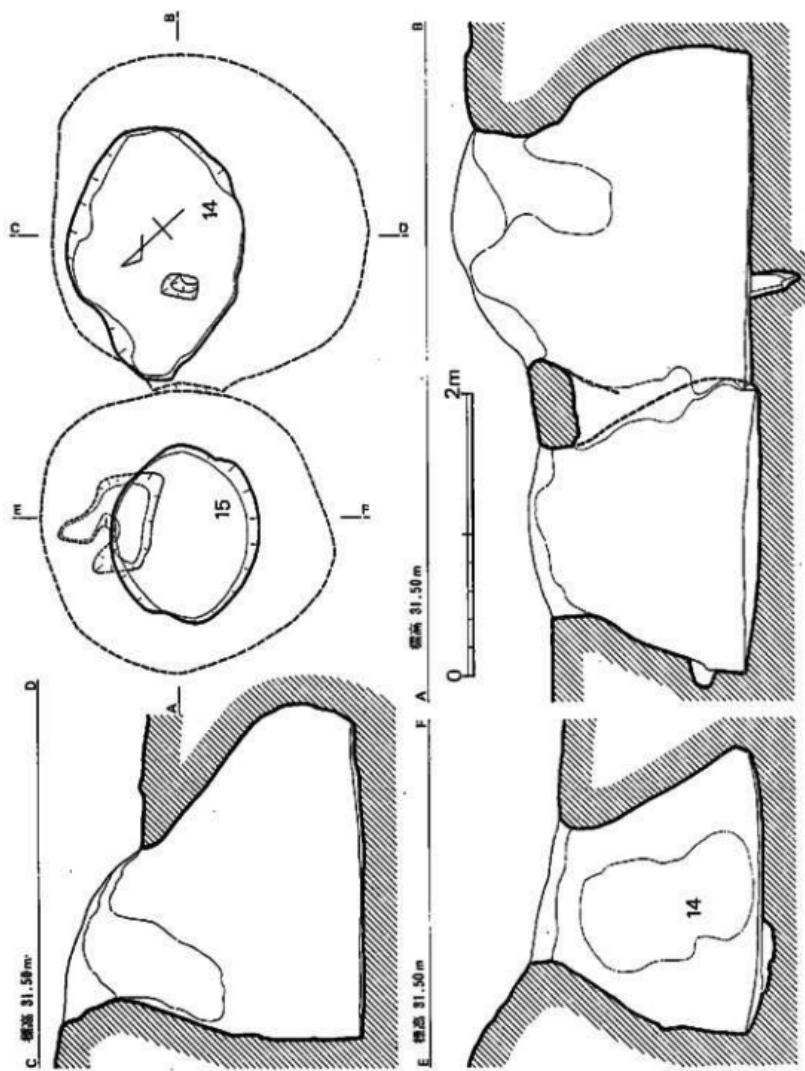
遺物は少量の土器破片がみられたにすぎない。

16号竪穴（第56図） 口辺は閉丸方形、底面は不整形を呈する。内壁は東側が階段状をなし、西側にくいこむ。小形でその変異な形態から、貯藏穴の範疇にも含まれるか疑わしい。出土遺物も皆無で、時期・性格とも不明。

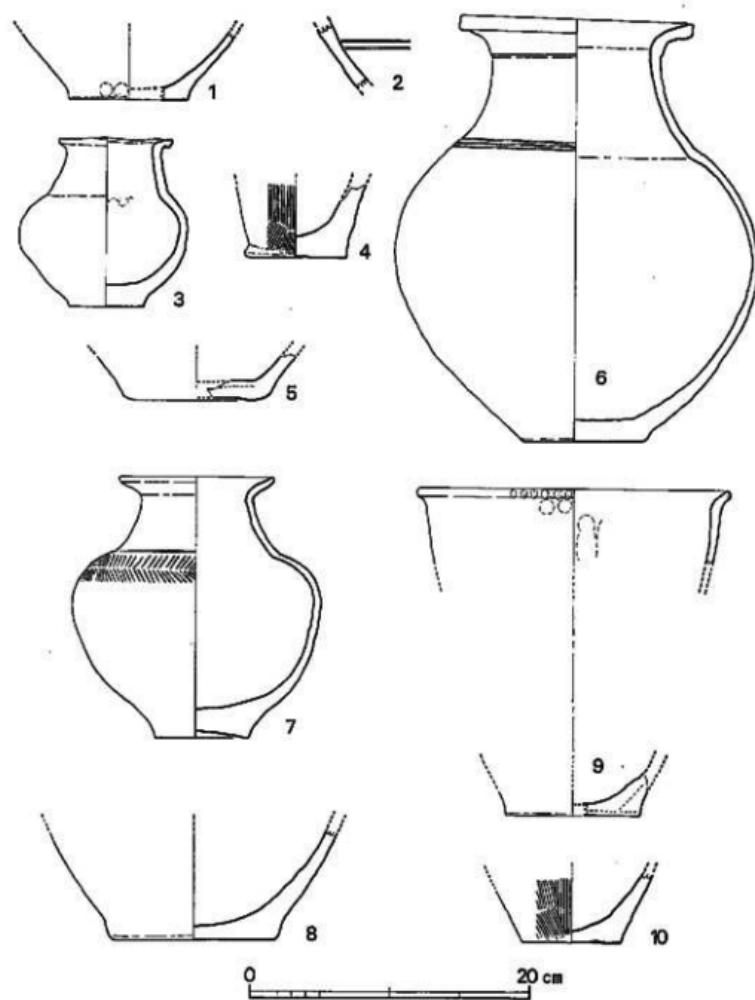


第47図 13号石錐
六出土石錐実測図
(1/2)

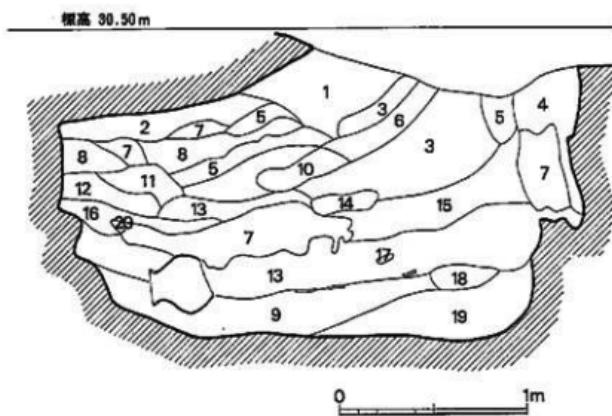
門出道路



第48圖 14・15号袋状窓穴地質圖 (1/40)



第49図 8・12・13・14号袋状窓穴出土土器実面図(1/4)



第50図 17号袋状竖穴土層断面図 (1/30)

土層名

- | | |
|-------------------|-------------------|
| ① 黄褐色粒子混在暗茶褐色土層 | ⑪ 明褐色粒子混在暗茶褐色土層 |
| ② 明褐色ブロック混入暗茶褐色土層 | ⑫ 暗赤褐色土層 |
| ③ 黄褐色粒子混在茶褐色土層 | ⑬ 明褐色粒子混在茶褐色土層 |
| ④ 黄褐色土層 | ⑭ 灰茶褐色粘質土層 |
| ⑤ 墓茶褐色土層 | ⑮ 明褐色ブロック混入淡茶褐色土層 |
| ⑥ 茶褐色土層 | ⑯ 明褐色粘質土層 |
| ⑦ 明褐色ブロック層 | ⑰ 黄褐色ブロック層 |
| ⑧ 明褐色ブロック混入暗茶褐色土層 | ⑱ 茶褐色粘性硬質ブロック層 |
| ⑨ 茶褐色粘質土層 | ⑲ 灰褐色粒子混在茶褐色粘質土層 |
| ⑩ 暗茶褐色粘質土層 | ⑳ 桃灰色ブロック層 |

17号袋状竖穴（図版24-1, 第41・50図） 南側斜面に位置する竖穴で、上部は斜めにカットされ口辺はかなり大きくなっている。底面プランは、南側辺がわりあい直線的な他は丸味をもち、いびつな梢円形を呈する。口辺部はかなり崩壊しているが、壁面は南壁が直立気味で北壁にくいくむ袋状を呈し、入口部は南側に片寄っていたことが考えられる。埋土の状態は、上部地山の明褐色土を含む層が中間層（7・15・16）として介在し、上層と下層に区別される。下層はわりと平坦に堆積しており、上層は南から北側への土砂流入が認められる。このことは入口が南側に片寄っていたためと思われる。

出土土器は、その出土状況から中間層をはさんで上層と下層の土器群に区別することができた。上層のそれは下層のそれに比較し新しい様相をもつ。他に、石斧片・燧石片・ポイントなどの石器類が出土した。

出土造物（第51～53図）

出土土器は上部地山の崩壊（明褐色土）を含む層を閻層として、上層と下層の土器群に区別できた。上層からは先形壺2、台付壺1、蓋1、体上半の大半消失する壺1、壺破片1、壺底部1、浅鉢破片1が出土した。下層からは先形壺1、胴部の一部あるいは体下半を消失する壺2、壺破片1がみられた。

上層の土器群

壺形土器（第51・52図1・3・8・9）3は口辺がわりと広く、安定した底部がつく小形壺で、外面はヘラ磨きされるが頸部付近に極細のハケ目が残る。色調は茶褐色、胎土には石英粒の他に微量の雲母・黒色粒子を含み、焼成はあまり良くない。9は胴中位が張り出し、口縁が形に開くもので、口縁は肥厚され、底下面は若干くぼむ。器面はヘラ研磨されるが、粗いハケ削痕目がかなり残存する。色調は淡茶褐色で、焼成良好。8は口縁が肥厚され内面に段をもつて色調は淡灰褐色、焼成はやや良好。内壁には指痕が残る。1は先形の台付無頸壺で、蓋2とともにカットと判る状態で出土した。体部は球状で下半はすぼまり、台部は上げ底を量する。体上端には2個ずつ対の紐通し孔があり、口器内面には紐かけと思われる凹みが一方に1ヶ所、他方に2ヶ所ある。体部はハケのあとヘラ磨き、他は指整形のあとナデ仕上げ。底下面是指ナデ。明茶褐色の色調で、胎土には石英粒の他微量の雲母を含み、焼成は良好。

蓋（第51図2）脚笠状を呈し、2個ずつ対に紐通し孔がみられる。直径8.4cm、器高2.3cmを測る。外面はハケのあと丁寧なヘラ磨きで仕上げられ、内面は指整形のあと丁寧なナデ仕上げ。色調・胎土・焼成とともに1と酷似する。

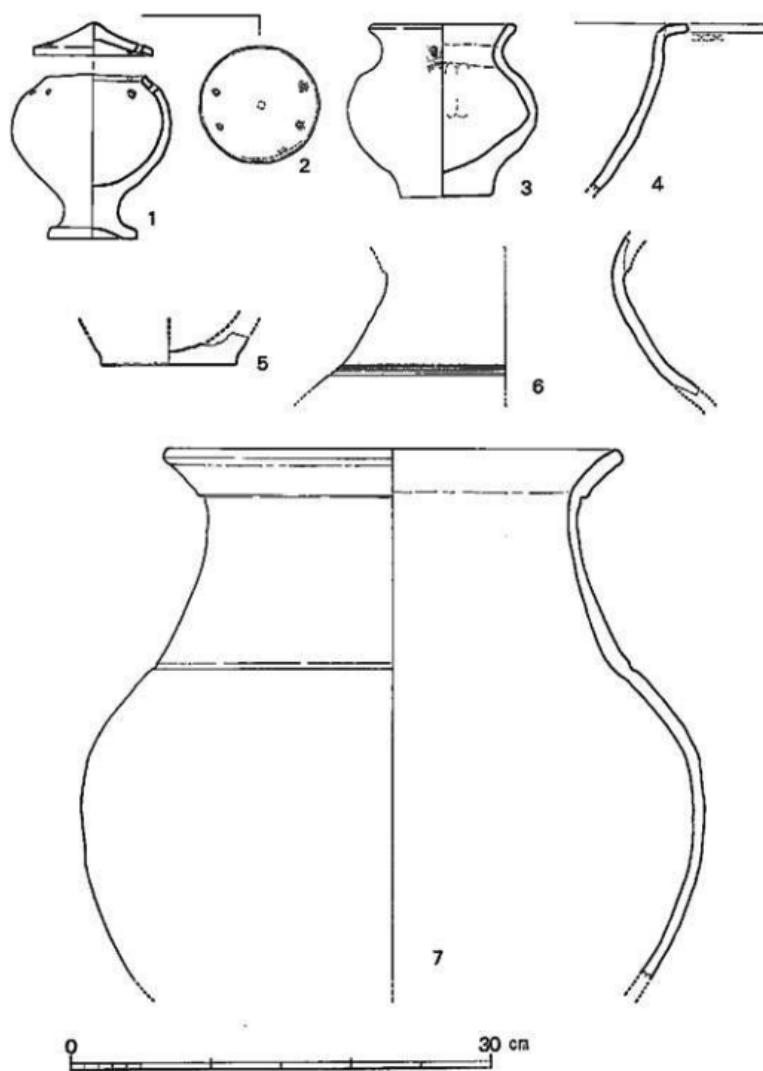
壺形土器（第52図12）口縁断面が逆「L」字状になったもので、外方は若干たれ下り気味、内側にわずかに突起する。口辺下の三角凸部とともに細かい刻目を施す。器面は極細のハケにて調整され、口縁横ナデ、内壁は指整形のあとナデ仕上げ。色調は淡赤褐色で、焼成普通。黒斑がみられる。

浅鉢形土器（第51図4）如意状口縁のもので、上方は平坦に近い。外面は横ヘラ磨き、口縁横ナデ、内面は指ナデ仕上げ、口縁下端に指痕が残る。色調は淡茶褐色で焼成普通。

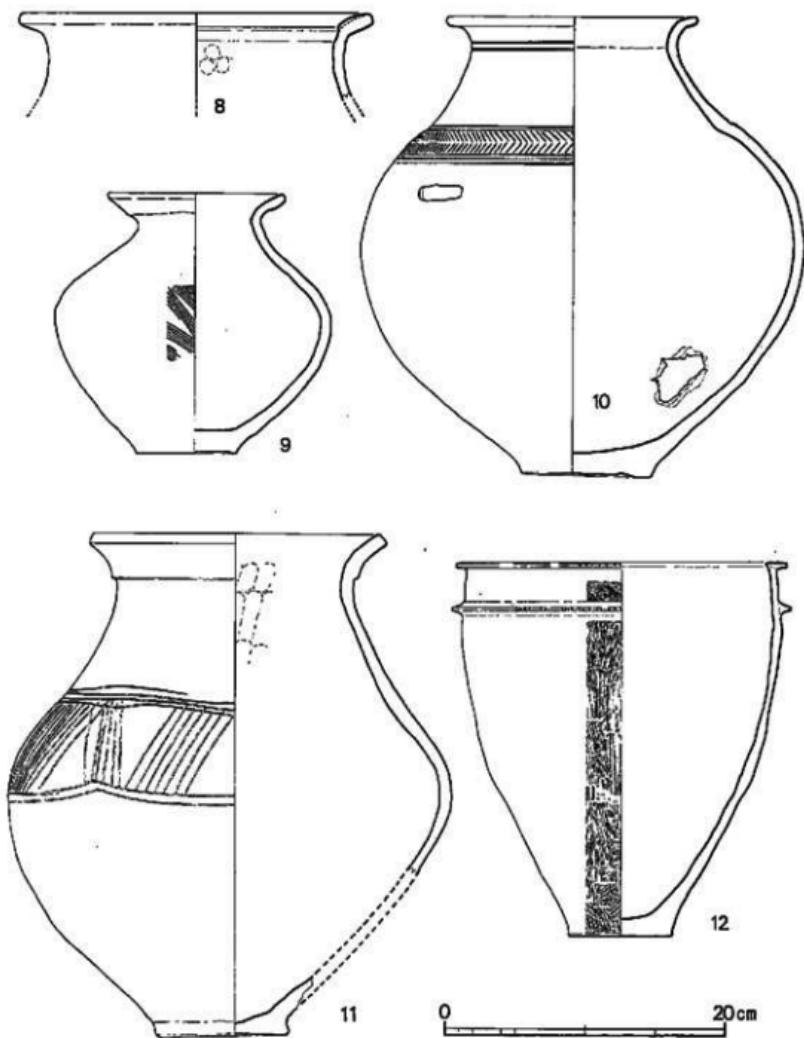
底部（第51図5）壺の底部で平底。底下面に粗圧痕がみられる。下層出土の6と同一個体と思われる。

下層の土器群

壺形土器（第51・52図6・7・10・11）下層からは4個体分の壺形土器が出土した。いずれも頸部から口縁への反転はなめらかで、6・7・11は口縁が肥厚し段をもち、10の口縁は彎曲する。6は頸部破片で、頸部との区分に三条の沈線がめぐる。外面は丁寧な横ヘラ磨きで、口縁裏面まで及ぶ。内面は上半が粗いヘラ調整の他は指整形のあとナデ仕上げ。色調は淡赤褐色で、焼成普通。胎土等とともに5と酷似し同一個体と思われる。



第 51 図 17号袋状壁穴出土土器実測図(1) (1/4)



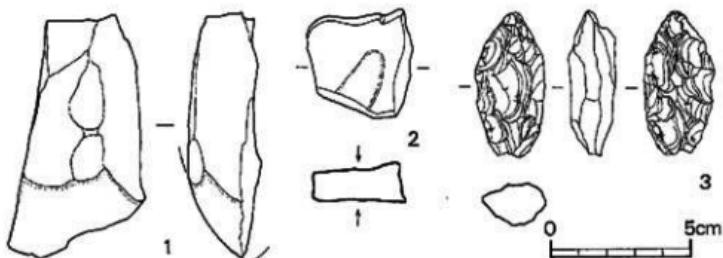
第 52 図 17号袋状窓穴出土土器実測図(2) (1/4)

7は胴下半以下を欠失する大形壺で頸部区分に指頭による条線がはいる。外面は口縁までヘラ磨き、内面は口縁横ナデの他は指整形のあとナデ仕上げ。色調は淡灰紫色で、焼成普通。胴上半に黒斑がみられる。11は胴の一部を欠く壺で体部は一方球状他方が尖り気味に張り出するいびつな形状で、底下面は若干くぼむ。胴上半にはだれた複線山形文を上三条下二条の沈線で区画する。器面は丁寧なヘラ磨きで仕上げられる。色調は淡黄灰色で焼成はわりと良好。口縁部と胴部に黒斑がみとめられる。10は球状の胴部で彎曲する口縁とのバランスもよく、器面は丁寧にヘラ研磨され端整なつくりである。口縁部境界に二条の沈線。胴上半の羽状文は上二条・下三条の沈線で区画される。色調は赤褐色で焼成良好。胴上半に黒斑がみられ、また胴上端に焼成後に穿たれた孔がみられる。

(宮崎貴夫)

石器（第53図1～3） 1は太形始刃石斧の破片で、片側の刃部の一部が残る玄武岩製。2は砂岩製の砾石の小破片、研磨面は表・裏両方で、表には幅1cm程の凹みがみられる。3は尖頭状石器で、先端はにくく尖り、中央部はかなり部厚い。周辺から粗い剝離を加えている。黒曜石製でバティナが進んでおり、弥生時代の所産でない可能性が強い。

(木下 修)



第53図 17号袋状豊穴山土器実測図(1/2)

18号袋状豊穴（図版25-1、第45図） 口辺に多少の崩壊が見られるが、残りの良い貯蔵穴である。平面形態は円形を呈し、床面形態は脛張り洞丸方形を呈する。北側の壁には先細りの横穴を掘っているが、用途は不明。

土層堆積は、上層部で自然堆積を呈するが、下層部ではほぼ水平な堆積を呈し、特に12層の上面の硬さと堆積状況から察するに、貯蔵穴の再利用が考えられないだろうか。

出土遺物は、床面直上で大形壺形土器1、大形壺形土器1、12層上面で小形壺形土器1を検出した。

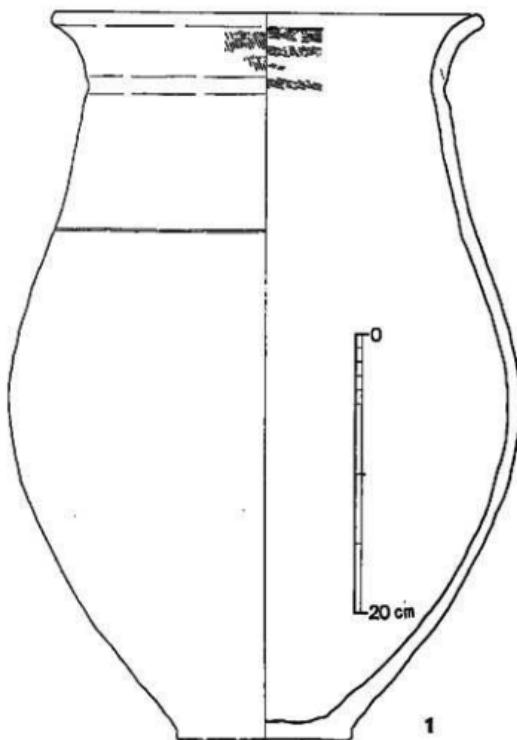
(佐々木隆彦)

出土遺物（第54・55図）

床面から12cm前後の位置に大形壺が横転、浅鉢が倒置し、約45cm上に小形壺が出土した。出土土器はこの3個体のみで、皆ほぼ完形に近い。大形壺と浅鉢が使用時に埋没し、その後に

小形壺が投入されたような出土状況を示し、あるいは22号のような埋葬例（壺棺）とも考えられなくもないが、明確でない。

壺形土器（第54・55図1・2） 1は長胴の大形壺。口縁は若干肥厚され口頭部境界には指頭による凹線、頸胸部区分には一条の沈線がめぐる。器面は粗いハケのあとヘラ磨きされ、口縁は横ナデされるがハケ目がかなり残存する。内面はナデ仕上げ。色調は淡黄色で焼成は軟質である。2は胴中位が張り出すわりと雛鶯なつくりの小形壺で、胴上半の羽文は頸胸区分の三角凸帯と二条の沈線で区画さ



第54図 18号袋状竪穴出土土器実測図(1) (1/4)

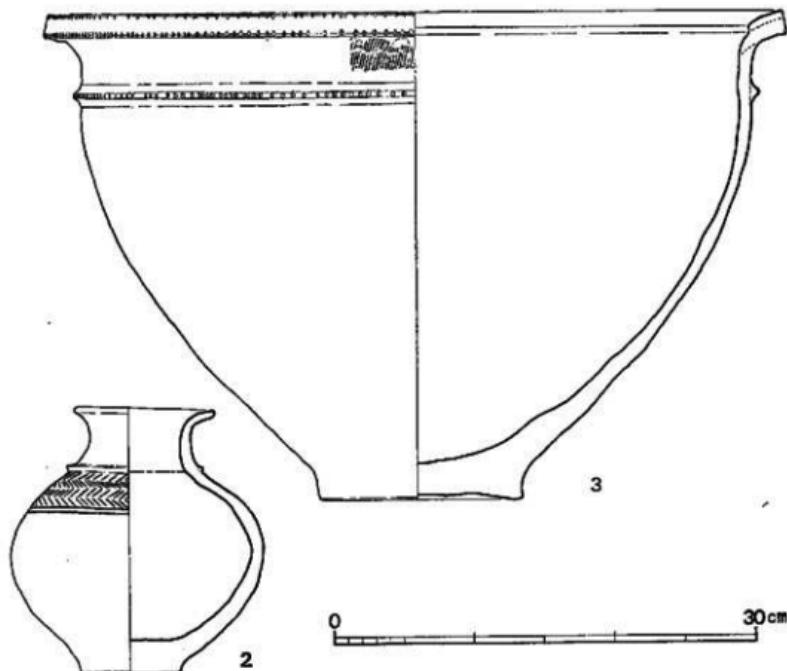
れる。底部はわりと厚味をもつ。色調は淡黄褐色で焼成普通。

浅鉢形土器（第55図3） 口縁の一部を失する浅鉢で口縁は肥厚して内面に段を有し、口唇上・下端と洞部の三角凸帯に刻目を施す。外面は凸帯の上面にはハケ目が残り、凸帯の下面は横ヘラ磨きで、底部付近は指ナデ。内面は内底面が指整形のあとナデの他は、丁寧なナデにて仕上げられる。色調はハダ色味もつ淡茶褐色で、焼成はわりと良く、胸部に黒斑がみられる。

（宮崎貴夫）

19号竪穴（第56図） 床面は不整梢円形を呈する。東壁際に梢円形のピットがある。重複の可能性もあるが調査の段階ではわからなかった。いわゆる袋状竪穴とは別の「浅い小形の竪穴」といえる。遺物は埋土中より前期の壺破片が出土している。

（丸山康晴）



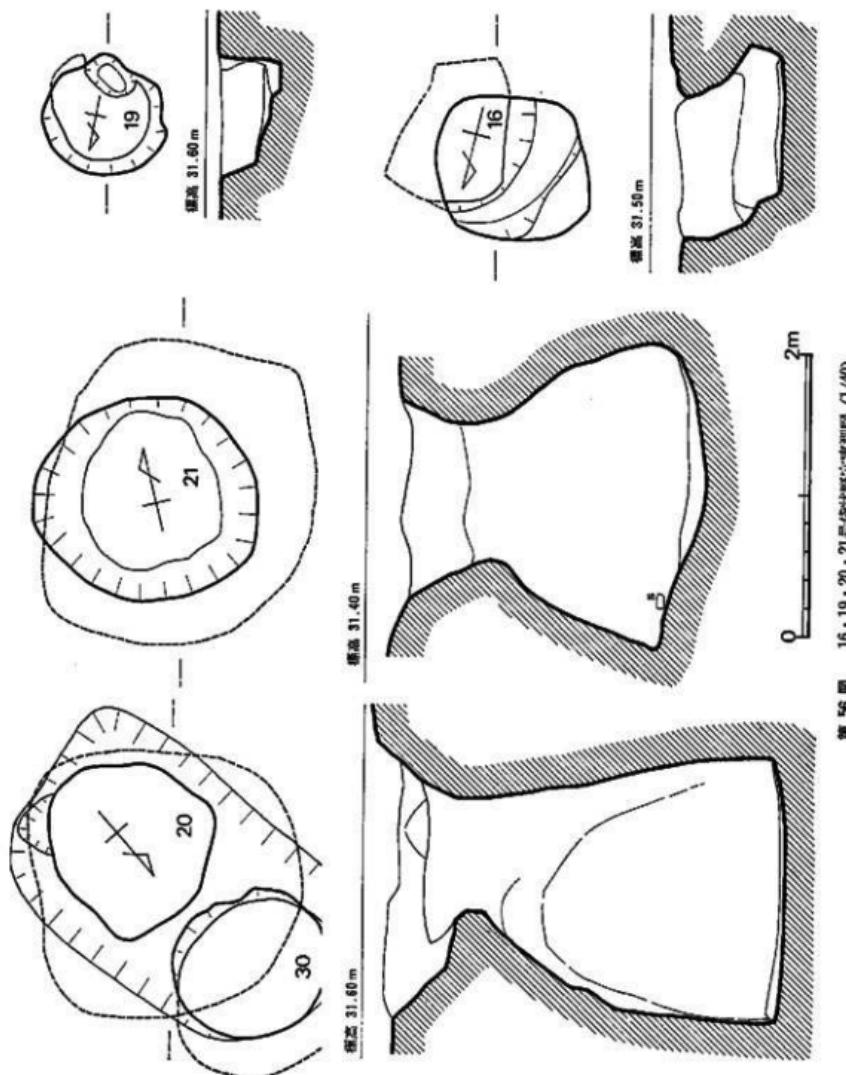
第55図 18号袋状窓穴出土土器実測図(1) (1/4)

出土遺物（第64図1）

変形土器片が数点出土したのみでそのうち図示できたのは1だけにとどまる。なお他の30号のものと同一個体と考えられるものも出土している。1は口唇を丸くおさめた加巻状口縁で細かい刻目を施し、肩部はわりとふくらみをもつ。器面は縦位ハケのあとナデにて仕上げ、口縁は横ナデ、内面は指整形のあとナデ仕上げ。灰色味おびる淡黄褐色の色調で、焼成はわりと良い。

20号袋状窓穴（図版24-2、第56図） 床面は不整多角形に近い隅丸方形の袋状窓穴である。壁面は残りがよく、北側の壁面は床から約1mまでは垂直に立ちあがり、そこから口辺部にかけてかなり大きく内凹する。南側の壁面は床面から口辺部へ直線的に内凹する。床面で最大径を測り入口は南側に開口している。30号袋状窓穴と口辺部で重複し、床面から1m70cm前後で若干の切り合いを持つ。27号袋状窓穴とも床面から50cmのところで切り合いを持つ。その切り合いの関係から、この窓穴は27号・30号窓穴が埋没した後に設けられたものである。遺物は甕・瓶の破

門田遺跡



第56図 16・19・20・21号祭祀施設の実測図 (1/40)

片が出土している。(丸山康晴)

出土遺物 (図64図2)

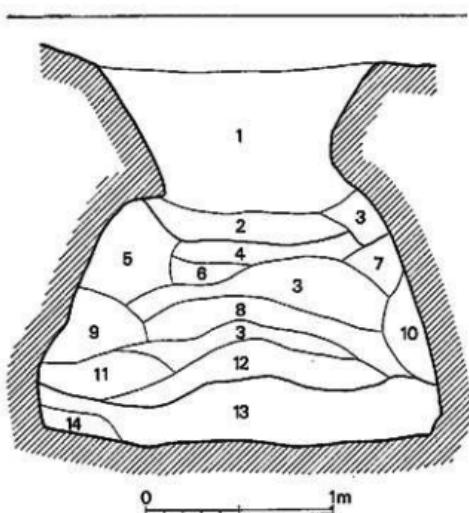
2は上層から出土した鉢形土器破片で、体上端が内側に強く折れこんだ変異な形態をもつ。外面は横ヘラ磨き、内面は指整形のあとナデ仕上げ。色調は淡灰茶色で焼成普通。他に窓形土器細片がみられる。(宮崎貴夫)

21号袋状竪穴 (図版25-2, 第56図) E12-6区に位置し、門田2号墳の周溝で口辺は削平されている。上辺は不整円形で径1.6mと広いが、下がるにつれ徐々に狭まり、-80cmで90cmと最も狭小になる。それ以下は反転して袋状に広がり、典型的なフラスコ状を呈す。深さ2.13mで底面は隅丸長方形を呈す。土層の堆積は14枚観察されるが、大きく(I)1~3層、(II)4~12層、(III)13~14層の3枚に分けられる。(I)は暗褐色土を中心とした土層。(II)は茶褐色土。(III)は暗褐色粘質土で平均して軟質な土層が全体的に堆積している。遺物は土器の細片が若干と、床面に台石状の石が1点出土したのみであった。(木下修)

22号袋状竪穴 (図版26-1, 第44図) 12号袋状竪穴とトンネル状の横穴で続く、残りの良い貯蔵穴である。平面形態は円形を呈する。床面形態は一辺が直の不整円形を呈するが、18号袋状竪穴と似かよっている。土層堆積は、中層で自然堆積を呈するが、ほぼ水平堆積である。また、この貯蔵穴の廃絶後に弥生時代前期末の盃缶を埋葬していた。

(佐々木隆彦)

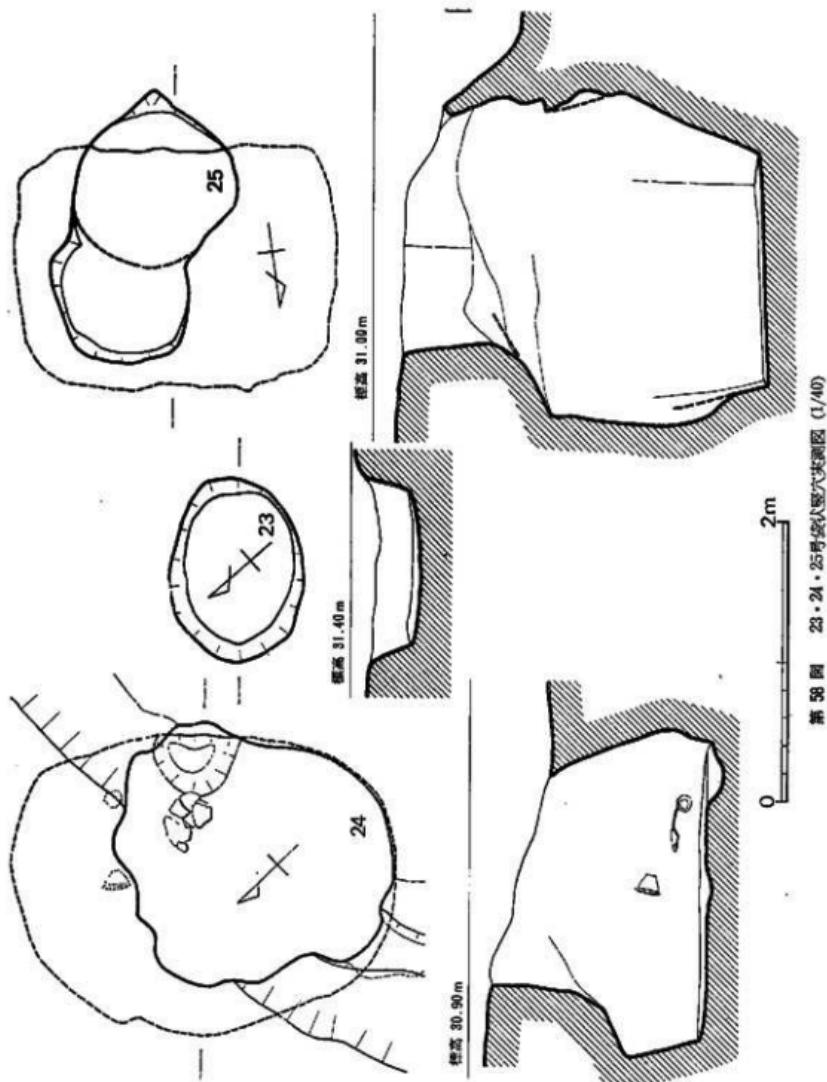
出土遺物 (第64図3)



第57図 21号袋状竖穴断面図 (1/30)

土層名

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ① 暗褐色土層 | 褐色土層 |
| ② 黄褐色粘性硬質土層 | 黄褐色ブロック混入茶褐色土層 |
| ③ 茶褐色軟質土層 | 褐色・黄褐色ブロック混入茶褐色土層 |
| ④ 灰白色ブロック混入赤褐色土層 | 褐色ブロック混入茶褐色土層 |
| ⑤ 黄褐色灰白色ブロック混入茶褐色土層 | 褐色ブロック混入茶褐色土層 |
| ⑥ 赤褐色軟弱ブロック混入明褐色土層 | 明褐色ブロック混入褐色粘質土層 |
| ⑦ 灰白色ブロック混入茶褐色土層 | 暗褐色粘質土層 |
| ⑧ 赤褐色軟弱ブロック混入茶褐色土層 | 褐色粘質土層 |



床面から若干浮いた状態で前期末の合口壺が埋設された他には、数点の土器小破片がみられただけで、図示したのは3の菱形土器底部破片だけである。

平底の底部片で、外面は縦位ハケのあと下半を指整形及びヘラ状器具による押圧整形を行なう。内面は指整形及びナデ仕上げ。色調は淡赤褐色で、焼成やや不良。(宮崎貴夫)

23号袋状穴(第58図) 床面が横円形を呈する浅い小形のもので、いわゆる袋状空穴とは別のものであろう。東西方向に長く、長径105cm、短径79cmを測る。遺物はなんら出土していない。これら小形空穴は辻田地区でも類例が知られる。床面に径10cmほどのピットを2~4個有するものもあり、そらととは機能を異にするものかもしれない。(丸山康晴)

24号袋状穴(図版27-1、第58図)

台地の両側の一帯を形成するものの一つで、台地を東西に走る削平の段落ちのため、上辺は大きく切られている。深さは北壁側では、1.54mだが、南壁側で0.5mを測るにすぎない。底面形態は横円形を呈し、長径2.73m、短径2.12mで南壁近くに10cmほどの凹みがある。断面は残存のよい北壁からフランコ状を呈していたことが判る。

埋土の堆積は20枚観察され、他の袋状空穴と異なり薄い堆積状態を示し、全体に南側から流れ込んだことが判る。(木下修)

出土遺物(第64・59図)

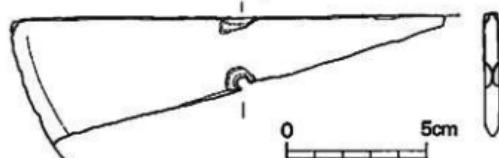
床面付近に小形の浅鉢5と壺が出土し、他に壺・壺の小破片と石庵丁片が出土した。

菱形土器(第64図4) 口唇を欠失し底部が剥落した小形壺で、体部はいびつな球状を呈し頸部と肩部の境界は不明瞭。器面はナデ仕上げ。内面は口縁が指ナデ。他は指整形及びナデ。色調は黄褐色で部分的に黒味もつ。焼成はあまり。

浅鉢形土器(第64図5) 完成の小形浅鉢で、口縁断面は三角形で若干たれ下る。底部は安定し下面は若干くぼむ。外面はナデ仕上げ。内面は口縁裏面が指整形、上半はハケ状で淡くナデ。下半はナデ仕上げ。色調は暗黄褐色で、焼成良好、口縁の一部にススが付着する。(宮崎貴夫)

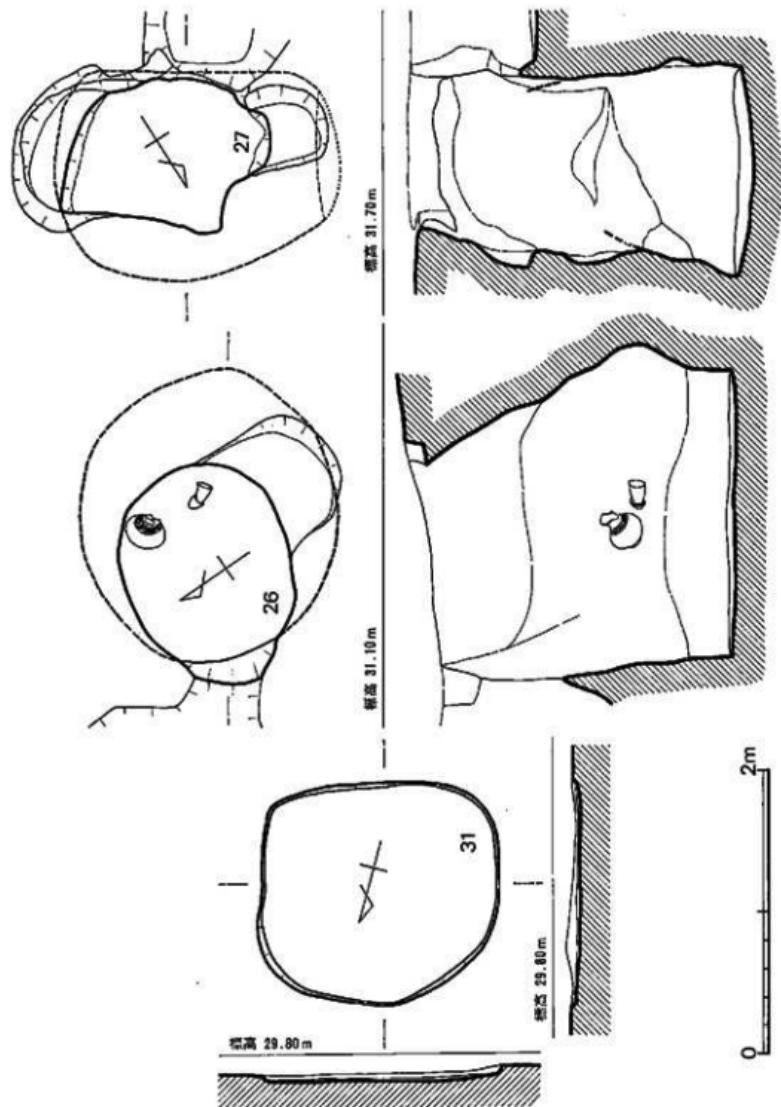
石庵丁(第59図) 硬砂岩製の大形の石庵丁で、左辺に刃部を残し、下辺は欠くが、半円状をなすものと思われる。背部は直線で、紐孔の直上に手すれの痕がみられる。穿孔は両側から行なわれている。

全面の研磨は丁寧。(木下修)



第59図 24号袋状穴出土石庵丁実測図(1/2)

25号袋状穴(第58図) 南西側斜面に孤立して存在する空穴で、底面は長軸N76°Wの隅丸長方形を呈する。南側に開口する入口付近は斜面でカットされ、上部は近世の墓塚で搅乱され



第4図 26・27・31号墳断面・実測図 (1/40)

ている。内壁は南側が直立気味の他は、中ぶくらみの袋状を呈する。

遺物は刷片などの他、壺形土器の破片が少量出土しただけである。

26号袋状窓穴（図版27-2・28-1、第60図） 門田2号墳東側周溝の南隅にあり、底面は東西に若干長いびつな円形を呈する。上部は周溝で削平をうけ、南側は近世墓によって搅乱されているが、入口は北西側に片寄っていたことがわかる。内壁は崩壊がはげしく、旧状の壁面は床から25~50cm前後しか残存していない。

遺物はほぼ完形の壺形土器1と完形小形鉢形土器2が床面から約65cm上にまとまって出土し、他に壺・壺形土器片が若干出土している。

出土遺物（図版34・第64図）

床面から約65cmの位置に、壺形土器と小形鉢2個体がまとまり出土した。小形鉢は横転し、入れ子の状態で出土した。他には、壺・壺・浅鉢などの底部がみられ、壺口縁部片11は下部から出土した。

壺形土器（第64図6・11） 6は肩中位が張り出し、頸部は垂直気味にのび、口縁は強く彎曲するもので、底部はわりと小さい。胴上半の貝殻施文の羽状文は上下一条づつの沈線で区画される。器面は丁寧にへら研磨される。色調は黄茶色で、焼成普通。胴部に墨斑が2ヶ所みられる。11は口縁部破片で、肥厚され、口縁端部は尖り気味におさめる。あきらかに6より古手のつくりである。器表は風化をうけ調整不明瞭。色調は淡黄褐色、焼成はあまり。

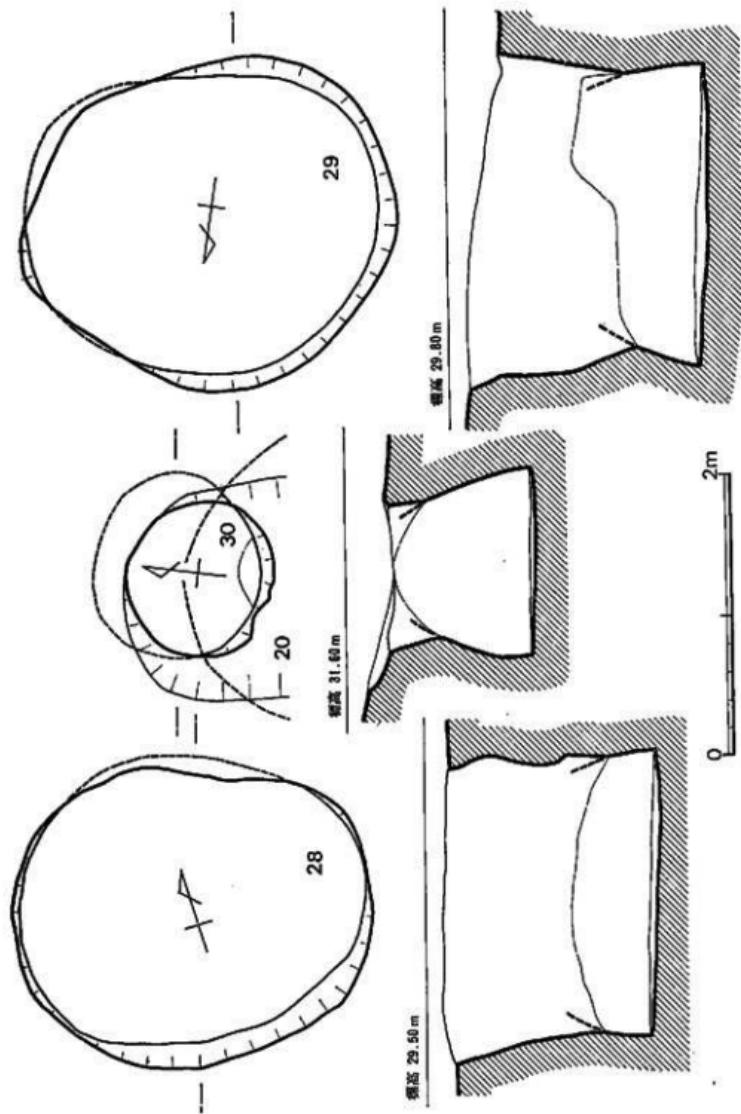
小形鉢形土器（第64図7・8） 7は短く彎曲する口縁で底面はわずかにくぼむ。外表面は極細のハケで調整され、下端はヘラ状器具による押圧整形痕がみられる。口縁横ナデ、内面は上半指ナデ、下半指整形及びナデ。色調は明茶褐色、焼成はやや悪し。8は口径10.9cm、器高8.2cmを測る小形のもので、短かい口縁は強く折れ、底部はわりと安定したものである。外表面はハケのあとナデ、下半はヘラ押えか。口縁横ナデ、内面は上半指ナデ下半指整形。色調は黄褐色で、焼成は軟質。

底面（第64図9・10・12） 9は焼成後に擦かれコシキとされたもので、底下面はくぼむ。外表面ハケのあと下半を指ナデし、内面は指整形及びナデで、ヘラ状器具による押圧整形痕が残る。色調は淡灰茶色で焼成普通。10・12は壺や浅鉢の底部で、底下面は若干くぼむ。器面はヘラ調整され、下端に指痕が残る。内面は淡赤褐色で、焼成良好。12は色調、外表面明茶褐色、内面淡赤褐色で、焼成普通。

27号袋状窓穴（図版28-2、第60図） 底面は、南側がわりあい直線的で対応する邊が丸味をもったいびつな閉丸長方形を呈する。北西側面及び壁面は20号袋状窓穴によって切られ、20号より古いことがわかる。上部は近世墓によって著しく破壊されているが、南側床面が直線的であることから、入口部は南側に片寄っていたことが推定される。

遺物は土器細片が数点出土したにとどまる。

（宮崎貴夫）



第 6 図 28・29・30号袋状形穴美刺圖 (1/40)

28号袋状竪穴（図版61） 平面・床面形態とも梢円形を呈する。上部は削平も激しく、崩壊も著しい。上層堆積状態は自然堆積を呈する。出土遺物なし。
（佐々木謙蔵）

29号袋状竪穴（図版29-1, 第61図） 床面は梢円形を呈する。壁面は床面から約50cmまでは原形をとどめているが、それより口辺部にかけては崩壊している。この崩壊は埋土の状態から構築後早い時期であることがわかる。本来は床面が最大径をなし、壁面は北側が大きく内凹、南側は直線的に内凹して、南よりに開口していたと思われる。遺物は含まれていなかった。

30号袋状竪穴（図版24-2, 第61図） 床面は円形を呈する。壁面は北側が最も大きく内凹し、南側は直線的に内凹する。西側は床面20cmで最大径を示す。20号袋状竪穴により南側の底部を切られており、20号よりこの竪穴の方が古いが、その時間的差はわずかであろう。遺物は埋土中より甕の破片が出土している。
（丸山康晴）

出土遺物（第64図13）

瓶形土器の破片13の他には数点の土器細片がみられるのみで、13は19号のものと同一個体と考えられる。

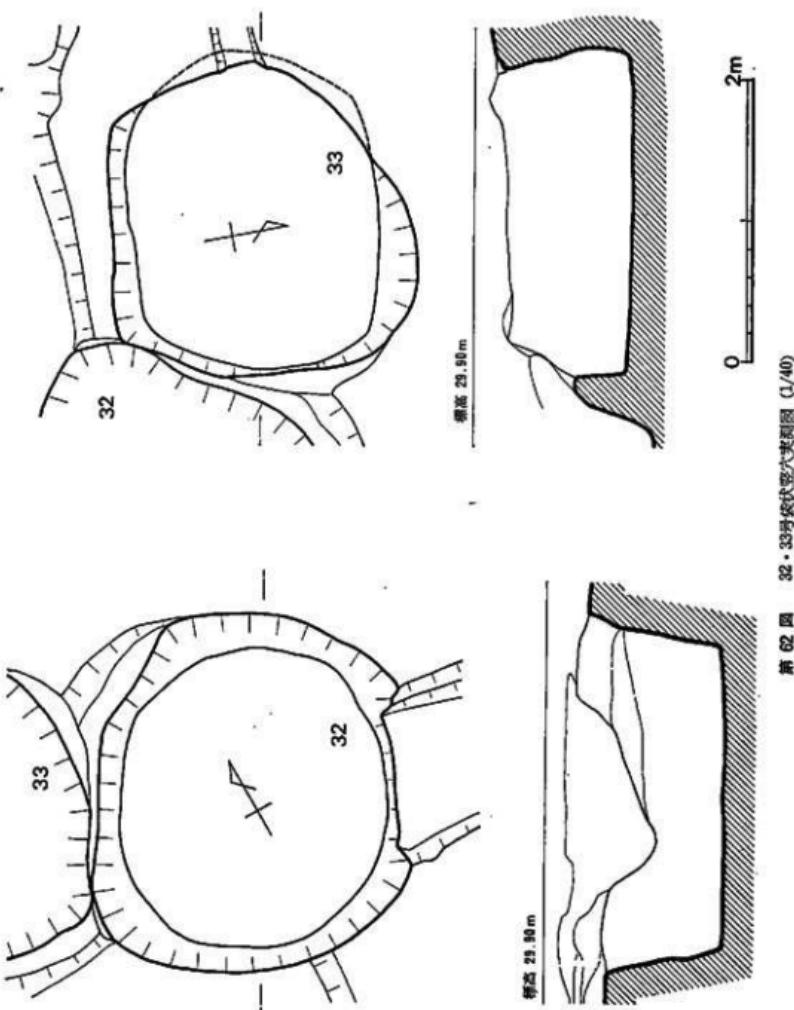
口縁は外反し、体部がふくらみをもつもので、器面は指ナデにて仕上げる。色調は外面灰褐色、内面黄茶色で、焼成は良好。器表面にススがこびりついている。
（宮崎貴夫）

31号竪穴（図版29-2, 第60図） 床面は西側が円形に近い隅丸多角形をなす。多少の削平受けているが非常に浅く、袋状竪穴はもちろん他の竪穴とも全く異なるものである。（丸山康晴）

32号袋状竪穴（図版30-1, 第62図） 台地の南東側斜面の灰白色粘土質土層に掘り込まれた、梢円形の床面プランをもつ本遺跡では中形の竪穴である。壁面は著しく崩壊しているが、床面から約30cmほど旧状を残しているところがあり、本来は袋状を呈していたことがわかる。現状の深さは1.04mと浅いがこの周辺は後世に1m以上は削平されたものと思われる。出土遺物がないため時期は不明であるが、33号袋状竪穴の埋没後に掘られている。さらに本竪穴の埋没後には中期前半の21号塗棺が埋葬されている。本竪穴の埋土を見ると、地山である黄褐色粘質土がブロック状に詰っており、壁面の崩壊と同時に人為的に埋戻されていることがわかる。

33号袋状竪穴（図版30-1, 第62図） 32号の東側に接する、かなり頭の張った隅丸長方形形状を呈する床面形の中形の竪穴である。これは32号より古い竪穴であるが、同様に上部を1m以上削平されているのと、壁面の崩壊で旧状を失っているが、部分的に床面から60cmほど袋状の壁面を残している。やはり遺物を含む有機質土がなく、地山のブロックで詰っているところから、人為的埋戻しだある。

34号袋状竪穴（図版30-2, 第63図） 梢円形に近いが、一部に角をもっているところから、削張りの長方形ともいえる床面プランを呈する中形の竪穴である。これも上部を1mちかく削平されたと思われるが、東壁を37号で破壊されている以外は壁面は旧状をとどめているところが多い。どくに北側壁面が、床面から20cmほどのところから急激に袋状を呈する。入口は南側壁近



前 62 図 32・33号焼成窯の断面図 (J.40)

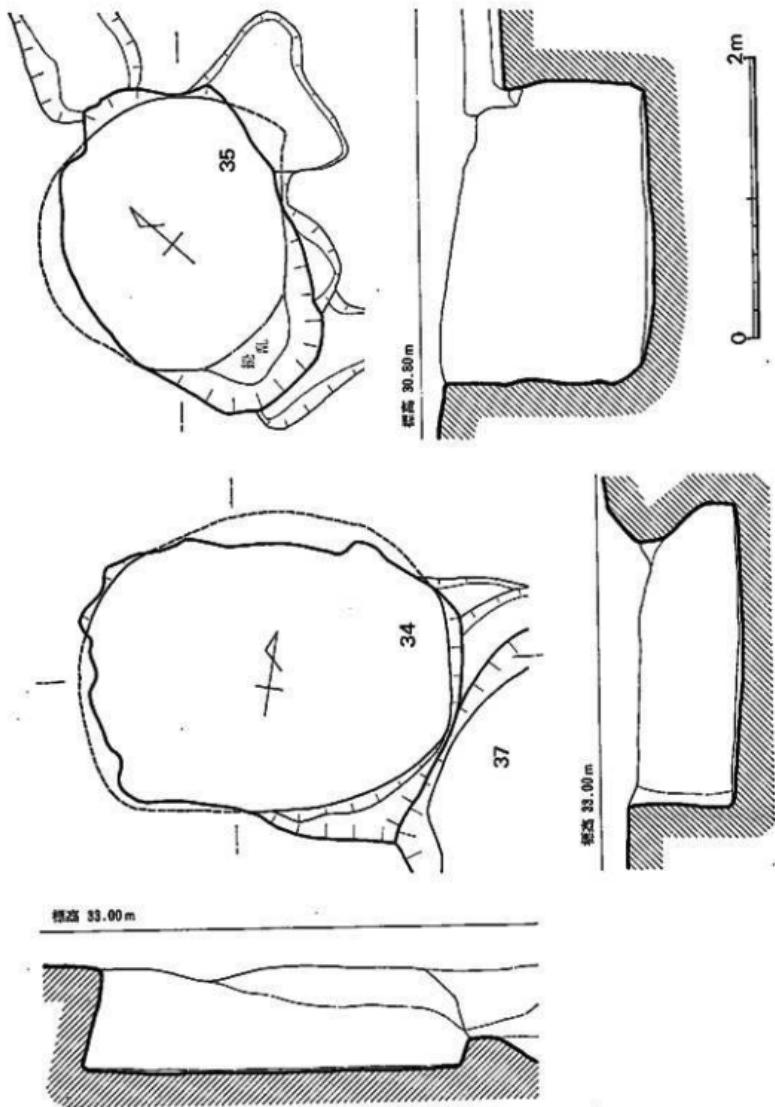
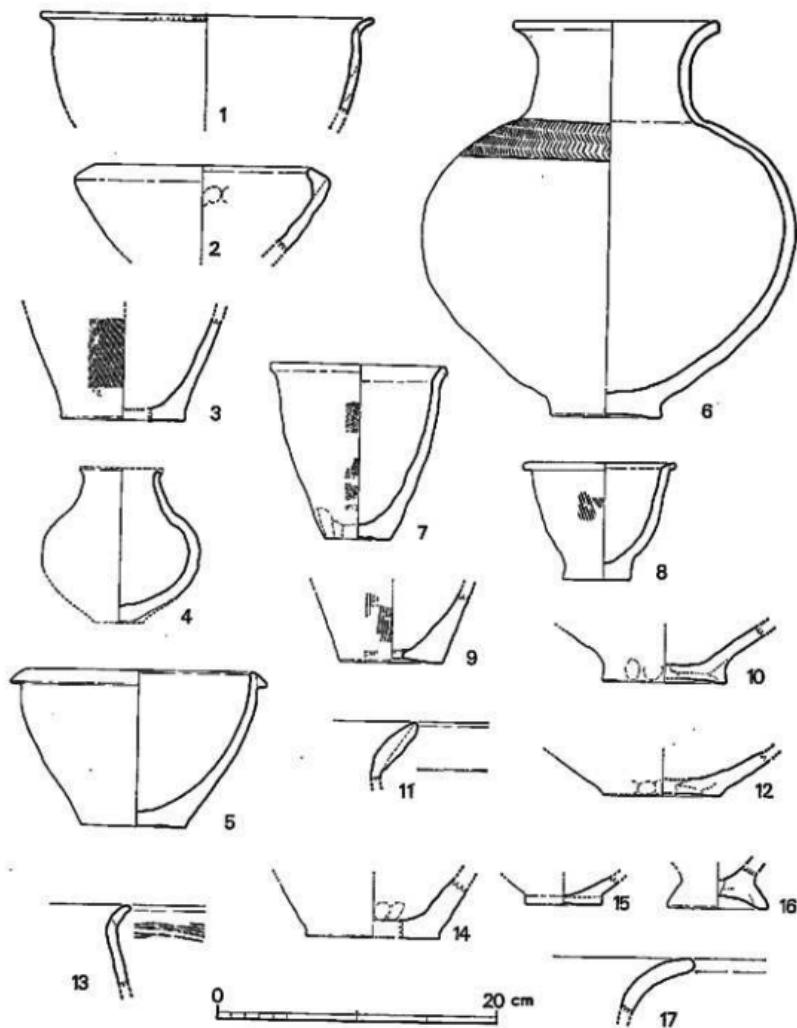


圖 63 圖 34・35 方案狀六形圖 (1/40)



第 64 図 19・20・22・24・26・30・35・36号袋状堅穴山土土器実測図 (1/4)

くに開口するタイプのものと思われる。出土遺物はない。

35号袋状窓穴（第63図） 舌状台地の中央付近に位置し、群をなさず孤立するかたちをとっている。床面プランは一部角を有するが、不整円形といえるものである。規模もこの遺跡では中形に属する。上部は50cm前後削られたと思われるが、埋土内と壁面は大きく近世墓で破壊されている。残りの良い北東壁面がゆるいカーブで入口に延びて袋状を呈するのに対して、他の壁面は床面近くから著しく袋状のカーブを描くところから、北東側近くに入口があったものと思われる。埋土は有機土が多く、土器片も発見された。前期後半のものである。（御田康雄）

出土遺物（第64・65図）

図示したのは壺底部片14・16と壺底部片15で、他に壺形土器の細片が出土した。

15は円盤貼付け状の小形壺底部片で、下面はわずかにくぼむ。外面はヘラ磨きとナデ調整され内面及び底下面は指整形及びナデ。色調は淡赤褐色で、胎土はわりと精良で、焼成普通。板付I式と考えてもよいものである。

14は平底の壺で器面はハケのあと横位のナデにて平滑に仕上げ、内面は指整形及びナデ。色調は外面淡赤褐色、内面淡黄褐色で、焼成はやや不良。16は下面が上げ底の台状の底部で、外面は横位のナデ、内面及び下面は指整形される。色調は淡茶褐色で、焼成普通。器表面は風化をうけている。（宮崎貴夫）

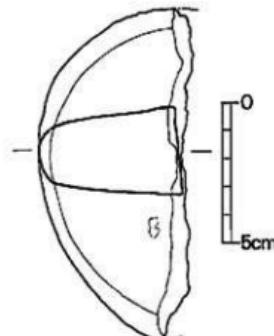
敲石（図版37-2、第65図） 砂岩を利用した扁平の敲石で、半分は欠損している。敲面はかなり凹凸がみられるが、体面は磨かれた形跡もあり、磨石としても利用されている。（木下修）

36号袋状窓穴（図版31-1、第67図） 床面は楕円形に近い圓多角形をなす。窓穴の上部を後世の削平により失なっているが、本来は開口部を南よりにもつた袋状窓穴であると思われる。北側の壁は床面より40cmで最大径を示し内凹する。南側は直線的に外反する。床面には10cm前後の深さをもつピットが3個見られるが性格は不明。遺物は理土上層より磨製石斧刀部と前期末に属する土器小片が出土している。（丸山康晴）

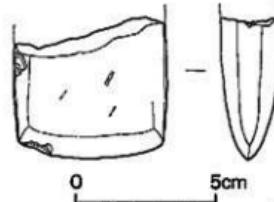
出土遺物（第64図）

壺・壺形土器の細片が数点出土したにとどまる。図示

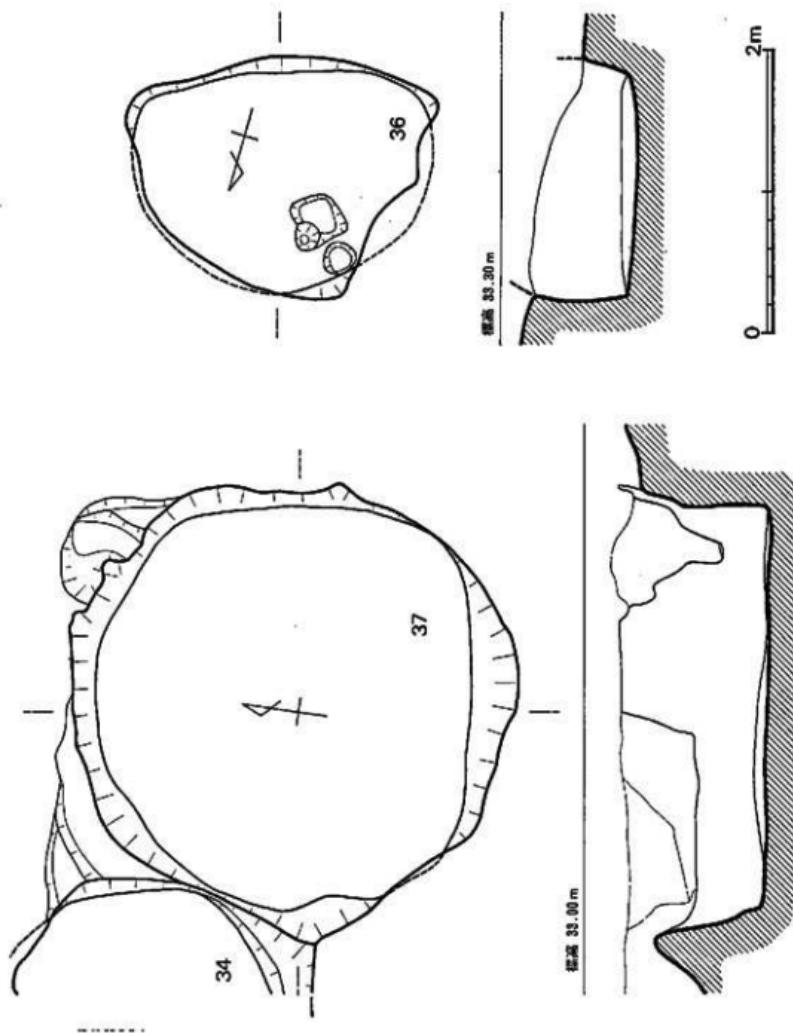
できたのは壺口縁部片で、他に脣部凸沿に刻目を施したものもみられる。



第65図 35号袋状窓穴出土敲石実測図
(1/2)



第66図 36号袋状窓穴出土石斧実測図
(1/2)



第 67 図 36・37号棟状窓穴実測図 (1/40)

表 4 門田地区袋状堅穴一覧表

(単位cm・cm)

No.	地點	形態	底面径	面積	深さ	備考	分類	出土土器	石器その他の遺物
1. D12	中央	不整多角形	254×202	406	258	直受け	2類	壺1, 加須窓1, 鍋1, 鉢1, 底盤5, 直・錐破片	石器1
2. D12	"	"	165×160	226	147	直受け	2類	壺1, 鍋2, 鉢1, 底盤5, 直・錐・鉢破片	たたき石1, 売化米
3. B11	東	円形	211×193	244	156	上部崩壊	2類	壺1, 鍋3, 鉢1, 底盤4, 直・錐・鉢破片	石斧1, スクレイバー1, 砕石1, 砕石2, 石製刃物1, 砕石刃1
4. B11	"	"	136×134	140	93	"	"	"	"
5. C10	"	"	185×184	205	128	"	2類	壺1, 直・錐・鉢破片	"
6. B11	"	楕円形	108×94	84	74	ピット2もつ小形堅穴	遺物なし	"	"
7. C11	"	不整多角形	175×175	240	93	"	"	"	"
8. D11	中央	楕円形	205×164	267	132	"	"	"	鈎頭車1
9. D11	"	長梢円形	142×98	123	20	小形堅穴	"	"	黒曜石片
10. D11	"	円形	85×79	51	31	"	"	"	"
11. E11	"	"	115×105	101	55	上部崩壊	"	"	石器1
12. D11	"	不整椭丸方形	202×185	306	120	22号とトンネル状に連続	1類	壺2, 長窓2, 直破片	石斧1
13. D12	"	不整椭円形	267×262	554	225	上部崩壊	1類	壺1, 底盤1, 直器皿片1	石器1
14. D12	"	"	244×226	421+α	211	15号より古い ピット1	1類	壺1, 底部1	石器1
15. D12	"	円形	199×195	318	164	"	1類	土器片若干	"
16. D12	南	不整形	112×80	66	76	小形堅穴	"	"	"
17. D12	"	不整椭円形	280×212	488	156	"	1-2類, 壺5, 白付無柄壺1, 直1, 鍋1, 直・鉢破片	石斧1, 砕石1, ポイント1	
18. E12	中央	不整椭丸方形	251×208	468	240	"	2類	壺2, 鉢1	"
19. E12	"	椭円形	78×65	40	35	小形堅穴	2類	直破片	"
20. E12	"	不整椭丸方形	187×185	277	280	27-30号より新しい	"	直・鉢破片	黒曜石片
21. E12	"	不整椭丸長方形	216×188	339	213	"	"	土器片若干	"
22. E12	"	不整多角形	235×188	339	230	合口蓋沿	1類	直縁壺1, 土器皿若干	"
23. E12	"	楕円形	105×79	65	32	小形堅穴	"	遺物なし	"
24. D12	南	"	273×212	465	154	ピット1	2類	壺1, 鉢1, 土器皿若干	石器1
25. E12	他	椭丸長方形	219×165	364	255	"	"	直器皿若干	石器1, 剥片1
26. D12	中央	円形	209×183	294	220	上部崩壊	2類	壺1, 鍋2, 直・直破片若干	"
27. E12	"	不整椭丸長方形	188+α×147	244+α	246	"	"	土器片若干	"
28. D13	南	椭円形	245×202	395	157	上部崩壊	"	遺物なし	"
29. D13	"	"	251×211	429	170	"	"	"	"
30. E12	中央	不整円形	130×118	121	100	"	2類	直破片	"
31. C13	南	不整椭丸方形	165×154	218	6	"	"	遺物なし	"
32. D13	"	椭円形	210×190	325	104	33号より新しい 上部崩壊	"	"	"
33. D13	"	"	228×176	336	88	"	"	"	"
34. D13	"	不整椭円形	263×212	360	74	37号より古い	"	"	"
35. C12	他	"	195×175	277	150	"	1類	直・直破片	細石刃1, たたき石1
36. D12	南	"	213×156	265	71	ピット6	2類	直・直破片	"
37. D13	"	不整椭丸方形	284×265	590	112	"	"	遺物なし	"

17はゆるやかに外端する口縁で、口径は不明。器表面は風化をうけるが、外面ヘラ調整、内面ナデ仕上げか。色調は淡黄灰色、焼成はあまり良くない。

磨製石斧（図版37-2、第66図） 玄武岩質の刃部破片である。全体は丁寧な研磨を施している。定角式石斧の範疇に入るものであろう。（宮崎貴夫）

37号袋状竪穴（図版31-2、第67図） 台地の南東側斜面にあり、やはり黄褐色粘質土層に掘り込まれている。北側壁がとくに崩壊の隅丸方形ともいえる。本遺跡最大の床面積プランをもっている。埋土層を観察すると壁面の残りが悪く地山の粘質土の大きなブロックが見られるところから、人為的に急激に埋戻された可能性が強く、黒色土など有機的物質を含む土層も少ない。遺物は発見されなかったが、34号より新しい。（柳田康雄）

a. 袋状竪穴について

門田遺跡門田地区はそのほぼ全面にわたって発掘され、37基の竪穴が検出された（第10図）。その分布状況は大まかに、東部（5基）、中央部（19基）、南部（11基）の3群にグルーピングが可能で、この他に所属の不明瞭な2基がある。これら竪穴の主体は時期的には弥生時代前期末の袋状竪穴といわれているものである（註1）。が、小形でその範疇に含まれるとは思われないものである。

この小形竪穴には9・10・19・23号と床面にピットをもつ6号の二者がある。前者は、床面が円形あるいは橢円形状もしくは垂直に立ちあがり、底面積が 1 m^2 以下のものである。いずれも中央部群に存在している。これを小形竪穴A類としよう。後者は底面が橢円形、壁面は垂直気味に立ちあがり、床面に柱穴状のピットを2個有する。東部群に1基だけ存在する。これを小形竪穴B類としよう。

A類については、辻田地区で径 $49\times 45\text{cm}$ の円形プランで深さ 110 cm の小形袋状竪穴（26号）が知られている（註2）。しかし、門田地区A類はその可能性をもつとはいえ、壁面の状態からは袋状を呈していたとは思われない。遺物は19号竪穴からは30号袋状竪穴出土の変形土器破片と同一個体と考えられるものが出土しており、弥生時代前期終末と推測されるが、他の小形竪穴も同時期で袋状竪穴と併用されたかどうかは判断ができない。B類については、辻田地区で同類のものが12基確認されている（註3）。辻田地区のそれは底面プランが隅丸方形のものが多いが床面に数個（2～4個）の柱穴状のピットを有する点など他の形状の特徴は酷似している。出土遺物は殆んどみられず時期・性格も明瞭でないが、その構造から上屋をもつ一種の貯蔵穴と考えられないだろうか。

したがって小形竪穴をのぞくと、門田地区では明確に袋状竪穴と考えられるものは31基が確認されたことになる。その分布状況は、東部（4基）、中央部（15基）、南部（10基）、他2基という内訳になる。

全般的に竪穴上部はなんらかのかたちで削平をされており、蓋受け状の遺構を残していたの

門田遺跡

は中央群の1・2号袋状竪穴の2基にすぎなかった。とくに東部・南部群は後世のカットが著しく、31号のように深さ6cm前後を測るにすぎないものもある。31基の袋状竪穴のうち内壁がどうにか袋状を保っていたものは18基で、他13基は上部が崩壊し口辺が大きくなり床面付近の壁面残存部の状態から袋状を呈していたと推察されたものもあった。

その点では底面形態は上部が崩壊しても比較的原形をとどめていると思われる。49年度概報(註4)の表には底面プランを単純に分類してしまったが、ここでは前回の分類を改めたい。すなわち、円形・橢円形・隅丸長方形の定型的形態と、一辺が直線的で側辺が張り出す不定型的形態にわけられる。

定型的なもの

円形 3・4・5・11・15・26号

橢円形 8・24・28・29・32・33号

隅丸長方形 25号

不定型的なもの

不整円形 13・14・30号

不整橢円形 17・34・35・36号

不整隅丸長方形 12・18・20・31・37号

不整隅丸長方形 21・27号

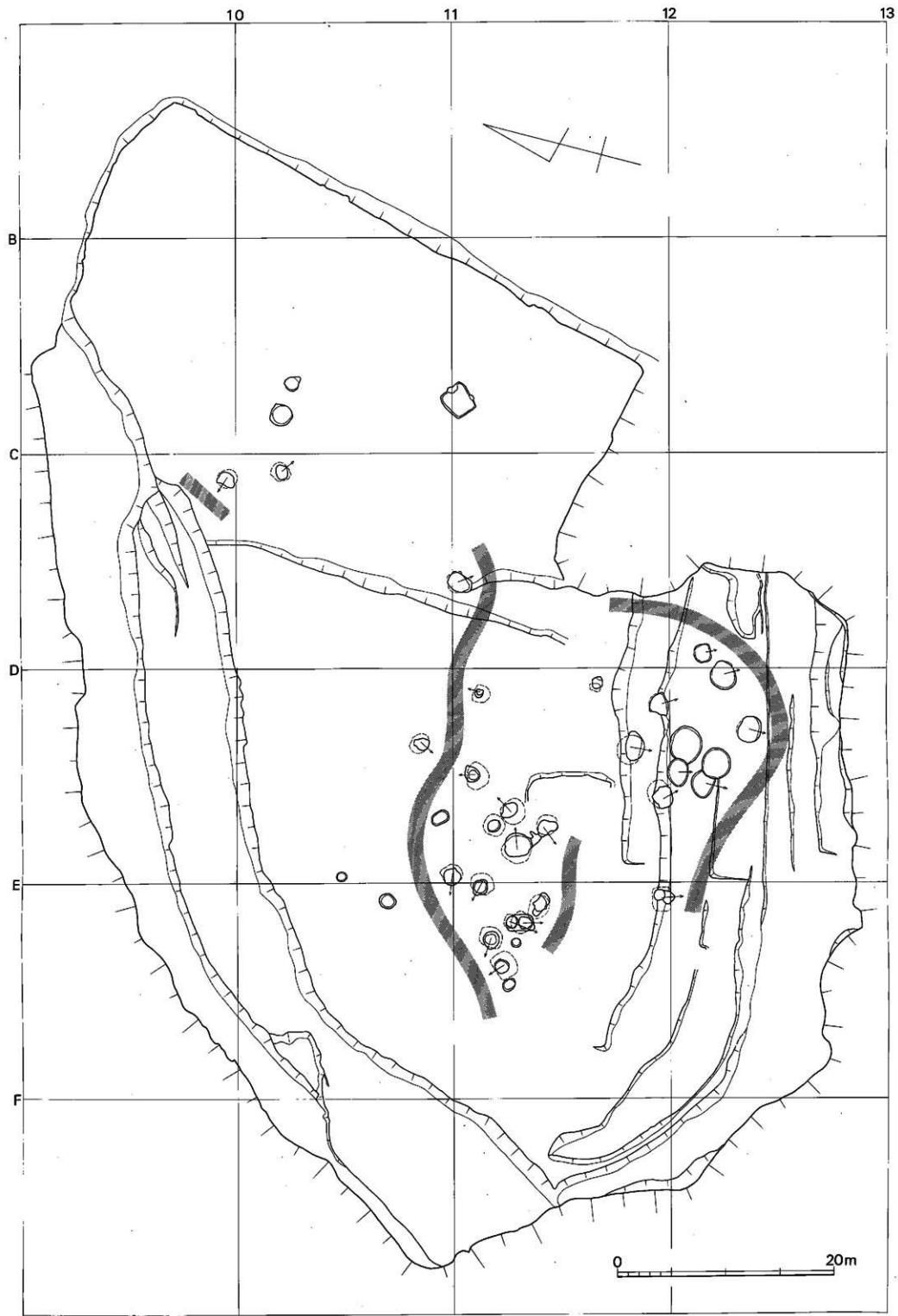
不整多角形 1・2・7・22号

不定型底面のものは、殆んどが直線的な辺の方へ入口が片寄り内壁も直立的で張り出した辺の方へ内壁がくいこんだ袋状を呈する。つまり底面一辺を張り出させ入口を片側に寄せることによって、竪穴を有効的に使用しようとした行為・工夫のあらわれとみることができよう。また床面長軸に対する入口の開口方向を示せば、中央部群は不定方向、南部斜面群では南向き、東部群は東あるいは西向きで、けっして統一的な方向を指してはいない(第68図)。このことは開口方向が集落などの居住域の方向を示していたと考えるよりも、門田地区をめぐっていたと思われる数条の道にむかって開口していたと考える方が妥当と思える。その点では25号は南部群に含めて考えてよいように思える。

14号→15号 33号→32号 竪穴間の重複関係は5ヶ所確認されている。このような竪穴(古)(新)
34号→37号 27号→20号 穴間の重複関係が何故生じたのかといえば、竪穴が埋没して
30号 しまう時間差を考慮すべきことはもちろんであるが、それに
もまして考えられることは竪穴が穿たれた区域が限定されていたことに帰因するように思える。すなわちこのことは、東部・中央部・南部の竪穴分布群の形成の原因ともいえよう。

またこの他に12号と22号はトンネル状の横穴で連結されており、同時的使用を示すものとして興味深い。これは竪穴が单一に使用されたのではなく、数基の単位で同時使用されたことを暗示させる。

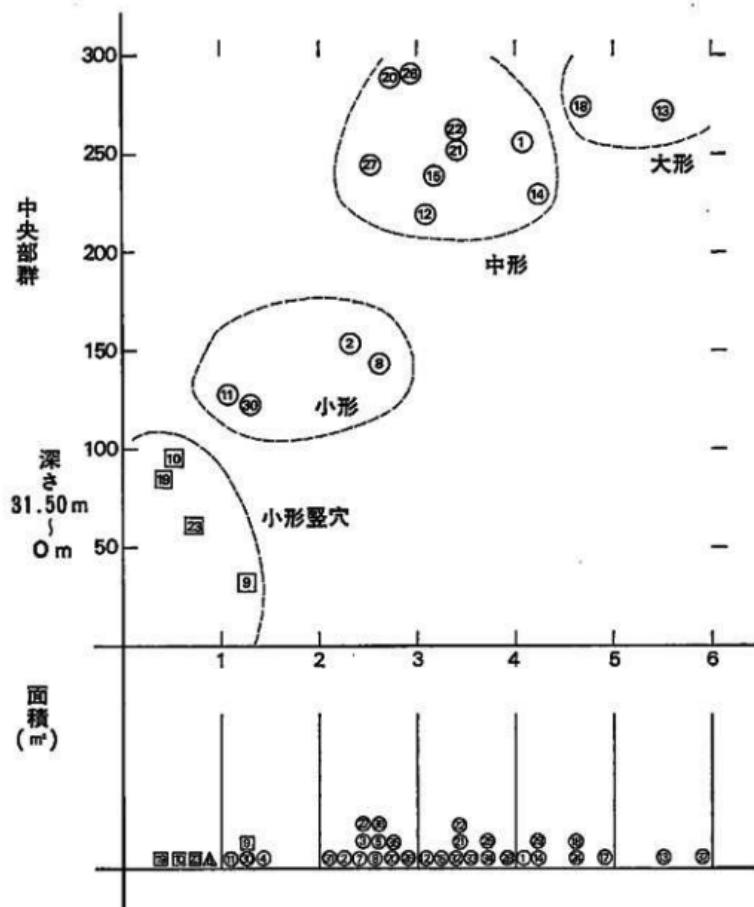
袋状竪穴の分布群についてみれば、I類土器は中央部群(12・13・14・22号)、南部群(17号)に出土しており、東部群には出土していない。南部群の17号袋状竪穴は上層にII類土器を出土することから、中央部群が最初に開始され、次に南部群、東部群の順に成立し併立して存



第66図 倒伏型穴への道選定図 (1/300)

在した可能性が強い。このような分布群の在り方は、世帯共同体の分枝・併用の姿をあらわしているように思える。

袋状豈穴の規模は、大まかに大・中・小の3種に分けられるようである。規模は容積として算出するのが好ましい方法であるが、各群・各豈穴の削平のされ方に差異があるため、各豈穴



第 69 図 袋状豈穴の面積と深さの関係図

門田遺跡

の底面積と削平率がわりあい一定であろうと推定される中央部竪穴群の深さ（31.50mを標準）との関係を図化した（第69図）。

- A. 小形 面積1~3m² 深さ2m以下 C. 大形 面積4.5m²以上 深さ2m以上
- B. 中形 面積2~4.5m² 深さ2m以上

このような規模の差異は、小形竪穴を含めて袋状竪穴のなかでも管理使用のされたに何らかの差異があったことを考えさせられる。

床面に小穴を有する袋状竪穴は4基で、また、13号には長径約1mの圓丸長方形の土壙がみられた。14号は斜めに穿たれた小穴、15号は不整形の凹み、24号は浅い小穴、36号は6個の浅い小穴などで、そこに一定の規則性をうかがうことはできない。他の遺跡から考へても、床面に存在するピットは、排水あるいは水を一ヵ所に寄せるため、覆蓋施設あるいは梯子施設のためなどが想定されるが、門田地区では積極的に実証できる資料はなかった。

竪穴の埋土状態について次の二点が問題としてあげられる。第一に、上部あるいは中間層に下部地山の灰白色粘土層（八女粘土層）を含む層がみられ層位の逆転を示しているもの（13・14・15・24・28・29・37）がみとめられることである。これらは上部地山（明褐色土）崩壊土が下層に堆積し廃棄された後に下部地山を含む層が堆積したものがほとんどであるが、この層位の逆転がただちに「埋戻し」の行為につながるのかは明瞭ではない。今後の目的意識をもった調査が必要であろう。第二は最下層がわりあい平坦に堆積しており、なかには硬質の土層で、あたかも二次的な床面をもつごとく推測されるもの（8・18・21・22）があったことである。その場合、22号はこの二次的床面を掘り込んで合口壺を埋戻した可能性をもっているが、二次的床面と推測される土層面で明瞭に使用時のまま埋没した遺物群は確認できず、あくまで仮説にとどまざるをえない。今後の詳細な調査にその是非を問いたい。

出土遺物は総体的に貧弱で、31基のうち8基には遺物はみられなかった。石器は13基に出土し、土器は21基の袋状竪穴にみられた。

出土石器は、石錐3、スクレイバー1、磨製始刃石斧3、石庖丁1、たたき石1、磨石1、砥石1、石製円板1の他に、先土器時代遺物の混入としてポイント、細石刃がみられた。磨製始刃石斧・石庖丁などに完形品がみられず、また未製品もないことは、破損して竪穴へ廃棄されたもので竪穴内へ保管されていたものではないことは明らかである。

出土土器は200個体を越えることはなく、実測可能であった110個体のうち底部27個体を除いた器種別百分率は、壺36個体（43.4%）、甕30個体（36.1%）、浅鉢16個体（19.3%）、釜1個体（1.2%）という値がでる。また高杯は1個体もみられなかった。土器は使用時のまま埋没したものではなく、殆どが廃棄されたものである。しかし、一括されたものは10基程で、他11基は土器細片が若干出土したにすぎない。このように土器の出土状態には、一括廃棄されたもの（10基）、若干の出土をみたもの（11基）、出土土器のないもの（10基）の3様の在り方がみ

られる。この土器廃棄の在り方は、土器の廃棄が無秩序になされていたと考えるより、収穫→保存→栽培という農耕社会のサイクルのなかでの季節的な土器の使用→廃棄ということが考え（消費）られないだろうか。自然科学的なアプローチが望まれる。その点で、昭和50年度の門田遺跡社田地区の最終調査において、花粉分析、プランツ・オパールなどの分析を委託しており、その結果がまたれよう。

22号袋状竪穴には前期末（I類）の合口壺棺が埋置され、竪穴の廃棄及び転用のされ方に特徴的な在り方をもつていて。この壺形土器はI類土器であり、門田地区袋状竪穴の最終期であるII類土器でないことは、合口壺棺が埋置された後にも袋状竪穴群が継続使用されていたことが推測される。また、18号袋状竪穴が理葬例とも考えられなくもないが明瞭でなく、他に前期末の埋葬例がなく、所謂<共同墓地>とは異なる在り方を示している。この門田地区の壺棺等の墳墓群については後日報告される予定であるためはぶきたい。

以上、門田地区の袋状竪穴について概観してきたが、若干の問題の所在の指摘にとどまり、内容を深化できなかったことを反省しなければならない。辻田地区の袋状竪穴群の報告の際、門田遺跡全体の在り方として再検討がなされる必要があろう。

最後に袋状竪穴について簡単にまとめておきたい。

① 袋状竪穴は入口部をせばめ蓋をつかって密閉保管することを目的としており、小形竪穴B類のように上蓋でおおう形態とは異なっている。

② 綱文時代から継続されるドングリピット（註5）等とは別系統と思われ、栽培→収穫→保存→栽培という農耕社会のサイクルのなかの必然性として、わりと大量の生産物（収穫物）（消費）を一括して保管するためにはいわば貯蔵の固定化・大形化として採用されたものといえよう。

③ 分布的には北九州、中國西北部、東九州の一部に分布し、遺跡内に群集する傾向をもつ。

④ 時期的には、夜臼・板付I式期から開始され中期初頭をすぎると減少し、急速に衰退する。この袋状竪穴が急速に衰退していく要因は竪穴がもつ湿気が多い、崩壊しやすいという欠陥性とともに、高床倉庫を構築しえる技術と工具類の充実にもとづくと思われる。また中期初頭以降の住居には小形の屋内貯蔵穴をもつ例が多いが、これは個別消費単位としての住居の性格を示し、貯蔵の共同化としての高床倉庫と対照して考えることができる。

⑤ 底面形態は、夜臼・板付I式期には方形・長方形が多く、板付II式の段階になるとバラエティをもち、中期初頭になると円形が多くなり、床中央に浅い小穴をもつものがでてくる。とくに遠賀川流域・中國西部・東九州の部では円形がほとんどで（註6）筑後の津古内畠遺跡（註7）の在り方などは地域的に異なる様相をもつように思える。

b. 出土土器について

門田地区竪穴群出土の弥生式土器は板付II式を主体とし、総数で200個体を超えるものではなく、実測可能なものは110個体を数えた。谷一つ隔てほほ同時期に存在したと考えられる辻

門田遺跡

田地区の堅穴群（註8）からは夥しい土器群が出土し、その量、良好なセットに比較し、門田地区の出土資料の貧弱さはまぬがれえない。したがって門田遺跡の弥生時代前期の土器を考えていく場合には、辻田地区の良好なセットにてらして作業を進めていくのが望ましいのであるが、辻田地区の莫大な資料は現在整理中であるため、ここでは門田地区の資料のみで分類し、辻田地区的報告の際には再びとりあげ総合化されることが望ましい。

堅穴出土土器群は殆どが板付II式の範疇に含まれるもので、従来でいう板付II(b)式に近い形態のものである。したがって前期末に包括されるのであるが、17号袋状堅穴で上層と下層の土器群に区別されたことから、これを基準としてI類とII類の2者に分類してみた。

I類 出出土器群のうち古手の様相をもつものを抽出した。17号袋状堅穴下層の土器群を標準としたが、器種として壺形土器と変形土器若干にとどまり、良好なセットとしてはとらえられなかった。

壺形土器は、最大径を器高ほぼ中位にもち張りのある肩部で、口縁は肥厚され段を有し、頸肩部区分には深い段あるいは沈線がめぐるものである。口縁を肥厚せず屈曲あるいは外傾させ、口頸部境界に沈線あるいは稜線がないものもある。肩上半にはヘラ先による羽状文・複線山形文などを描くものもあり、また、つくりはわりと丁寧で端整な姿のものが多い。

変形土器は、器形をほぼ推定できるのは14号袋状堅穴出土のもの（14号⑧）で、口縁は短かく外彎する如意状のもので、刻目は口唇幅に及ぶ。底部は安定した平底で、肩はあまり張りをもたない。器表面はハケのあとナデ仕上げ、あるいはハケ削整（14号⑩）される。断面三角形あるいは如意状口縁で、肩部の凸凹とともに刻目を有する所謂亀ノ甲型の変形土器は伴出しないように思える。

以上のI類の特徴をもつものは、17号下層、12号、13号、14号、35号と22号（合口壺植）出土のものがあげられよう。このなかで35号小形壺底部片（35号⑪）は、円盤貼付状底部で上部を欠失しているので正確な器形は判別しがたいが、あるいは板付I～II（古）式に属するものとも考えられる。他は所謂板付II（新）式の古い部類に相当し、板付IIa（古）式の特徴を残存するものである。類似したセットをもつものとしては福岡市西区淨泉寺遺跡（註9）のI類土器があげられ、特に40号ピットのセットに近いものと考えられる。したがって、もし従来の板付IIa（古）式を前期中葉ととらえれば、前期後葉の位置にくると思われる。

II類 17号袋状堅穴上層の土器群を標準としセット的にある程度とらえられる。壺、無頸壺、壺、壺（鉢）、浅鉢（碗）などがあげられる。

壺形土器は小形とわりと大形のものがある。小形壺は、一部口縁は肥厚するものがあるが、大半は橢曲する口縁で、肩部と頸部との境界が不明瞭となり口縁へ向ってなめらかに反転する器形のものが多く、頸肩部区分として沈線あるいは三角凸帯をめぐらすものもある。文様はヘラ先あるいは貝殻施文による重弧文、羽状文がある。重弧文は頸肩部区分沈線の上下に存在す

るもの、逆転するものがあり、大半は下部の区分沈線を欠き、文様は規格性を失って任意に描かれた感が強くなる。大形壺は、口縁を肥厚し刻目をもつものと無いものがあり、頸部は垂直気味になり、胸部はあまり張りをもたず胴径のわりに器高の高い器形を呈する。器表面の調整はハケのあとヘラで研磨されるが、粗雑な仕上げで部分的にハケを残し、焼成もあまり良くな。これらの壺形土器のなかでは、2号②、18号③のように頸部区分に三角凸帯を付するもの、18号④のように口縁裏面に段をもつもの、26号⑥のように頸部が垂直気味で口縁が彎曲するもの、18号①の大形壺などはII類のなかでも新しい様相をもつようと思われる。

無頸壺は、1号⑥のように体部が球状でわずかに外傾する口縁に穿孔をもつもの、17号①のように上げ底の台部がつくもの、3号⑦のように口縁が強く外反し形態的に広口壺に近く、中期の小形広口壺につながっていく姿態をもっているように思われるものがある。

壺形土器は、A如意状口縁のもの（刻目をもつもの、無いもの）、B如意状口縁で胸部に三角凸帯をもち相方に刻目をもつもの（2号⑧～⑪、5号⑫）、C断面三角形の口縁で胸部の三角凸帯とともに刻目をもつもの（1号⑬、2号⑭、3号⑮）、D逆「L」字状の平坦な口縁で胸部の三角凸帯とともに刻目をもつもの（17号⑯）などに分けられる。Aは外側する口縁と強く折れ逆「L」字形に近くもある。I類に比較すれば一般に口縁が長めで彎曲度が強くなり、口唇の刻みは下端に施すものが多くなる。その点で3号⑩⑯はわりと口縁が短く彎曲もゆるやかで、II類のなかでは古い様相をもっている。B～Dは所謂亀ノ甲型の壺形土器である。Bは唯一の弥生時代前期の住居跡である5号住居跡からも出土している。Cは1号⑬と3号⑮はわりと小形で、2号⑭は形態的にDに近づいている。Dは中期的形態に接近するが、底部は平底を呈する。またこれらと別に深鉢形のものとして2号⑦がある。これらの壺形土器は、下底面が平底の他に若干上げ底気味になるものもでてくるが、上げ底で台状の底部や厚味をもつ城ノ越式の底部は殆ど無い。（35号⑯は台状の底部であるが古手の様相をもつようにも思える。）

浅鉢形土器は、A如意状口縁のもの（2号⑯⑰、3号⑪、5号⑬⑭⑮、17号⑯）、B断面三角形口縁のもの（3号⑨、24号⑪）、C逆「L」字状口縁あるいは内面に突出をもつもの（2号⑩⑯⑰）、D口縁を肥厚し段をもち刻目を施すもの（18号⑯）、E体上端が「く」の字状に内に折れ込むもの（20号⑯）、下輪状の形態のもの（3号⑯）などに分けられる。Aは口縁がゆるやかに外側するものと、強く彎曲し上方が平坦になったものがあるが、いずれも口縁が長めになってきている。

以上のII類土器は、1号～3号・5号・17号上肩・18号・24号・26号・30号・36号の各豊穴から出土している。このII類土器をセットとして明確に分離するのは困難であるが、3号豊穴出土の壺・壺形土器にはより古い様相がうかがえ、18号・26号豊穴一括あるいは2号⑭の壺形土器にはより新しい様相をみることができる。これらの土器群に類似する資料としては、筑紫野市野黒坂遺跡（註10）の3類土器と福岡市西区砂泉寺遺跡（註11）のII・III類土器があげられ

門田遺跡

る。野黒坂のそれは、變形土器において如意口縁のA類の他に、断面三角形口縁で脇部に凸帯をもつC類を含み、セット的には3号竪穴に近いものをもっている。淨泉寺II・III類土器は變形土器において、17号⑥のように逆「L」字口縁で脇部に凸帯をもつD類に近いものであるが、底部は台状で底下面が上げ底を呈し、平底の17号⑥にくらべ若干後出の感をうける。しかし淨泉寺51号Aの⑦の壺は頸部部分に三角凸帯を付し、18号⑥と類似するなど時期的にはほぼ同一の段階も含んでいると思われる。したがってII類土器は2つに細分される可能性をもっているが、明確には分離できず、時期的には前期(最)終末期として把握しておきたい。

(宮崎貴夫)

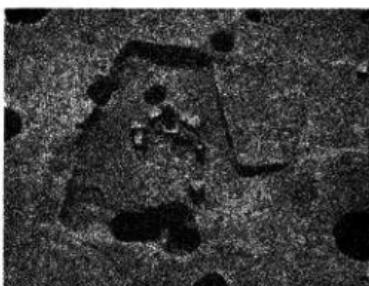
(2) 竪穴住居跡

3号住居跡(図版32、第70・72図) 一部南西隅を古墳時代後期(5号住居跡)の住居跡と重複して発見されたものである。東西2.6m×南北2.7mの小形の方形整穴住居跡で、壁高は上面がかなり削平されているため、わずかに5cmと浅い。住居に伴うと思われるピットは11個と多数あるが、柱穴と思われるものはP1~4のみである。しかし、住居の方向と明らかに異なる点が疑問として残る。炉跡はみられない。遺物としては床面中央部で出土した甕1個体のみである。

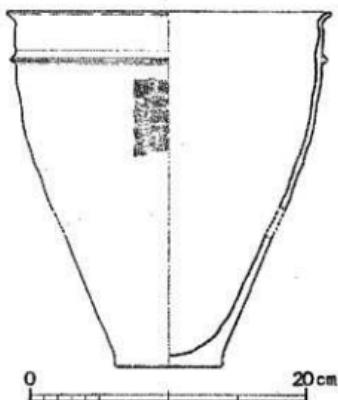
出土遺物

甕(第71図) 口縁部はゆるやかに外反し、若干のふくらみをもつ脇部にゆるやかに移行し、底部へと直線的にすぼまる型である。頸部には一条の點付け凸帯をめぐらして、口唇部と凸帯外端にそれぞれ刻目がつけられている。器面は内外とも風化がはげしく、整形がかならずしも明らかではないが、内面はナデ、外面は細かい刷毛のあと、軽くナデしているようだ。色調は茶褐色を呈し、胎上・焼成とも悪い。時期は前期末である。

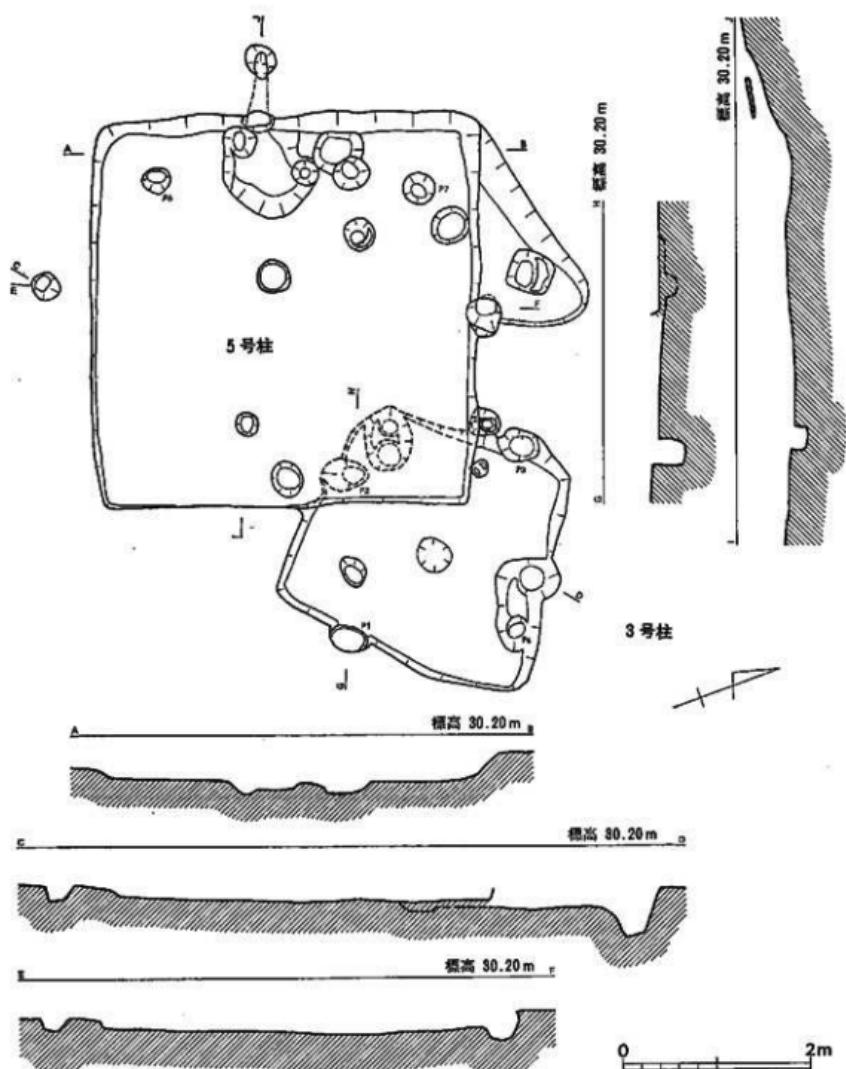
石礫(第73図) 黒曜石の剝片を利用した



第70図 3号住居跡全景



第71図 3号住居跡出土土器実測図(1/4)

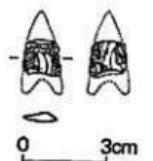


第 72 図 3・5 号住居跡実測図 (1/60)

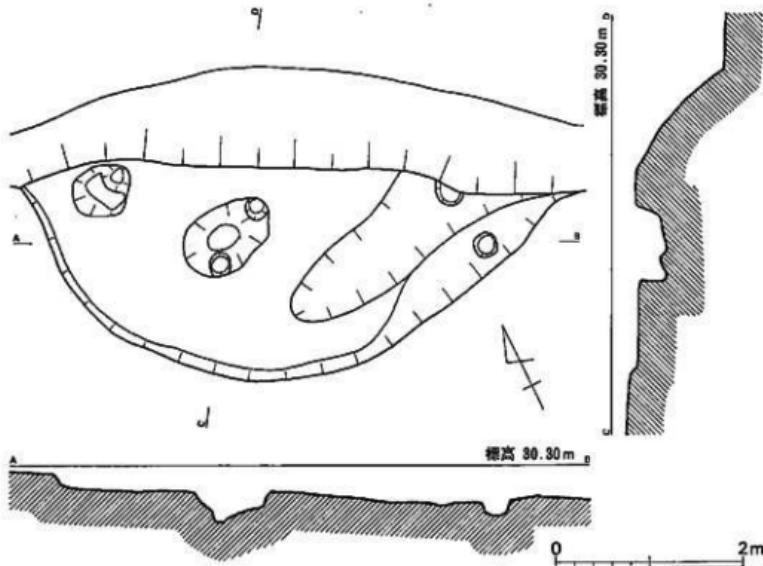
門田遺跡

石縫で、先端部・脚部を欠く。

7号住居跡（第74図） A10区で検出されたもので、その大半は道路によりカットされて、上面もかなり削平されていた。残存する部分から考へて円形竪穴住居跡と思われる。柱穴と思われるピットは3個あるが明確でなく、床面もあまり踏みかためられていない。また、炉跡と思われる遺構も検出されなかった。遺物としては若干の弥生式土器の細片のみで、時期は不明である。しかし、プランから考へて、ほぼ中期のものといえよう。



第73図 3号住居跡
出土石縫実測図(1/2)



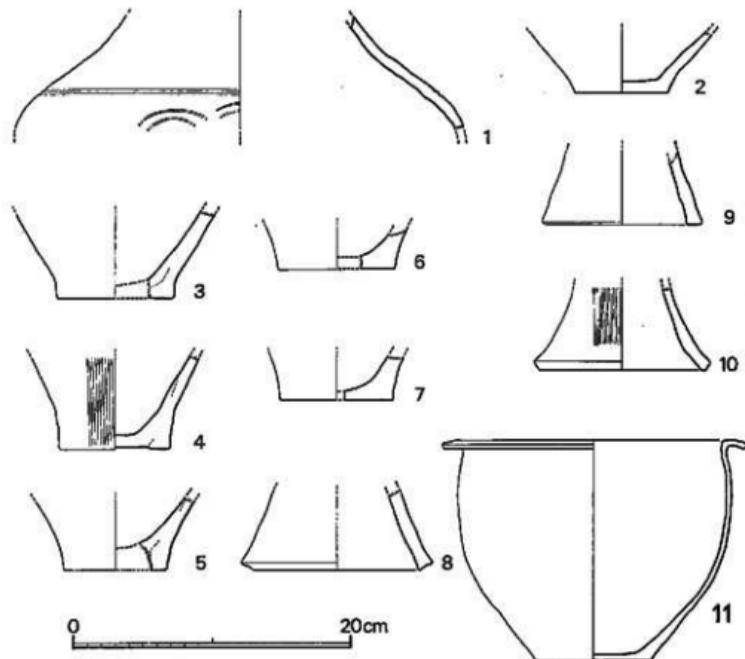
第74図 7号住居跡実測図(1/60)

(8) 包含層出土の遺物

a. 土器・土製品

壺(第75図1・2) 1は大形壺の頸部の破片資料である。肩部に二条の堀がき沈線と2重の頸文を配し、張りのある肩部から頸部への移行はゆるやかである。内面頸部は指先による押圧の痕跡を残し、下半はナデで仕上げている。外面は丁寧に荒磨きしている。色調は黄味の強い明黄褐色を呈し、胎土・焼成ともあまりよくない。2は小型壺の底部破片である。黄褐色を呈し、内外ともナデで仕上げている。

壺(第75図3~7) 全て底部破片資料である。3は暗赤褐色を呈し、器面の風化がはげしく整形不明である。4はわずかに上げ底氣味の底部で、外面は粗い縦位の刷毛、内面はナデで仕上げている。5は外面を細い刷毛整形のあと、ナデで、内面はナデで仕上げている。両者とも赤褐色を呈し、胎土にはかなりの細砂を含むが、焼成は普通である。6・7とも褐色を呈し、内



第75図 包含層出土弥生式土器実測図(1/4)

門田遺跡

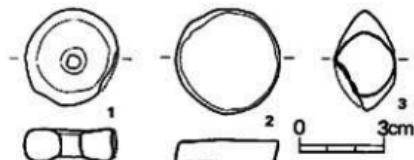
外ともナデ仕上げである。

器台（第75図8～10） 全て台部の破片資料である。8は黄褐色、9は赤褐色を呈し、胎土・焼成とも悪く、また器面の風化がはげしく整形は不明である。10はラッパ状に開く茶褐色を呈するもので、胎土・焼成とも良好である。体部外面は継ぎ刷毛、内面施削りで、台部口縁内外はヨコナデ仕上げている。

鉢（第75図11） 口径21.8cm、器高15.6cmを測る。口縁部は逆「L」字状をなし、口唇部はわずかにたれさがり気味である。体部外面は風化がはげしく整形不明であるが、一部下端に横位の粗い刷毛の痕跡を残している。内面ナデ、口縁内外はヨコナデ仕上げである。（井上裕弘）

土製品（図版38-2、第76図）

1はほぼ円形の紡錘車で径3.4cm、孔径0.7cm、厚さ1.1cmを測る。赤褐色を呈し、胎土に小礫を多く含み曉い。2は円盤状土製品で、周辺は磨かれている。3は灰黒褐色を呈す投弾の欠損品である。



第76図 包含層出土の土製品実測図 (1/4)

b. 石器（第77～80図）

門田遺跡出土の石器は表5の通りで門田地区は谷地区、辻田地区に比べて非常に少なく、全体総数1,414点のうち97点で約7%を占めるにすぎない。

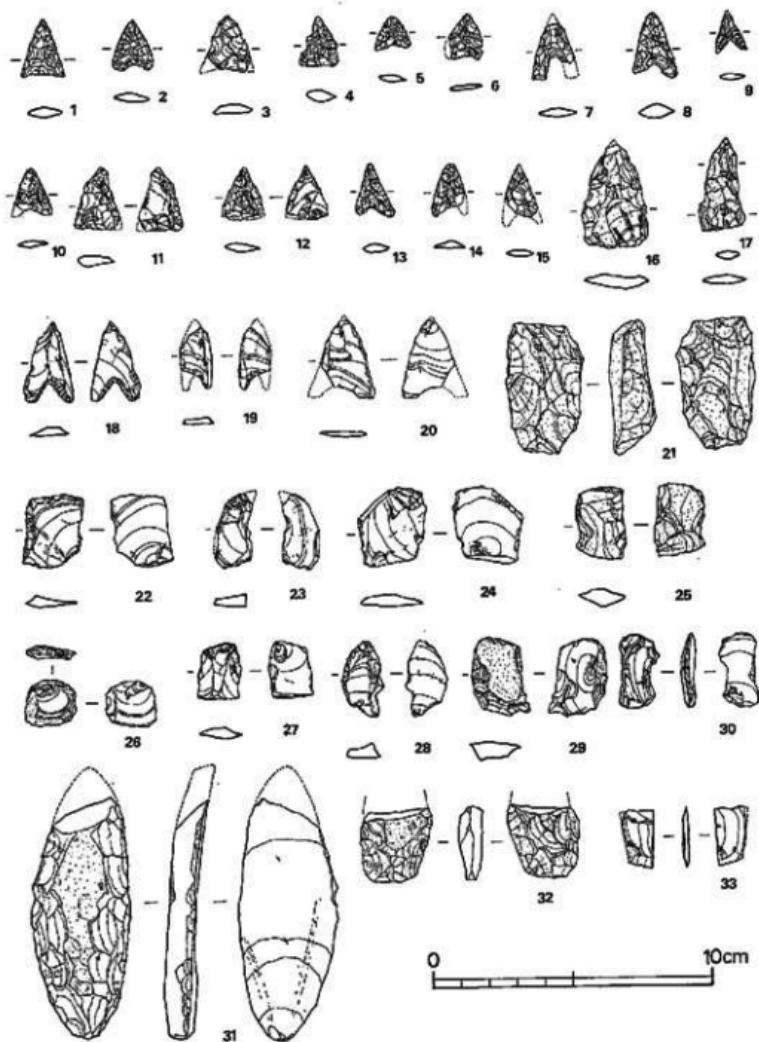
石鎚（図版38-1、第77図1～20） すべて打製石鎚で石材は黒曜石とサヌカイトに限られる。全体に剥離を加えたもの（I類）と主要剥離面を大きく残すもの（II類）に分けられ、さらにI・II類は基部の形態から2つに細分できる。

I a類（1・4・16・17） 基部に抉りのないもので、1は二等辺三角形を呈す完形品でサヌカイト製。表面とも入念に調整を加えている。4は黒曜石製で左辺からの二度にわたる剥離が特徴的である。16はサヌカイト製の大形の石鎚で長さ3.5cmを測る。周辺からの荒い剥離をして厚さを減じ、その後細かい調整を部分的に加えている。17はサヌカイト製で、先端は右へ彎曲して尖る。基部は台状になり薄手。

I b類（2・3、5～10、13～15） 基部が内側しているもので2・3・5・6・10は全面に細い剥離を加えている。7・8はサヌカイト製で8は部厚い。9は小形で有齒鎚とも言える。14は先端が丸く、中央に自然面が残る。

II a類（11・12） 2点とも黒曜石製で基部は平らである。11は打瘤が基部側にあり、それを除去するため調整を加えている。12も左下に打痕があり入念な調整を加えている。背面は両者とも粗い剥離を施している。

II b類（18～20） 基部に抉りのあるものでいずれも黒曜石製。18は縦長剥片を利用し、基部



第 77 図 包含層出土の石器実測図(I) (1/2)

表 5 門田遺跡出土クリップ陶石器・土製品一覧表

クリップ		種類	門田遺跡出土クリップ陶石器・土製品											合計
			スイ クレ ー	石 斧	石 刀	石 矛	石 槍	石 槍	石 矛	石 槍	石 槍	石 槍	石 槍	
A	10	1	1	2	1									2
	11	1												5
	12	1												2
B	10	1	1	2	1	3	1	2	1					3
	11	1												7
	12	1												1
	13	3	2											2
C	12	1												1
D	10	1												1
	11	3			1									5
	12	3				6	2	2						4
E	12	3				1	1							1
	13	1												1
F	11	1			1									2
	12	1				2	1							3
その他	1	1				3			1					7
小計		33	16	6	12	10	5	1	2	2	3	1	1	97
B	9	1	1	3	7	1	1					1	1	15
C	9	22	23	55	19	22	14	4	9	7	2	1	1	200
D	9	103	6	20	5	9	6	5	2	1	1	1	1	169
E	9	73	7	8	1	5	7	4	1	1	2	1	1	112
F	8	10	10	1								1	1	14
G	9	46	3	3	2		1		1					72
H	10	87	10	6	4	3	1	2	1	1	1	1	1	123
	11	1	1	1	1	1	1	3	4	5	1	1	1	37
その他	1	1		9	10	1	1	1	2	2	1	1	1	26
小計		403	83	121	39	42	51	22	21	10	6	2	6	860

B	6	9	3	6	2	2	2	1	2	2	1	1	27
C	4	2	8	6	3	1	1	1	1	2	2	10	3
D	2	2	11	5	11	1	4	9	1	1	1	57	32
E	3	1	3	1	1	1	1	1	3	2	1	1	12
F	2	2	4	1	1	1	1	1	1	1	2	2	12
G	11	12	15	16	15	1	4	7	2	1	1	1	5
田	5	4	1	8	2	1	1	1	1	1	1	4	54
地	7	7	3	3	1	1	1	1	1	1	2	6	62
区	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	22
合	106	37	94	28	40	36	5	14	8	2	3	1	27
不	3	1	7	2	1								443
合	545	137	228	79	94	93	28	37	20	11	6	7	15
その他の	1	1	2										4
小計													1,415
合計													1,415

門田遺跡

側は入念に調整をし、先端部は主要剝離面側から細かい剝離を加え厚みをもたせ、尖らしている。19もやはり縦長剝片の打瘤と反対側を先端に用いたもので、調整剝離は基部のみに行なわれている。20は縦に長く薄い剝片を利用し、縁辺のみに細かい調整を加えている。

スクレイパー（図版38-1、第77図21～30） 21は部厚い横長剝片を利用し、縁辺に二次加工を加えたサイド・スクレイパー。B13区2層出土で安山岩製。谷地区で出土したものに類似し、先土器時代のものかもしれない。22～25・29は剝片の一部に二次加工を加えたもので25のみがサヌカイト製のサイド・スクレイパー。26・27は打瘤部の厚みを利用し、刃部を作りだしたエンド・スクレイパーである。2点とも黒曜石製。28は剝片の全周に主要剝離面側から刃済し状の加工を加え、剝片自体の厚みを利用してスクレイパーで、舌状部を有す。F12-13区表土層出土。黒曜石製。

尖頭状石器（図版38-1、第77図31・32） 31はサヌカイト製の縦長剝片を利用し、周辺から荒い剝離を加え、柳葉形に整形している。剝離は中央部まで達せず、自然面が残る。主要剝離面側の調整はまったくみられない。先端部が欠損しているので判然としないが、断面が台形状をなすことからスクレイパーとして用いられた可能性もある。F11-14区出土。32はサヌカイト製で石槍の基部破片である。押圧剝離により薄く仕上げられている。一部自然面を残す。E12区出土。33は刀器状側片の折断されたもので、台形石器と同様な形をもつが刃済し加工はない。縁辺に刃こぼれが觀察される。黒曜石製で柏田遺跡に類品がみられる。

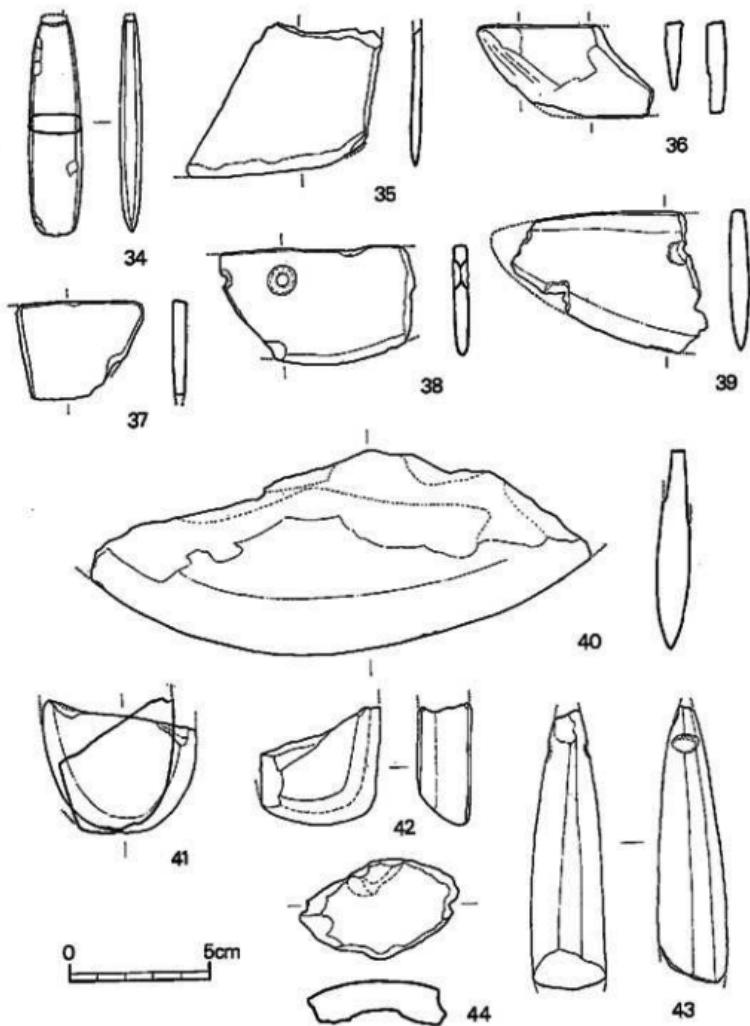
石斧（図版38-2、第78図34） 蛇紋岩製の扁平小型磨製石斧で、断面は縦に丸みをもつ長方形を呈す。頭部は欠損している。刃部左辺に刃こぼれがある。B11区2層出土。

石庖丁（図版38-2、第78図35～40） 35は砂岩質で非常に扁平な石庖丁の刃部破片である。刃部は直線的なのが特徴。D12-1区出土。37は砂岩質の破片で背部は直線的。38は砂岩製の半欠損品で背部に手ずれの跡がみられる。刃部は幅狭く、にぶい。紐孔の穿孔は両側から行なわれている。39は頁岩製で、よく研磨された良品。背部は若干外彎ぎみで、刃部は比較的幅広である。画面の研磨は背部・中央部・刃部と4回に分けて行なわれている。D12-5区表土層出土。40は泥岩製の大型の石庖丁で、背部を欠損する。刃部は大きく外彎し、鋸く、厚みのある両刃を有す。研磨は非常に良好。36は上下両端に背部を持ち、左縁に上背部から下背部にかけ直線的な刃部を有するもので、画面ともよく研磨されている。左・右に刃部を持つか否か不明だが、形態・刃部の作り方は石庖丁のそれによく類似している。B10-12区2層出土。

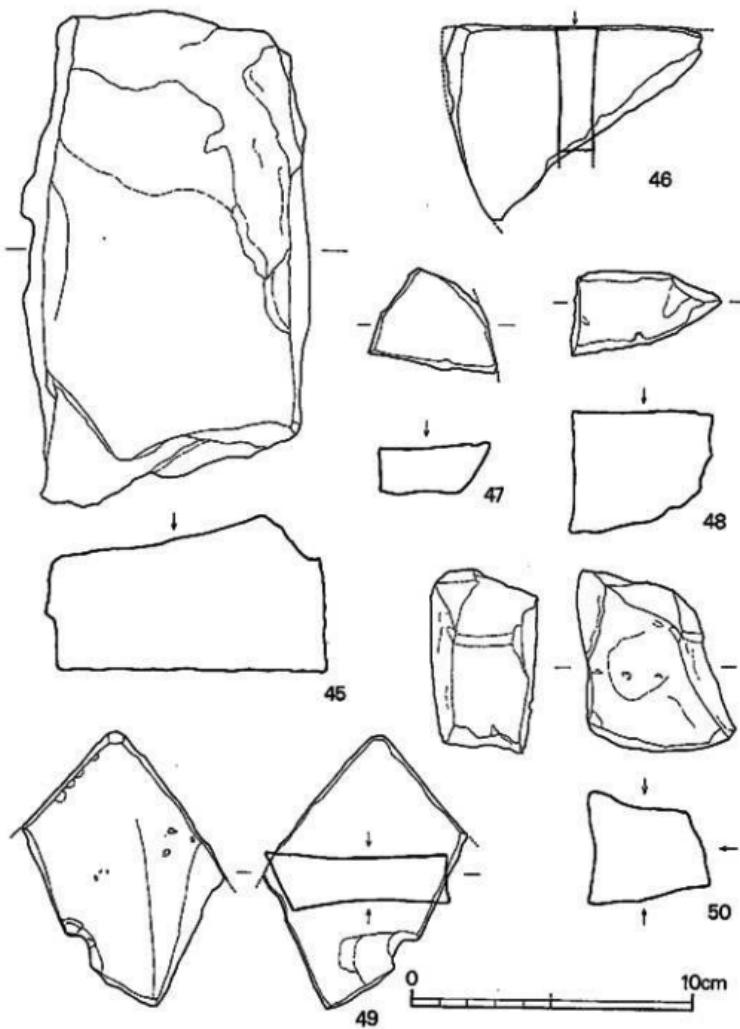
磨石（第78図41） 硬砂岩製の長円形の礫を利用し、下端に敲打による剥落がみられる。

砥石（第79図45～50） 45は硬砂岩製の大型で安定した研砥面1面をもつ仕上げ盤で、砥面はゆるい凹面を呈す。E11の表土層出土。46・47・49は扁平な砂岩を用いたものである。48は硬砂岩製で、50は上・下に2面の研砥面を有す。硬砂岩製である。

石皿（第80図51） 砂岩で小振りの鞍形を呈す石皿の優品である。底面は平坦で安定し、厚



第 78 図 包含層出土の石器実測図(3) (1/2)

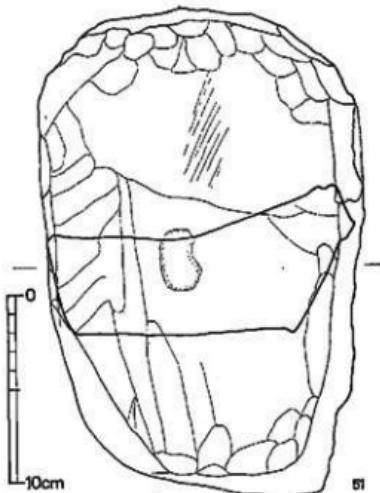


第 79 図 包含層出土の石器実測図(3) (1/2)

さは中央部で 5cm を測る。左辺を除いた三方の縁は立ちあがりを有している。C12区表土層出土。最近、總波町スダレ遺跡でも弥生時代中期の石皿の完形品が出土している(註12)。重さ 5.3kg。

その他の石器(第78図42~44) 42 は流紋岩製で研磨して片刃状の刃部を作っている。43は上下端が火損している円錐状の石器で石質は硬砂岩製。上部が細く両側辺に浅い抉りが入る。大分県安国寺遺跡出土の石棒に大きさ、形状ともよく類似(註13)している。44は滑石製石鍋片を再利用した打ち欠きの石鋸で、両端に糸掛けがみられる。

(木下 修)



第80図 包含層出土の石器実測図(4) (1/3)

- 註1 一般に袋状空穴とよばれているが、他に袋状土壤あるいは単に土壤ともいわれている。
- 2 小池史哲編「昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1976
- 3 註2と同じ
- 4 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
- 5 カシの実の貯蔵。アクリ抜き、虫出しのため使用されたと思われ、水辺の汀際に並んで存在する場合が多い。九州地方では、縄文時代の例として坂の下遺跡(佐賀県有田町)、弥生時代中期の黒田原遺跡(長崎県北松浦郡田平町)、弥生時代後期末~古墳時代初期の例として門田遺跡(谷地区)などが知られている。
- 6 佐賀県域では轟田原遺跡(福岡県直方市)、中国地方西部では伊倉遺跡(山口県山口市)、東九州地方では台ノ原遺跡(大分県宇佐市)などがあげられる。
- 7 西谷正・柳田敬雄他「津吉内堀遺跡」1~5次 小郡町教育委員会・福岡県教育委員会 1970~1974
- 8 「昭和47年度~昭和50年度 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1973~1976
- 9 三島格他「淨泉寺遺跡」東洋開発株式会社 1974
- 10 松岡史・龍川誠洋・副島邦弘「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会 1970
- 11 註2と同じ
- 12 稲口達也「スダレ遺跡」『總波町文化財調査報告』1 1975
- 13 九州文化総合研究所編「大分県直方町安國寺弥生式遺跡の調査」 1968

5. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 門田1号墳

立地 舌状台地の先端近くの好立地には門田2号墳があるが、この1号墳は規模において比較になるものではない。1号墳の位置は一応台地の尾根線上にはのるが、2号墳の基盤が標高31.0mであるのに対し、1号墳は標高30.6mである。さらに2号墳は、台地先端の平坦部いっぱいに構築されているために、西側から望めば台地全体を墳丘に折り込んだ感を呈する。

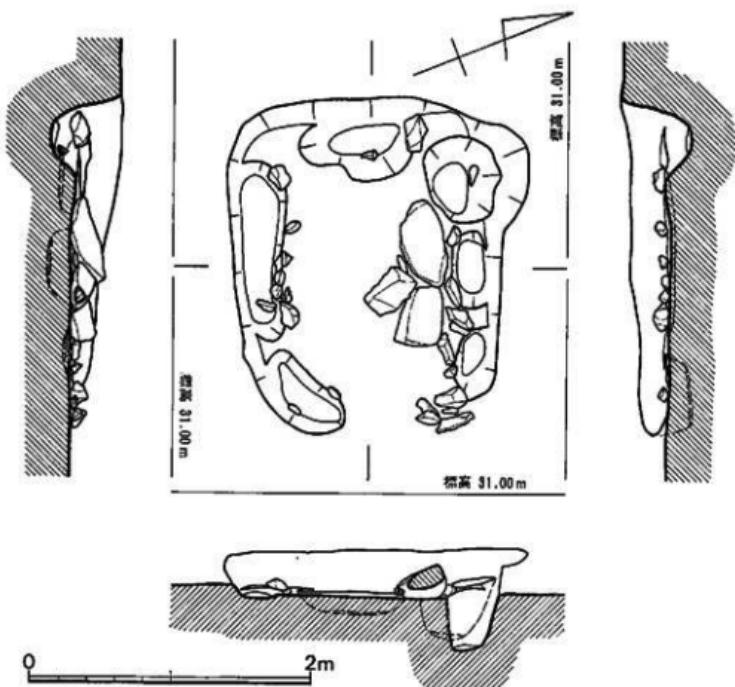
主体部 (図版39、第81図) この遺構を古墳の主体部と決定できたのは、完全に掘り上る墳であった。あまりにも規模が小さく周溝など外部施設を備えたわけでもなく付近に類似遺構を伴わなかったからである。2号墳は墳丘を残しているのでそれと判断できたが1号墳の墳丘を削平するのは簡単であったろうし、調査で石室の掘り方のプランを確認してからも付近や掘り方内から発見される遺物は中世のもので、古墳につながるものは見いだすことはできなかつた。これが古墳の横穴式石室と判断できたのは、床石の一部と壁面を構成していたと思われる石材の抜き跡からであった。

掘り方と石材の抜き跡から判断すると、石室はS80°Eを主軸として構築された小型横穴式石室である。石室の掘り方と石材抜き跡からは、談道および墓道の痕跡がないところから、長い談道・墓道は付設されず、玄門からわずかな石積によって開口する形式のものであったろう。

石室の規模は掘り方と石材の抜き跡から推計できる。掘り方の大きさは、主軸の長さ2.36m、奥壁部幅約2.0m、玄門部幅1.6mである。掘り方内には3~6個の原位置の床石と、石材の抜き跡に残る根石があるが、これらは全て質の悪い花崗石である。石室の構築には、石材の抜き跡から見ると、基礎の腰石となるものが奥壁に1枚、北壁に3枚、南壁に2~3枚のものが使用されたらしい。玄門となる石材の抜き跡は、南側のみその痕跡をとどめるが北側には残っていない。小型の石室であるから玄門の石材とて小さなものであろうから、その痕跡をとどめないのであろうが、玄門が北側に片寄った片袖形式のものであるかもしれない。以上のことから推計すると石室内法の大きさは主軸長約1.7m、奥壁幅約1.1m、玄門側幅約1.0mであったろう。

床面には、石室に対しては大きな60cm×30cmの大石も使用されている。現状の石室の掘り方は、深いところで0.3mほどであるから、多少後世に削平されたとしても、石室の構築は少なくとも1.5m以上には達するであろうから、墳丘が存在したことは明らかであろう。

まとめ 以上のように墳丘の存在は明らかであるが、周溝など外部施設が存在しないため、その規模は不明である。掘り方内からは、古墳時代の遺物は1片も発見できず、中世の土器片が発見されたが、これから中世のものとすることはできないであろう。古墳時代以後この台地上



第 81 図 門田 1 号墳石室実測図 (1/40)

は平安後期に集落と墓地に使用され、中世に引き継がれているので、この時期に小型の古墳であったために盗掘・削平されたのであろう。

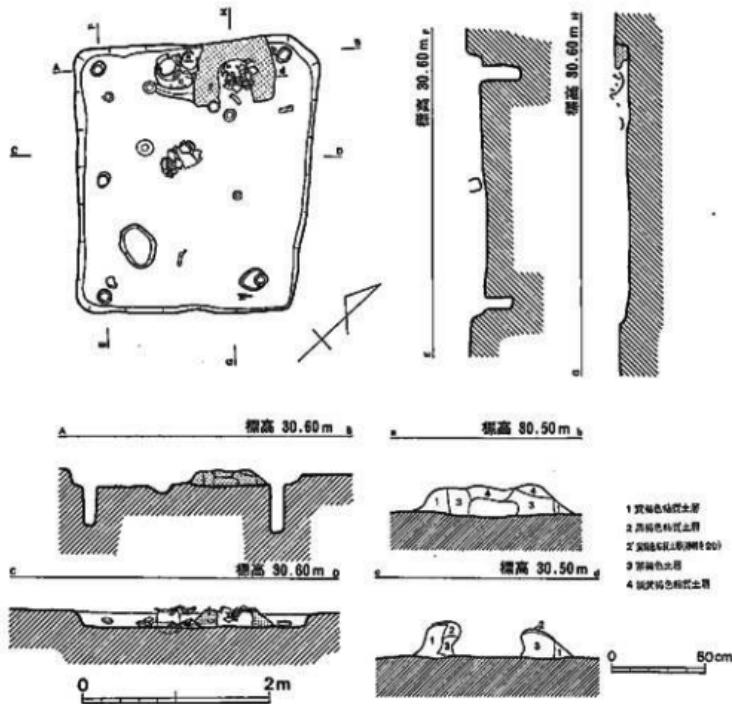
本古墳の年代は、出土品がないために決定できないが、石室の形式から 6 世紀代のものであることに異論はなかろう。このことは門田 2 号墳が 6 世紀後半（註 1）、辻田古墳が 5 世紀後半から 6 世紀後半（註 2）におよぶことから考へても妥当なところではなかろうか。

（柳田康雄）

(2) 竪穴住居跡

2 号住居跡（図版 40～42、第 82・83 図） 東西 2.85m × 2.5m を測る小形の方形竪穴住居跡である。壁高は上面がかなり削平されているためわずかに 16cm を残すのみであった。柱穴と思われるビットは四隅に 4 個あり、西壁に竈を付設している。竈の南側には戸内貯蔵穴と思われ

門田遺跡

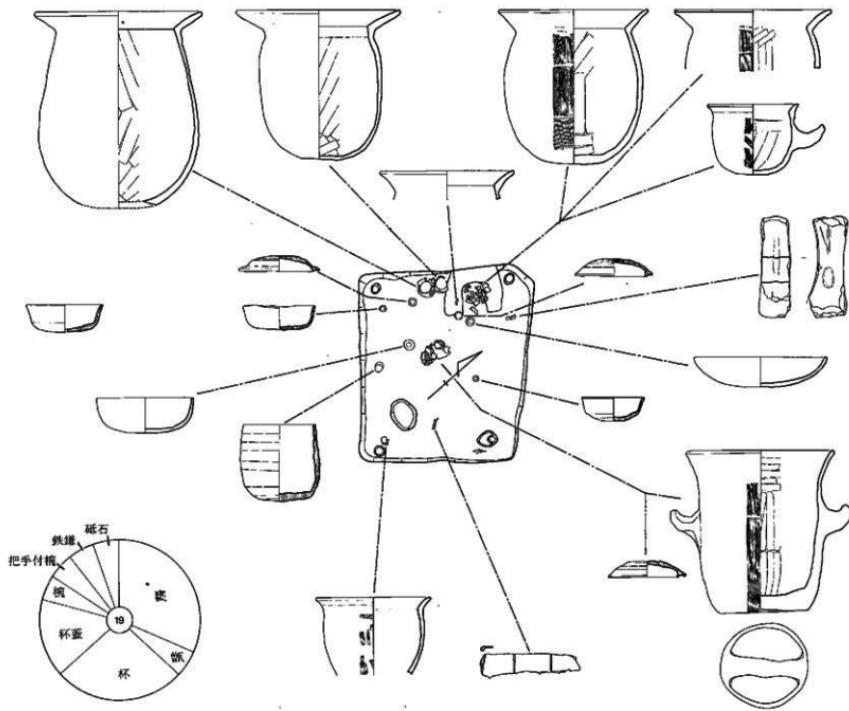


第 82 図 2号住跡実測図 (1/60)

る約40cm×34cmの不整橢円形の凹みが設けられ、そこには完形の甌2個（1個は底部を欠く）が直立して掘えられていた。また、甌の中央部から蓋・把手付瓶がつぶれた状態で出土し、床面からは廃棄時そのままと思われる状態で完形の甌・杯・輪等の土器・須恵器類や鉄鎌、磁石などが発見された。時期は甌・杯蓋が須恵器の編年のV期にあたり、7世紀前半の年代が比定されよう。

出土遺物

土器（図版44、第84図・第85図5・6） 1は底部を欠く資料で、口径25cm、復原器高29.2cmを測る。腹部最大径を下位にもつしもふくれの長い頸部に、強く「く」の字状に外反する口縁部がつく安定感のある土器である。頸部外面は刷毛整形の後、ナデ仕上げを行い、内面は粗い鉈削りしている。口縁部内外はヨコナナデしている。色調は茶褐色を呈し、胎土には

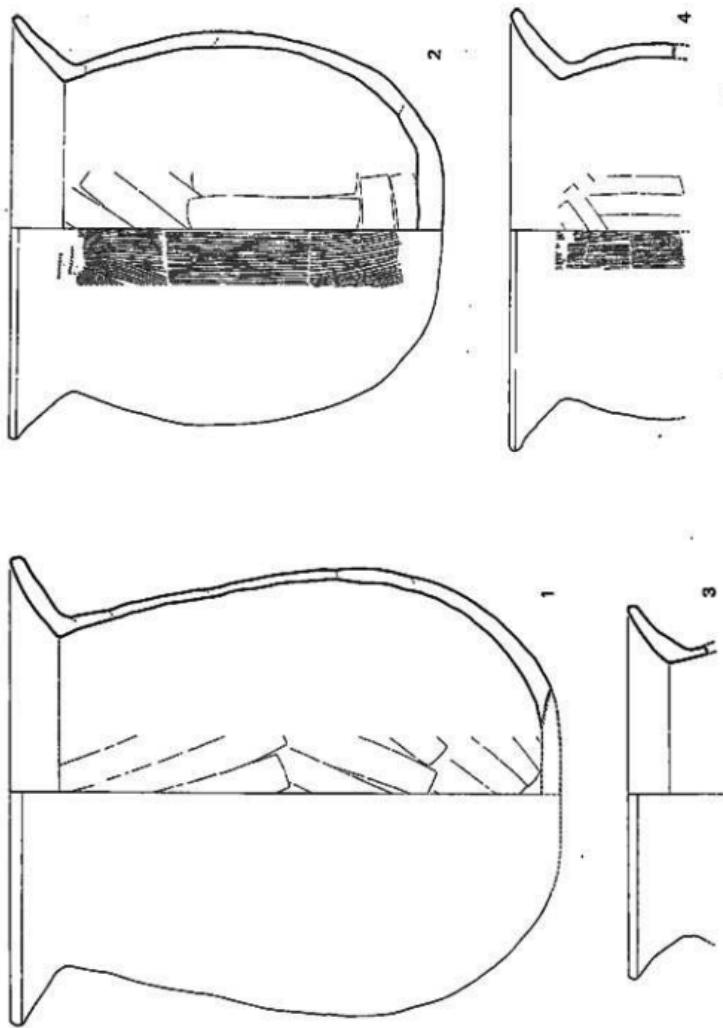


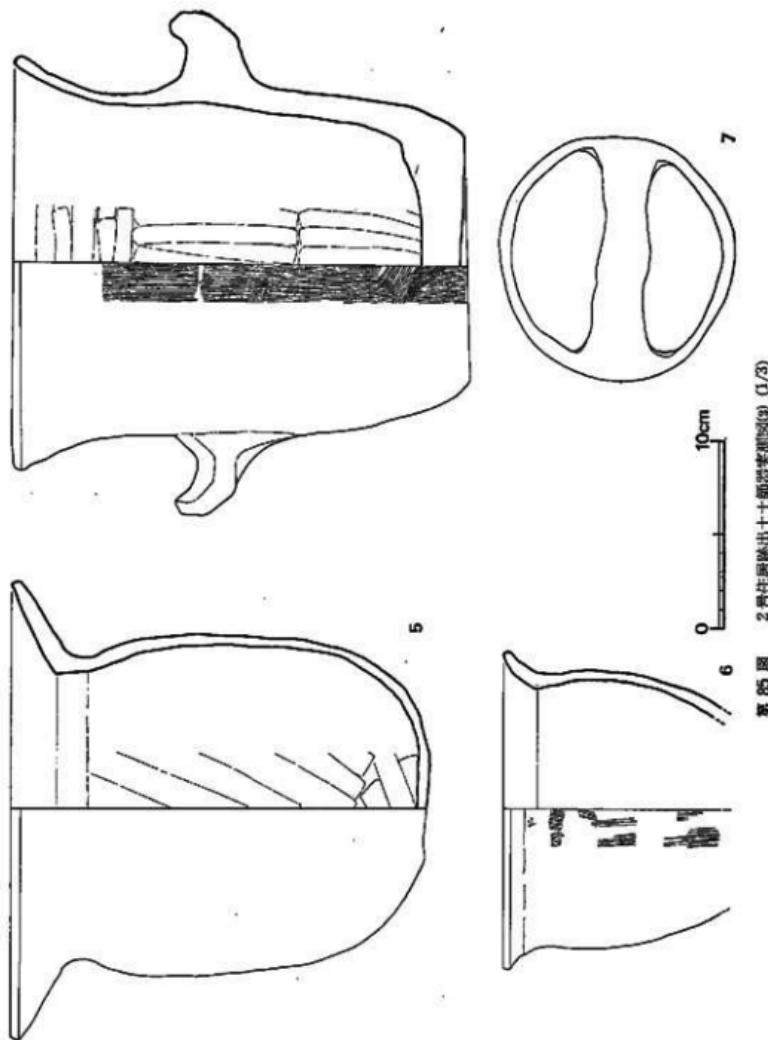
第63圖 2號住居跡內遺物分布圖 (遺構1/60, 遺物1/6)

門出遺跡

15cm
0

第94圖 2号住居跡出土土面層次剖面(1)(3)





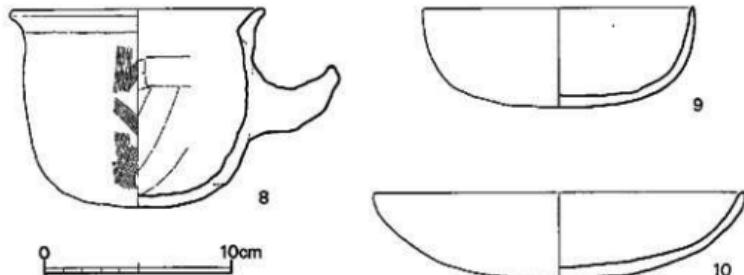
第25圖 2号性器陶出土土器器形圖(3) (1/3)

多くの細砂を含むが焼成は良い。胴部外面には煤の付着がみられる。2は地中出土の完形品である。卵形の胴部に、強く「く」の字状に外反する口縁部がつく口径22.4cm、器高23cmの土器である。胴部外面には継位・斜位の刷毛、内面は粗い箒削りを行っている。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、外面には煤の付着が著しい。胎土には多くの細砂を含む。焼成は普通。3は口縁部の破片資料で、口径19.8cmを測る。2と同様に強く外反する口縁部で、整形技法も同じである。3は胴上部の破片資料で、口径23.6cmを測る。器形・整形技法とも2と同じである。6は胴下部を欠く破片資料である。前記した壺とは異なり、わずかに外反する口縁部をもつ口径17cmの小形の壺である。胴部外面は刷毛、内面は箒削りし、口縁部内外をヨコナデしている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。5は1と並立して壺の南側から発見されたもので、完形資料である。橢円形の胴部にラッパ状に強く外反した口縁部がつく壺で、底部は平底気味の丸底である。最大径は口縁部にあり、口径24.4cm、器高22.3cmを測る。胴部外面はナデで仕上げ、内面は箒削りしている。口縁部内外はヨコナデしている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

土師器壺（図版44、第85図7）床面中央部でつぶれた状態で出土した完形の資料である。長胴の胴部中位に把手を有し、口縁部は緩かに外反する。底部中央には一本の横状をなす「みす止め」がある。体部外面は継位・斜位の細かい刷毛で、内面は粗い箒削りしている。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの細砂を含む。焼成普通。

土師器把手付壺（図版44、第86図8）地中出土の完形資料である。純形をなす体部片側に把手の付くショッキ形の土器である。口径13.6cm、器高10.5cmを測る。体部外面は継位・斜位の細かい刷毛整形で、内面は粗い箒削りのままである。底部は細かい刷毛のあと、箒磨きをしている。色調は茶褐色を呈し、胎土には多くの細砂を含むが、焼成は普通である。

土師器杯（図版45、第86図9・10）9は口径14.4cm、器高5.3cmを測る深めの杯である。土器の器面は風化がはげしく整形は不明である。10は口径19.8cm、器高4.4cmを測る。胎土・焼



第86図 2号住居跡出土土器実測図(3) (1/3)

門田遺跡

成とも悪く、褐色を呈す。2と同様に整形は不明である。

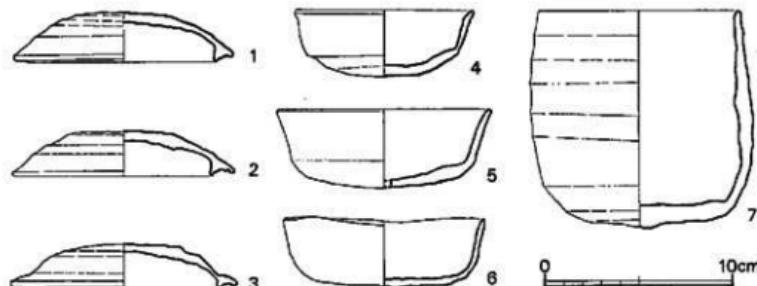
須恵器杯蓋（図版45、第87図1～3） 1は口径9.8cm、器高2.6cmで内外とも黄褐色を呈し、焼成は悪い。天井部外面は回転鋸削り、体部・口縁部内外面ともヨコナデ調整である。2は口径9.2cm、器高2.4cmで内外とも褐色を呈し、焼成のあまり良くないものである。天井部外面は回転鋸削り、体部・口縁部内外面ともヨコナデ調整している。天井部内面は剥落がはげしく整形不明である。3は口径10cm、器高2.4cmで内外とも茶褐色を呈し、胎土には若干の細砂を含むが、焼成は良好である。天井部外面は回転鋸削り、体部・口縁部内外面ともヨコナデ調整している、天井部内面は不定方向のナデで仕上げている。いずれも天井部外面にヘラ記号を持っている。

須恵器杯身（図版45、第87図4～6） 4は口径9.4cm、器高3.5cmで内外とも褐色を呈し、焼成は良好・堅緻である。底部は回転鋸切り、体部と口縁部内外はヨコナデし、内底部は不定方向ナデを行なっている。体部と底部の境界は明瞭である。5は口径11.3cm、復原器高4.2cmで灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好・堅緻である。底部は回転鋸切り、体部と口縁部内外はヨコナデ、内底部はナデで仕上げている。6は口径10.6cm、器高3.6cmで内面暗灰色、外面灰色を呈す。口縁は彎曲し、つくりの難な上器である。底部は回転鋸切り離して、体部・口縁部内外面ともヨコナデ調整である。底部と体部の境界は丸みをおび明瞭でない。4・5・6いずれも底部にヘラ記号を有している。

須恵器碗（図版45、第87図7） 口径10.6cm、器高11.6cmのコップ状をなす碗で、内外とも紫色を帯びた茶褐色を呈し、焼成は良い。底部は回転鋸切りのあと、ナデで仕上げ、体部と口縁部内外面はヨコナデしている。内底部は不定方向のナデを行なっている。

砥石（図版45、第88図1） 砂岩製の砥石で、研砥面は表裏二面である。側面はたたかれ、ほぼ中央部にへこみをつくり出している。手持ち用の凹みの可能性がある。

鉄鎌（図版45、第88図2） 刀部の一部を欠くが、ほぼ完形資料である。全長14.8cm、刀部長



第87図 2号住居跡出土須恵器実測図 (1/3)

13.5cm、刃部中央幅2.7cm、背2mmを測る。茎部には着柄の折り返しがある。

以上の一括遺物は、当時使用した木器類を除く、ほぼ全セットと理解して良いものと思われる。とりわけ豊富な土器類は、土師器10個体と須恵器7個体の17個体である。時期は、出土した須恵器からみてV期にあたり、7世紀前半の年代を比定する。現在、この時期の資料は極めて少なく、貴重な資料である。また、10個体と多くを占める土師器については現在、編年的位置を確定する段階になく、須恵器の編年にたよらざるを得ない現状である。後日、土師器の編年についても独自の大系を確立しなければならないであろう。

5号住居跡（図版46、第72図）

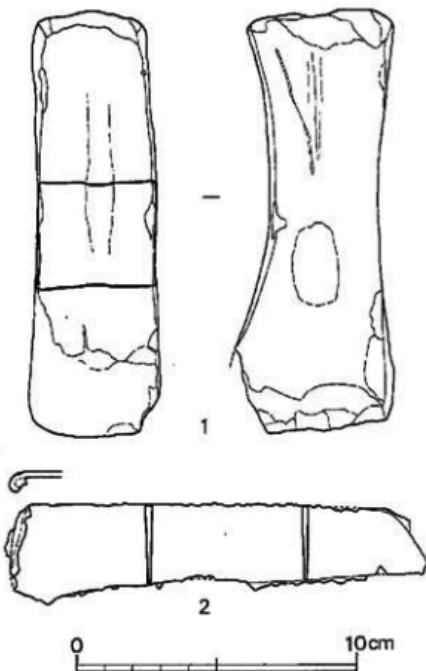
一部北東隅を前記した弥生前期の3号住居跡と複合している。東西4.1

m×南北4.1mの方形窓穴住居跡で、西壁側に竈を付設した痕跡を残している。2号住居の竈が床面上に付設されているのとは異なり、床面をわずかに掘り込んで構築されたようである。煙出しは西壁より50cm離れてあった。柱穴と思われるピットは西壁側で検出されたP1・P2のみである。遺物は須恵器片数点である。時期は出土した須恵器から7世紀後半の年代が比定される。

出土遺物

須恵器蓋（第89図1・2） 1は口径18.6cm、器高1.8cmを測る。ふくらみのない器高の低い形態で、頂部に平坦なつまみがつく。天井部は平らで、口縁端部は嘴状につくり出されている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。器面は風化がはげしく整形は不明である。2は宝珠形のつまみの破片である。

須恵器杯（第89図3・4） 3は高台を欠く杯部の破片資料で、口径14.2cmを測る。内縁気味



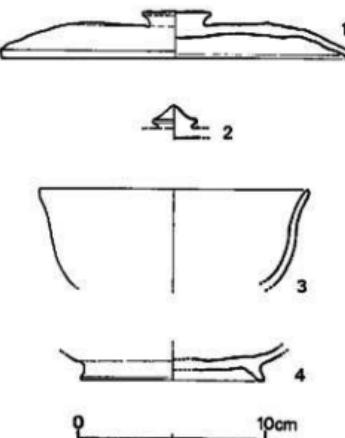
第88図 2号住居跡出土瓦石・鉄鍛実測図(1/2)

門田遺跡

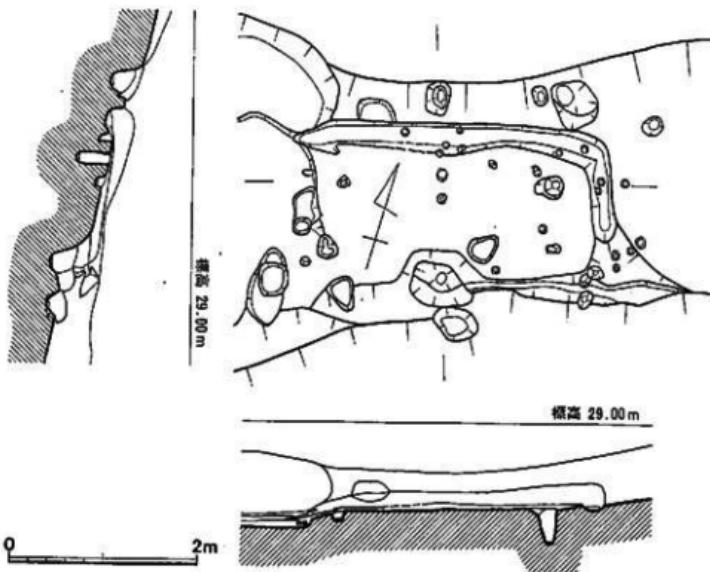
の体部に、緩かに外反する口縁部がつくもので、内外ともヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良好・堅敏である。4は高台部の破片で、台部径9.6cmを測る。高台は外反する短いもので、底部内外ともナデで仕上げている。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密で良いが、焼成は悪い。

(井上裕弘)

8号住居跡(図版47、第90図) D13区の南斜面に位置する住居跡で、四側は木柱茎によって切られている。壁溝からみて長辺3.4m、短辺2m弱の周丸長方形を呈す。壁溝は北壁側で幅30cm、深さ20cm内外であるが、南側は狭く浅くなる。床面は南北方向に傾斜し



第88図 5号住居跡出土須恵器実測図(1/3)



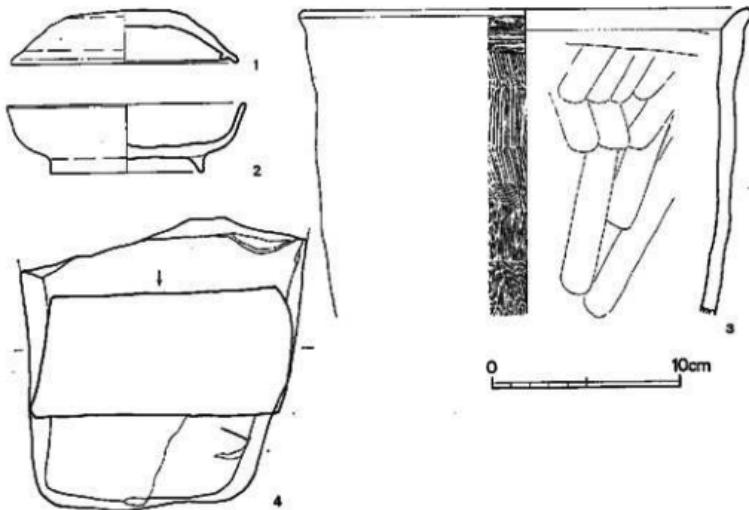
第90図 8号住居跡実測図(1/60)

ている。主柱穴は内に2本で、壁溝に沿っては径10cmぐらいの支柱穴が認められた。炉・カマド等の施設は一切存在しない。この8号住居跡の西側に方形の落ち込みがみられ、住居跡の可能性もある。

出土遺物（第91図1～4） 1は須恵器の杯蓋で、口径12.1cm、器高2.9cmを測る。口唇端部は厚く丸みを持ち、小さな身受け部を有す。非常に焼成悪く、暗茶褐色を呈す。2は高台付杯でやはり須恵器。口縁部は内焼きみに立ちあがり、薄い。高台はほぼ直立し、端部は平坦である。焼成が悪く器面の剥落が著しいので整形技法などは不明。口径12.8cm、器高3.6cm、高台径8.2cmを測る。3は土師器の窓形土器で、肩下部以下を欠く。「く」字形の1cmと部厚い口縁部から直ぐな胴部に移行する。胴部はヘラケズリにより薄く仕上げられている。外面は頸部付近が横方向のハケ目、その以下は縦方向のハケ目調整を施し、内面は下→上方向のヘラケズリを行っている。口径24.2cmを測り、茶褐色を呈している。4は硬砂岩製の砥石の破片で、研磨面は1面のみ。幅12cm、厚さ6.5cmと大型な良品である。

8号住居跡はこれらの遺物から古墳時代後期であろう。

(木下 修)



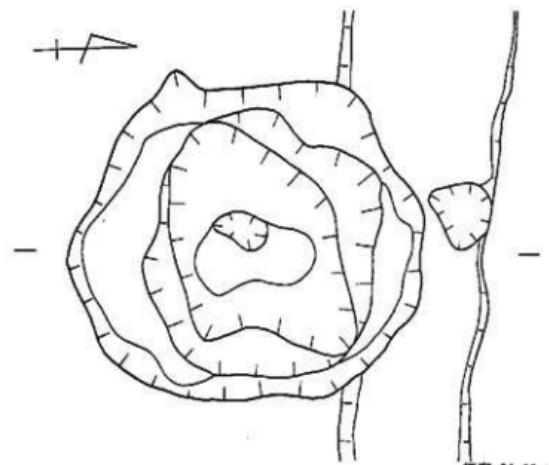
第91図 8号住居跡出土土器・石器実例図 (1/3)

(3) 不整円形整穴 (第92図)

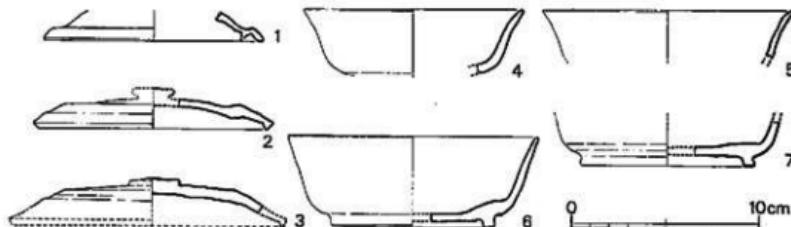
南北両側にテラスをもつ2段掘りの不整円形の整穴である。長径約1.90m、短径1.65m、深さ0.60mを測る。一部北側で構造遺構と複合している。時期は出土遺物から須恵器Vibであり7世紀後半が比定できる。

出土遺物

須恵器杯蓋 (第93図1~3) 1は口縁部の破片資料で、口径11.6cmを測る。三角形状を呈す身受けの返りを有している。2はつまみ部を欠く資料で、口径12cm、留高1.6cmを測る。口縁部と体部の境界は明瞭で、口縁端部は嘴状につくり出している。



第92図 不整円形整穴実測図 (1/30)



第93図 不整円形整穴出土須恵器火焔形 (1/3)

いる。口縁部内外はヨコナデ、天井部内面はナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。3は口縁部を欠く、簡平な宝珠形の鉢をもつ蓋である。体部内外ともヨコナデ仕上げで、色調は灰白色を呈し、焼成はあまり良くない。

須恵器杯（第93図4～7）4は底部を欠く資料で、口径11.6cmの無高台の杯と思われる。体部と底部の境界は丸みをもつが明瞭で緩かに外反する杯である。5は底部を欠く資料であるが、高台の付くものと思われる。口径13.2cmを測り、内面暗灰色、外側黒灰色を呈し、内外ともヨコナデで仕上げている。胎土にはかなりの細砂を含み、焼成は普通である。6は口径13.2cm、復原器高4.85cmを測る。体部に近い位置に、低い外反気味の高台がつく。体部と底部の境界は丸みをもつが明瞭で直線的に外反する口縁部につづく。色調は黄褐色を呈し焼成は悪い。7は高台部の破片資料で、復原器高9.1cmを測る。暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。

(4) 溝 状 造 構 (第11図)

B12区で検出されたのは東西に走る溝である。全長13.20m、幅96cm～75cmを測る。深さは上面がかなり削平されているため8cm～11cmと浅い。溝底は地形に沿って西から東に傾斜していく、一部南東側で古墳時代後期の不整円形窓穴に切られている。遺物としては土師・須恵器の細片が若干出土したのみで時期不明である。

(井上裕弘)

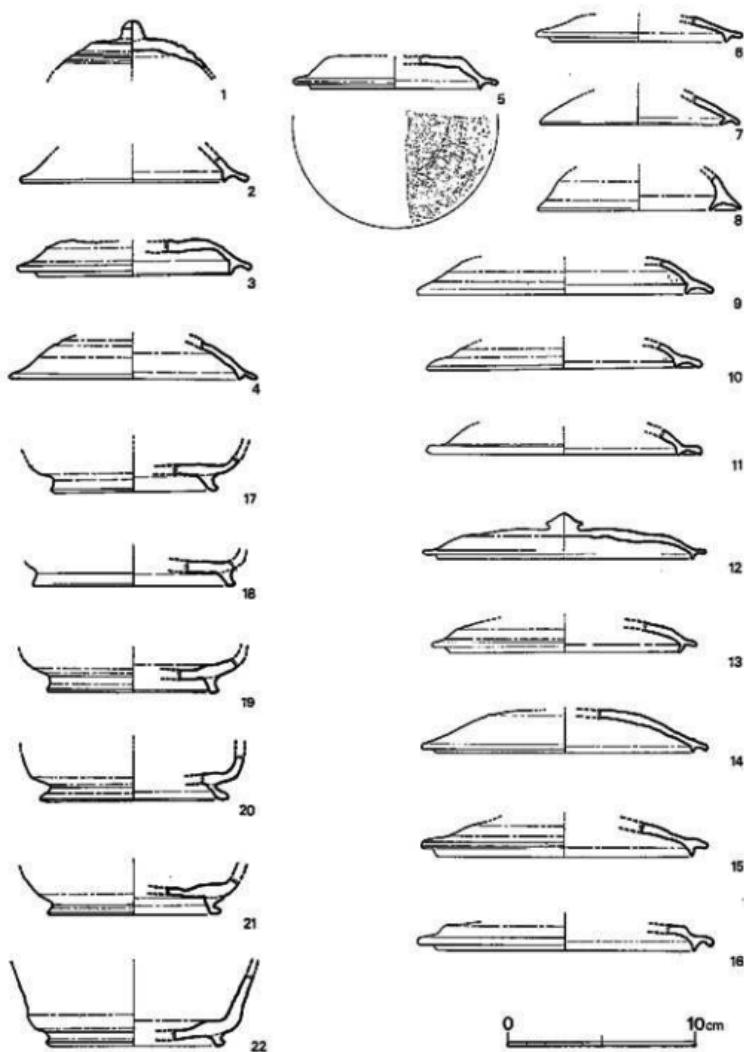
(5) 包含層山土の遺物

全て須恵器で、層位としては表土層から第3層までに含まれていたものである。かなりの量出土したが大半が細片であった。従ってここには実測可能なものを選び、その中から報告した。器種は、杯蓋・有高台杯・杯身・高杯（脚付盤）、甌等が出土した。杯蓋は口縁部、有高台杯は高台を中心に観察した。その結果、I～Ⅲ類に分類出来た（図1）。その他の器種については、上記の分類と比較検討し決定した。

杯蓋（第94図1）乳頭状のつまみを持ち、天井部外面には櫛状の道具で粗い回転施割りを施している。天井部と体部との境に段を有する。内面は粘土ひもの巻き上げによる成形痕を残したままにし、簡単な不定方向のナデで仕上げている。器形は全体に丸みを帯びている。口径は10cm前後を推定出来る。時期は須恵器V期のものであろう。絶対年代は6世紀終末～7世紀前半が与えられている。実測可能なものとして1点だけ含まれていたので併せて報告した。

I類（図版48）

杯蓋（第94図2～16）口縁部に身受けがあり、身受けの端部が口縁先端より突き出るタイプと突き出ないタイプがある。体部は全て丸みが強く曲線を描いている。天井部も大半が



第 94 図 包含層出土の須恵器実測図(1) (1/3)

丸みを帯びている。従って器高の高くなるものが多いと考えられる。例外的に3・5のように天井部が平らになっているものもある。口径では10cm前後の小形のタイプ(5~8), 15cm前後の大形なタイプ(9~16)と、更にはその中間タイプとしての12cm前後のタイプ(2~4)がある。

整形技法としては、殆んどが口縁部分しか残存しておらずその把握が難しいが、天井部は簡で削り切り離し、その後の調整はしていないというが普遍的であろうと考えられる。体部その他の部分は、輪転回転を利用したナデを施しているものが多い。概して焼成は余り良くなく、胎土は砂粒を含んでいるものが多い。

有高台杯(第94図17~22) この門田地区出土の須恵器有高台杯I類には、高台の形態は2種類のタイプがある。高台が外方に強く屈曲し下部に行くに従い細くなるタイプ(17~19)と、高台内側はほぼ直線的であるが、下部が肥厚し全体的に強く外方に彎曲しているタイプ(20~22)とがある。その双方いずれも疊付けを接ね上げている。高台の直径をみると9cm~10cmのものが大半である。

整形技法としては底部外面は杯蓋と同様、範削りのままにしているものが多い。底部内面は不定方向のナデ、体部その他は回転ナデで調整している。概して焼成は余り良くなく、胎土は砂粒を含むものが多い。

II類(図版48)

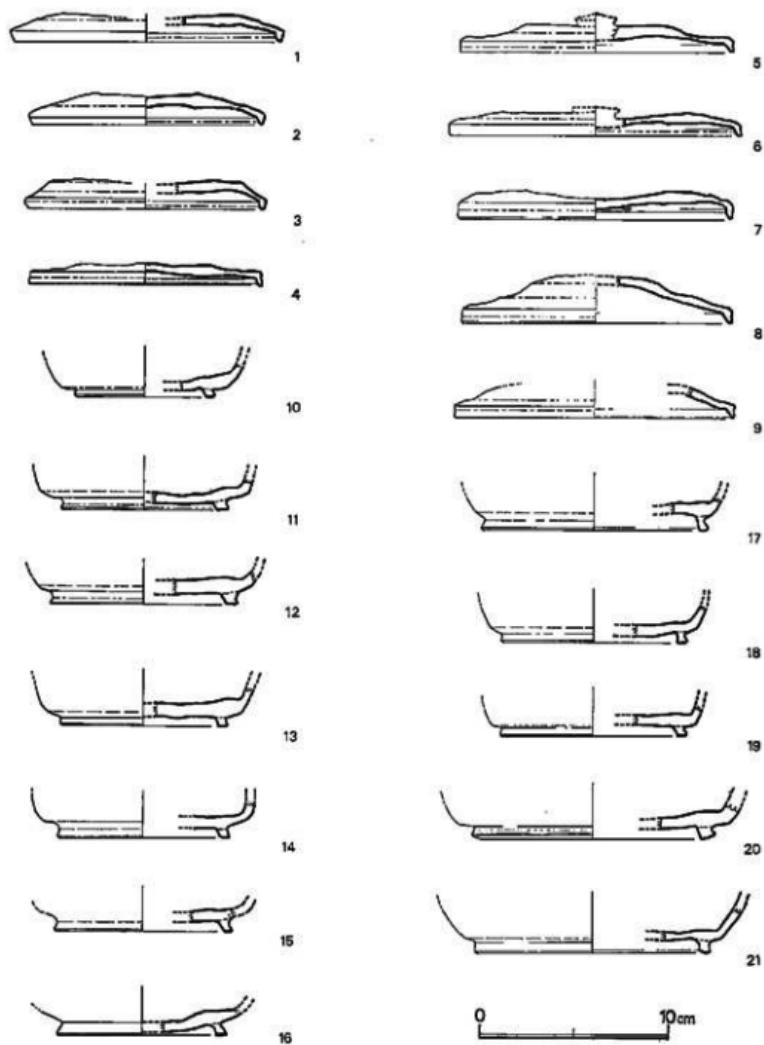
杯蓋(第95図1~9) 口縁部の身受けがなくなり、口縁先端は鋭角ないし直角に折り曲げているものが多い型式である。天井部はI類と比較してより平坦になり、端部との境の後も低いものが特徴である。従って全体に器形は扁平になるものが多い。口径の大きさでは、12cm台の小形のタイプ(2~4)と、15cm前後の大形のタイプ(1~5~9)とがある。

整形技法としては、天井部外面は回転を利用して範削りで切り離し、その後指で軽くナデしているものが多い。生がわきの状態で鑿状の道具を使い回転削りで整形しているかと考えられるような粒子の移動度がみられるものもある。つまみはその後につけたものと考えられる。天井部内面は不定方向のナデ、体部その他は回転ナデで調整している。胎土は比較的良好で砂粒を含むものもある。焼成は概して良好である。

有高台杯(第95図10~21) 高台はI類と同様屈曲しているが、比較的小さくなる。高台内側が彎曲し外方に小さくふんばるタイプ(10~16・21)と、やはり高台内側が彎曲するが下部を肥厚させるタイプ(17~20)とがある。疊付けは接ね上げるものと接ね上げないものとどちらにもある。体部はやや内壁気味に立ち上がり、底部との境に棱を有するものが多い。高台径では9cm前後の小形のタイプ(11~15・18・19)と、12cm前後の大形のタイプ(17~20・21)とがある。

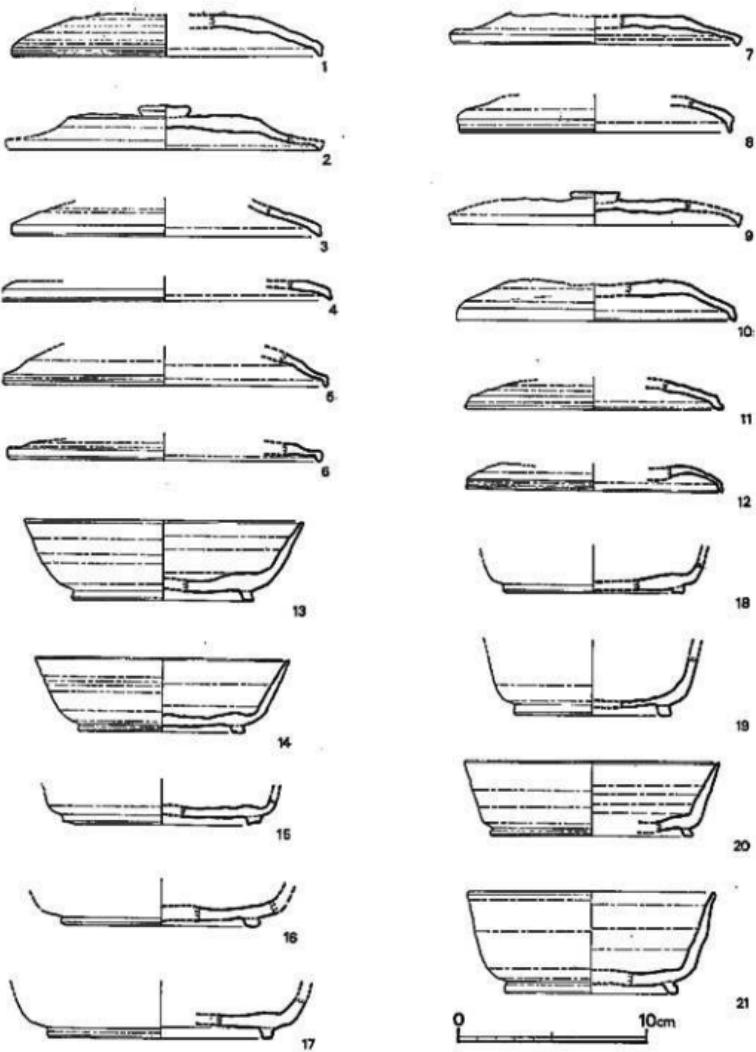
整形技法としては、底部外面は範削りの後ナデ、底部内面は不定方向のナデを施している。

門田遺跡



第 95 図 包含墓出土の須恵器実測図(1) (1/3)

門田遺跡



第 96 図 包含層出土の須恵器実測図(a) (1/3)

門田造跡

体部その他は回転ナデで調整している。胎土は良好で砂粒を含んでいるものが多い。概して焼成も良好である。

Ⅲ類（図版48）

杯蓋（第96図1～12） 口縁部は殆んど折り曲げないか（1～4）、折り曲げても小さいもの（7～12）とがある。折り曲げないものには嘴状にしているタイプ（5・6）がある。天井部は低く平坦に成形している。従って器高は低いものが多い。口徑では14cm前後のタイプ（7～12）と、16cm以上のタイプ（1～6）の2タイプがある。全体に大形化するのがこの時期の傾向のようである。

整形技法としては、天井部外面は回転箝削りの後指ナデ、天井部内面は不定方向のナデを施している。体部・口縁端部その他は回転ナデで調整している。概して胎土は良好で砂粒を含むものは少ない。焼成も良好である。

有高台杯（第96図13～21） 高台の形態は3種類のタイプがみられる。第1のタイプは高台内側がほぼ直線的となり、断面は正方形となるもの（13・14、16～19）。第2のタイプは第1タイプと同様高台内側がほぼ直線的になるが、外側に段を有するもの（20・21）。第3のタイプは高台内側が内窓し、外側は外窓し疊付けの部分に凹みを持ったもの（15）である。疊付けはいずれも接ね上げていない。体部と底部との境の稜はなくなり、体部はほぼ直線的に立ち上がる。口径は杯蓋と同様大形化するが、体部が斜めに立ち上がる所以高台径はⅡ類と比べて逆に小さくなる。8cm～10cm前後のものが大半である。口径では13cm前後のもの（14・18～22）と、15cm以上になると考えられるもの（13・15～17）とがある。胎土は概して余り良くなく、焼成は普通である。

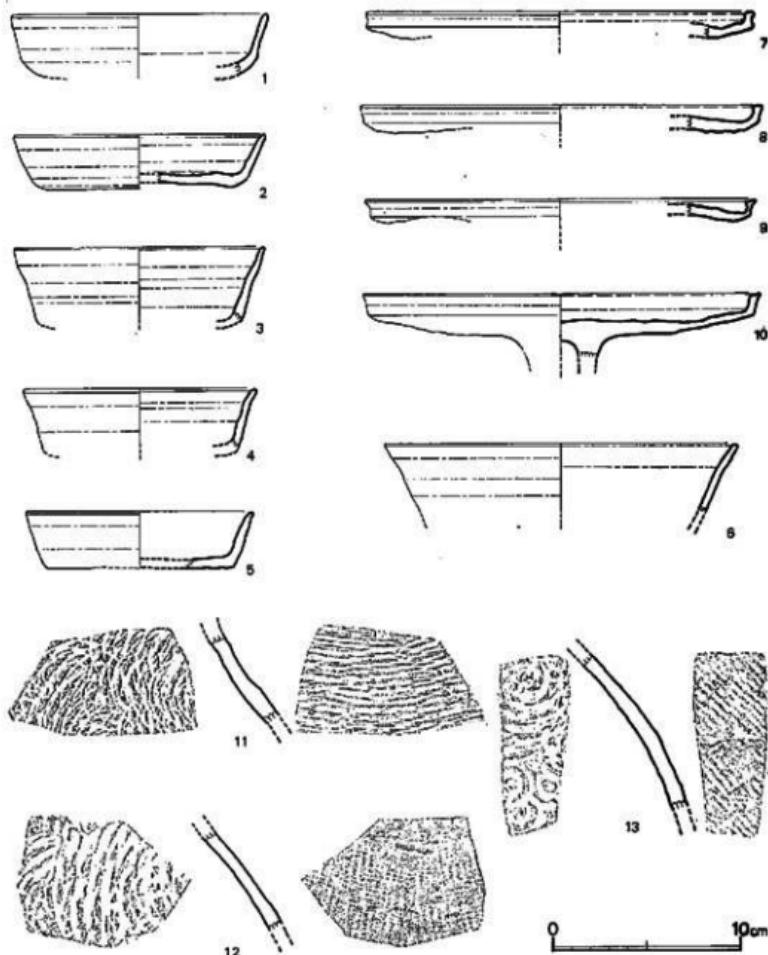
その他の器形

杯身（第97図1～6） 体部は、内窓気味に立ち上がるものの（4）と、ほぼ直線的に立ち上がるものの（2・3・5）とがある。口径はすべて13cm前後である。底部は箝削りし、その他の部分は回転ナデを施している。胎土・焼成とも概して良好である。時期は須恵器編年VI期に該当すると考えられる。（6）は底部を欠き、高台の付くものと思われる。口径は18.8cmの大形のものである。時期としては先述した杯身と同様VI期であろう。

高杯（第97図7～10） いわゆる脚付盤である。脚付盤は脚の口径・高さと用途に依り、中盤・高盤と高杯とに分類されている。口縁部は体部に対してほぼ直角に折り曲げている。端部は丸くおさめるか、平坦にしている。口径はすべて21cm前後である。底部は箝で切り離し、その後指ナデしている。底部内面は不定方向のナデ、体部その他は回転ナデで調整している。概して胎土は普通で砂粒を多く含んでいる。焼成は余り良くない。色調は灰色である。この高杯の報告例については、愛知県猿投山西南麓古窯跡群の黒釜3号窯・黒釜101号窯出土例がある。時期は須恵器編年 VIc 期後半に該当する。8世紀後半から9世紀にかけてのものと比定されてい

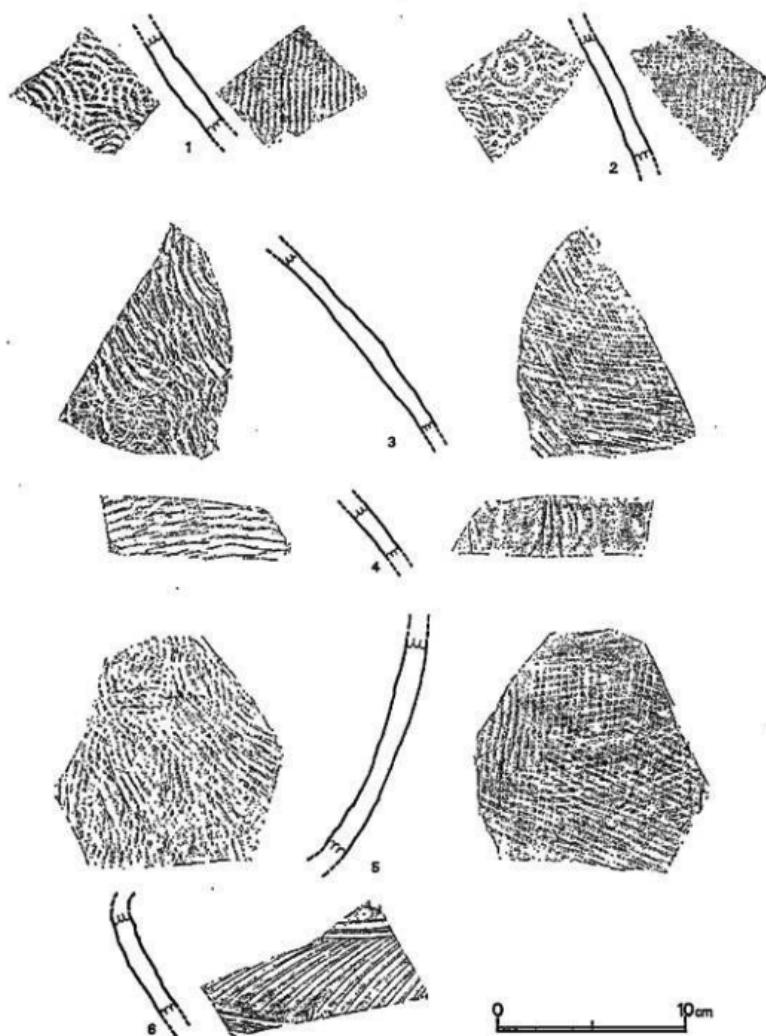
る。

図(第97図11~13・第98図1~6) 11は体上半部の破片である。外面は横位のゆるやかなカーブをもった曲線の叩きを施し、その後指頭で調整したのか指圧痕がみられる。内面は青海波



第97図 包含層出土の須恵器実測図(4) (1/3)

門田遺跡



第 98 図 包含窯出土の須恵器実測図(5) (1/3)

文の叩きである。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は灰色を呈している。

12は体上半部の破片である。外面は縦方向の平行線状叩きを施し、その後叩きが殆んど消えるぐらいまでかき消している。内面は青海波文である。胎土・焼成ともに良好である。色調は外面が青灰色、内面が灰褐色である。

13は体上半部の破片である。外面は斜方向の長方形格子目状の叩きを施し、部分的にナデている。内面は青海波文である。胎土は砂粒を若干含み普通である。焼成は良好、色調は青灰色を呈している。

1(以下第98図)は体上半部の破片で、外面に縦方向が強い格子目状の叩きを施している。内面は青海波文の叩きである。胎土は普通、焼成は余り良くない。色調は外面が黒灰色、内面が灰色である。

2は体上半部の破片である。外面は縦方向の平行線状の叩きを施し、その後カキ目で調整している。内面は小さな青海波文の叩きである。胎土は砂粒を含んでいるが良好である。焼成も良好である。色調は灰色を呈している。

3は体上半部の破片である。外面はほぼ縦方向の粗い平行線状の叩きであり、その後に非常に粗くて太いカキ目を施している。内面は密な青海波文の叩きである。胎土は砂粒を若干含むが良好である。焼成は良好で、色調は灰色だが部分的に灰白色を呈している。

4は体上半部の破片である。外面は細かいハケ目で調整し、内面はゆるい曲線の叩きを施している。胎土は良好で砂粒を若干含む。焼成は良好であり、色調は灰色を呈している。

5は体下半部の破片である。外面は縦方向の平行線状の叩き、その後極めて細かいカキ目で調整している。内面は青海波文の叩きである。胎土は砂粒を若干含み普通である。焼成は良好である。色調は灰色、部分的に黒色を呈している。

6は頸部破片である。2条の幅広い沈線の間に、笠状の道具で斜線の文様を施し、内面はナデしている。胎土は細砂粒を若干含むが良好である。焼成も良好である。色調は外面が青灰色、内面は灰色を呈している。

以上の幾の時期については、完形品が出土していないので類推でしかあり得ないが、叩きの様相と他の須恵器との関係上須恵器編年VI期と考えるのが妥当であろう。

小結

以上の須恵器の時期については、筑前地方に於ける須恵器の編年を体系づけた「野添・大浦窯跡群」(註2) 調査例、更には歴史時代以降の須恵器の編年を確立した「向佐野・長浦窯跡群」(註3) 調査例を基準に判断すると、大半が須恵器編年VI期に該当する型式であると考えられる。年代としては、7世紀中葉頃から8世紀初頭までにかけての所産のものと考えられる。この時期、政治的には大宰府政庁の制度的確立、發展期であると言えよう。という事は須恵器製品の需要性が昂じてきた為、それに応ずべき生産体制が整備されたと考えられる。牛頭窯跡

表 6 I類須恵器一覧表

No.	器種	法量 (最高)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
2	盃	12.0	身受けはやや内側し、先端で屈曲する。体部との境に縫をもつ。	残存部分は回転ナデ	普通	良好	内一黒灰色 外一灰褐色
3	"	12.4	身受けはやや内側し、端部よりかなり突き出る天井部は平坦。	天井部は鋸割り、その他は回転ナデ	良好 細砂粒含む	良好	茶灰色
4	"	12.8	身受けは断面三角形を呈し、端部とは同じ高さである。	残存部分は回転ナデ	普通 細砂粒含む	普通	灰色
5	"	10.5 (1.7)	身受けはほぼ直面で口縁より突き出る。天井部は平坦。	天井部は鋸割り、その他は回転ナデ	余り良くない	余り良くない	茶灰色
6	"	10.8	身受けはほぼ垂直で、口縁より突き出る。	残存部分は回転ナデ	普通	普通	褐色
7	"	10.5	身受けはかなり内側し、体部と口縁部との接合に縫をもつ。	天井部は鋸割り、その他は回転ナデ	良好 細砂粒含む	良好	内一淡灰色 外一灰褐色
8	"	10.8	身受けは内側し、端部と同じ高さである。	残存部分は回転ナデ	良好	良好	内一赤褐色 外一暗灰色
9	"	15.5	身受けは内側し、先端で外方に屈曲する。底の後は低い。	"	良好 砂粒含む	普通	内一暗灰色 外一灰褐色
10	"	14.6	身受けは内側し瘦い。端部と同じ高さ。	"	良好	良好	内一灰色 外一淡灰色
11	"	14.4	身受けは内側し、先端を折り曲げている。	"	普通	普通	黄灰色
12	"	15.0 (2.4)	身受けはほぼ直面で、口縁より突出する。天井部との接合は低い。	全面回転ナデ	良好	余り良くない	黄褐色
13	"	14.0	身受けは内側し、端部より突き出る。体部と接合部に縫をもつ。	残存部分は回転ナデ	"	良好	淡灰色
14	"	15.0	身受けはほぼ直面で、天井部と端部との境の高さは高い。	"	普通 細砂粒多く含む	余り良くない	青灰色
15	"	15.1	身受けは直面。口縁より突き出る。天井部と体部の境の高さは高い。	"	普通	普通	赤褐色
16	"	15.4	身受けはほぼ直面で、口縁より突き出る。	"	"	良好	墨灰色
17	杯	9.6	高台は外方に屈曲し、先端ほど細くなる。	底部内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ	良好 細砂粒含む	良好	内一暗灰色 外一灰褐色
18	"	10.6	高台は外方に屈曲しながら、先端になる程、細くなる。	残存部分全面回転ナデ	普通 細砂粒若干含む	不良 (破損)	灰白色
19	"	8.8	高台は外方に屈曲する。下部に段を有する。	底部は鋸割り、内面は不定方向のナデその他は回転ナデ	普通 細砂粒含む	良好	内一暗灰色 外一灰褐色
20	"	9.8	高台は外方に弯曲しながら強くふんばる。下部は肥厚する。	底部内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ	良好 砂粒含む	普通	灰色
21	"	9.2	高台内側はほぼ直線的に外方にふんばるが外側は肥厚している。	底面内面は不定方向ナデ、外面は鋸割りのまま、その他は回転ナデ	余り良くない 細砂粒含む	余り良くない	灰色
22	"	9.2	高台はやや外方にふんばり、下部は肥厚し段を有する。	底面外側は鋸割り、内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ	普通 砂粒含む	普通	灰色

表 7 日類須恵器一覧表

No.	器種	法量 (証(筋高))	形態の特徴	手法の特徴	胎・土	焼成	色調
1 瓢	14 (1.4)?	先端は鋭角に折り曲げ、天井部と体部との境は低い。	天井は回転窓削り。内面は不定方向のナデ。端部その他の回転ナデ。	良 好 砂粒若干含む	良 好	淡灰色	
2 "	12.1 (1.5)	先端は鋭角に折り曲げ、天井部は凹みをもつ。	天井部は回転窓削り。内面は不定方向のナデ。	余り良くない 砂粒含む	余り良くない	茶灰色	
3 "	12.4 (1.3)?	先端は鋭角に折り曲げ体部と天井部との境は低い。	天井部は窓削りの後ナデ。内面は不定方向のナデ。その他の回転ナデ。	普通 砂粒含む	良 好	灰 色	
4 "	12.2 (1.1)	先端はほぼ直角に折り曲げ天井部は平らである。	天井部は回転窓削り。内面は不定方向ナデ。その他の回転ナデ。	良 好	良 好	灰 色	
5 "	14.4 (2.1)?	先端はほぼ直角に折り曲げ。天井部は平坦。	"	普通	普通	灰 色	
6 "	15.4 (1.6)?	先端は直角に折り曲げ、天井部と体部との境は低い。 つまみは穴あき	天井部は回転窓削り。内面は不定方向のナデ。端部その他の回転ナデ。	良 好 細砂粒含む	良 好	灰 色	
7 "	14.6 (1.1)	先端はほぼ直角に折り曲げ。天井部体部は平坦。つまみは穴あき	天井部は回転窓削り。内面は不定方向のナデ。その他の回転ナデ。	良 好	良 好	灰 色	
8 "	14.2 (2.5)?	先端はほぼ直角に折り曲げ。天井部はややふくらみをもつ。	天井部は回転窓削り。内面は不定方向のナデ。端部その他の回転ナデ。	良 好	普通	灰 色	
9 "	14.8	先端はほぼ直角に折り曲げている。天井部と体部との境は低い。	残存部は回転ナデ	良 好 砂粒含む	良 好	内一灰色 外一灰褐色	
10 杯	7.2	高台は小さくふんばる。要付けはね上げる。	底外部は窓削りの後ナデ。内面は不定方向のナデ。体部その他の回転ナデ。	余り良くない 細砂粒含む	余り良くない	内一暗灰色 外一灰色	
11 "	8.6	高台は外方にふんばるが小さい。体部と底部との境に段差をもつ。	底外部は窓削りの後ナデ。内面は不定方向のナデ。体部その他の回転ナデ。	良 好	良 好	灰 色	
12 "	10.0	高台は外方に屈曲。断面は長方形を呈する。	底外部は不定方向のナデ。その他の回転ナデ。	普通 細砂粒含む	普通	暗灰色	
13 "	8.8	高台は小さく外方に屈曲。断面は正方形。底部と体部に段差がある。	底外部内面は不定方向のナデ。外側は窓削りの後ナデ。その他の回転ナデ。	良 好	普通 (吸質)	淡灰色	
14 "	9.0	高台は外方に屈曲。断面は正方形。体部と底部との境に段差をもつ。	"	良 好	良 好	灰 色	
15 "	9.2	高台内部は外方に彎曲しながら、ふんばる。	"	不 砂粒含む	普通	内一暗灰色 外一灰色	
16 "	7.8	高台外側はほぼ直線的。内側は彎曲し高台は外方にふんばる。	"	良 好 細砂粒含む	良 好	灰 色	
17 "	11.6	高台内側は彎曲する。下部は肥厚する。盤付けをややはね上げる。	"	良 好	良 好 (吸質)	淡灰色	
18 "	8.8	高台はやや外方にふんばる。体部と底部との境に段差をもつ。	"	良 好	良 好	灰 色	
19 "	9.6	高台内側はほぼ直線的に外方にひらく。底部に段を有する。	"	余り良くない	余り良くない	内一灰色 外一暗灰色	
20 "	12.9	高台は外方に傾曲し、要付けはねあげる。高台外側に段を有する。	"	普通 細砂粒含む	普通	内一灰色 外一暗灰色	
21 "	12.4	高台は外反する。内側に段をもつ。体部と底部との境に段をもつ。	"	良 好 細砂粒含む	普通	灰 色 部分的に黒褐色	

表 8 III類須恵器一覧表

No.	器種	法量 (g)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	盃	16.2 (2.4)?	先端は小さく折り曲げ、体部は曲線となり、天井は平坦である。	天井部は回転施削り、内面は不定方向のナデ、端部その他の回転ナデ	普通	普通	淡灰色
2	"	16.8?	天井部は平坦で、つまみも平坦だが中央が小さく凸起している。	天井部つまみ部は回転ナデ、内面は不定方向のナデ	普通 砂粒若干含む	普通 (軟質)	淡灰色
3	"	16.4	先端は小さく折り曲げている。	残存部分は回転ナデ	良好	良好	淡灰色
4	"	17.4	先端は殆ど折り曲げていない。	"	良好	普通 (軟質)	淡灰色
5	"	16.8	先端は殆ど折り曲げず嘴状をしている。	"	良好	良好	淡灰色
6	"	16.6	先端は小さく折り曲げて、天井部は盤状である。	"	良好 細砂粒含む	良好	内一灰色 外一黒灰色
7	"	15.2 (1.4)?	先端は短く折り曲げている。天井部は平坦。	天井部は回転施削り、内面は不定方向のナデ、端部その他の回転ナデ	普通 砂粒含む	普通	灰色
8	"	14.2	先端は鈍角に折り曲げている。	残存部分回転ナデ	良好	良好	内一灰色 外一暗灰色
9	"	15.2? (1.8)	天井は平坦でつまみも平坦である。	天井部つまみは回転ナデ、内面は不定方向のナデ	良好 砂粒含む	良好 (硬質)	灰色
10	"	14.6 (2.4)?	先端は折り曲げ嘴状にしている。体部と天井部との境に沈線。	内面中心部は不定方向のナデ、天井部端部その他の回転ナデ	普通 砂粒含む	良好 (硬質)	内一赤褐色 外一黑色
11	"	13.4	先端は鈍角に折り曲げている。	残存部分は回転ナデ	良好	普通	灰色
12	"	13.4 (1.4)?	先端は鈍角に折り曲げ嘴状をしている。先端ほど筋肉は薄い。	残存部分は回転ナデ	良好	良好	内一暗灰色 外一灰色
13	杯	(14.5) 9.6 4.3	高台内側に被を有し、やや外方に開き小さい。体部は直線的。	底部外面は施削りの後ナデ、内面は不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	不良	普通	灰白色
14	"	(13.5) 8.8	高台は直線的。外側がやや肥厚している。体部は直線的にのびる。	底部外面は施削りの後、指壓整形、内面は不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	良好	良好	淡灰色 部分的に灰色あり
15	"	10.2	高台内側は内凹し、外側は外壁する。縁付けに凹みがある。	底部外部は施削りの後ナデ、内面は不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	良好	良好	灰色
16	"	10.6	高台内側は直線的。断面は正方形に近いが下記に丸みをもつ。	底部外面は施削りの後ナデ、内面は不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	不良	不良	内一淡灰色 外一素灰色
17	"	12.6	高台はほぼ垂直で断面はほぼ正方形。	底部外面は施削りの後ナデ、内面は不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	良好 (軟質)	良好 (軟質)	淡灰色
18	"	8.8	高台はほぼ直線的。	残存部分は回転ナデ	良好	良好 (硬質)	暗灰色
19	"	8.2	高台の断面は花方形。体部と底部との境に棱はなく丸みをもつ。	底部外面は施削りの後ナデ、内面不定方向のナデ、体部その他の回転ナデ	普通 砂粒含む	普通 (軟質)	内一暗灰色 外一灰色
20	"	(13.4) 10.8 4.1	高台はやや外方に聞くが小さい。体部はほぼ直線的にのびる。	"	良好	良好 (軟質)	内一淡灰色 外一灰色
21	"	(12.8) 9.2 (5.5)	高台は内凹しているが、やや外方に聞く体部はほぼ直線的。	"	普通 細砂粒若干含む	普通	内一灰色 外一暗灰色

表 9 その他の須恵器一覧表

No	器 形	法 量 種(器高)	形 線 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
1	杯 身	13.4 (3.5)?	体部はほぼ直線的、底部との境は丸みが強い。	底部は鋸切り、体部は回転ナデ	良 好 砂粒含む	良 好	灰 色
2	杯 (高台付)	12.0	体部はほぼ直線的。	"	良 好	良 好	外一暗灰色 内一灰色
3	杯 身	13.1 (2.9)	底部から体部へはほぼ直線的に立ち上がる。	底部は鋸切り、底部内面は不定方向のナデ、体部は回転ナデ	良 好 細砂粒含む	普 通	淡灰色
4	杯 身 (高台付)	13.2	体部中央でやや内凹する。(体底のみ)	体部内外面とも回転ナデ	良 好	良 好	灰 色
5	杯 身 (高台付?)	18.8	体部はほぼ直線的だが、口縁部になるに従い外反する。	残存部分回転ナデ	良 好	良 好	淡灰色
6	杯 身	12.0 3.0?	体部は外方にほぼ直線的に立ち上がる。	底部は回転鋸切り出し、内面その他は回転ナデ	良 好 細砂粒含む	良 好	灰 色
7	脚付盤	20.8	口縁先端はほぼ直角に折り曲げている。	残存部分回転ナデ	良 好	良 好	灰 色
8	"	20.6	口縁先端はほぼ直角に折り曲げ端部は丸くおさめている。	"	普 通 砂粒含む	普 通	灰 色
9	"	21.4	口縁先端は平坦にししてほぼ直角に折り曲げている。	"	普 通 砂粒含む	良 好	内一灰色 外一暗灰色
10	"	21.2	口縁先端は平坦にし、やや凹みをもつ。	底部内面は不定方法のナデ、体部その他は回転ナデ	普 通 砂粒含む	普 通	灰 色

群中、大宰府に近い最東部に位置する地区に7～8世纪代の窯跡が集中しているものとの為であると説明出来る。大量生産と供給の開始と共に、その製品が直線距離約4～5kmのこの門田近辺にも波及したものと考えられる。

以下、分類にそって再度整理しながらこの項の結論を述べてみよう。

I類の杯蓋は身受けを有し、有高台杯は体部を外方に屈曲させ、強くふんばる高台を付け盤付けを纏ね上げるのを特徴としている。整形技法は、杯蓋の天井部を鋸割りのままにし、他はナデ仕上げを施している。有高台杯も底部を鋸割りのままにしているものが多い。時期としては、相対年代須恵器編年 Via 期が比定される。絶対年代は7世紀中期を中心とした時期が考えられている。窯跡としては長浦窯跡、平田窯跡B地点2号窯・3号窯がこの時期として知られている。

II類の杯蓋は身受けを有せず、口縁端部を鋸角ないし直角に折り曲げている。有高台杯は高台をやや屈曲させているが、I類と比較して小さいのが特徴である。整形技法としては杯蓋は天井部を鋸割りの後纏くナデしている。内面は不定方向のナデ、端部その他は回転ナデを施しているものが多い。有高台杯も底部を鋸割りの後、纏くナデしている。内面もやはり不定方向のナ

門田遺跡

テ体部その他は回転ナゲを施しているのが一般的である。II類須恵器の時期については、須恵器編年 VIb 期と考えるのが妥当であり、絶対年代としては 7 世紀後半を中心とした時期が比定される。窯跡としては平田窯跡 B 地点 1 号窯・上平田窯跡がある。

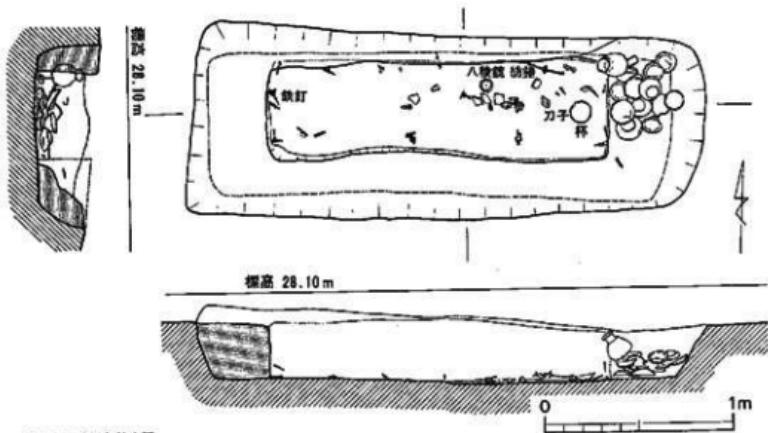
III類の杯蓋は口縁端部を鈍角ないしは殆ど折り曲げていないものが多い。有高台杯は高台をほぼ垂直にし断面が方形となるのを特徴としている。整形技法は II類とほぼ同様である。時期は須恵器編年 VIc 期が比定され、絶対年代では 8 世紀前半から 8 世紀後半ないし末頃が考えられる。窯跡としては、向佐野 1 号窯跡・井手窯跡等が知られている。
（藤瀬禎博）

- 註 1 甲元真之他「X、門田 2 号墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会 1976
2 井上裕弘編「47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1973
柳田康雄編「48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1974
小池史哲編「50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1976
3 須恵器の分類については、九州歴史資料館の龟井明徳氏に御教示を得た。記して謝意を表したい。
4 小田富士雄・柳田康雄・眞野和夫「野添・大津窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970
5 龟井明徳・酒井仁夫・高橋章「向佐野・長崎窯跡の調査」『九州総質貿易車道関係埋蔵文化調査報告-VI』福岡県教育委員会 1975
6 手越秀一・上野精志・向田裕始「筑前平田窯跡」雄山閣出版 1975
7 註 4 と同じ
8 註 3 と同じ
9 註 3 と同じ
10 横田賢次郎・川述昭人・酒井仁夫「福岡県大野城市牛頭における奈良時代窯跡」『九州考古学』49・50 九州考古学会 1974
11 楢崎彰一「猪俣窯」『陶器全集』31 平凡社 1966

6. 歴史時代の遺構と遺物

(1) 木棺墓 (図版49~51, 第99図)

D13区に発見された。台地の南傾斜面で、地山面のコンタ (第11図) では 29m~28m が走り、比較的傾斜がきつい。歴史時代の墓は他に土壙墓 (E13区) があるが、この木棺墓のみ離れて存在する。



ドットは暗褐色粘土層

第99図 木棺墓実測図 (1/30)

8号住居跡の西側にあり、鉄釘の出土により木棺墓であることが判明した。墓塚は白色粘土層を掘り込み長辺2.73m、短辺1m、深さ0.3mの素掘りの墓塚で、主軸はN2.5°Eを指す。

上部から内堀ぎみに掘り下げた下底部は長辺2.45m、短辺0.8mを測る。墓塚内の棺材は腐ち、その痕跡はまったく残さないが、鉄釘の出土状態から木棺の大きさが復原できる。詳しくは後述するが第103図の1・4・15の釘から長さ1.8m、幅0.45mの長方形で、棺の高さは刀子のレベルから20cm以上あったと思われる。それを裏付けるように木棺の三方は暗茶褐色粘土層をもって充填し、棺を保護している。棺床面は東側に若干低くなっている。注意すべきは木棺棺床面下の中央部に並んで発見された瓦・鉄碎で、出土状態から木棺を安定させるものと考えられよう。

副葬品は中央部北よりに青銅製八棱鏡が鏡面を下に、鉄製鋒鏡は北東壁際に、糸カケ部を西に向けて出土した。また東側中央部に土師器の高台付椀(第102図2)が上向きに置かれていた。これらの副葬品から頭位は東枕であることが判る。棺内副葬の他に木棺東側に副室を設け土師器を納めている。内法は35×40cmの方形で、その内に壺1・高台付椀6・皿6が副葬され、壺は木棺に接し、出土位置も高い。他の土器は上下の統一はみられない。(木下修)

出土遺物

鏡(図版52-1、第100図) 八棱鏡である。一部に青銅が認められるが、銅分が多く全体に鼠灰色の滑沢な仕上がりで、特に鏡面は研磨されて涼やかであるが、作品としては不出来である。最大径7.3cm、最大径6.65cmの小品で、鏡背は内・外区に分けられて装飾が施されてい

る。鏡背の中心には円錐台形の鉢がある。鉢をめぐって3個体の文様がある。一つは鳥である。この鳥は頭が丸く、雀のようであるが尻尾が長く鳳であろう。そして次は、折り紙でつくった雛人形のような形状である。最後のは、川に棲息している蜻蛉か蝶の幼虫のような形状である。これらを取り囲んで一条の山形凸帯が内外を区画する。外区には鏡頂部の位置に8個のこれまた何ともつかぬ文様がある。どうも花文のようである。縁端は1.5mmの厚さで、鏡面が若干反転するが、全体に鏡面は平坦である。鉢の部分で4mm、文様等のない部分で1.2mmの厚さである。

鏡背の文様はシャープさに欠け、縁端部において褐色えが見られる。特に鳥から真下縁辺（実測図対照）にかけてそれが明瞭である。

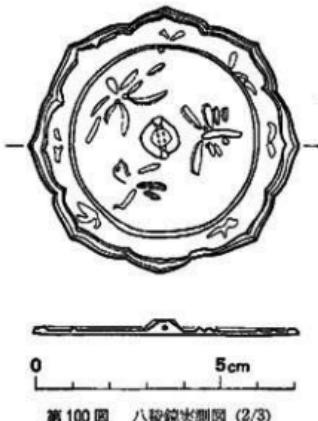
なお、鏡背の文様等以外の面に、0.5~1mm幅に同心円状に細線が認められる。これは鏡型作成時の整形痕で、鏡の大きさと厚さを決定する最初の作業である。このことから鏡型を作成するに当って回転台の使用が考えられる。

(宮小路賀宏)

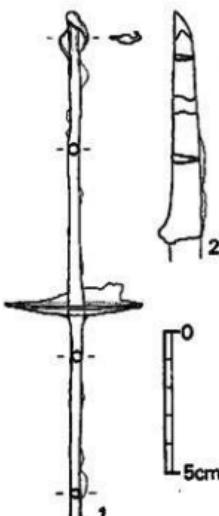
紡錘（図版52-2、第101図1） 糸に擦りをかけるもので、檜北壁東側に置かれていた。鉄製紡錘車の中央に鉄軸を通した完成品。鉄軸は断面が丸く全長18.2cm、紡錘車から上部が10.6cm、下部が7.6cmである。鉄軸先端には糸カケ部が作られている。紡錘車は径4.9cm円形を呈し、厚さは1mmと薄い。東京都中田遺跡（註1）のA地区6号住居跡に出土した鉄製紡錘は35.3cmで、それと比べると半分近くの大きさである。なお、この紡錘は窓の焚口近くに置かれている。県内では夜須町八並遺跡にて土壇墓内より発見されている（註2）。

刀子（図版52-2、第101図2） 基部と刀身先端部の方が狭くなる。出土状態から木棺上に置かれたものであろう。

土師器（図版53、第102図、表10） 2のみが棺内出土上で、それ以外は木棺東側の墓窓内から出土した。蓋1、高台付碗



第100図 八稜鏡炎測図(2/3)

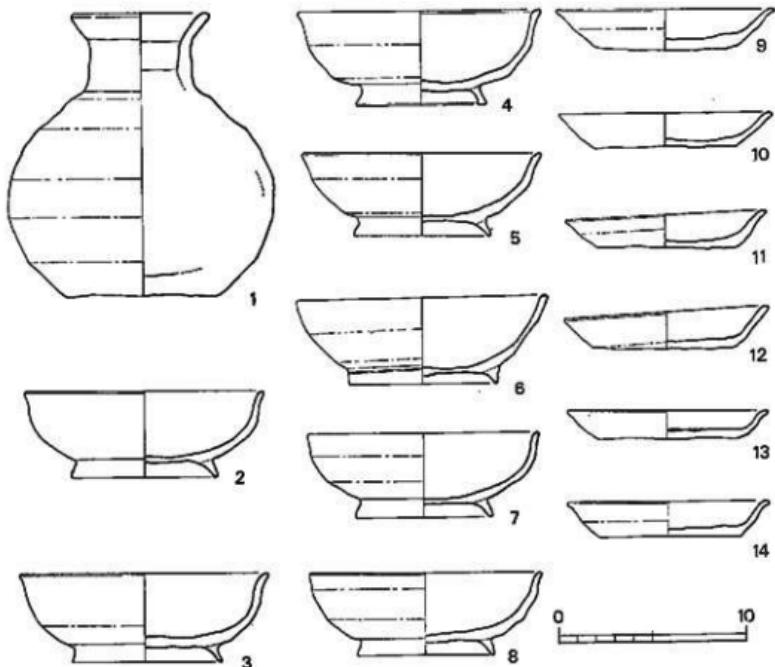


第101図 木棺墓出土鐵器実測図(1/2)

7, 且6よりなる。

壺(1) 口径7.25cm, 器高15cmを測る。まっすぐにのびた頸部から肥厚し、外反した口縁部にいたる。口唇部は丸く仕上げられている。若干膨らんだ肩部から腹をもつ胴部に移行し、最大径を胴部中間にもつ。厚さ1cmと肥厚した底部は径8cmの中央部がややとびでた平底である。全体の器形は胴部の張った“鎧利”状を呈す。肩部はヘラケズリによって整形し、丸みを除いている。肩部から頸部にかけては指によってしほっており、口縁部の外反も指による曲げが認められる。器面は最後にナデ調整をしている。外面黄褐色を、内面は黒灰色を呈し、いぶしにより器壁を密にしたものと思われる。胎土・焼成とも良好である。容積は720ml(4合)。

高台付碗(2~8) 壁10のとおり、7点ともほぼ同じ数値をもつ。口縁部は6のみが内轉ぎみで、他はすべて外反する。4の口唇部は斜めに切ったような平坦面を有す。高台はすべて付け高台で、形は変化が認められる。6は直に立ち、2・5・7・8は外に張り出す安定したもの。



第102図 木棺藍棺外出土土器実測図(1/3)

門田遺跡

3は外に張りだすが、器壁が薄く、端部が外に流れぎみになっている。4は口唇部と同じように平坦面をもっている。口径は12.2~13.4cmとやや大小の差が見られるが、高さにはあまり変化がない。器面の調整は回転ナデで、底部は不定方向のナデが丁寧に行なわれており、切り離し方法は不明である。器壁は全体的に薄く仕上げられ、特に5・6などの底部は2mm前後しかない。色調は淡褐色を呈し、5・7は非常に脆弱な土器である。

皿(9~14) 高台付椀に比べて焼成が良いのが特徴で、口径は10.6~11.5cmとはほぼ同じ大きさで統一されている。9は底部が6mmと厚く、口唇部は外反する。13・14も外反する。10・12

は丸く仕上げられた口唇部を持っている。底部の切り離し方法はすべてロクロ右回転ヘラ切りで、9・11には板目状の圧痕が認められる。色調は黄褐色を呈している。

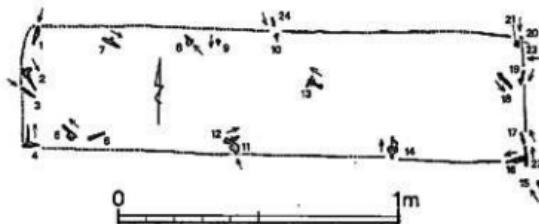
副葬品の外に木棺に打たれた鉄釘と、木棺を安定させるのに用いたと思われる瓦、鐵滓が出土している。鐵滓については大澤正己氏の分析を受けたので説明はそちらにゆずる。

鉄釘(図版54-1、第103・104図) 鉄釘は全部で24点出土した。内訳は、完形品10点、先端のみを欠くもの8点、破片または不明6点である。出土状態は西壁側4点、南壁6点、東壁7点、北壁5点。その他2点で、1、4、16、21~23の釘の出土位置から木棺の大きさが復原できた(第103図)。

釘の形についてみると、頭部は18点の大部分が横からたたいて錐状にしたもので、1・3の直角に曲げたものと11・16のように鋭角なものもある。15・19・20はたたいているが錐状を呈さない。断面はすべて方形を呈し、頭部近くで厚さ5mm前後を測る。長さは完形品からみると2・3・4が8.2cm、7・14が7.5cm、17が8.8cmと一番長く、8が4.9cmときわどって短かい。次いで、20・22が

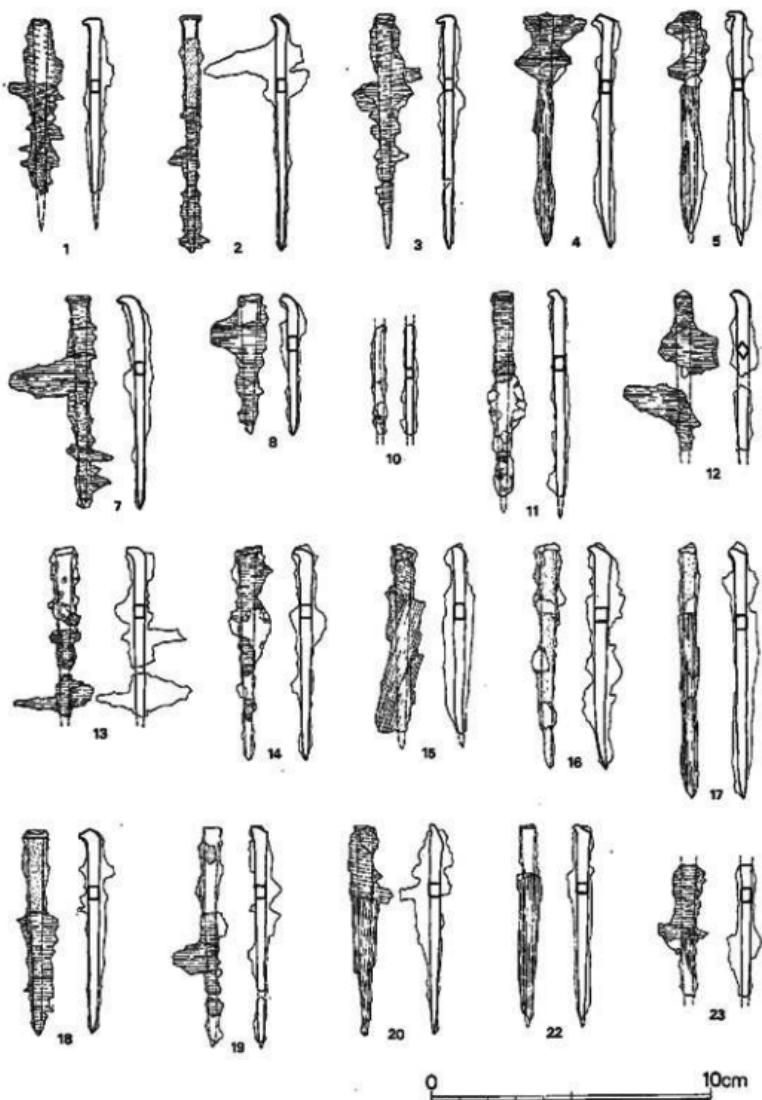
表10 土器器皿表 (単位cm)

	口径	高さ	底径 (高台付)	備考
1	7.25	15.0	8.0	棺外・皿
2	12.6	4.7	7.6	棺内・高台付碗
3	13.1	4.7	7.8	棺外・"
4	12.8	5.0	6.8	" "
5	12.6	4.4	7.2	" "
6	13.4	4.6	7.9	" "
7	12.2	4.5	7.2	" "
8	12.2	4.4	7.2	" "
9	11.5	2.15	7.5	棺外・皿
10	11.2	1.85	7.4	" "
11	10.6	1.7	7.2	" "
12	10.7	2.0	7.5	" "
13	10.6	1.55	7.3	" "
14	10.6	1.85	7.4	" "



第103図 鉄釘の出土状態と木棺の大きさ (1/20)

門田遺跡



第104図 木棺墓出土鉄釘夷頭図(1/2)

門田遺跡

6.4cmである。重さは当然長さに比例するが、8cm前後の釘で7g弱を測る。釘には棺材の腐食した木質が付着している。よく観察すると、釘身の上半分と下半分で木質の付着状態が異なっており、3つに分類できる。

A型 上半部、下半部とも釘身に対してヨコ方向の木目をもつもの1・7・8・11~14・16

B型 上半部、下半部ともヨコ方向の木目であるが、それが90°ずれるもの、2・3・18・19

C型 上半部はヨコ方向の木目で、下半部は釘身に沿ってタテ方向のもの。4~6・15・17・20~23

A~C型の木目の相違は棺材の厚さを示すと同時に木棺の組合せ方法による使用場所ならびに棺材の木目の方向を示している。残存した釘が木棺に打たれた位置を必ずしも示す訳ではないが、出土状態からほぼ原位置を示すと思われる。1・4・11・14・15・20の釘をみてみよう。

表 11 鉄釘一覧表

NO.	長さ(cm)		木目		レベル		残存状態	重さ(g)	使用場所
	残存長	長(復原)	類型	頭部木目長さ	頭	先			
1	6.3	(6.8~)	A	2.2	27mm 64cm	—	先 欠	6.5	側板—底板
2	8.4	8.4	B	3.0	66.9	65	完 形	6.7	蓋板—小口板
3	8.2	8.3	B	?	71	69	"	6.85	蓋板—小口板
4	8.2	8.2	C	2.1	63.5		"	4.80	側板—小口板
5	7.9	8.2	C	2.4	64.5	66	先 欠	6.55	側板—小口板
6	—	—	C?	—	63.3		小破片	3.15	
7	7.5	7.5	A	—	64.5	63.3	完 形	0.5	蓋板—側板
8	4.9	4.9	A	—	62.8	64.5	"	4.80	蓋板—側板
9	1.3	—	A?	—	—	64	先破片	0.5	側板—底板
10	3.9	—	—	—	62.5		中間破片	1.45	
11	7.3	(8.3)	A	2.2	59.5	—	先 欠	6.6	側板—底板
12	5.1	—	A	—	—	—	"	7.15	蓋板—側板
13	5.8	—	A	2.6	6.0	—	"	6.1	
14	7.5	7.5	A	—	59.8	60.4	完 形	7	側板—底板
15	6.7	(7.5)	C	1.6	73.5	—	先 欠	7	側板—小口板
16	7.8	7.8	A	(2.3)	63.5	61.8	完 形	7.80	側板—底板
17	8.8	8.8	C	2.1	61	63.3	"	6.75	小口板—底板
18	7.2	7.2	B	2.7	59.5		"	6.75	蓋板—小口板
19	7.7	(8.1)	B	2.8	59	59.5	先 欠	5.95	蓋板—小口板
20	6.4	6.4	C	2.4	71.2	64	完 形	6.15	側板—小口板
21	4.0	—	C	—	41.5		中間破片	1.8	小口板—底板
22	6.0	(6.4)	C	1.7	66.5	—	先 欠	5.1	側板—小口板
23	4.6	—	C	—	71.5	47.2	中間破片	4.75	側板—小口板
24	—	—	A?	—	64		—	—	

1は北西隅から出土し、釘先の方向は北から南である。木質はA型で釘頭から2.2cmで木質が変わる。4は1と反対側に出土した釘で、方向も南から北でC型に属す。2本の釘の方向から小口板が側板をはさむ木棺では両者のような痕跡は残きない。11・14はA型に属す。出土位置は棺床面についた南壁側で、釘先は南→北つまり棺内に向っている。11の木質は上・下半に相違がみられることから、側板から底板に打たれた釘で、底板は側板より小さく、棺材の木目の方向が側板・底板とも長辺方向に走ることも判る。15・20は東側の側板と小口板の関係を示す釘であろう。これを基本に釘を観察するとC型に属す17から小口板も底板を換み、木目も長辺方向に走っていることになろう。B型は釘身の上・下半部の木目の方向が90°にねじれるもので4本のみみられる。東・西小口部に残存する2・3・18・19がそれである。このねじれの痕跡は木目の走向が直角に交わる部分に打たれた釘で、側板→小口板、小口板→底板が考えられるが、木目の方向から釘身の下半部の木目は継方にしか残らない。従って蓋板→小口板へ打たれた釘のみに残る。これにより蓋板の木目も長辺方向であり、側板・小口板を覆っていたことが判かる。木棺の棺材の厚さは釘に残っていた痕跡より側板が15の1.6cmから1の2.2cm、小口板は17より2.1cmの厚さを示す。一方、蓋板は2が3cm、19が2.8cmと、側板・小口板に比べ厚い板材を用いている。

以上のたとから木棺の組合せを復原すると第105図のようになる。なお、釘の一覧表は表11の通りである(註3)。

釘(2・7)に残存した木質の鑑定を九州大学農学部木材理学部教室松木昂教授に依頼し、次のような結果を得た。

(木下 修)

古代木棺樹種判定結果

資料1 釘2

資料2 釘7

資料1・2共に同一樹種と判明し、コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (針葉樹) である。

木材組織

放射組織 1~10細胞高であるが、2~7細胞高のものが多く、単列である。放射仮道管は含んでいない。分野壁孔は大型で眼状でありいわゆるコウヤマキ型の壁孔をもつ。

仮道管 有縁壁孔対を有し、壁、孔口は円形である。(早材部仮道管) 晩材部仮道管壁厚は、早材仮道管から急激に変化し、顯著な晚材部を認めた。



矢印は木目の方向を示す。
高線矢印は底板の方向を示す。
粗線は蓋板の方向を示す。

第105図 木棺の復原図 (1/30)

門田遺跡

木材柔細胞 半径面観察では認められなかった。

以上のように放射組織の分野壁孔を中心に他の組織的特徴からコウヤマキと判定した。

(松本 勝)

瓦(図版 54-2, 第106図) 平瓦の

破片で6片に割られ使用されていた。表面は平行条線文様叩きで、裏面は粘土板から離した痕跡をそのまま残している。側縁はヘラにより面取りされている。門田地区包含層出土の瓦に類品(第121図8・10)がみられ、7世紀後半頃のものであろう。

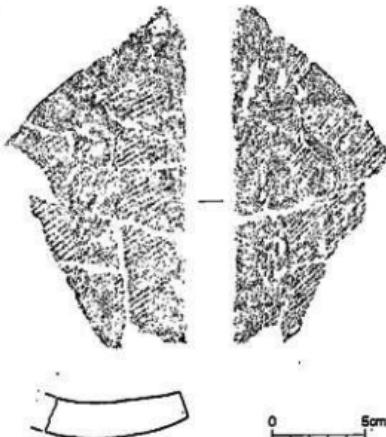
まとめ

木棺墓は棺内に八稜鏡・鉄製紡錘・土師器純、棺外に刀子、土師器壺・椀6・皿6と豊富な副葬を有していた。副葬品としての八稜鏡の例は小郡市津古遺跡(註4)で上墳墓内より鋳銅製鏡・土師器純・杯などと伴出し、また岡山県赤磐郡山陽町岩田土墳墓群第17号土墳墓(註5)でも土墳墓内より土師器の高台付杯・須恵器壺と共に検出されている。

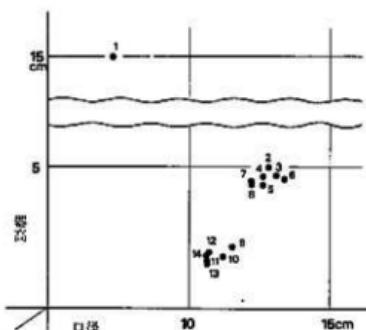
一方鉄製紡錘は朝倉郡夜須町八並遺跡(註6)で土墳墓内より出土し、副葬品ではないが、東京都中田遺跡では住居跡出土の例が知られる。時期的には津古・岩田遺跡は平安末頃とされ、中田遺跡は国分期の所産である。

木棺墓の時期は出土した土師器から推定できる。椀・皿ともすべてヘラ切

り離し手法をもち、椀は脣部が丸みを持ち、口縁部が外反する器形で、付け高台を有する。森田勉氏等による大宰府周辺の土師器の編年(註7)からすると大宰府史跡政庁地区の最終期の整地層や土墳 SK357 出土の椀形土器に類似する。これらの土器の口径は16cm前後で、木棺墓



第106図 木棺墓出土瓦実測図(1/3)



第107図 山土土器の分布図

出土物の13cmと比べて一回り大きい(第107図)。従って木棺墓の年代は10世紀後半頃に位置付けられるであろう。

木棺の材がコウヤマキを使用していたことは注目される。九州地方では木棺の材が判明しているものは少なくて福岡市若八幡宮古墳(註8)がスギとされている程度で、本例のようにコウヤマキが使用されているものは唯一の例である。しかし、今回の釘に残存した木質でも棺材が判明できることから今後資料の増加を期待したい。

(2) 土 墓 墓

E13区の変形墓群に2基並んで検出された。49年度概報で土壙墓5・6としたもので、2号土壙墓の人骨鑑定より、歴史時代と判明した。

1号土壙墓(図版55-1、第108図下) 長辺1.67m、短辺1.02mの隅丸長方形を呈し、深さ0.87mを測る素掘りの墓壙で、上辺から垂直に近く掘り込まれている。床面は北側に若干深くなり、北壁下では幅20cmほど凹みをもっている。2号土壙墓の人骨の残存状態より、北枕と考えられ、この凹みは頭部の位置であろう。主軸方位はN8°Wとほぼ南北方向である。人骨の碎片が出土したが性別・年令不詳。

2号土壙墓(図版55-2、第108図下) 1号土壙墓の東側に並んで発見され、59号変形墓の墓壙北東側を一部切っている。上辺は長辺1.5m、短辺0.82mの隅丸長方形を呈すが、1号に比べて丸みをもつ。深さ1.05mを測り、墓壙の大きさに比して深さを持っている。床面は長辺0.97m、短辺0.6mで浅い皿状を呈す。主軸方位はN7°Wと1号墓とほぼ同じである。土壙内には北壁側に頭蓋骨が、大腿骨は東西方向に二本みられるところから仰臥屈葬であろう。九州大学永井昌文教授の鑑定により熟年の中年男性で、中世人骨であることから、土壙墓の時期が判明した。副葬品は両者ともなし。

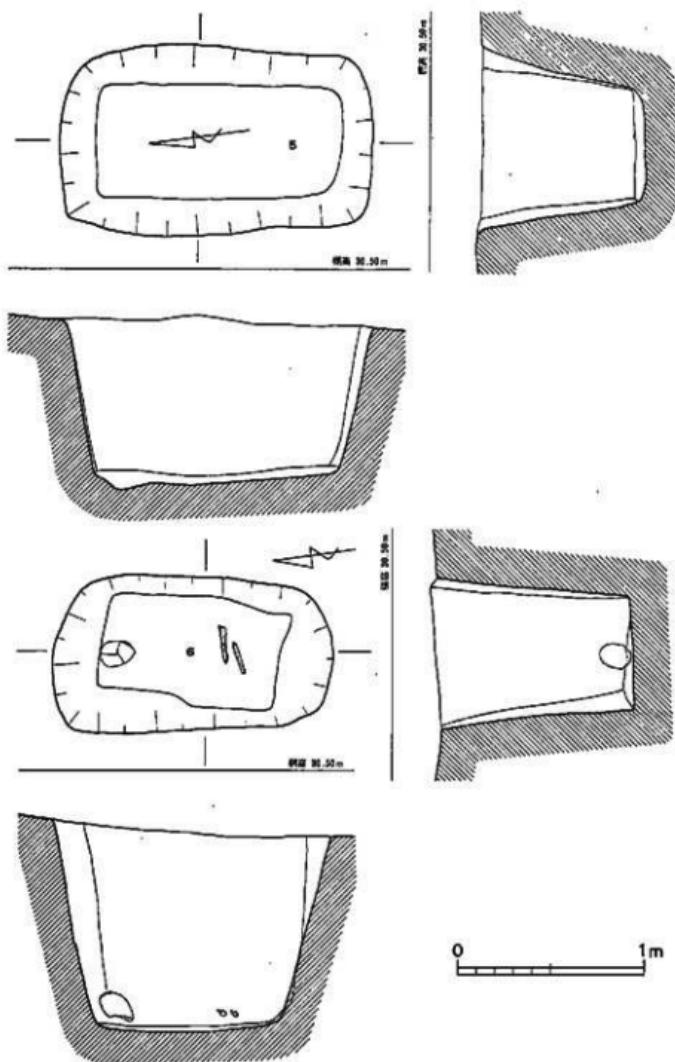
表12 棚列計測表 (単位cm)

	性	間	柱穴	長径	短径	深さ
P1-P2		423	1	38	30	8
2-3		427	2	68	60	14
3-4		460	3	78	62	25
4-5		370	4	76	48	35
5-6		370	5	54	40	17
6-7		414	6	76	72	67.5
7-8		486	7	40	31	11
8-9		354	8	43	39	28
9-10		385	9	60	34	33
計		3689		10	46	8
平均		410		平均	57.9	45.5
						24.7

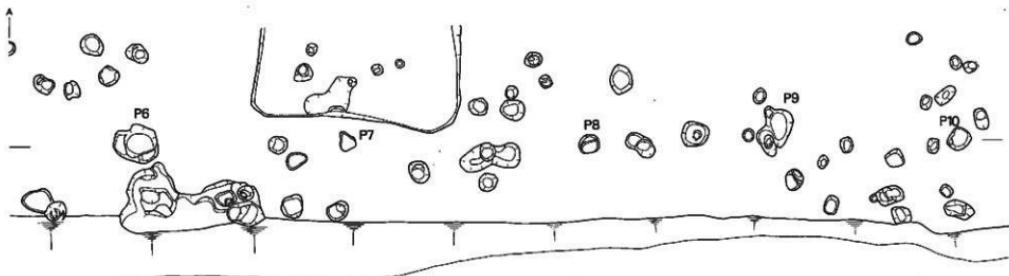
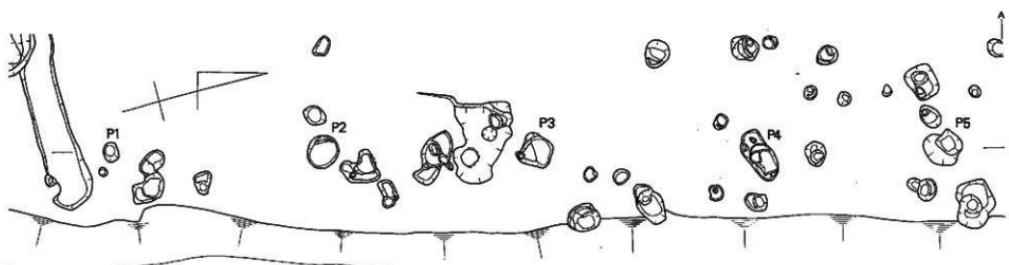
(3) 棚列(図版56-1、第109図・表12)

台地の東端に沿って柱穴が一直線に並ぶ。P1～P10がそれで、全長37mを測る。北端は台地が削平されているので延びる可能性もある。南端は溝状構造の前で止まる。柱穴間の間隔はP8～P9間が3.54mと最も狭く、P3～P4間が4.6mと最大を示し、平均4.1mである。柱穴の形はいずれも長円形ないし円形を呈し、P

門田遺跡



第108図 5・6号土坑墓実測図 (1/30)



第109圖 條列英圖 (1/80)

6が67.5cmときわどて深く、その両側のP 5・P 7が17cm, 11cmと浅いのが注意される。主軸方位はN15°Eをさす。

(4) 挖立柱建物跡（図版56-1）

1号建物跡（第110図上・表13） D11区の台地中央部に位置する1間×1間の建物跡で梁間間340cm, 衍行間350cmとほぼ方形を呈す。占有面積は11.9m²で衍行方位はN20°Eを指す。柱穴の深さはP 2が16cm, P 4が21cmで平均18.75cmと浅い。

表 13 1号建物跡計測表 (単位cm)

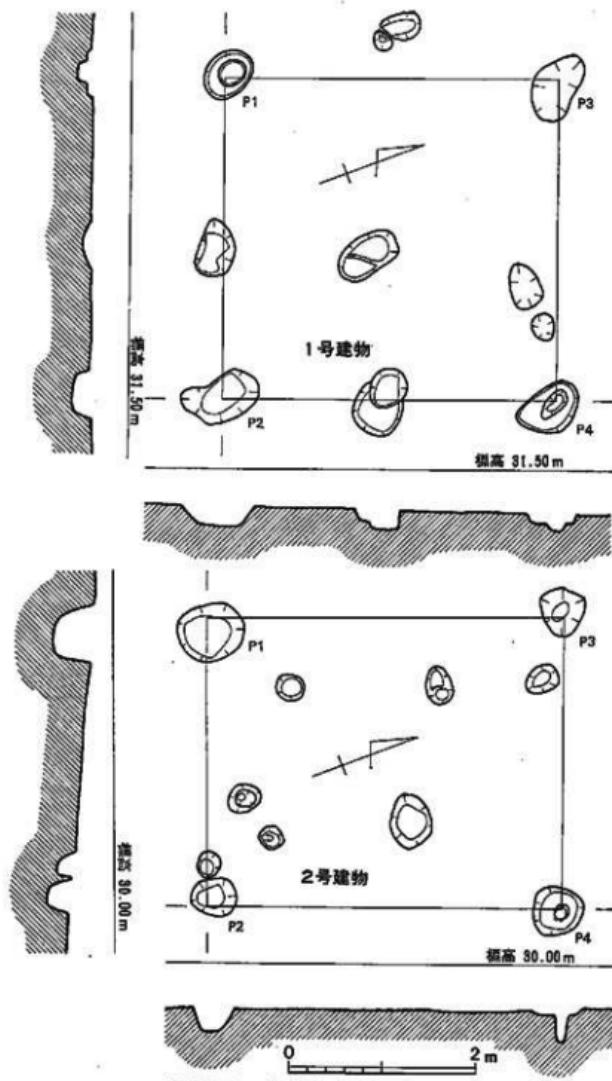
1間×1間		梁間間		衍行間		P	深さ	長径	短径
P 1	P 2	340.0	P 1	P 3	345.0	1	18	58	44
3	4	340.0	2	4	355.0	2	16	14	46
平均		340.0	平均		350.0	3	20	76	48
						4	21	70	49
						平均	18.75	69.5	46.75

2号建物跡（第110図下・表14） A10・11にかかる1間×1間の建物跡で、5号住居跡の北側に位置する。梁間間300cm, 衍行間388cmを測り、衍行方向はN20°Eと1号建物跡と一致し、柵列とは5°西に寄る。P 4は二段掘りの柱穴で、他は素掘りである。深さは平均36.5cmを測り、占有面積は11.64m²。

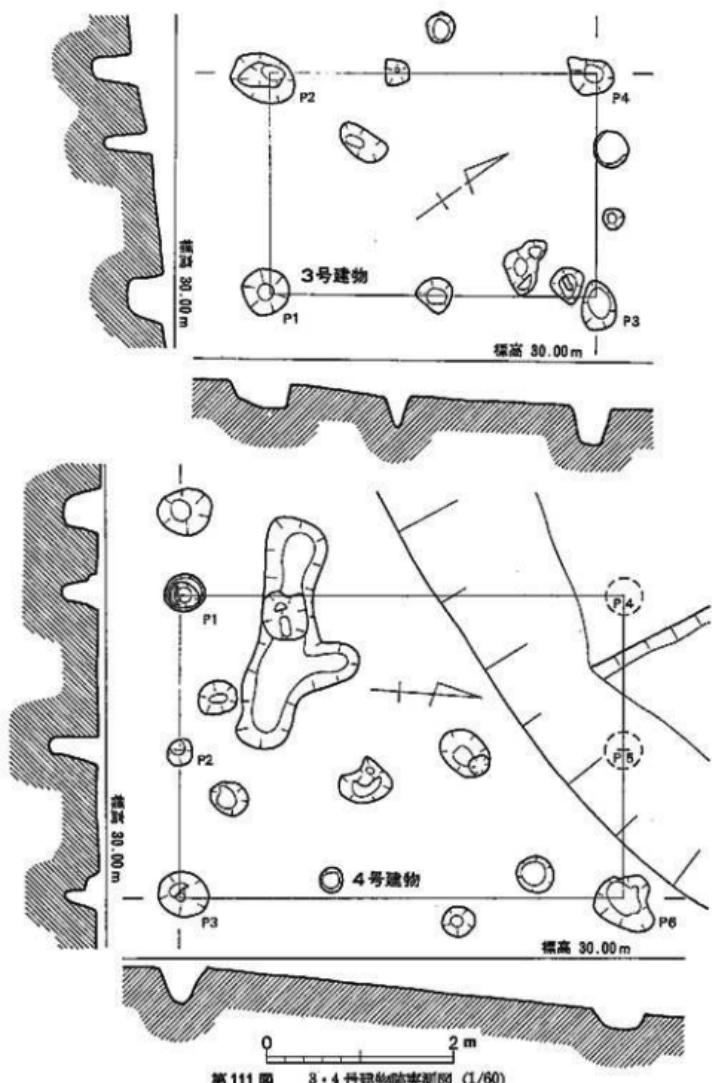
表 14 2号建物跡計測表 (単位cm)

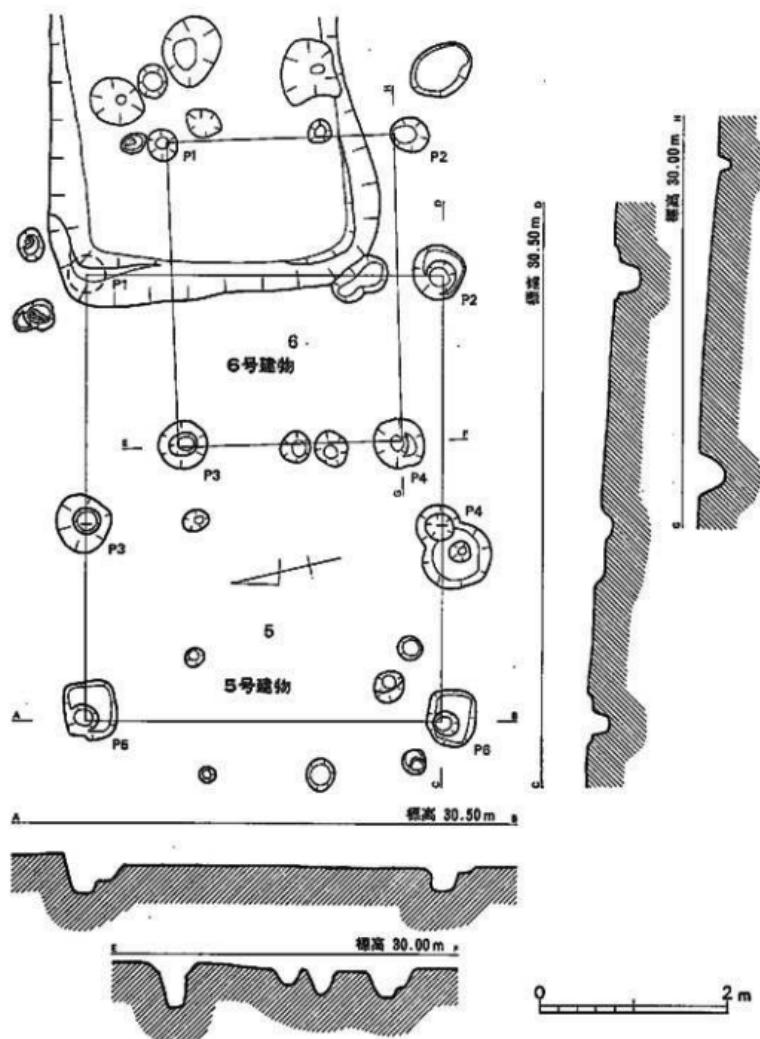
1間×1間		梁間間		衍行間		P	深さ	長径	短径
P 1	P 2	280.0	P 1	P 3	380.0	1	43	71	60
3	4	320.0	2	4	396.0	2	38	52	48
平均		300.0	平均		388.0	3	25	50	40
						4	40	56	51
						平均	36.5	57.25	49.75

3号建物跡（第111図上・表15） B10区、台地の北端側に位置する1間×1間の建物跡で梁間間240cm, 衍行間370cmを測る。衍行方位はN36°Eを指し、占有面積は8.88m²と小振りな建物である。P 1が12.5cmと浅い。



第110図 1・2号建物跡平面図 (1/60)





第112図 5・6号建物実測図 (1/60)

表 15 3号建物跡計測表 (単位cm)

1間×1間		梁間間		桁行間		P	深さ	長径	短径
P 1	P 2	235.0	P 1	P 3	375.0	1	12.5	50	49
3	4	245.0	2	4	365.0	2	44	58	58
平均		240.0	平均		370.0	3	39	53	37
						4	47	47	36
						平均	35.625	54.5	45

4号建物跡 (第111図下・表16) 3号建物の西側に位置する1間×2間の建物跡で、梁間に中柱を持っている。北側の柱穴は台地の削平により存在しない。梁間間370cm、桁行間475cmで、梁間柱間はP 1-P 2, P 2-P 3間とも185cmを測る。桁行方位はN5°Wを指し、占有面積は17.6m²。

表 16 4号建物跡計測表 (単位cm)

1間×2間		梁間柱間	梁間間	桁行間		P	深さ	長径	短径
P 1	P 2	185.0	370.0	P 1	P 4	470.0	1	40	44
2	3	185.0		2	5	475.0	2	54	32
4	5	—	—	3	6	480.0	3	36	54
5	6	—		平均		475.0	4	—	—
平均		185.0	370.0				5	—	—
							6	20	68
							平均	37.5	49.5
									44

5号建物跡 (第112図上・表17) 建物6ならびに4号住居跡と重複した建物跡でB11区に位置する1間×2間の建物跡である。P 1は発掘中に気づかずに入ってしまったので、4号住居跡の北西壁を切っている。梁間間380.1cm、桁行間475.5cmで占有面積は18.1m²と建物群中で最も大きい。桁行柱間は東側つまりP 1-P 3, P 2-P 4間が260cm、西側P 3-P 5, P 4-P 6間が210cmと相違がみられ、間仕切りによるものと思われる。柱穴は長径60cm内外と大きいが、深さはP 5の57.5cmを除けば、全体に浅い。桁行方位はN77°Wであるが、柵列とは梁間方位で一致する。

6号建物跡 (第112図下・表18) 建物5と同様に4号住居跡と重複して位置する1間×1間の建物跡で、梁間間242cm、桁行間326cm、占有面積7.9m²を測る。柱穴はP 2が14cmと極

門田遺跡

端に浅く、他は50cm近い。桁行方向はN79°Wと5号建物跡に近い。

表 17 5号建物跡計測表

(単位cm)

1間×2間		梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2 3 4 5 6 平均	380.0	P 1 P 3 3 5 2 4 4 6	262.0 214.0 265.0 210.0	476.0 475.0 475.5	1 2 3 4 5 6	— 30 20 10 57.5 23.1	— 58 64 48 64 60	— 56 60 42 55 52	— — — — — —
	376.0								
	386.0								
	380.1								
		平均		237.75	475.5	平均		58.8	53

表 18 6号建物跡計測表

(単位cm)

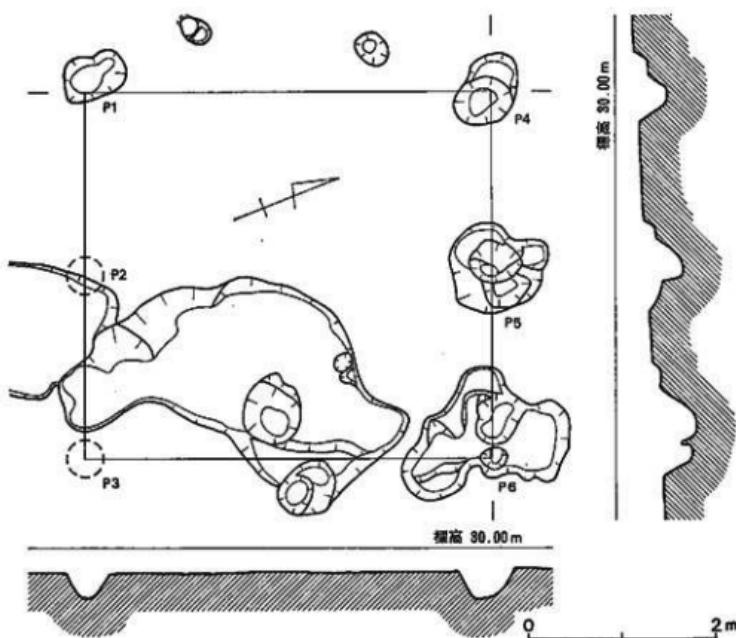
1間×1間		梁間間		桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2 3 4 平均	256.0	P 1 P 3 2 4	320.0 332.0	1 2 3 4 平均	47 14 49 47 39.25	34 41 53 52 45	31 37 51 52 42.75	— — — — —
	228.0							
	242.0							

7号建物跡(第113図・表19) B11区と建物群の内では最も南側に位置する1間×2間の建物で、北側の柱は攪乱によりとんでいる。梁間間390cm、桁行間432cmで占有面積16.9m²を測る。梁間柱は中間に存在する。桁行方向はN21°Eを指し、幅列より6°西へ振れる。

表 19 7号建物跡計測表

(単位cm)

1間×2間		梁間柱間	梁間間		桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1 P 2 2 3 4 5 5 6	—	— — 390.0 390.0	P 1 P 4 2 5 3 6	424.0 — 440.0	1 2 3 4 5 6	28 — — 36 43 35	73 — — 86 57 28	42 — — 56 56 24	— — — — — —
	—								
	—								
	195.0								
	195.0								
	195.0		390.0	432.0					
平均		平均		平均		平均		平均	



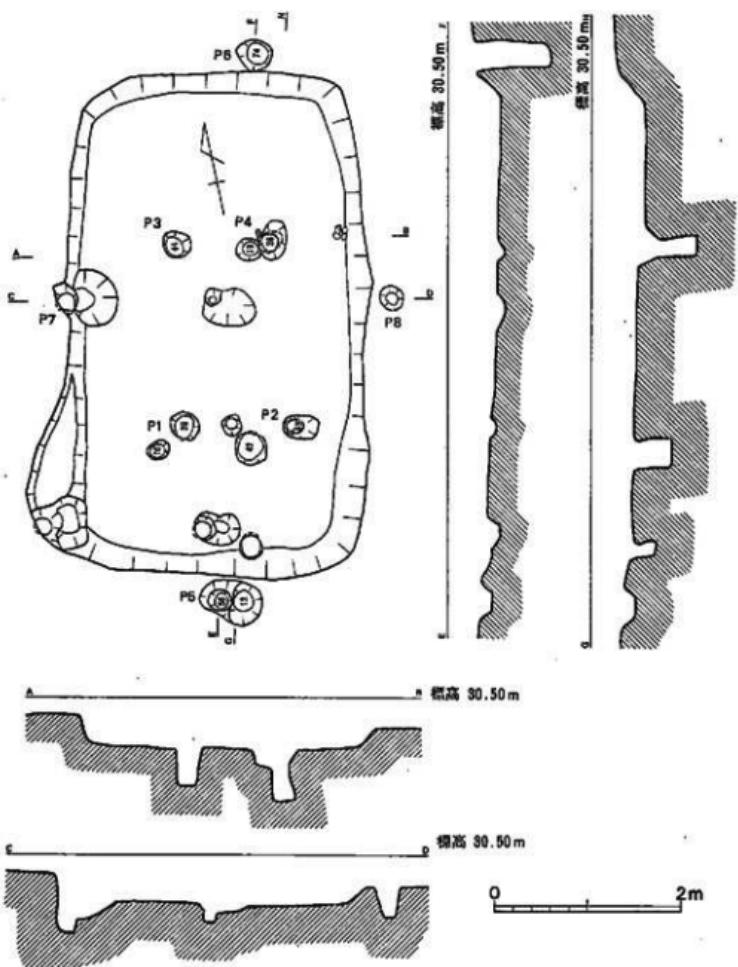
第113図 7号建物跡実測図 (1/60)

7棟の遺物跡のうち特に2・5・6・7は、朽行ないし梁間方位が柵列にほぼ平行している。また柵列・建物跡付近から出土する遺物は後述する中世の糸切り土師器・青磁・白磁・土鍋等であることから両者がお互いに係り合っていたことを示している。なお他にも柱穴が多数あるがまとまるものはない。

(木下 修)

(5) 壁穴住居跡

1号住居跡 (図版56-2, 第114図) 東西3.20m, 南北5.40mを測り両丸長方形を呈する壁穴住居跡である。戸・窓と思われる施設はない。床面もさほどたたきしめられていない。柱穴と思われるピットは屋内P1～4の4本と変則ではあるが屋外の塙ぎわ中央部にあたるピットP5～8が考えられる。遺物としては若干の土師器・青磁片のみである。



第114図 1号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

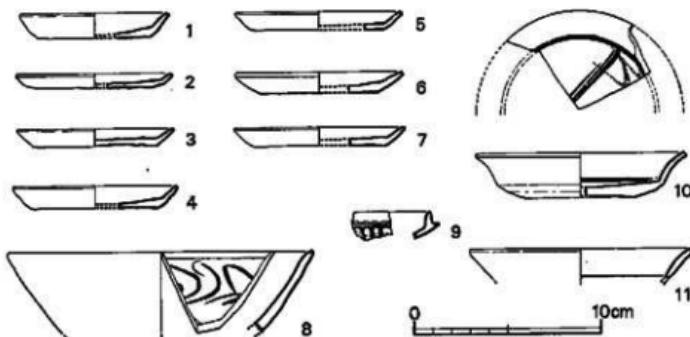
土師器皿（図版60、第115図1~7） 全て破片資料である。1は口径7.8cm、器高1.3cm、底径5.8cmを測る。体部は内彎ぎみで、口唇部にてわずかに外反する。器壁はやや厚い。2・3は口径8.2cm、器高0.8~0.95cmとほぼ同じ大きさで、2が体部にてわずかな屈折をなすのに対し、3は底部から直線的に外反する。器壁は薄い。4・5は口径8.6cm、器高1~1.1cm、底径6.6~6.8cmとほぼ同じ大きさのものである。4は体部中位にヨコナデによる凹みをもち、5はゆるやかに外反する。器壁は薄い。6・7は口径8.8~9cm、器高1cmとほぼ同じ大きさのもので、体部中位にて若干肥厚する特色を有している。底径は6が6.2cm、7が7cmと異なる。

以上の皿は形態・手法において大きな差はないが、底部に糸切り痕と板目をもつ1・3・4・6と糸切り痕をもつ二種にわかれる。色調は2が暗黄褐色を呈すほかは、すべて黄褐色で、胎土には少量の細砂を含む。

青白磁合子（図版60、第115図9） 青白磁の合子の身の細片資料である。外体部には蓮華座のスタンプがある。口唇部内外面・蓋受け部分と、体部下半には釉がかかっていない。いわゆる影青の合子といわれるものである。

青磁皿（図版60、第115図10） 青磁小皿の破片資料である。上げ底の底部に、中央にて屈折する体部がつき、ゆるやかに外反する口縁部につづくものである。内面には筆描き・墨描きによる文様が描かれている。釉は底部以外に施され、うすい緑灰色、胎土は灰色である。

刀子（図版60、第117図1） 基部の一部を欠く資料である。刃部長5cm、中央刃部幅0.9cm、背の厚さ0.35cmを測る。茎部の断面は長方形を呈す。

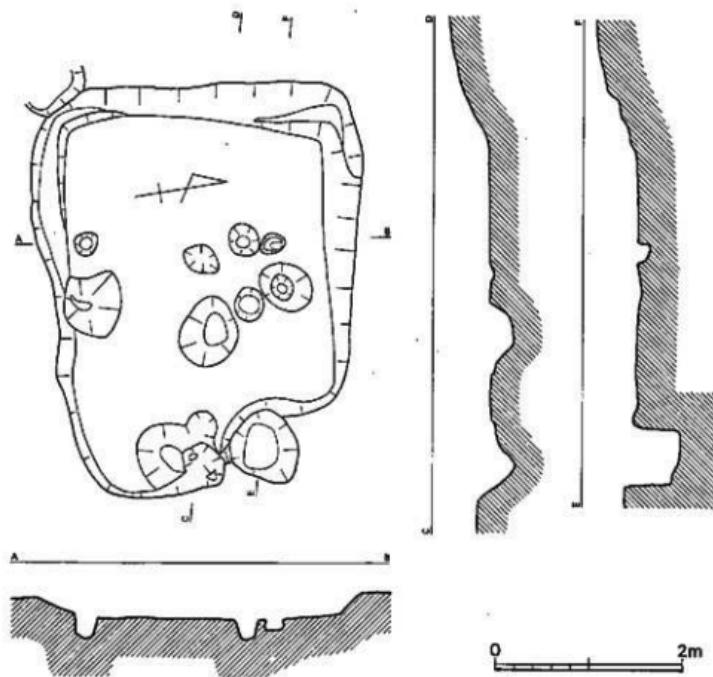


第115図 1・4・6号住居跡出土土器・青磁窓刻図 (1/3)

門田遺跡

以上の土器群から時期を決めることはかならずしも充分でない。現在、前川威洋、横田賛次郎、森田勉氏等により太宰府地区の歴史時代の土師器杯・皿を主体とした編年作業が精力的に進められている(註9)。それによると、本住居跡内出土の土師器皿は、前川氏のII-3類に比定され、鎌倉時代前期後半の年代が与えられる。

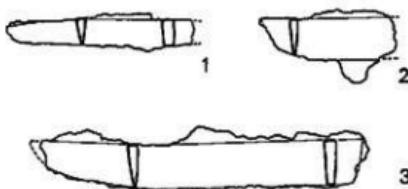
4号住居跡(図版57、第116図) 東西3.60m(張り出し部まで含めて4.40m)×南北3.40mを測る四丸長方形を呈する竪穴住居跡である。が・窓と思われる施設はなく、床面もさほどたたきしめられていない。また柱穴と思われるピットも検出できなかった。遺物としては、若干の土師器・磁器破片と刀子・砥石のみである。



第116図 4号住居跡実測図(1/60)

出土遺物

青磁模（図版60、第115図8） 高台部を欠く胴上半部の破片資料である。復原口径16.4cmを測る。内面は鐵書きの草花文が描かれ、口唇部には一条の圓線がめぐっている。釉は内外に施され黄緑色を呈す。胎土は灰色である。

**刀子**（図版60、第117図2・3）

2は切先部の資料で、刃部の幅は1.5cm、背の幅0.3cmを測る。3は切先端部を欠く資料である。3は刃部と茎部の区別が不明瞭で、茎部先端から3cmの所に刃部との境がある。復原全長17cm、刃部8cm、幅は中央部で1.6cm、背の厚さ0.4cmを測る。茎部の断面は、背が若干厚い長方形をなす。

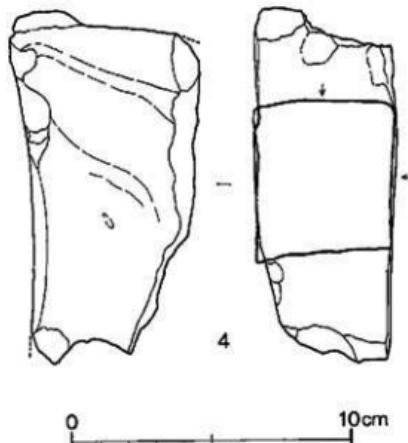
砥石（第117図4） 硬質砂岩製の砥石で、表面と右側面を研砥面として使用している。

6号住居跡（図版58、第118図）

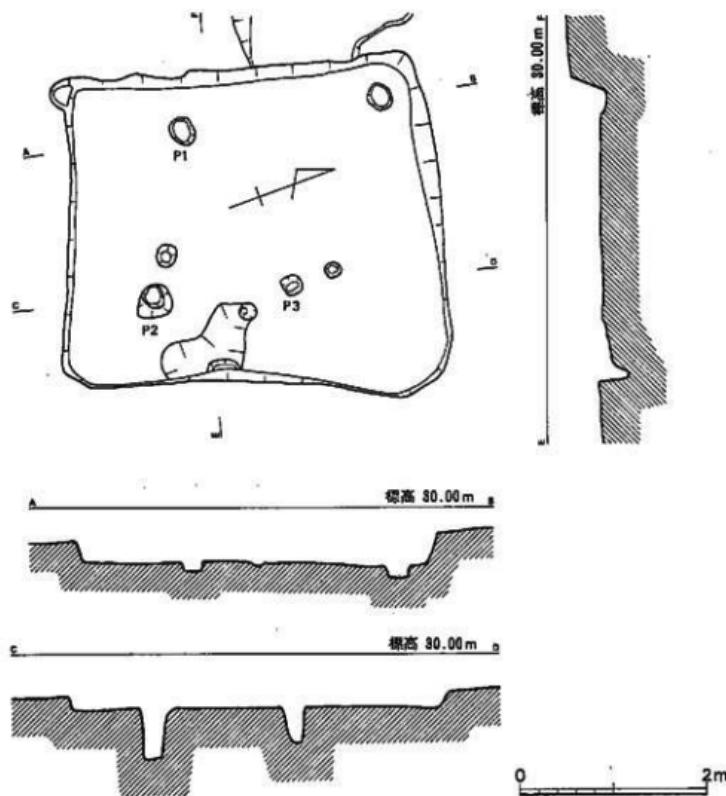
A10地区で発見された東西3.36m×南北4mを測る隅丸長方形を呈す竪穴住居跡である。北側にはならんで2号遺物跡があり、両者とも東側の構列に沿って建てられている。壁は西側で34cm、東側で16cmと浅くなり地形の傾斜に沿っている。他の例と同様に炉・竈と思われる施設もなく、床面もあまりたたきしめられていない。柱穴と思われるピットはP1～3の3個検出されているが、深さは一定しない。P2が58cmともっとも深く、P1は10cmと浅い。遺物としては若干の土師器・青磁破片のみである。

出土遺物

青磁皿（図版60、第115図11） 脇下半部を欠く青磁の小皿である。復原口径11.6cmを測る。内面身込の部分に一条の圓線がめぐる。釉は青灰色を呈し、内外に施釉されている。胎土は灰色で、作りはあまりよくない。



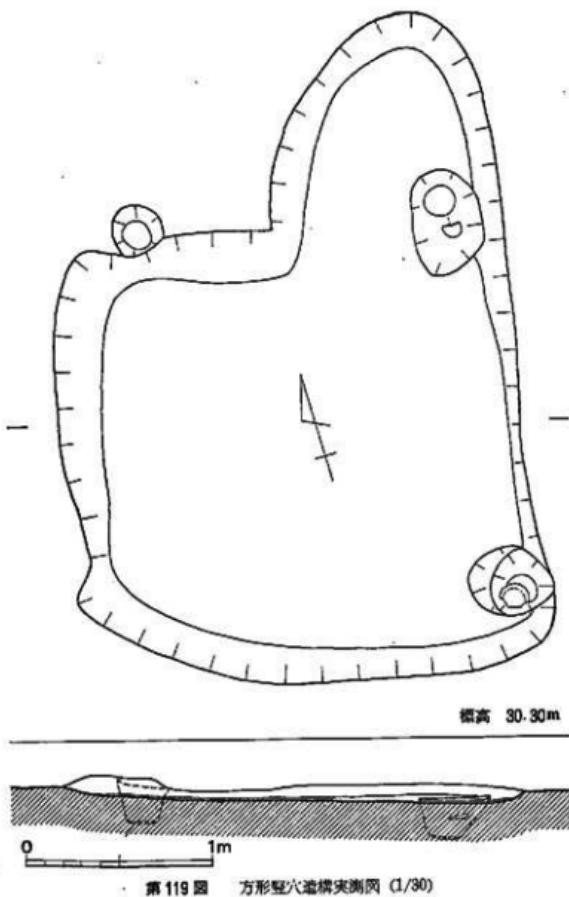
第117図 1・4号住居跡出土刀子・砥石実測図(1/2)



第118図 6号住居跡断面図 (1/60)

(5) 方形豊穴造構 (図版59, 第119図)

1号住居跡の南側にあり、北東隅が舌状に張り出した方形豊穴の造構である。東西2.46m×南北2.40m（張り出し部を含み 3.53m を測る。）上面がかなり削平されているためか壁高は9cmと浅く、壁は緩かな傾斜をもつものである。柱穴と思われるピットが3個ある。遺物として



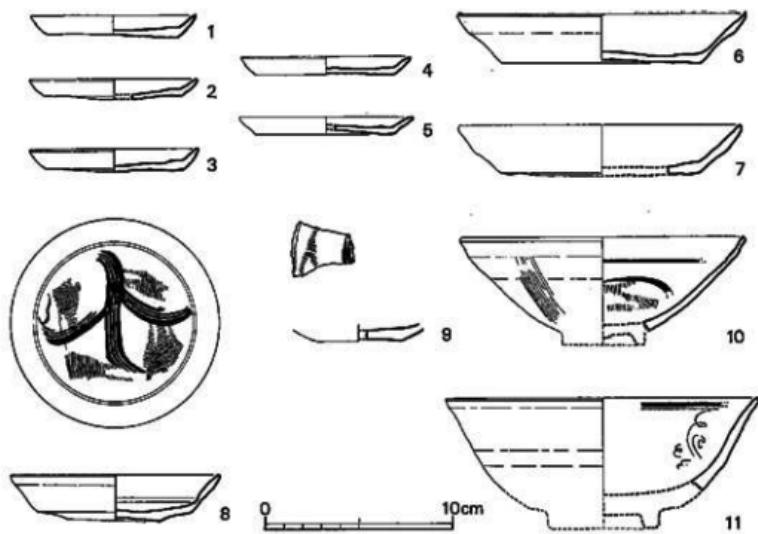
第119図 方形堅穴造構実測図 (1/30)

は、床面から土師器皿・杯・青磁片多数が出土した。

出土遺物

土師器皿 (図版61-1, 第120図1~5) 1は口径8.6cm, 器高1cmの小皿で、体部は内彌ぎみに外反する。器面の風化がはげしい。2・3・4は口径8.8~8.9cm, 器高1~1.2cmとほぼ同じ大きさのものである。いずれも底部は糸切り痕と板目を残していて、体部はココナデで内彌ぎみ

門田遺跡



第120図 方形堅穴口構出土土器類・青磁実測図 (1/3)

に外反し、口縁端部を丸く仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土にはかなりの細砂を含み焼成は悪い。5は口径9.2cm、器高0.95cmで上げ底ぎみの底部に外反する口縁がつくものである。器面の風化がはげしく模様不明。

土師盤杯 (図版61-1、第120図6・7) 6・7とも口径15.1~15.4cm、器高2.6cmとほぼ同じ大きさのものである。体部下半がヨコナデによりやや凹み、中位にてわずかに肥厚して内縁ぎみに外反する口縁部につづく。6は全体に墨跡が薄いのに対し、7はやや厚い。底部の切り離しは器面の風化がはげしく不明である。色調は6が暗茶褐色、7が茶褐色を呈し、胎土にはかなり細砂を含む。焼成は悪い。

青磁皿 (図版61-1、第120図8・9) 8は口径11cm、器高2.4cmの青磁小皿の完形資料である。いわゆる珠光青磁とよばれるもので、内面には櫛・筆書きによる文様が描かれ、身込の部分に1条の周線があめぐる。釉は青灰色を呈し、底部と一部体部にはかけられていない。胎土は灰白色をなし、細砂をかなり含み、器面には貯入がめだつ。作りのあまりよくないものである。9は底部の破片資料で、内面には櫛齒による文様が描かれている。釉は緑灰色、胎土は灰白色を呈す。

青磁碗 (第120図10・11) 10は高台を欠く破片資料で、復原口径15cm、復原器高5.8cmを測

る高台付青磁碗である。ゆるやかに内側する体部に、軽く外反させる口縁部がつくもので、体部外面には斜位の輪描文、内面には細い輪描きの雷光状文とツル草状の籠描文を組合せている。また、内面口縁下に1条の沈線がめぐっている。釉は緑黄色を呈し、体部下半にはかかっていない。胎土は灰色をなす。11は腹部上半の破片資料で、復原口径16.4cm、復原器高7cmの高台付青磁碗である。内側する体部にわずかに外反ぎみの口縁部がつくもので、内面には籠描きによるツル草状の文様が描かれている。釉は黄緑色、胎土は灰色を呈す。

以上の土器群から当窯穴の時期について若干触れてみたい。年代的にかなり正確におさえうる土器器皿・杯についてみると、皿の口径8.6~9.2cm、底径6.9~7.4cm、器高1~1.2cm、杯の口径15.1~15.4cm、底径10.5~10.6cm、器高2.65~2.75cmを測り、底部の切り離し手法は板目と糸切りである。また、包含層出土として掲載した18(第122図)も本窯穴に伴った可能性をもつ土器で、口径15.8cm、底径12cm、器高2.6cmを測り、底部には板目・糸切り痕を残し、同様の傾向をもっている。これは、前川氏のいうII-I類(註10)に属し、12世紀後半に比定されるものである。

これらに伴う磁器は白磁で、青磁はいまだ共伴しないと考えられている土器器群である。しかし、今回の調査では前記した青磁類が共伴したことは、これまでの考えよりさらに青磁の共伴する時期がさかのぼったことになる。でも、年代比定の基準になった土器器皿・杯の大半が復原実測を行った資料であるため、ここでは、その可能性を指摘するにとどめておきたい。

(7) 包含層出土の遺物

a. 丸瓦・平瓦

出土した瓦類は、全て丸・平瓦の破片資料である。従って模倣の規模などは知り得ない。叩文様は大きく格子目文と平行線文に分けられ、格子目文3種、平行線文8種に割分できる。他にすり消されて不明のもの1例がある。

格子目文 (図版61-2、第121図1~3) 1は凸面0.8×0.5cmの長方形格子目文、凹面は布目で、内外ともその大半は笠ですり消されている。焼成は硬質である。2は丸瓦の破片で、凸面は0.45×0.5cmの正方形格子目文、凹面は布目で、粘土板から切り離す時の糸切痕が明瞭である。凸面はその大半が笠ですり消されていて、わずかに格子目文を残すのみである。胎土には多くの砂粒を含む。3は0.25cmと小さい正方形格子目文で焼成は須恵質のものである。凹面は布目で、他と同様、凸面の大半が笠ですり消されている。焼成は硬質である。

平行線文 (図版61-2・62、第121図4~12) 4は幅0.4cmの太い平行線文で、凹面は布目のあと、青海波文の叩きが行われている。また、凹面の糸切痕も明瞭である。色調は褐色を呈し焼成は良い。5は幅0.3cmの浅い平行線文で、焼成は須恵質である。凹面は布目痕で粗く、糸

門田遺跡

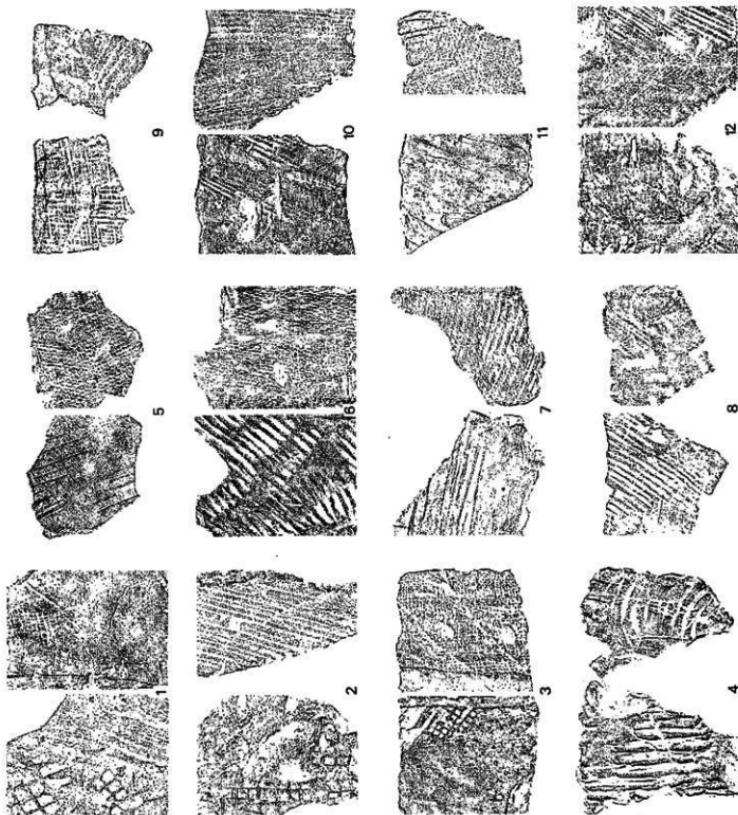
切痕は明瞭である。6は幅0.3cmの太目の平行線文で、凹面の布目痕は細い。色調は黄褐色を呈し、焼成は軟質である。7は幅0.3cmの浅い平行線文で、5と同様の叩文のようにもみえるが、ここでは別種とする。凹面の糸切痕が明瞭である。焼成は須恵質である。8は幅0.15cmの細めの平行線文で、凹面には細かい布目痕と粘土板糸切痕を残している。9は幅0.1cmの細い平行線文で、上端は箒面取りしている。凹面は布目で、上端を箒面取り消している。また、凹面には、斜位の布の総目がみられる。10は幅0.1cmの細い平行線文で、大半は箒面取り消されている。凹面は細かい布目で、粗い糸切痕もみられる。11は丸瓦の破片である。叩板の凹面の幅0.25cm、凸面の幅0.15cmの細めの平行線文で、その大半は箒面取り消されている。凹面は細かい布目で、糸切痕もみられる。12は凸面が完全にすり消されているため不明。凹面は少し粗い布目で、糸切痕も粗い。

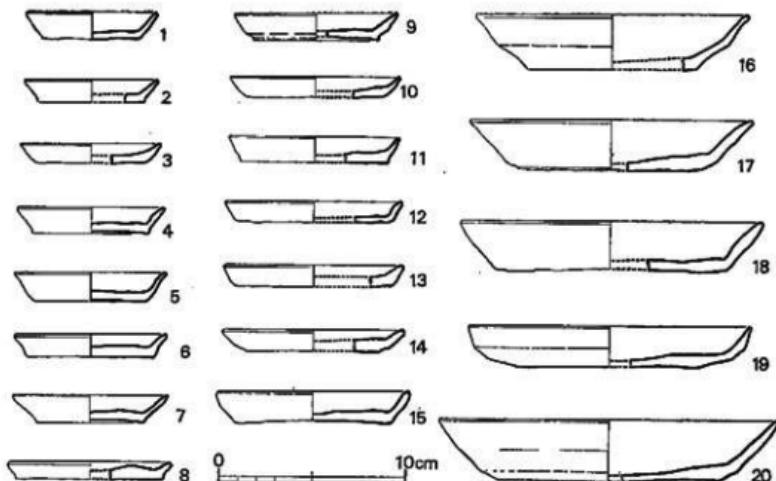
これらの丸瓦・平瓦類の格子目文や平行線文は、肥前・基肄城跡(註11)、筑前・塔原庵寺や豊前・垂水庵寺(註12)等で発見されているものと共通した叩文様である。とりわけ、3・5・7のように須恵器に近く焼成が堅緻で青灰色を呈す薄手の瓦の存在や、4の凹面にみられる青海波文のタキの存在は、大浦2号窯跡出土(註13)の瓦と共通するものであり、全体に古い瓦の特色をそなえている。

この種の瓦類は、門田遺跡谷地区の調査や西方100mの所にある柏田遺跡の調査で、かつて発見された上白水遺跡(註14)の山田寺系の八葉單弁軒丸瓦と同範の瓦が共伴している。また、上白水ウトロの丘陵斜面で道路建設中に2基の窯跡が発見され、同種の平瓦が採集されている。これらは前記した須恵器Vb期の土器を出す5号件居跡や、包含層出土の大半の須恵器に共伴するものと思われる。7世紀後半の年代が比定できよう。

b. 土師器

皿(図版63、第122図1~15) 15を除き、全て破片資料である。1・2は口径6.9~7cm、底径5.1~5.6cm、器高1.2~1.45cmを測るほぼ筒形のものである。色調は、いずれも黄褐色を呈し焼成はあまり良くない。底部の切り離し手法は不明。3は口径7.4cm、底径5.8cm、器高1.05cmを測る。色調は黄褐色を呈し、焼成は悪い。底部の切り離しは不明。4~7は口径7.8~8.2cm、底径5.6~6.6cm、器高1.25~1.55cmを測り、底部の切り離し手法は全て糸切りである。色調は全て黄褐色を呈す。8は口径8.7cm、底径7.9cm、器高0.95cmを測るもので、器高の最も小さい例である。器壁は厚く、内底部はミコナデにより隆起している。底部は糸切り離しである。9は口径8.6cm、底径6.6cm、器高1.45cmを測る。口径のわりに底径の小さいもので、体部と底部の境界は明瞭である。底部は糸切り離しで、色調は黄褐色を呈す。胎土・焼成とも極めて良好である。10・11は口径9cm、底径7.2~7.8cm、器高1.1~1.4cmを測る。体部は内窓気味にゆるやかに外反し、口唇部にてわずかに外反する特色をもつていて。底部の切り離し手法は、10が板目・糸切りで、11は糸切りである。12~14は口径9.4~9.6cm、底径7.0~8.3cm、器





第122図 包含層出土の土器器表測図 (1/3)

高1.1~1.15cmを測るほぼ同形のものである。底部の切り離し手法は、13が糸切りの他は不明。15は口径10.4cm、底径8.4cm、器高1.6cmを測るもっとも大きい例である。底部の切り離しは糸切りで、全体に器壁の厚い作りのものである。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。1・3・5~7・11・15が表土、2・12~14が2層、4・8が3層出土のものである。9がD13区出土である他は、A・B・C10~12区出土のもので、前記した掘立柱建物跡・竪穴住居跡等にかかわるものであろう。

杯(図版63、第122図16~20) 16は口径14.4cm、底径9cm、器高2.9cmを測る。全体に器壁は薄く、体部中位にてわずかに肥厚し段をなす。底部の切り離しは不明で、胎土・焼成とも悪い。17は口径14.9cm、底径9.8cm、器高2.7cmを測る。底部には板目・糸切痕を残し、器壁は全体に厚めである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。18は口径15.8cm、底径12cm、器高2.6cmを測る。体部内外はヨコナデ、内底部中央は不定方向のナデで仕上げた器壁の厚い作りのものである。底部の切り離しは板目・糸切りである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。19は口径15cm、底径9.4cm、器高2.1cmを測る。底部は上げ底氣味である。体部は中位にてわずかに肥厚し段をなし、薄く仕上げた口唇部へとつづく。底部の切り離しは糸切りである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。20は口径18cm、底径11.8cm、器高3.25cmを測る大形の杯である。色調は黄褐色を呈し胎土には多くの細砂を含み、焼成は悪い。

全て、B10・11区出土のもので、18・20が表土、16・17・19が2層出土のものである。

門田遺跡

c. 土師實土器

土鍋 (第123図1) 口縁部付近の破片資料で、復原口径29.5cmを測る。内側気味に外反する口縁部で、端部を丸くおさめている。外面は刷毛のあと、横窓削りし、内面は刷毛のままで、口唇部はヨコナデで仕上げている。表土層出土。

擂鉢 (第123図2~4) 2は胴上半部、3・4は胴部下半の破片資料である。2は復原口径30.6cmを測るもので、外面は斜位の刷毛、内面と口唇部はヨコナデ仕上げである。口唇部にはヨコナデによる凹線をもつ。小破片のため内面には櫛目条溝がみられないが、器形等から擂鉢と思われる。色調は黄褐色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。焼成は普通である。3・4とも内面に5条の櫛目条溝がある。色調は灰白色を呈し、焼成は良い。全て3層出土のものである。

d. 瓦質土器

土鍋 (第123図5~8) 5・7が口縁部付近、6が胴上半部、8が胴下部の破片資料である。5は復原口径26cmを測る少し小形のもので、内面には刷毛の痕跡を残している。6は復原口径27.4cmを測る。体部は直立気味に外反し、口縁端部を丸くおさめている。体部外面は斜位の刷毛、内面は横位・斜位の刷毛で仕上げ、口唇部はヨコナデしている。外面灰色、内面黒灰色を呈す。7は復原口径31.7cmで、口縁部に帯状の貼付け凸帶を有するものである。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成は普通である。8は内外とも刷毛整形した暗灰色を呈すもので、焼成は良い。7が表土層、5・6・8が3層出土のものである。

e. 白磁

壺 (図版64-1、第124図1) 口径9.8cmの玉縁の口縁部をもつ破片資料である。釉色は淡灰色を呈し、器面には貫入がみられる。3層出土。

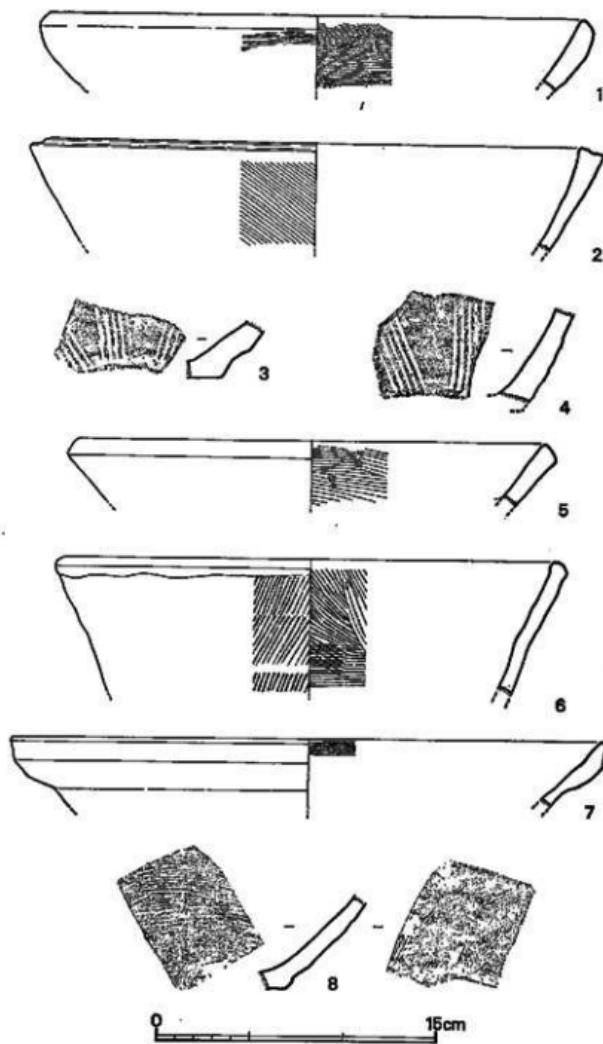
椀I類 (図版64-1、第124図2・3) 2は口縁部、3は胴下部の破片資料である。2は口径14cmの玉縁の口縁をもつもので釉色は白色を呈す。3は底径6.4cmの上げ底の底部で、体部内面に1条の沈線がめぐる。釉色は灰白色をなし、体部外面と高台部には施されていない。两者とも2層出土。

椀II類 (図版64-1、第124図4) 高台の底部を欠く破片資料で、口径17.1cmを測る。やや内巻しながら延びる胴部を口縁部で引きあげて軽く外反させた形態である。釉色は淡灰色をなし、胎土は乳白色である。3層出土。

皿 (図版64-1、第124図5・6) 5は底部を欠く破片資料で、口径10.8cmを測る。釉色は淡白色で、口縁端部は釉のかからない、いわゆる口禿げ状を呈する他は、内外面とも施釉されている。胎土は乳白色を呈す。2層出土。6は底部の破片資料で、復原底径7.6cmを測る。釉色は淡青白色をなし、内外面に施釉されている。胎土は淡灰色。2層出土。

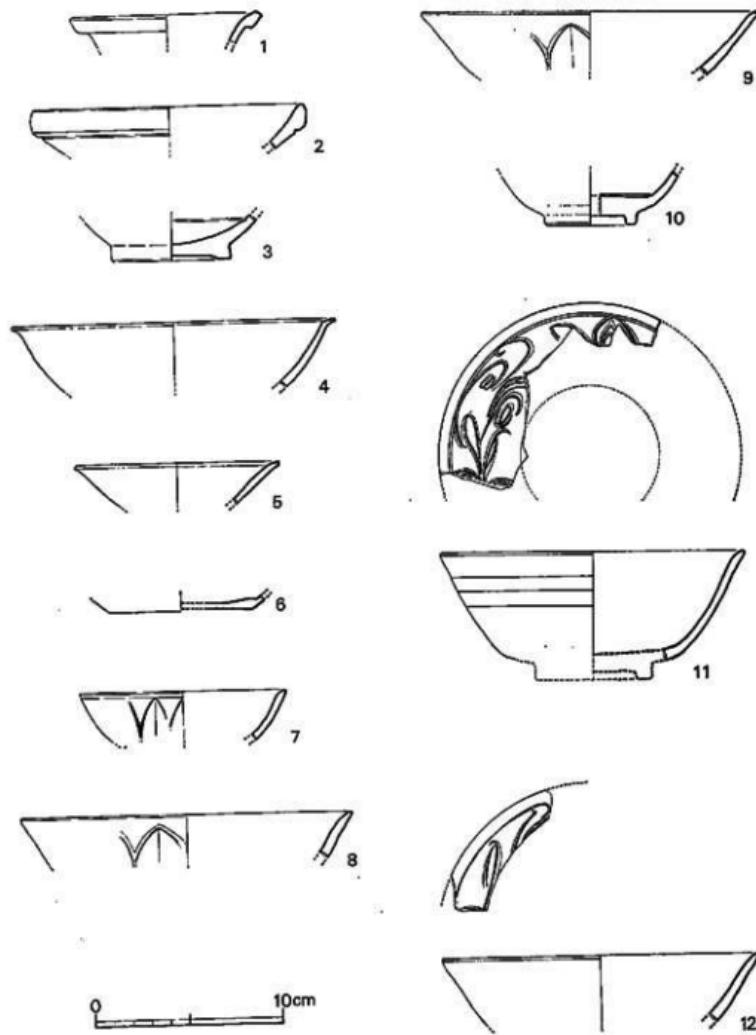
f. 青磁

〔A類〕 いわゆる龍泉窯系のもので、体部外面に蓮弁文を有するもの。



第123図 包含層出土の土器質・瓦質土器実測図 (1/3)

門田遺跡



第124図 包含層出土の白磁・青磁実測図 (1/3)

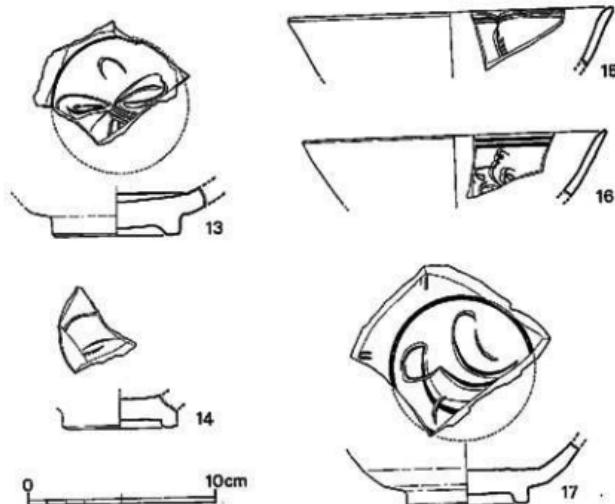
楕（図版64-2、第124図7～9） 7は脣上半部の破片資料で、復原口径10.8cmを測る。体部外面には葉先の尖った細めの蓮弁文を有し、釉色は淡緑色を呈す。高台のつくものと思われる。8は脣上半部の破片資料で復原口径17.4cmを測る楕で高台のつくものと思われる。体部外面には広めの蓮弁文があり、釉色は淡緑灰色を呈す。胎土は灰色をなし釉のかかりが厚い。9も脣上半部の破片資料で復原口径17.8cmを測る楕で、高台のつくものと思われる。体部外面には蓮弁文を有し、釉色は緑灰色、胎土は灰色を呈す。1・3が表土、2が2層出土。

〔B類〕 いわゆる龍泉窯系のものではあるが、体部外面に蓮弁文を有しないもの。

楕（第124図10） 脣下半部の破片資料で、復原底径4.8cmを測る高台付の楕である。釉色は青灰色を呈し、高台部内面を除く内外に施釉されている。胎土は灰色。2層出土。

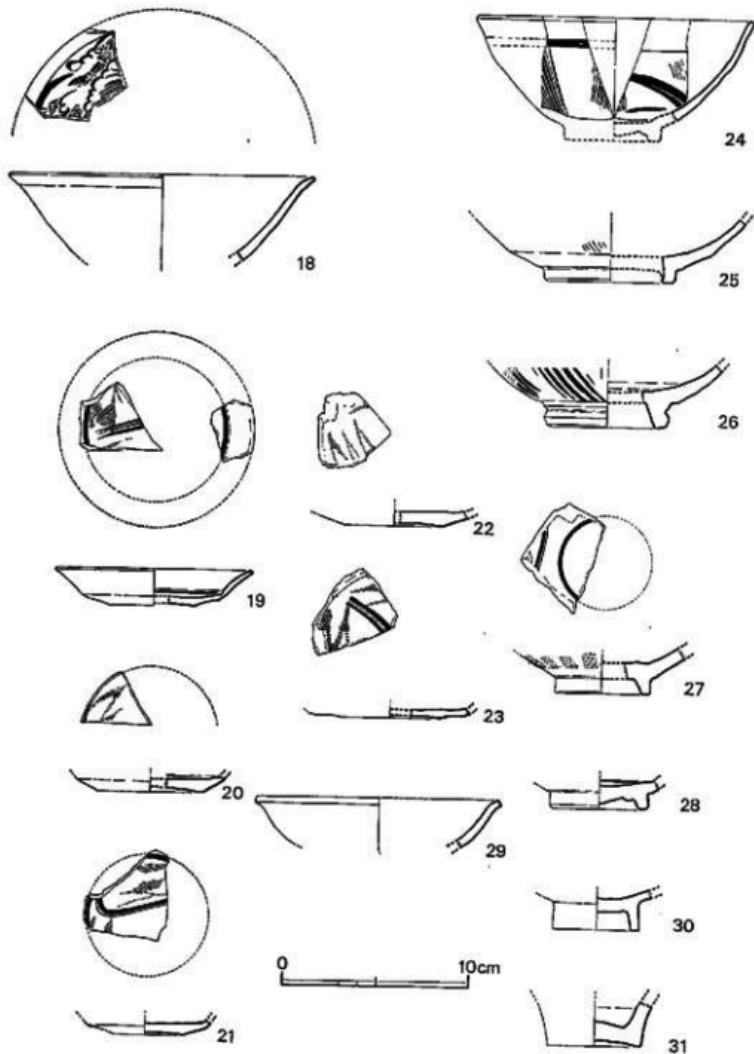
〔C類〕 いわゆる龍泉窯系のもので、内面に片彫りの草花文が描出されているもの。

楕（図版65-1、第124図11・12、第125図13・14） 11は底部を欠く破片資料で、復原口径18cmを測る楕で、ずんぐりとした高台のつくものと思われる。体部は、ゆるやかに内壁しながら外反し、口縁部をわずかに外反させている。体部外面には3条の沈線がめぐり体部内面には軟らかなのがびととした筆致で草花文様を描出している。片彫りの箋描文である。釉色は緑灰色、胎土は灰色を呈す。12は脣上半部の破片資料で、復原口径16.6cmを測る。高台のつくもの



第125図 包含層出土の青磁実測図(1/3)

門田遺跡



第126図 包合層出土の青磁・陶器実測図 (1/3)

と思われる。内面には草花文が描き出されていて、釉色は緑灰色を呈す。13は高台部の破片資料で底径6.8cmを測る。高台はずんぐりとした作りのもので、内底部には草花文様が描出されている。見込みの部分には1条の圓線があげてある。釉色は濃い黄緑色を呈し、高台部内面にはかけられていない。14も高台部の破片資料で、底径6.1cmを測る。底部内面には籠描きの草花文様が描かれている。釉色は緑灰色で、高台部内面には施釉されていない。11・13・14は2層、12は表土層出土のものである。

〔D類〕 いわゆる龍泉窯系のもので、内面体部が5区画され、その中に片彫りの草花文様が描出されたもの。

楕(図版65-2、第125図15~17) 15は肩上半部の破片資料で、復原口径17cmを測る。高台のつくものと思われる。体部内面には、5区画をなすと思われる籠描文がある。釉色は淡緑色を呈する。16も肩上半部の破片資料で、口径16cmを測る。体部内面にはツル草状の籠描文があり、口縁端部には5つの区画をなすと思われる2条の籠描文が描出されている。釉色は緑灰色を呈する。17は肩下部の破片資料で、底径6.4cmを測る。ずんぐりとした高台部をもつもので、内底部には草花文様が描出され、体部内面には5つに区画をなすと思われる籠描文がある。釉は内底部を除く全面に施され、黄緑色を呈する。胎土は灰色を呈し、外外面に貢入がみられる。

〔E類〕 いわゆる竈泉窯系のもので、体部内面に片彫りの草花文と細い円彎状の籠描文を組合せて描出されているもの。

楕(図版65-2、第126図18) 底部を欠く破片資料で、復原口径16.1cmを測る。体部は内壁気味に拡がりながらたちあがり、口唇部を軽く外反させる形態である。釉はうすくかかり、緑灰色である。

〔F類〕 いわゆる同安窯系のもので、一般に珠光青磁と呼称されているもの。

皿(図版66-1、第126図19~23) 19は体部上半と、底部の部分破片で、復原口径10.4cm、器高2cm、底径4.6cmの無高台のやや上げ底状を呈するものである。身込みの部分には1条の圓線があげてある。内底部には籠描文と柳葉文が描出されている。釉は外底部を除く全面に施され、青灰色を呈する。20は底部の破片資料で、復原底径5.6cmを測る。上げ底状の底部をもつもので、内底部には柳葉文が描かれ、身込みに1条の圓線があげてある。釉は底部を除く全面に施され、灰緑色を呈する。21は体部下半の破片資料で、復原底径3.5cmを測る。内底部には籠描文と柳葉文が描出され、身込みの部分に1条の圓線があげてある。釉は底部を除く全面にみられ、青灰色を呈す。22は底部の破片資料で、復原底径5.2cmを測る。底部は上げ底状で、釉は灰緑色を呈し、底部を除く内外に施されている。器面には貢入がみられる。23は底部の破片資料で、復原底径5.2cmを測る。他と同様に底部は上げ底状をなし、内底部には籠描文と柳葉文が描出されている。身込みの部分に1条の圓線があげてある。釉色は緑灰色を呈し、器面の内外は貢入

門田遺跡

入が目立つ。

椀(図版66-1, 第126図24~28) 24は高台を欠く胴上半部の破片資料で、復原口径14.6cmを測る。口縁部外面に1条の太い沈線があぐり、体部外面には模描文が施され、口縁部内面には1条の圓線があぐり、体部内面は筆描文と模描文が組合せて描出されている。釉は内外に施され、緑黄色を呈する。25は胴下半の破片資料で、復原底径6.8cmを測る。体部外面には模描文がみられ、釉は外底部下端から底部を除く内外面に施され、淡緑灰色を呈する。26は胴下半の破片資料で、復原底径6.6cmを測る。わずかに外反気味の高い高台で削り出しの作りは無造作である。体部外面に粗い模描文が描出されている。釉は内底部と底部一帯には施されず、黄緑色を呈する。27は底部の破片資料で、復原底径5.2cmを測る。体部外面には細い模描文が描かれ、釉は底部付近を除き、内外に施され、緑黄色を呈す。28も底部の破片資料で、復原底径5.2cmを測る。高台の削り出しの作りは無造作で、外底中央部を凸状に削り残している。釉色は緑灰色を呈する。

〔その他〕

椀(第126図29・30) 29は胴上半部の破片資料で、復原口径12.8cmを測る。釉は内外に施され、淡緑灰色を呈す。器面には買入がみられる。30は底部の破片資料で、底径4.6cmを測る粗雰なつくりのものである。釉色は緑灰色を呈する。器面には多くの買入がみられる。

g. 陶器

壺(第126図31) 底部の資料で、底径5cmと小さく上げ底状をなす。内外全面に施釉され、灰緑色を呈する。

以上のように、門田地区出土の白磁をI・II類に、青磁をA~F類に分けた。この分類は、基本として最近、精力的に研究を進められている亀井明徳氏(註15)の分類に従ったが、一部細分し、新たにD類(いわゆる竜泉窯系のもので、内面体部が5区画され、その中に片彫りの草花文様が描出されたもの)を加えた。遺構内出土のものも含め、図示した資料は39個体と少ないが、他の破片資料を含めると、114個体分になる。それを類別すると表20のようになる。A~E類はいわゆる竜泉窯ないしはその影響を受けた窯の製品とみられるグループのもので、

表 20 門田地区出土磁器点数と比率

青 磁					白 磁	青白磁	合 計
竜 泉 窯 系					同安窯系	景德鎮窯系	
A	B	C	D	E	F		
23	3	21	10	3	39	14	1 114点
20.2	2.6	18.4	8.8	2.6	34.2	12.3	0.9 100%
52.6							

52.6%と過半数を占める。次にF類の同安系のものが34.2%，白磁が12.3%，景德鎮系のものである青白磁0.9%となっている。また、A～E類内の比率をみるとA類とC類がその大半を占めることが判る。将来、このような類別に対応する中国側の窯が明らかになれば、日宋貿易の実態と、さらにその中で供給された本道跡との関係が少なからず把握できるものとなろう。

h. 古銭（図版66-2, 第127図）

全て寛永通寶で、いずれ

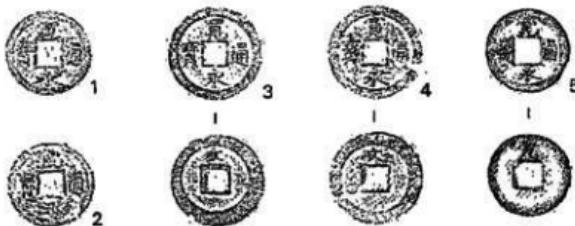
も寛文8年（1668）以降に
鋳造されたいわゆる新寛永
である。これらは大きく3
種類に分れる。1・2のよ
うに背文がなく、小型で、
字体が太字のもの、3・4
のように背に『文』の字の

ある細字のもの、5のように背に『元』の字のあるものである。とりわけ、3・4は一般に文
銭・大仏銭と呼ばれているもので、寛文8年（1668）～天和3年（1683）まで武藏國江戸深川
亀戸村で鋳造されたものであり、5は寛保元年（1741）に攝津國大坂高津新地で鋳造されたもの
であることがその背文から知られる（註16）。

これらの古銭は、未調査ではあるが同一台地上に多くの近世墓が存在していたことから、そ
れに伴ったものと考えられよう。

表 21 古銭計測表 (単位 mm, g)

No.	直 径	内 直 径	内面直径	厚さ	重 さ	備 考
1	22.9	19.3	6.9	1	2.70	
2	22.9	19.1	6.3	1	2.40	
3	25.2	20.0	6.2	1	3.45	背文『文』
4	24.9	19.0	6.4	1	2.10	背文『文』
5	22.8	18.8	6.9	1	1.70	背文『元』



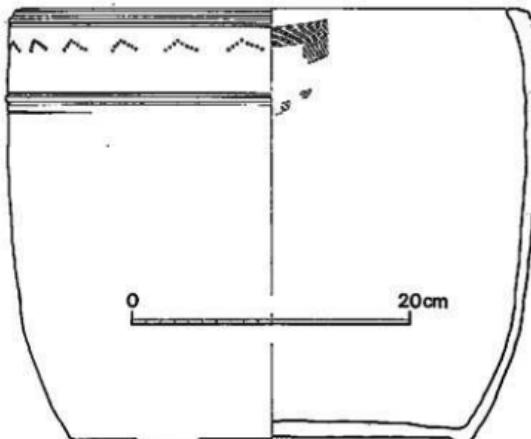
第127図 包合層出土の古銭拓影図 (2/3)

i. 近世火舎（図版66-2, 第128図）

三足の低い脚部をもつ火舎で、口径36.6cm、高さ31.1cmを測る。口縁部と体部上半に2条の貼付け凸帯をもち、その間に山形をなす刺突列点文が刻まれている。体部外面は丁寧に鉋磨きし、内面ナグで、底面は刷毛のままで仕上げている。一部、口縁部内面に斜位の刷毛目痕を残

門田遺跡

している。色調は黄褐色を呈す土師質のもので、胎土にはかなりの細砂を含むが、焼成は良好・堅緻である。67号発掘調査出土のものである。この種の火合の類例は筑紫野市大字武藏字八隈所在の八隈遺跡にある(註1)。この遺跡は貝原益軒著『筑前国統風土記』にみる江戸時代初期に小河義兵衛直常が「峰の隈」をきり開いて邸宅をかまえたとされる屋敷跡の一部の可能性が指摘されているもので、本例も未調査ではあるが、周辺に多くの近世墓が存在していたことからも、ほぼ同様の時期を比定することは可能であると思われる。(井上裕弘)



第128図 包含層出土の近世火合実測図(1/4)

- 註1 甲野勇・岡田淳子他「八王子中田遺跡」八王子市中田遺跡調査会 1966
2 宮小路賀宏氏の教示による
3 紋による木棺の復原にあたっては丸山康晴氏の協力に負うところが大きい。
4 宮小路賀宏「津古内掘第三次(遺構篇—歴史時代の遺構)」福岡県教育委員会 1972
5 神原英朗編「岩田古墳群」「岡山県营山陽新住宅街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告」6 山陽団地埋蔵文化財調査事務所 1976
6 鈴木直治氏調査 宮小路賀宏氏の教示による。
7 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館 1976
8 柳田康雄「若八幡宮古墳」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」2 福岡県教育委員会 1971
9 前川威洋・新原正典「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊跡(1)」「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」2 福岡県教育委員会 1975
前川威洋・新原正典「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊跡(3)」「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」3 福岡県教育委員会 1976

- 横田資次郎・森田頼「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『研究論集』2 九州歴史資料館 1976
- 10 註9と同じ
- 11 小田富士雄・眞野和夫・柳田康雄「野原・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 福岡県教育委員会 1970
- 12 斎田勉・高橋章・龟田修一他「遠水廃寺」『新吉富村文化財調査報告書』2 新吉富村教育委員会 1976
- 13 註11と同じ
- 14 小田富士雄「九州に於ける山田寺系壇瓦の発見」『歴史考古』6 1961
- 15 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析—大宰府出土品を中心として—」『考古学雑誌』58-4 1973 なお磁器の分類にあたっては、亀井明徳氏から多くの教示を得た。記して謝意を表したい。
- 16 小川浩綱「寛永通宝鉄鑄」日本古鏡研究会 1972
- 17 松崎有一郎・酒井仁夫・松村一良「福岡県筑紫野市所在八戸遺跡の調査」『九州鉄貨自動車道関係埋蔵文化財調査報告』7 福岡県教育委員会 1976

7. 門田地区出土鉄滓及び 羽口先端溶着鉄滓の調査結果

(1) はじめに

門田遺跡の門田地区は、昭和47・48・49年の3ヵ年にわたって調査され、先土器・绳文・弥生・古墳・歴史時代（平安末～鎌倉初頭を中心とする）の複合遺跡と確認されたところである。ここでは、製鉄遺構の検出は出来なかったが、古代製鉄に関係すると思われる鉄滓及び羽口破片が採取されている。今回、福岡県教育委員会よりそれら試料の提供を受けたので、鉢土組成と化学組成の調査結果を取りまとめて報告する。

なお、門田遺跡門田地区より約150m程度へだてた北側台地の辻田地区（F5区）では、製鉄遺構が発掘されており（註1）、また、筆者らによって、製鉄炉跡に関連した鉄滓・木炭・砂鉄・炉壁粘土などの概略を昭和50年度の概報に報告している（註2）。

(2) 試料及び調査項目

門田地区より出土した鉄滓及び羽口先端部溶着鉄滓の分析調査を行なった。試料は表22に示すように、7地区より出土した鉄滓であり、そのうち、B11区では鉄滓と羽口が含まれてい

る。

調査項目は、(i) 肉眼観察。(ii) 光学顕微鏡による鉱物組成の観察。(iii) E.P.M.A. 分析(Electron Probe Microanalyser)。(iv) 湿式法による化学分析。(v) 発光定性分光分析などである。

試料の調製は、鉄岸の場合、十分に水洗した後乾燥して2分割し、顕微鏡試料と分析試料に分けた。羽口先端溶着鉄岸は、量的に少なく、ガラス質を主成分としているので、微量削り落して、顕微鏡試料と分光分析試料にあてた。

表 22 供試鉄岸の層面及び調査項目

符 号	トレンチ	層 位	採取月日	外観及び性状(重量)	調査項目			
					外観 写真	顕微鏡 観察	EPM. A分析	化 学 分 析
A 6	A-11	3 層	73.12.03	多孔質比重大(100g)	○	○		○ ○
B 6	B-12	"	73.12.22	" 粘土付着(35g)	○	○	○ ○	○ ○
C 6	B-11	"	73.12.11	緻密質 (125g)	○	○		○ ○
D 6	C-11	1 層	74.06.22	多孔質 (215g)	○	○		○
E 6	D-13	木棺墓床間	74.09.12	緻密質(岩石状)(150g)	○	○		○
F 6	F-11~15	1 層	74.07.09	表面風靡 (85g)	○	○		○
G 6	7号住居壁 裏 土	73.09.20		緻密質 (78g)	○	○		○
1	B-11	3 層	72.07.22	羽口先端溶着鉄岸(54g)	○	○		○

(3) 調査結果

1. 肉眼観察(図版67~69)

A 6 : 表面は赤褐色を呈し多孔質。破面は黒色で気孔が多いわりには比重は大きい。

B 6 : 表面は赤褐色であり、裏面は焼粘土が付着している。多孔質。

C 6 : 表面は赤褐色を呈し、破面と共に緻密で気孔は少ない。破面はやや赤味を帯びている。

D 6 : 表面は赤褐色を呈し、肌は比較的なめらかである。破面は多孔質で黒味を帯び、木炭の喰み込み痕がある。鍛冶岸特有の巣に近い気孔が認められる。

E 6 : 表面部は打欠かれて観察出来ないが、裏面は浅い気孔がみられる。破面は一見岩石に似た緻密な肌を呈し、気孔はまったく認められない特異な鉄岸である。

F 6 : 表面は赤褐色を呈し、粗雑な肌を有している。破面は黒褐色で気孔が多い。

G 6 : 大塊の破片で表皮の状態は観察出来ないが、裏面は赤褐色で気孔がみられる。

破面は外気に接した個所に赤錆がにじみ出ているが、気孔はいたって少ない。破面は黒色と

赤黒色が混在している。

羽口破片：羽口先端部の1/4程度の破片である（第129図）。溶着鉄滓は、ガラス質を主体とするが、この中に、粒の粗い石英が混入している。使用粘土は、よく精製されており、耐火性、成型性の観点からか、細かい石英の投入が認められた。また、破面にはわらすき並びに2ヵ所に炭化モミが検出されている。

2. 観察組成（図版67～69）

A 6：鉱物組成は、大部分が成長した白色粒状の Wüstite (FeO) によって占められている。その間隙の局所に淡灰色柱状の Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が存在する。この組織は、鍛冶滓の可能性がありそうである。

B 6：同一試料であるが、構成鉱物が二分されるので、2視野撮影している。

B 6-1：少量の白色粒状の Wüstite (FeO) と淡灰色多角状結晶の Hercynite ($\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$)、それに灰色長柱状結晶の Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、黒色地の glass 質等と、白色と淡灰色の混在した顆粒状凝聚部分が存在するが、これは Wüstite (FeO) が砂鉄から還元される過程での組織であり、この試料の約 6 割を占めている。

なお、glass 質中には、Wüstite (FeO)、Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、含チタン glass 等の微結晶も認められる。

B 6-2：B 6-1 と同一試料であり、組織も類似したものであるが、こちらは Wüstite (FeO) がきれいに樹枝状に晶出している。

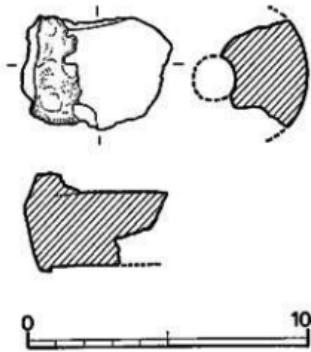
炉壁粘土の付着があったこの鉄滓は、Hercynite ($\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$) が存在することから製錬滓とみなされよう。

C 6：溶融スラグから晶出した Wüstite (FeO) が認められる。また、長柱状の Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) は初晶であり、かなり多量に存在している。製錬滓と考えられる。

D 6：A 6 程ではないが、かなり多量の Wüstite (FeO) が成長した組織である。Wüstite (FeO) の粒間には、長柱状の Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が存在している。鍛冶滓だろうか。

E 6：樹枝状の微量 Wüstite (FeO) と短柱状の大結晶として多量に存在する Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、その間隙に Wüstite (FeO)、Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ 、棒状細片)、含チタン glass 等の微結晶から構成された共晶部が認められる。

この鉄滓は、Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) の結晶の発達度からみて、徐冷滓と思われる。製錬滓



第129図 羽口実測図 (1/2)

門田遺跡

であろう。

F 6 : 白色粒状の Wüstite (FeO) とかなり成長した初晶 Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_3$) が存在する。製錬滓だろう。

G 6 : かなり多量の Wüstite (FeO) と、その中に微量の含チタン粒子（灰色）が認められ、Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_3$) は成長した状態で存在している。製錬滓だろう。

1 : 羽口先端に溶着した鉄滓であり、その鉱物組成は大部分がガラス質である。また、極く一部に白色微粒子の金属鉄 (Metallic Fe) が認められる。

3. E. P. M. A 分析 [Electron Probe Microanalyser] (図版70)

別名X線マイクロアナライザ分析と呼ばれる分析法でもって、試料B6の鉱物組成の同定を行なった。顕微鏡組織 (B6-1) と同一視野で上端一部の組織を分析している。

分析元素は、鉄 (Fe), アルミニウム (Al), けい素 (Si), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg), チタン (Ti), バナジウム (V), 酸素 (O) 等である。分析結果を、図版70に示す。白色微小粒子が強く集中していれば、該当元素が検出されていることを表わしている。

検出元素としては、鉄 (Fe), アルミニウム (Al), けい素 (Si), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg), 酸素 (O) 等が明瞭であり、チタン (Ti) は微量、バナジウム (V) は、ほとんど認められない。

これらの各元素は、いずれも酸化物または化合物として存在することから、例えば鉄 (Fe) の濃い所は、けい素 (Si), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg) が淡いといった傾向が認められるが、注意すべきは、いくつかの元素が組合わされて鉱物組成を構成している点である。

顕微鏡組織で観察された白色粒状の Wüstite (FeO) は、鉄 (Fe) と酸素 (O) の重なりとなり、前述したように、けい素 (Si), アルミニウム (Al), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg) 等とは濃度を異にする。しかし、多角形結晶の Hercynite ($\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$) は、鉄 (Fe) とアルミニウム (Al), 酸素 (O), それに微量のチタン (Ti) によって形成されていて、同じ鉄化合物でも、Wüstite (FeO) と Hercynite ($\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$) では、はっきりと構成元素が変わっているのが確認できる。

また灰色長柱状の Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_3$) も、鉄 (Fe) とけい素 (Si), マグネシウム (Mg), 酸素 (O) から構成されているのが判る。

地の濃灰色ガラス質相は、カルシウム (Ca), アルミニウム (Al), けい素 (Si), 酸素 (O) から成っている。

なお、バナジウム (V) が、明瞭な形で検出されなかったのは、含有量が痕跡程度のためであろう。

以上のように、各検出元素は顕微鏡組織で観察した鉱物組成とよく対応していることが確認出来た。

4. 化学組成

①化学分析結果

湿式法による定量分析結果を表23に示す。A6からG6までの7個の鉄滓は、いずれも全鉄(Total Fe)が45.7~62.3%と高目であり、造洋成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)は13.6~35.4%と低目である。この結果から鉄收率はあまり良好とはいえない。

化学組成から製鉄原料を検討する場合、構成成分中の二酸化チタン(TiO_2)、バナジウム(V)、マンガン(Mn)、磷(P)、硫黄(S)、銅(Cu)等が目安になる。二酸化チタン(TiO_2)、バナジウム(V)が高目で、マンガン(Mn)、磷(P)、硫黄(S)、銅(Cu)等が低目のものは砂鉄であり、逆傾向にあるものは鉄鉱石と考えられている(註3)。

今回の調査試料は、二酸化チタン(TiO_2)およびトランプエレメント(微量元素)が全般的に低いことから、砂鉄であれば高品位の極低チタン砂鉄であろう。また、二酸化チタン(TiO_2)以外にバナジウム(V)が高目(小数第1位に数字のあるもの)の鉄滓は、砂鉄を原料とした製鉄滓と考えられ(註4)，これに該当するのは、C6, E6, G6である。

次に鉄鉱石使用の可能性が考えられる鉄滓として、残るのはA6・B6・D6・F6等である。これらは、二酸化チタン(TiO_2)0.56%以下、バナジウム(V)0.04%以下で非常に低目である。しかし、A6・D6は前述したように鉱物組成のWüstite(FeO)が成長粒であり、また、全鉄(Total Fe)が最も多く、A6は62.6%，D6は57.7%あり、造洋成分は極端に少なく前者は13.61%，後者は17.09%あり、このタイプの鉄滓は鐵冶滓と考えた方が良さそうである。

残るB6・F6は、酸化マンガン(MnO)0.15%, 0.08%, 硫黄(S)0.019%, 0.074%, 五酸化磷(P_2O_5)0.25%, 0.18%, 銅(Cu)0.004%等、微量元素が特別高目でもないので、これが鉄鉱石からの鉄滓かどうか、現時点では早急に判断は下せない。

わが国の古代製鉄での鉄鉱石の使用例として、滋賀県北牧野製鉄遺跡(註5)が挙げられる。鉄滓中に二酸化チタン(TiO_2)少なく(0.600~0.699%)、酸化マンガン(MnO 0.577~0.600%)、硫黄(S·0.511~0.948%)、銅(Cu·0.114%)が多いことから磁鉄鉱・赤鉄鉱を原料としたと考えているが、成因的にも門田南台地の鉄滓とは隔たりがある(鉱石は廣域により成因構成がかなり異なるので十分なる注意が必要)。

ここで、一考しなければならないのは、全鉄(Total Fe)が多くて造洋成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)が低目の鉄滓は製錬初期の排出滓の可能性があり、この時還元し易い赤鉄鉱などを装入して溶体を生成させ、次に真砂投入で本操業にかかるといった、近世たらの技術レベルに近い背景があったか否かである。

村上氏(註6)によると、月の輪古墳の出土鉄器は、原料として鉱石・砂鉄の混用であると唱えておられる。門田遺跡においても、その様な技術があったのであろうか。興味を呼ぶところである。

表 23 化学分析結果

(%)

符号	ブロック	層位	発掘年月日	全鉄 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化硅素 (SiO ₂)
A 6	A-11	第3層	73.12.03	62.6	0.29	63.5	18.5	7.5
B 6	B-12	"	73.12.22	46.8	0.29	47.6	13.6	18.7
C 6	B-11	"	73.12.11	50.5	0.58	52.0	13.6	17.8
D 6	C-11	1層	74.06.22	57.7	0.29	47.2	29.5	11.2
E 6	D-13	9号木棺 底床面	74.09.12	45.7	0.29	49.0	10.6	25.4
F 6	F11~15	1層	74.07.09	51.4	0.29	51.4	16.0	20.4
G 6	門田南 7号住	フク土	73.09.20	52.5	0.29	51.1	17.8	14.8
S	F 5~22		74.06.11	46.26	0.38	49.74	10.47	24.23

酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化磷 (P ₂ O ₅)
2.3	3.0	0.81	0.28	0.40	0.029	0.016	0.16
12.0	2.0	0.83	0.15	0.56	0.025	0.019	0.25
5.8	4.5	1.0	0.17	0.72	0.076	0.027	0.22
3.8	1.7	0.39	0.07	0.36	0.019	0.030	0.21
6.8	2.4	0.83	0.22	0.90	0.066	0.050	0.03
5.1	2.7	0.56	0.08	0.42	0.020	0.074	0.18
7.4	1.8	0.76	0.17	1.1	0.11	0.061	0.19
4.70	3.06	0.98	0.28	1.29	0.08	0.031	0.050

炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造渣成分	造渣成分	TiO ₂
				Total Fe	Total Fe
0.091	0.020	0.005	13.61	0.22	0.0063
0.119	0.017	0.004	33.53	0.72	0.0119
0.110	0.10	0.004	29.1	0.58	0.0142
0.213	0.015	0.032	17.09	0.30	0.0062
0.047	0.22	0.007	35.43	0.78	0.0196
0.177	0.040	0.004	28.76	0.56	0.0081
0.070	0.19	0.003	24.76	0.47	0.0209
0.106	0.240	0.002	32.97	0.71	0.0278

分析は新日鐵八幡製鉄所で行なった。

参考までに、辻田(F区)の製鉄炉内より採取した鉄滓(S)の成分をみてみると、全鉄(Total Fe) 46%、造渣成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) 33%、二酸化チタン(TiO_2) 1.29%、バナジウム(V) 0.24%等で沙鉄を原料とした製鉄滓と明瞭に推定できる。しかし、今回の南台地の7個の鉄滓とは、成分配分的にやや異なっている。この差異は何に起因するのであろうか。辻田以外に製鉄炉があったのだろうか。単なる操業年代のずれ、もしくは製鉄原料の違い等も考えられ、今後に残された研究課題になろう。

④分光分析結果

羽口に沿着した鉄滓の性格を確認するために、試料が少量ですむ分光分析を試みた。比較材として、A6・B6・C6 の各鉄滓を用いている。

分析結果を表24に示す。検出された元素は、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、クロム(Cr)、銅(Cu)、鉄(Fe)、カリウム(K)、マグネシウム(Mg)、マンガン(Mn)、ナトリウム(Na)、けい素(Si)、チタン(Ti)、バナジウム(V)等である。いずれも、化学分析で押えた元素であり、鉄滓を構成するものである。

羽口沿着鉄滓の試物組成は、顕微鏡で観察したようにガラス質を主体とするものであり、その主成分は、けい素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)等の造渣成分であろう。そのなかで量的に最も多いのは、けい素(Si)と思われる。また、検出強度としては、カルシウム(Ca)が4と出ているが、定量的には2~3%程度であり、続いて鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、ナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、銅(Cu)、カリウム(K)、バナジウム(V)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)という順になっている。

表 24 分光分析結果

符 号	ブロック	測 位	発 潜 年月日	銀 (Ag)	アルミ ニウム (Al)	比素 (As)	ほう素 (B)	バリ ウム (Ba)	ビスマ ス(Bl)	カルシ ウム (Ca)	コバ ルト (Co)	クロム (Cr)
1	B-11	3 屋	72 07 22	0	2	0	0	0	0	4	0	1
A6	A-11	"	73 12 03	0	4	0	0	0	0	4	0	1
B6	B-12	"	73 12 22	0	3	0	0	0	0	3	0	1
C6	B-12	"	73 12 11	0	3	0	0	0	0	5	0	1

銅 (Cu)	鉄 (Fe)	ゲルマ ニウム (Ge)	カリ ウム (K)	リチ ウム (Li)	マグネ シウム (Mg)	マン ガン (Mn)	モリブ デン (Mo)	ナトリ ウム (Na)	ニオブ (Nb)	ニッ ケル (Ni)	鉛 (Pb)	アンチ モン (Sb)	けい素 (Si)
2	4	0	2	—	3	1	0	3	0	0	0	0	5
2	5	0	2	—	4	2	0	2	0	0	0	0	4
3	4	0	1	—	4	2	0	2	0	0	1	0	5
2	4	0	4	—	3	1	0	2	0	0	0	0	3

門田道詠

すず (Sn)	テルル (Te)	チタン (Ti)	バナジウム (V)	タンゲン (W)	亜鉛 (Zn)	ジルコニウム (Zr)	金 (Au)	銅 (P)	0 : 認められない
0	0	1	2	0	0	0	0	0	1 : 半じて認められる
0	0	2	3	0	0	0	0	0	2 : 明瞭
0	0	2	3	0	0	0	0	0	3 : 強い
0	0	1	3	0	0	0	0	0	4 : 可成り強い
									5 : 非常に強い

1 : 羽口先端溶着鉄滓 A 6 ~ C 6 : 鉄滓

(分析は新日鐵八幡製鐵所で行なった。)

この羽口先端溶着鉄滓から、羽口が製鐵炉につくのか、鍛冶炉のものなのか、追求するデーターが得られはしないかと考えたが、分析結果は大差なく、解析も十分できないので、現段階ではデーターの提示だけに止め置くことにする。今後とも資料の集積が大切であろう。

(4) 考察

古代製鐵の研究において、当時の技術レベルを知るには、鉄滓から製錬温度を追求するのも一つの方法であろう。

FeO-Anorthite ($\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$) - SiO_2 系状態図を使って鉄滓の融点を求め、これから製錬温度の推定を試みてみる。

対象にする鉄滓は、わが国では今まで、あまり報告例を聞かなかった Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) を検出した B 6 と、古代鉄滓の代表的な鉱物組成で、比較的均一な Wüstite (FeO) を示し、炉材等の焼き込みがない F 6 を選んでみた。

まず、B 6 から検討してみる。この B 6 は、Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が顕微鏡組織及び E.P.M.A 分析からも確認されているが、分析結果(表23)から、 Al_2O_3 の CaO に対する比が他の試料より、ずっと高い鉄滓である。 $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$ の比を書き抜くと表25のようになる。

表 25 $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$ の比率

試料	A 6	B 6	C 6	D 6	E 6	F 6	S
$\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$	0.77	6.0	1.29	2.24	2.83	1.89	1.54

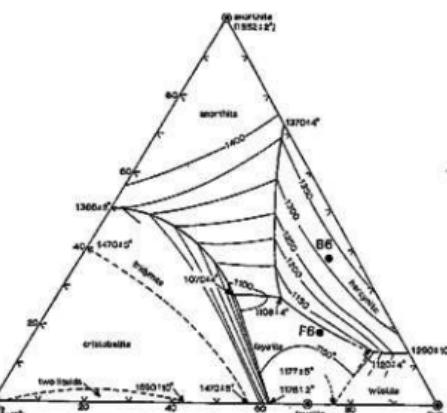
これは、ガラス質 Anorthite ($\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$) が CaO を満たすに十分な Al_2O_3 を取り上げ、残りの Al_2O_3 は FeO と結びついて Spinel Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) を形成したものと予想される。

いよいよ、FeO-Anorthite-SiO₂ 系状態図を使って融点を求めてみる。まず分析値(表23)

は $\text{FeO} : 47.6\%$, $(\text{Ca} + \text{Mg})\text{O} : 2.83\%$, $\text{Al}_2\text{O}_3 : 12.0\%$, $\text{SiO}_2 : 18.7\%$ であるから、これらの相対比は $0.587 : 0.035 : 0.148 : 0.230$ になる。これから $\text{FeO} = 58\%$, $\text{Anorthite} = 36\%$, $\text{SiO}_2 = 5.6\%$ の組成を第130図の $\text{FeO}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$ 系状態図に当ててみると、 Hercynite 領域に入り、融点として $1,300\sim 1,320^\circ\text{C}$ が得られる。製錬温度はこれより若干高目の $1,350^\circ\text{C}$ 前後と推定してよかろう。

同じように F6 の融点を調べてみよう。分析値は $\text{FeO} : 51.4\%$, $(\text{Ca}, \text{Mg})\text{O} : 3.26\%$, $\text{Al}_2\text{O}_3 : 5.1\%$, $\text{SiO}_2 : 20.4\%$ から相対比率は $0.641\% : 0.078\% : 0.064\% : 0.255\%$ になる。これは第130図の $\text{FeO}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$ 系状態図で $\text{FeO} = 64\%$, $\text{Anorthite} = 18\%$, $\text{SiO}_2 = 18\%$ の組成になり、融点として $1,120\sim 1,130^\circ\text{C}$ が得られる。この領域は Fayalite ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) の帯である。しかし、顯微鏡組織(図版69)の F6 では初晶一次鉱物は Wüstite (FeO) であり、上記の結果と矛盾する。成分偏析であろうか(註8)。融点は $1,180\sim 1,200^\circ\text{C}$ 程度と推定されよう。この鉄滓の製錬温度は、 $1,300^\circ\text{C}$ を越えることはなかったと考えられる。なお、古代製錬の鉄滓融点の推定には、 $\text{Fe}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$ 系状態図に対する批判もあり、片岡氏ら(註9)は、 $\text{Fe}-\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 系状態図が適当といっておられるが、これも今後の研究課題であろう。

最後に製錬条件の基本となる鉄率を検討してみる。製錬原料(鉱石もしくは砂鉄)の還元の順序は、 $\text{Fe}_2\text{O}_3 \rightarrow \text{Fe}_3\text{O}_4 \rightarrow \text{FeO} \rightarrow \text{Fe}$ であるが、このなかで鉱滓中で金属化されていない鉄分を求める必要がある。この分類に入る鉄滓では、 Fe^{II} はすべて Goethite ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$) で金属鉄の風化物と考えられるので、金属化されない鉄分は Fe^{II} であろう。表26に Fe^{II} の数値を示す。

第130図 $\text{FeO}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$ 系状態図表 26 Fe^{II} の数値 (%)

試料	A 6	B 6	C 6	D 6	E 6	F 6	S
Fe^{II}	49.7	37.0	40.4	36.7	38.1	40.0	38.7

す。A6 と D6 は、鐵治滓の可能性が濃厚とも思われるが、参考までに挙げておく。

これを製鉄原料（砂鉄）の鉄分52～63%（註10）に比べると、金属化の割合は4～5割に過ぎず、非常に効率の悪い操業を行なっていたものと考えられる。

(5) ま　と　め

門田地区出土の鐵滓は、製錬滓タイプと鐵治滓タイプの2種であった。特に前者の製錬岸タイプは、辻田（F区）地区の製錬炉から発掘された鐵滓とは、構成成分が異なり、二酸化チタン (TiO_2) 以下微量元素の含有量が少ないので特筆される。原料の差異であろうか。

また、これら鐵滓の推定年代であるが、層位的には古墳時代終末期から中世（平安末～鎌倉前半）にかけての遺物に混在しており、的をしづれば、E6 鐵滓などは10世紀後半に相当する木棺の床面と、古墳時代後期にあたる8号住居跡の中間層から検出されているので、この辺が有力な手がかりとなるであろう。

鐵岸の鉱物組成は、Wüstite (FeO) と Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$) 及び一部に Hercynite ($FeO \cdot Al_2O_3$) を含むものがあり、Magnetite の存在は認められなかった。

製錬温度は、2個の鐵滓の融点から推定して、1,180～1,350°C 程度と考えられ、この温度であれば、古代製鉄の鐵滓によくみられる系統のものである。また、鉱物組成で Hercynite ($FeO \cdot Al_2O_3$) の報告例は、管見では国内ではなく、英國文献（註11）（ローマ時代の古代製鉄Slag）でみた程度である。

製鉄原料の砂鉄は、高純度の低チタン砂鉄を使ったと思われ、製錬温度は低目であったとなると、調査鐵岸は古代に属するものと判定出来そうである。しかし、また製錬初期に鉱石装入の可能性もあり今後の研究課題になろう。

製錬岸に対して鐵治滓は、まだ不純物を多く含有する海綿鉄を精錬する時期で生成するもので、大鐵治的なものであろう。製鉄作業における製錬→精錬は当然考えられることで、炉の存在が気になるところである。

また、製錬炉、精錬炉とともに操業時は、ある一定の炉温を維持させる必要があり、これには当然フイゴの使用が考えられ、これを裏付ける資料として、羽口破片が発掘されている。

この羽口の先端に溶着した鐵岸は、ガラス質を主成分とする鉱物組成であり、化学組成を定性的にチェックしたが、製錬岸と鐵治滓の区別は出来なく、両者はあまり差異のない結果であった。

羽口の胎土には、薬スサが用いられ、これと共に和歌が2粒発見出来た。和歌は半纏状であるが、実体顕微鏡の10倍撮影で計測すると、粒長5.0mm、粒幅2.7mmであった。当時の古代米であろ

う。

以上、7点の鉄滓と羽口1点の資料について、とりとめのない調査結果を述べたが、古代製鉄の研究は、まだ、緒についたばかりである。これらの Data が今後の研究に役立てばと念じる次第である。

また、浅学非力な筆者であり、Data の扱いに誤認の点もあることと思われる。今後の研究者に叱正頂ければ幸いである。

最後になったが、この稿作成にあたり、分析関係の資料は、新日鉄、K. K. 生産技術研究所、清水基男部長の御尽力でそろったことを明記し、感謝の意を表して筆を據ることにする。

参考：門田地区出土鉄滓点数36点＝884.3g

(大澤正巳)

- 註1 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1975
- 2 大澤正巳・中山光夫「門田遺跡製鉄遺構出土品の科学分析結果」「昭和50年度山陽新幹線埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1976
- 3 長谷川熊彦「わが国考古学的古代製鉄器の材質に関する研究、第1報」『財団法人資源科学研究所業報』第70号 1968
- 4 大澤正巳「福岡県下の古代製鉄」『福岡考古懇話会々報』第3号 1975
- 5 斎浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告—若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査—」同志社大学文学部文化学科 1971
- 6 村上英之助「月の輸古墳出土鉄器の原料について」「たたら研究」No. 9 1962
- 7 J. F. Schairer: J. Am. Ceram. Soc., 25 (1942), p. 252
- 8 渡秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉄滓の鉱物組成と製鉄条件について」「たたら研究」第14号 1968
- 9 片岡三郎・井ノ山直哉・畠明郎「たたら製鉄反応の冶金学的検討」金属(アグネ) Vol. 45 1975
- 10 ⑩と同じ
- 11 G. R. Morton and J. Win grove. Constitution of Bloomeryslag: Part I: Roman. Journal of the Iron and Steel Institute. December. 1969

8. おわりに

門田遺跡の調査は、4年次にわたる長い調査であったが、先土器時代・撫文時代・弥生時代・古墳時代、さらに歴史時代にわたり連続として形成された濃密な大複合遺跡で多くの成果をあげることが出来た。本遺跡の報告は、この報告も含め5分冊で完了する予定である。ここに報告する門田地区の調査の成果は、すでに各項目にわたってのべてきた。ここでは、その成果と問題点を整理し、まとめたい。

1. 先土器時代の調査は、それまで、谷地区に流れ込んだ状態で発見されていた多くの細石刃・細石刃核・ナイフ形石器などの資料が、A11・B11地区で層位的に確認されたことである。そこでは、細刃器の文化層とナイフ形石器の文化層が層位的に分けられ、いわゆる半舟底形細石刃核を有する文化層が確認できたことである。

2. 弥生時代の調査の成果は、前期末の37基の袋状竪穴群と1軒の竪穴住居跡の発見である。

とりわけ、37基の袋状竪穴群は大きく東部（5基）・中央部（22基）・南部（10基）の3グループに分れ、中央部群が最初に開始され、次に南部群・東部群の順に成立し、併立して存在していた可能性がある。各群内の竪穴間の重複関係、竪穴群の小地域への集中性（3グループの形成）など、竪穴の穿たれる区域の限定性がうかがえる。

竪穴の入口の方向が、床面長軸に対する入口部の偏在により、開口方向が示されるとすれば、中央部群は不定方向、南部斜面群は南向き、東部群は東あるいは西向きなど、さまざままで一定の方向を指さない。これは、開口方向が集落などの居住域の方向を示すと考えるより、居住域からつづく数条の道にむかって開口していた可能性が指摘できる。しかし、この竪穴内の内容、それを使用していた集落（今回、発見された住居跡は1軒と少なく、この竪穴群に伴う集落は東側につづく台地上に存在する可能性をもっている。）の実態が充分に明らかにされていない現在、あくまで一つの仮説である。

また、22号竪穴内から検出された前期末の合口壺棺墓は、竪穴廃棄後に再利用された極めて珍しい例であり興味深い。

3. 古墳時代の調査の成果は、わずかに石室の掘方と若干の石材を残した1号墳の発見と、竪穴住居跡2軒、溝状造備1条の発見である。2号住居内に遺存した豊富な遺物類は、当時の生活の内容を把握できる好適な資料である。

とりわけ、現在資料的に少ない7世紀前半の貴重な資料である。また、各遺物の出土位置を示した図83図をみると、その状態は、あたかも、さき程まで食事をしていたような状況である。住居の中央部に瓶があり、それを囲むようなかたちで住居の西側に偏して須恵器の杯・碗

門田遺跡

蓋・鏡・土師器の杯が分布している。それはあたかも円座して食事していた様子が思い浮ぶ。竈には甕がすえられ、何かを煮焚きしていて、そのわきには、水甕や貯蔵用甕として使用されたかもしれない大形の甕2個が並んで直立している。また磁石は北東隅から出土し、鐵鏃は少し浮いた状態で、南東側壁付近で検出された。屋内の梁にでも掛けられていたものであろう。

4. 歴史時代の調査の成果は、奈良時代の瓦、多量の副葬品を内蔵していた10世紀後半の木棺墓、12~13世紀前半の方形窓穴・窓穴住居跡の発見、また、ほぼ同時期と思われる掘立柱建物跡群の発見などである。

奈色時代の古瓦については、かつて白水廃寺と呼ばれ、現在上白水遺跡と変更されている山田寺系の盛弁八葉軒丸瓦と共伴するほぼ同系の丸瓦・平瓦と思われるものである。すでに、門田谷地区、柏田遺跡でも上白水遺跡発見の軒丸瓦と共に多量に発見されていることを考えると、少なくとも門田周辺に、この種の古瓦を葺く何等かの施設の存在が想定できるのである。

10世紀後半の木棺墓からは、八稜鏡1、鐵製釘錠1が棺内から、棺上と思われるところから刀子1、棺外から土師器甕1、高台付甕6、皿6など多數の副葬品が検出され、この時期の貴重な資料である。棺材はすでに朽ち、その痕跡は、まったく残っていなかったが、鐵釘の出土状態から木棺の大きさが復原できた。長さ1.8m、幅0.45m、高さ20cm以上の長方形である。また、鐵釘に付着していた木片を、九州大学農学部木材理学松本教授に同定していただいた結果、コウヤマキであることが判った。九州内では、はじめての例であり貴重な発見であった。

12世紀後半~13世紀前半の方形窓穴、窓穴住居跡の発見も貴重なものである。とりわけ、方形窓穴内から出土した12世紀後半の土師器と青磁の共伴は、これまでの大宰府の調査、大宰府・御笠川兩条坊の調査では白磁のみで、青磁の共伴をまだみない土器群とされているものである。しかし、本遺跡の例が、資料的にかならずしも充分な状態でなく、12世紀後半か13世紀前半か微妙なところであるため、ここでは、その可能性を指摘するにとどめたい。

また、門田地区出土の鉄滓の分析結果を大澤正巳氏よりいただいた。とりわけ、本遺跡の辻田地区で発見された製鉄炉との関係で重要であり、貴重な分析となった。

(井上裕弘)

図 版

門 田 遺 跡



1 門田遺跡周辺航空写真 (1972. 9)



2 門田遺跡航空写真 (1972. 9)



1 昭和47年度・門田地区の予備調査航空写真



2 昭和47年度・門田地区の予備調査航空写真



1 昭和47年度・辻田地区の予備調査航空写真



2 昭和47年度・辻田地区の予備調査航空写真



1 伐採後の門田遺跡航空写真 (1973. 9)



2 伐採後の門田遺跡航空写真 (1973. 9)



1 昭和48年度・門田地区の調査航空写真



2 昭和48年度・辻田地区の調査航空写真



1 昭和48年度・谷地区の調査全景



2 昭和48年度・谷地区C 9区で検出された遺物（南から）



1 昭和48年度・谷地区の調査全景



2 昭和48年度・辻田地区の調査全景



1 昭和49年度・谷地区の調査全景



2 昭和49年度・谷地区の調査全景



1 昭和49年度・門田道跡全景航空写真（西から）



2 昭和49年度・門田道跡全景航空写真（南から）



1 昭和49年度・門田地区の調査航空写真



2 昭和49年度・辻田地区の調査航空写真



1 昭和50年度・辻田地区の調査航空写真（西から）



2 昭和50年度・辻田地区の調査航空写真（東から）



1 門田地区全景航空写真



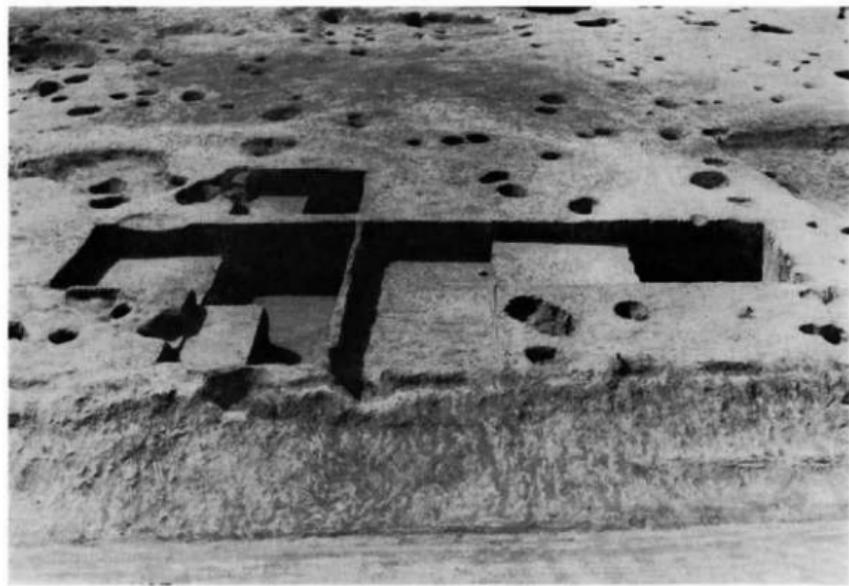
2 門田地区 A・B・C 10~12区堀掘区全景航空写真



1 門田地区 C・D・E・F10~13 区全景航空写真（北から）



2 門田地区 C・D・E・F10~13 区発掘区近傍航空写真



1 先土器時代祭祀区全景（東から）



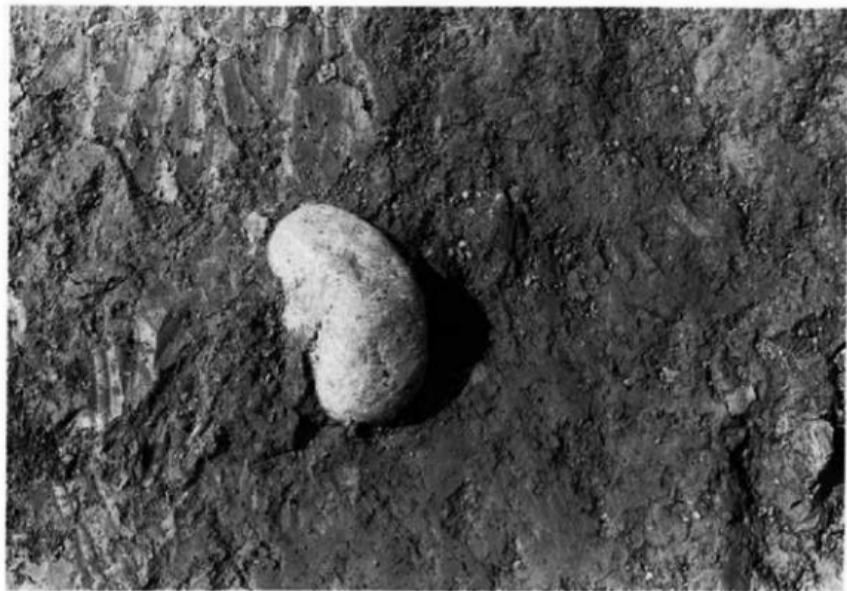
2 先土器時代祭祀区全景（北から）



1 B4区西壁



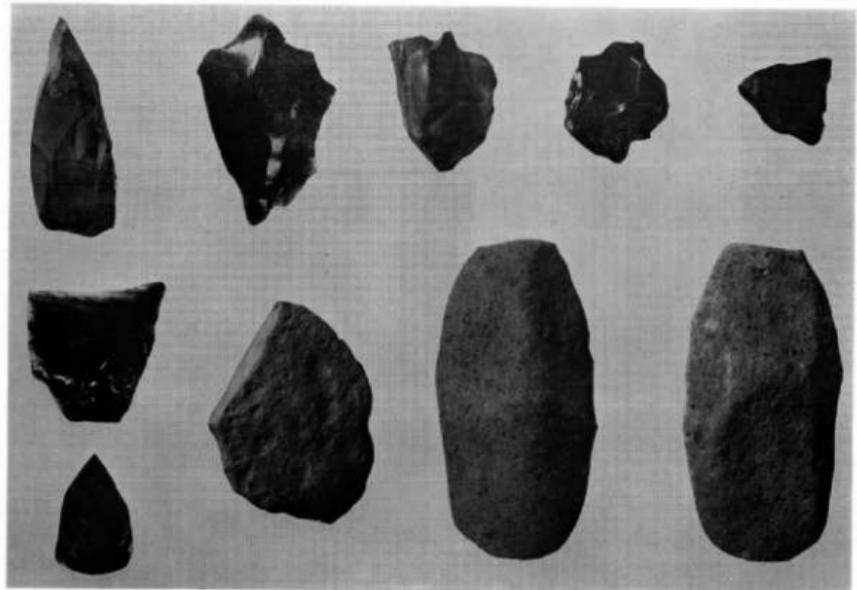
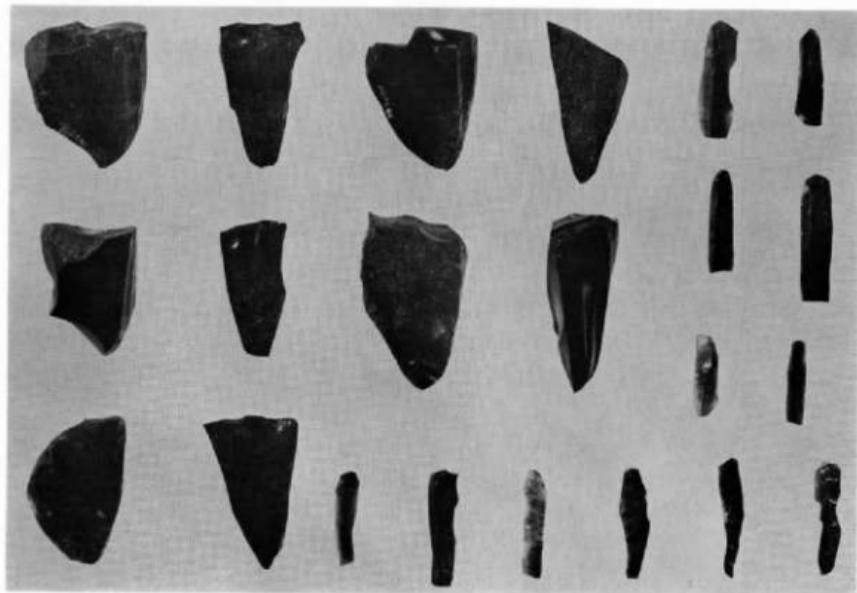
2 B1区西壁



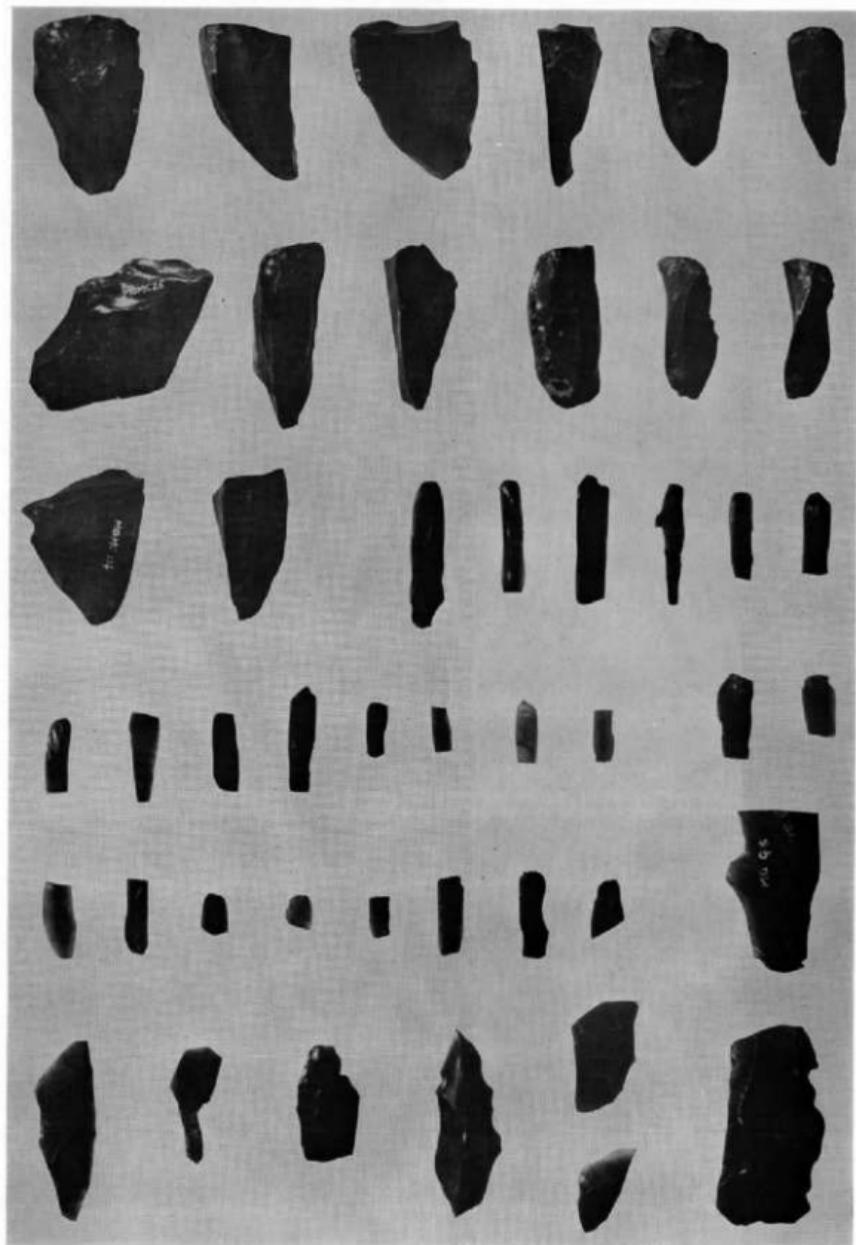
1 遗物出土状态



2 遗物出土状态



包含層出土先土器時代の遺物



門田地区出土先土器時代の遺物



1 袋状竖穴群全景（北から）



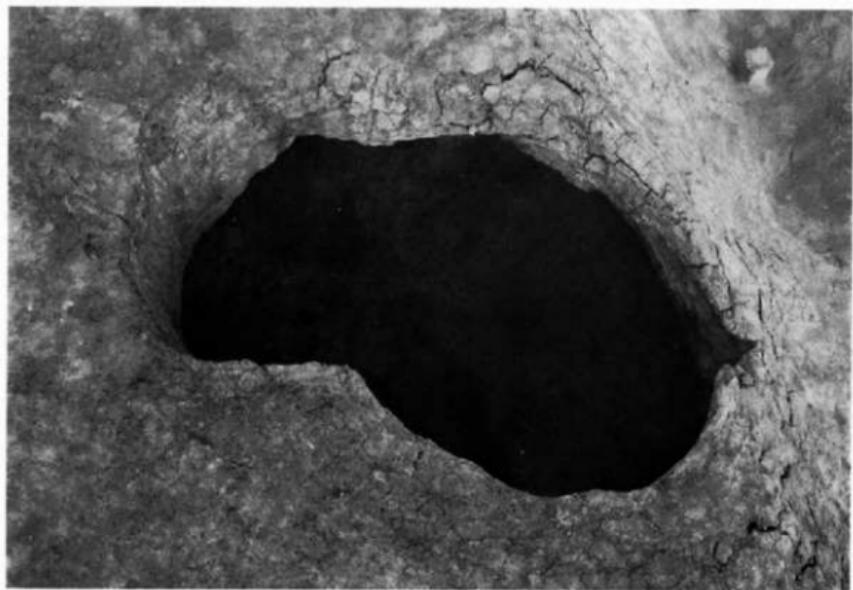
2 袋状竖穴群近景（南から）



1 3号袋状竖穴



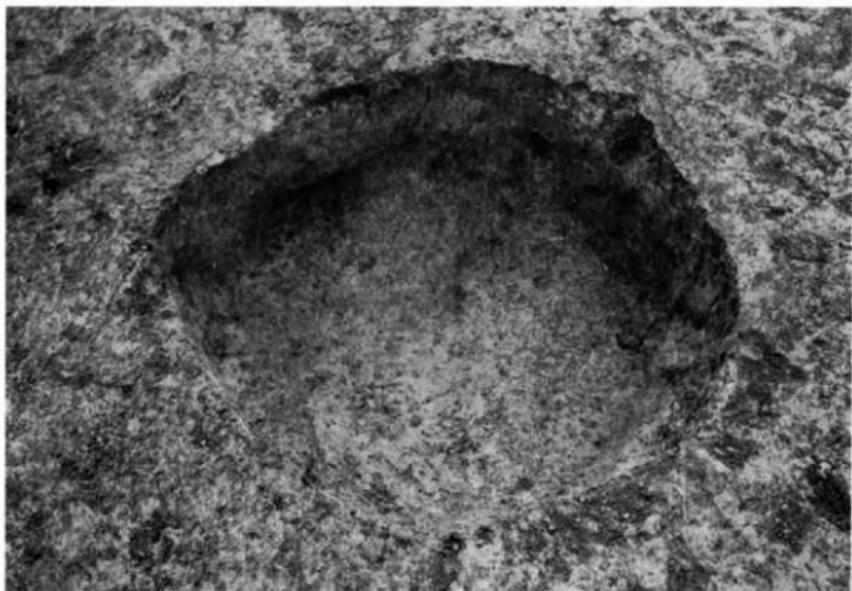
2 4号袋状竖穴



1 5号袋状空穴



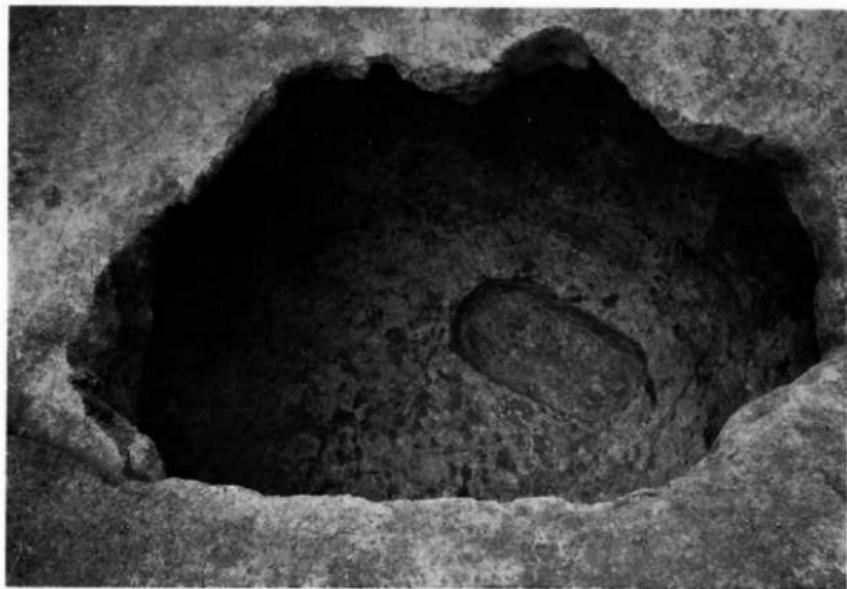
2 9号袋状空穴



1 11号袋状堅穴



2 12号袋状堅穴



1 13号袋状竖穴



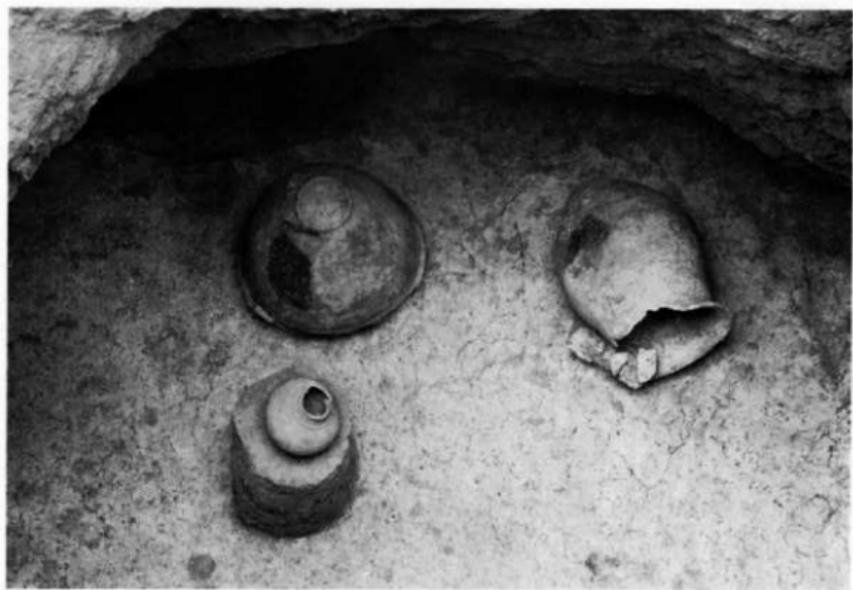
2 13号袋状竖穴土剖面



1 17号袋状竖穴



2 20·27·30号袋状竖穴



1 18号袋状竖穴内土器出土状態



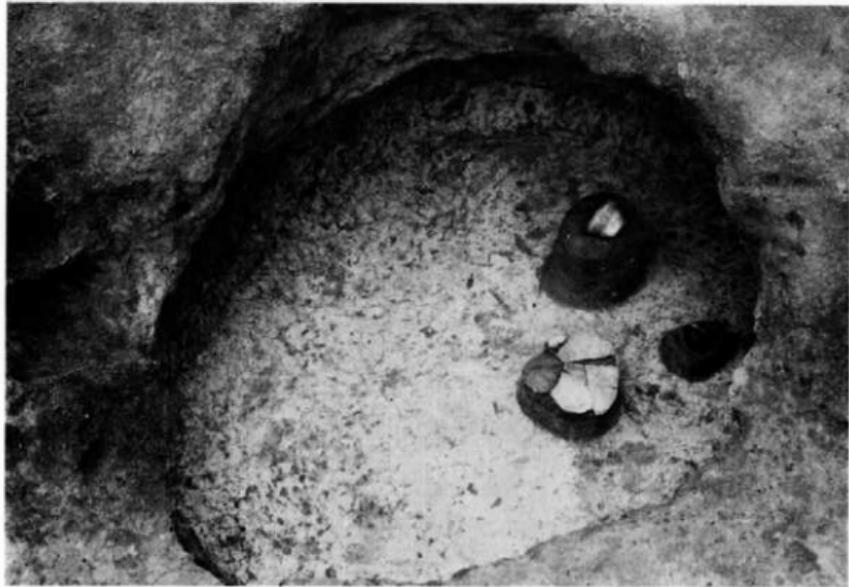
2 21号袋状竖穴



1 22号袋状堅穴と合口棗棺



2 24号袋状堅穴土層断面



1 24号袋状豊穴



2 13・26号袋状豊穴



1 26号袋状壁穴



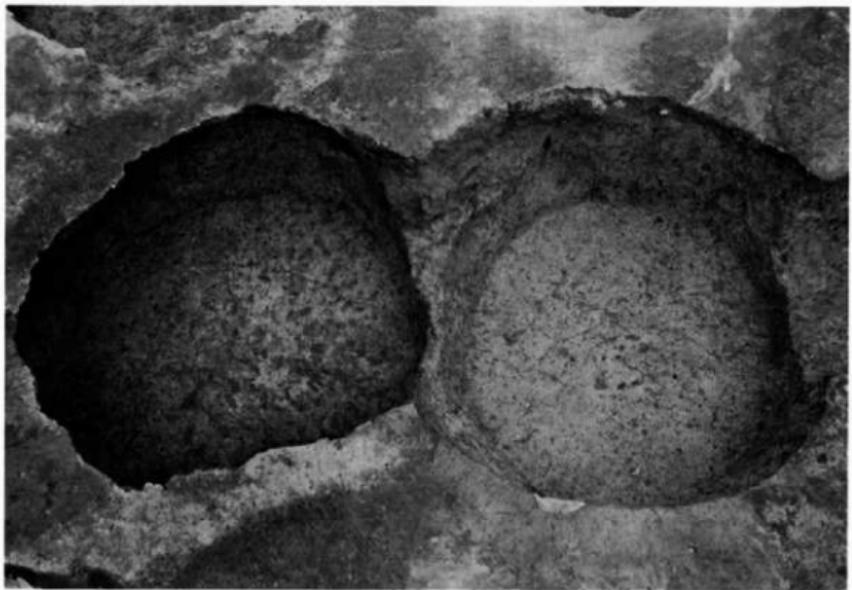
2 27号袋状壁穴



1 29号袋状空洞



2 31号袋状空洞



1 32·33号袋状竖穴



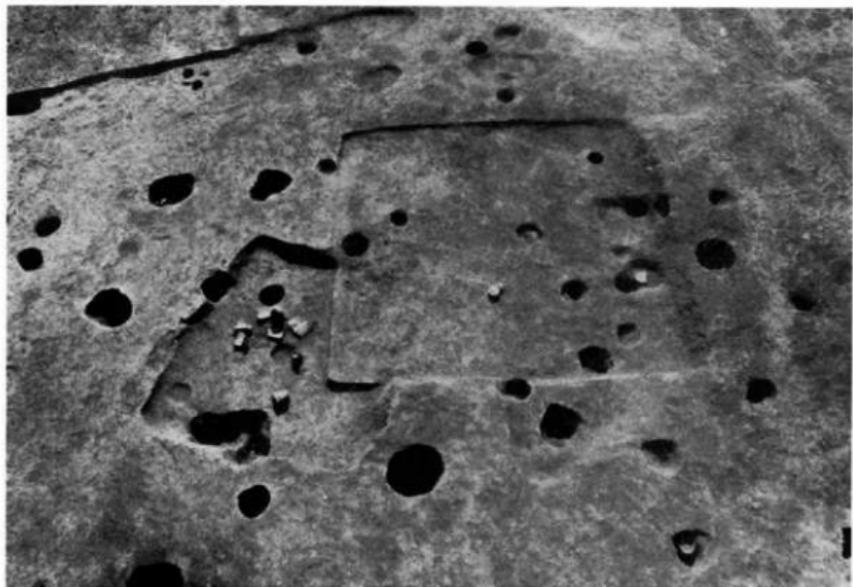
2 34号袋状竖穴



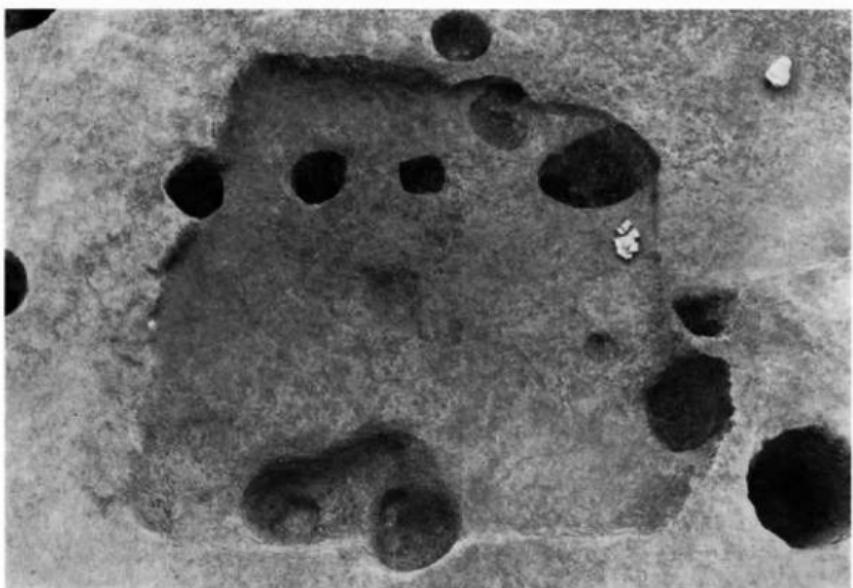
1 36号袋状空穴



2 34・37号袋状空穴



1 3・5号壁穴住居跡 (北から)



2 3号壁穴住居跡 (北から)



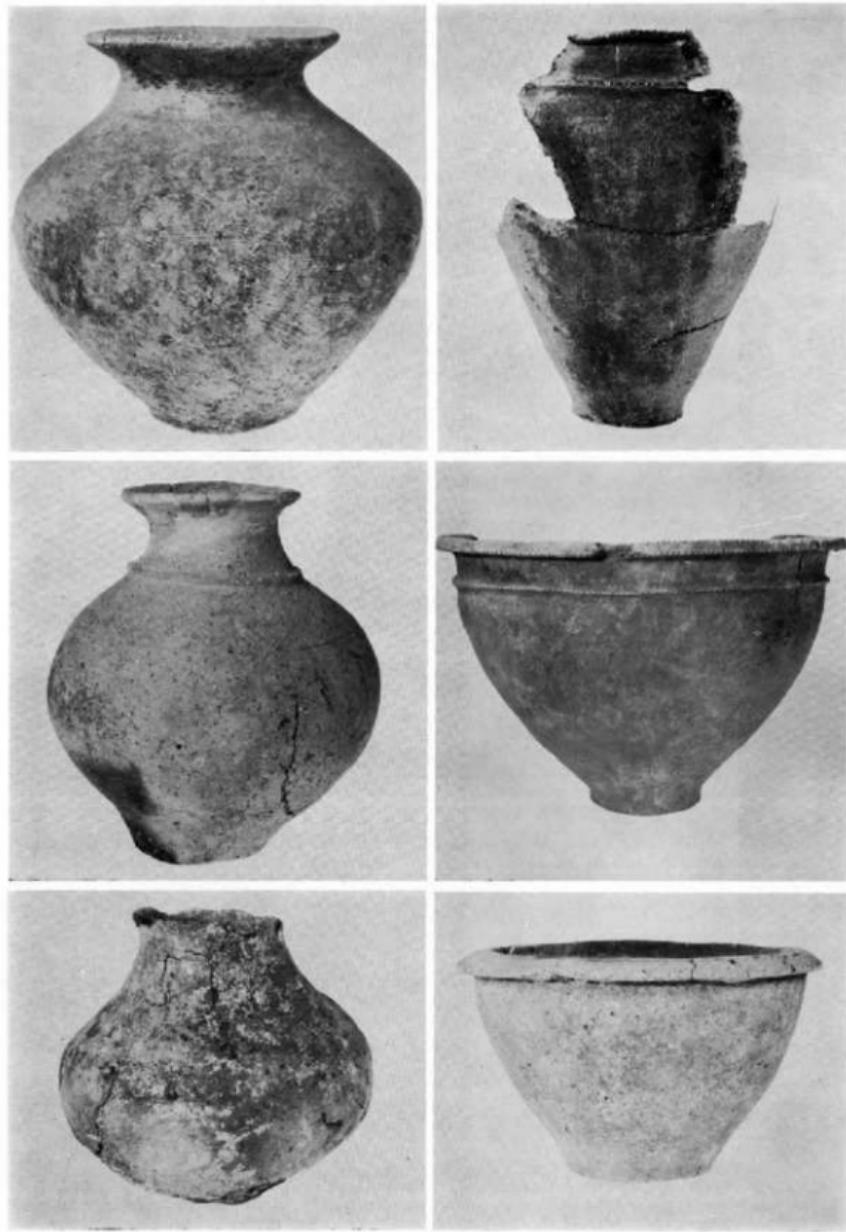
1・2号袋状壁穴出土土器



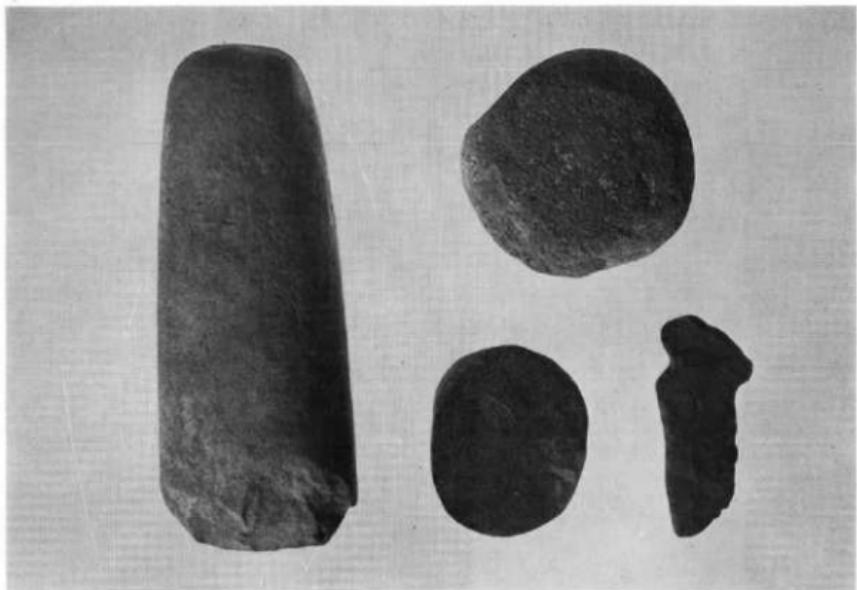
3·12·26号袋状竖穴出土土器



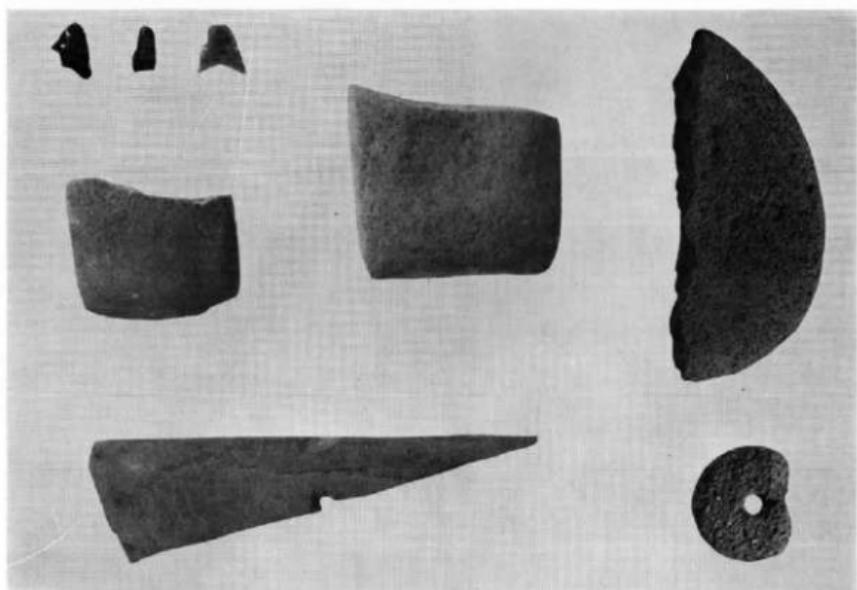
17号袋状竖穴出土土器



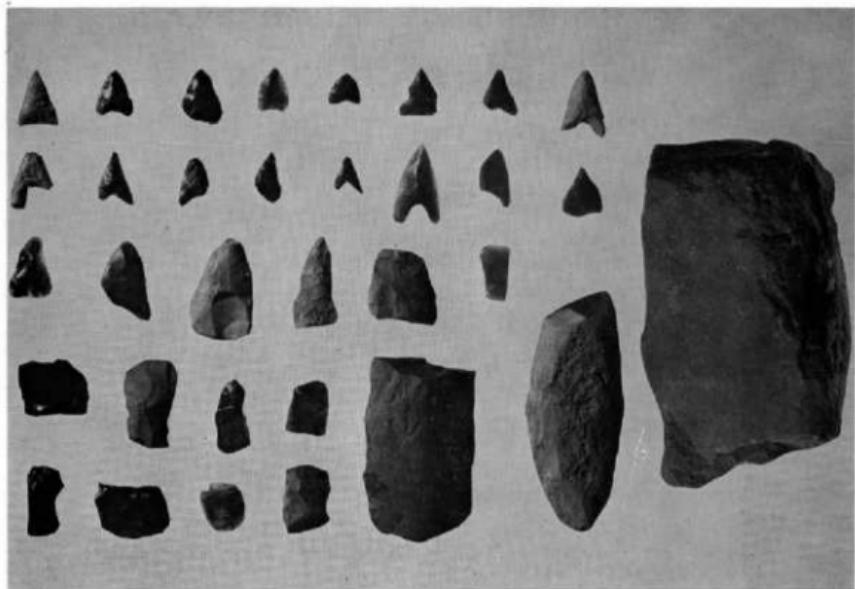
○号袋状窓穴出土土器



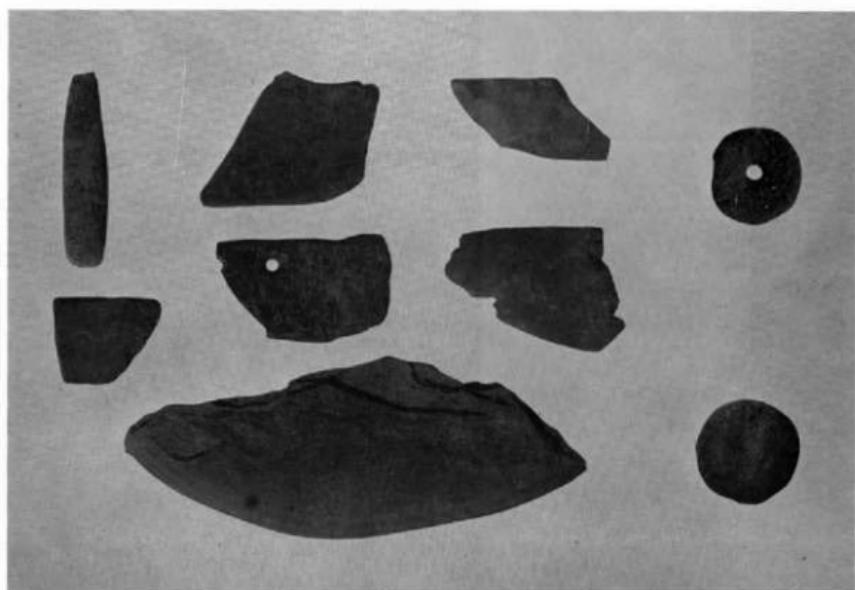
1 3号袋状壁穴出土の石器



2 袋状壁穴出土の石器・土製品



1 包含層出土の石器



2 包含層出土の石器・土製品



上 1号墳と住居跡



下 破壊された石室



1 2号竖穴住居跡（東から）



2 2号竖穴住居跡（南から）



1 2号竪穴住居跡内土器出土状態（東から）



2 2号竪穴住居跡内壺と付近土器出土状態（東から）



1 2号堅穴住居跡内甌と土器出土状態



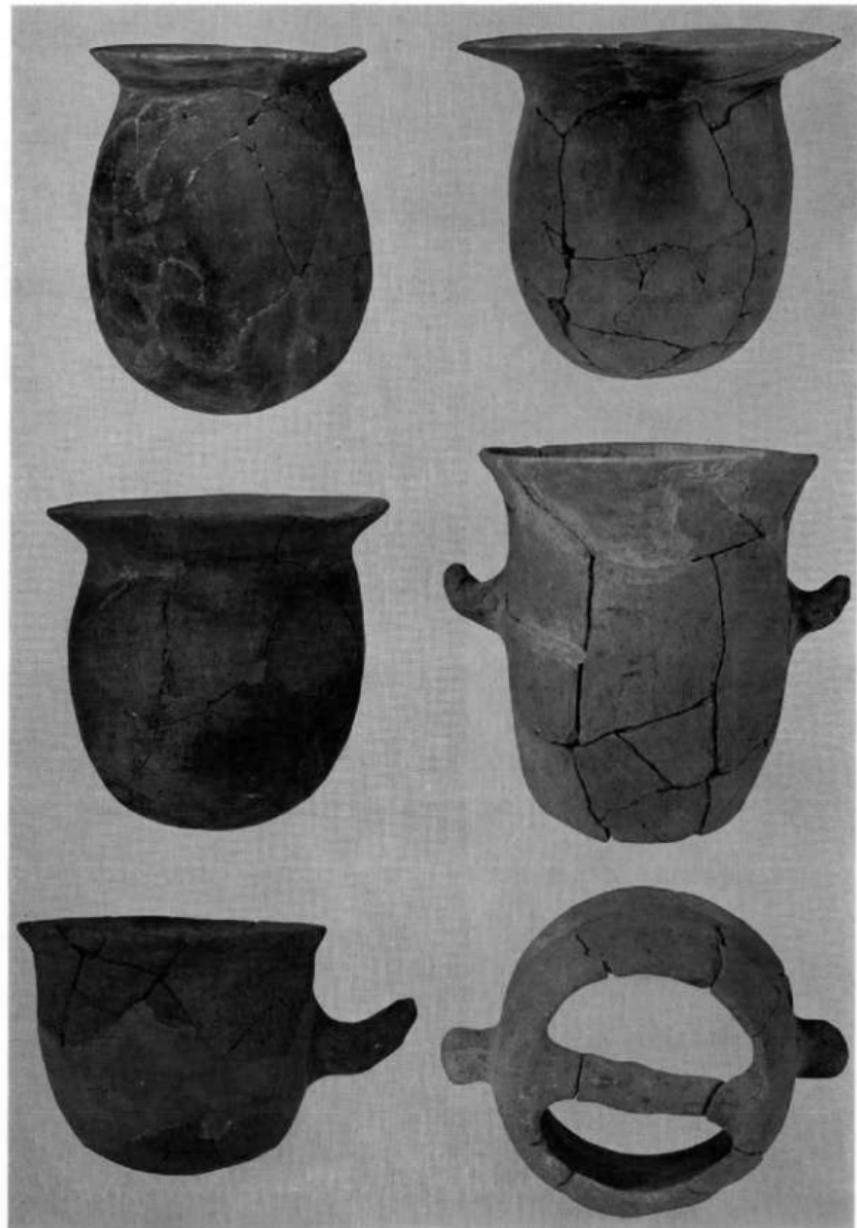
2 2号堅穴住居跡内甌



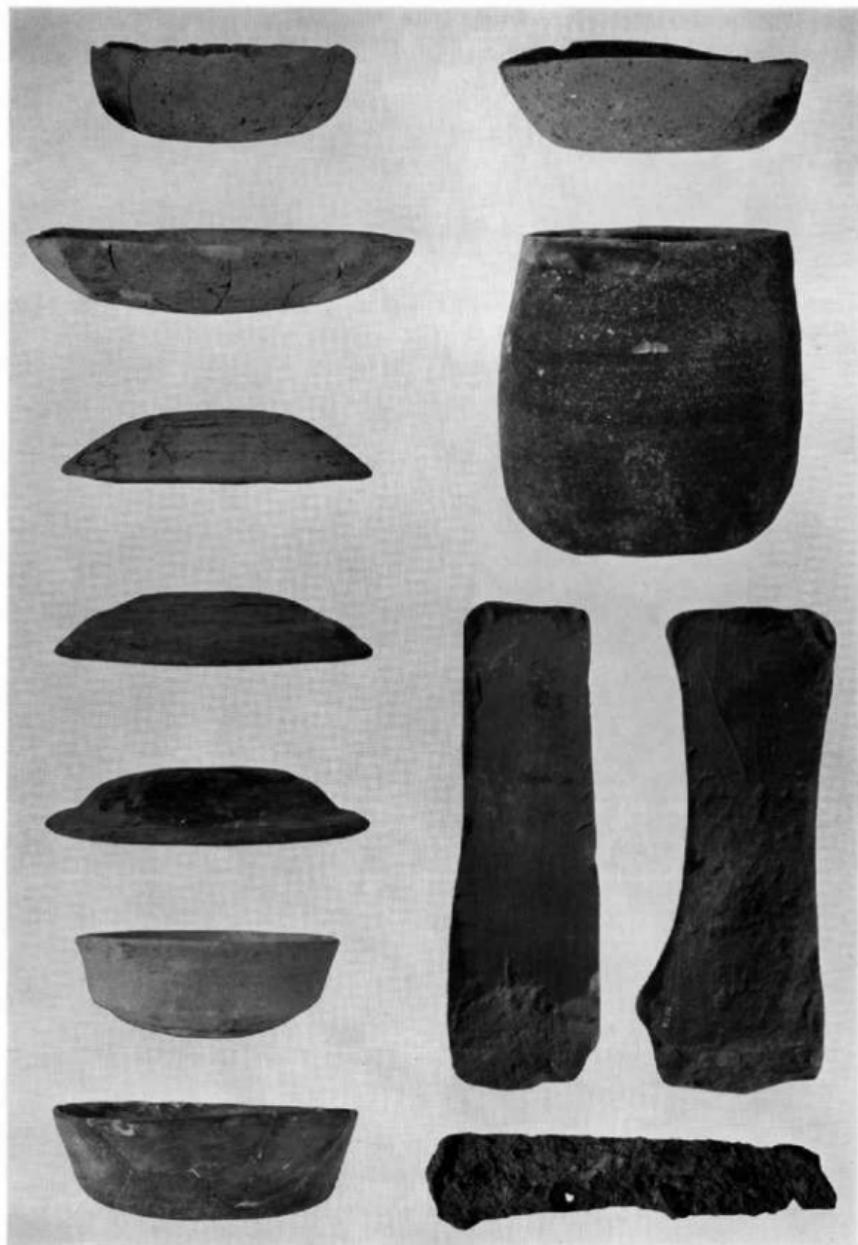
1 2号竪穴住居跡出土土器状態



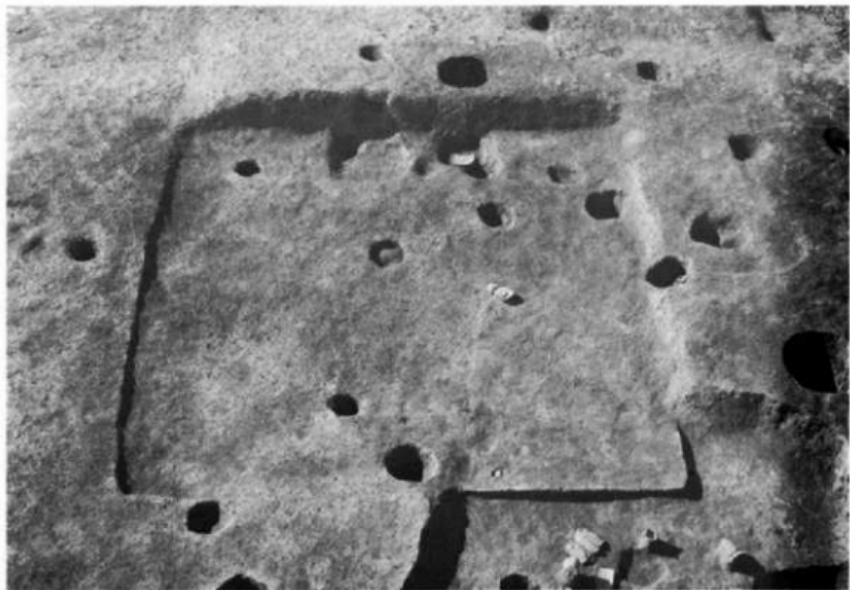
2 2号竪穴住居跡出土鐵器状態



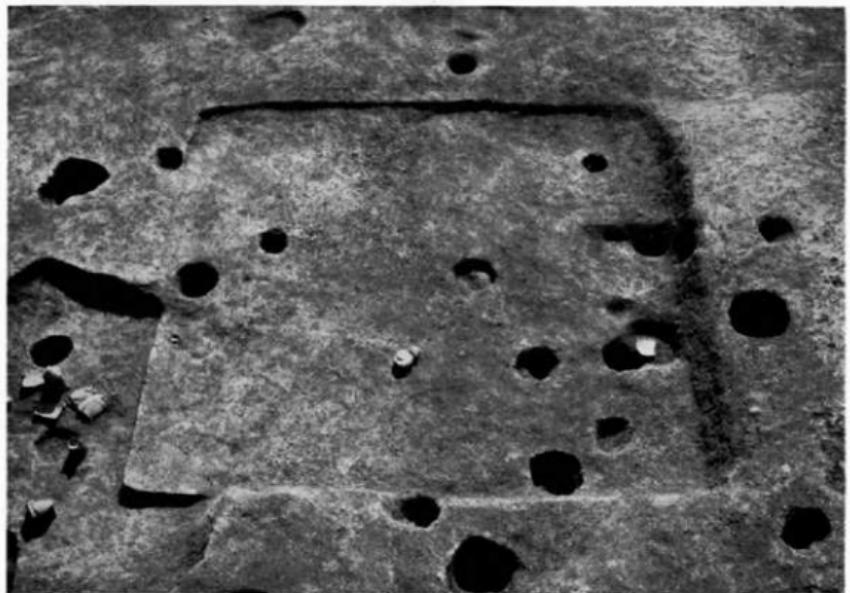
2号竖穴住居跡内出土土器



2号竪穴住居跡内出土土師器・須恵器・砥石・鉄鏹



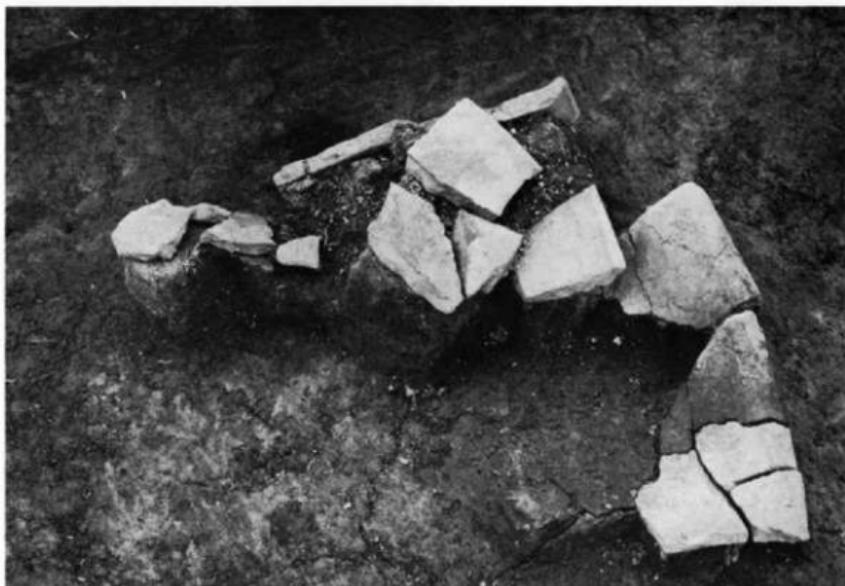
1 5号壁穴住居跡（東から）



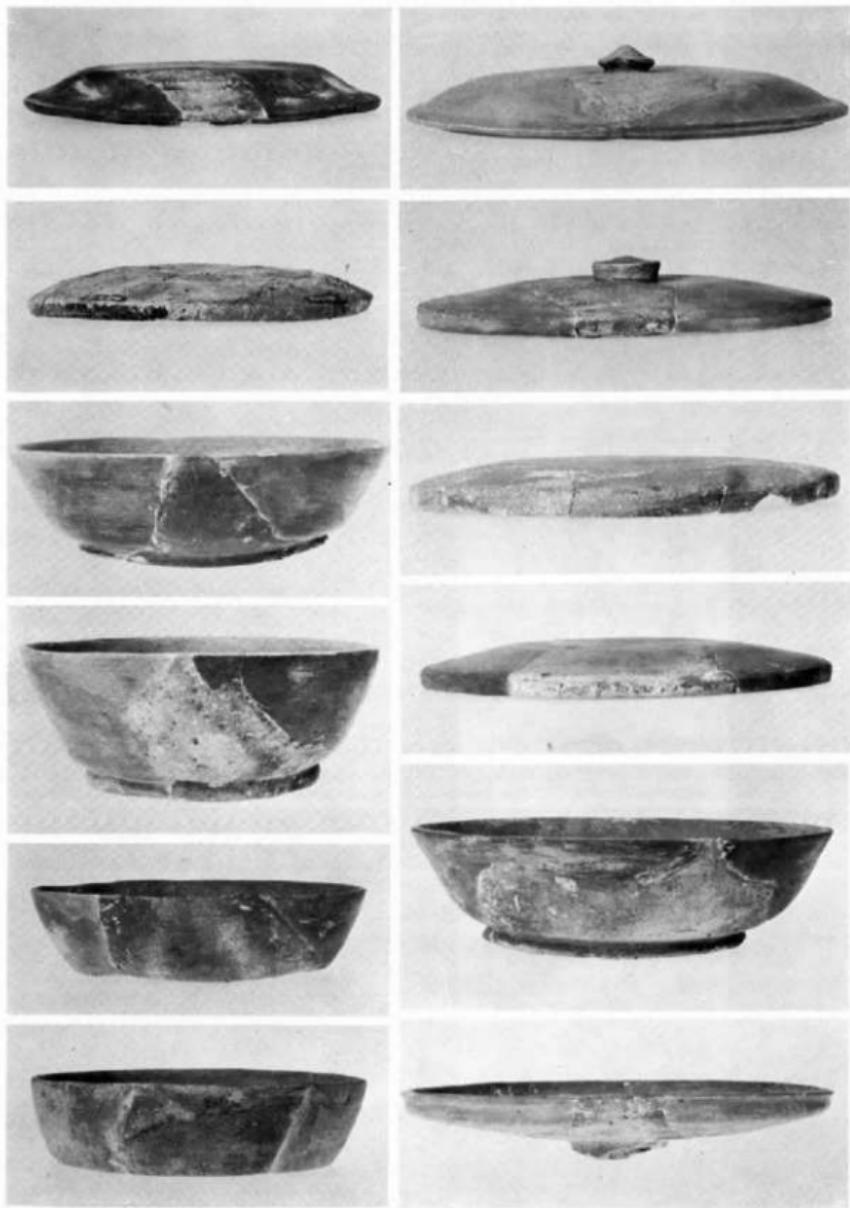
2 5号壁穴住居跡（北から）



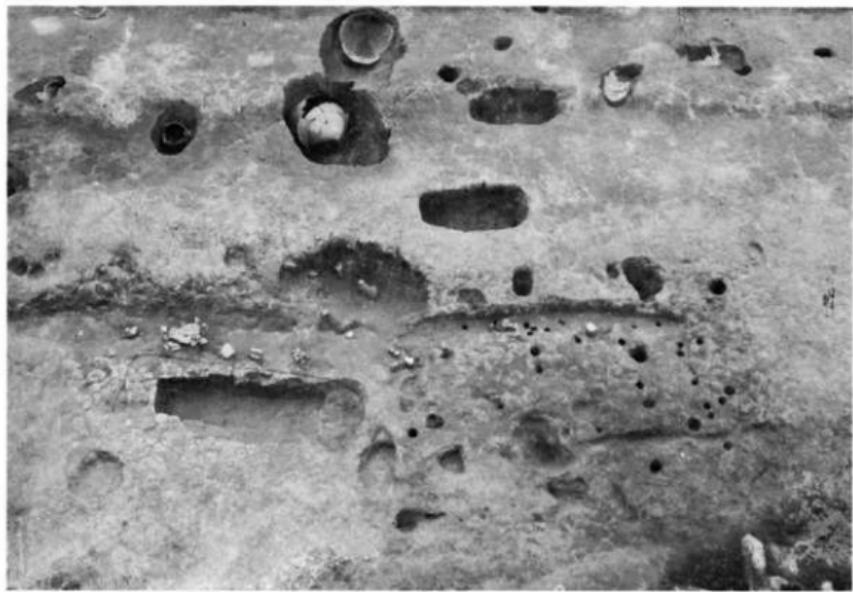
1 8号竪穴住居跡（南から）



2 8号竪穴住居跡内土器出土状態



包含層出土須恵器



1 木植蔵付近全景（南から）



2 木植蔵全景（南から）



1 遺物の出土状態



2 八後鏡出土状態



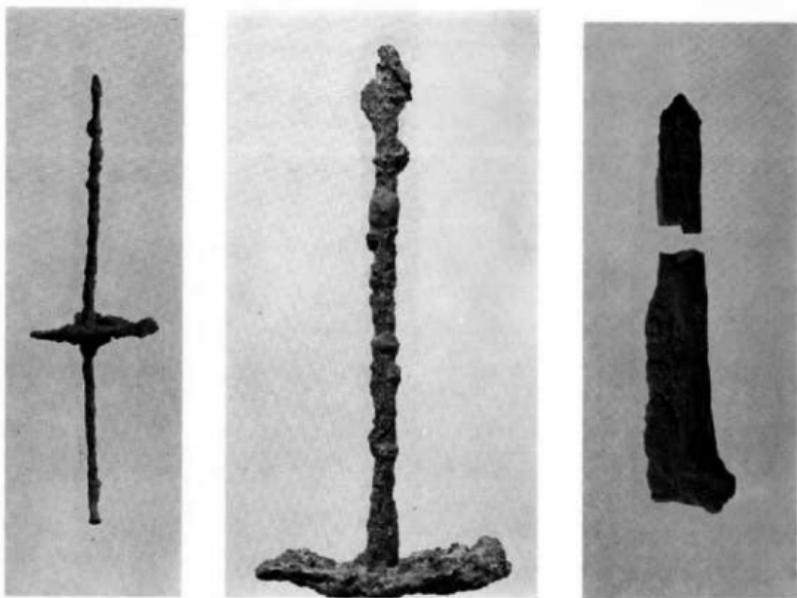
1 土師器出土状態



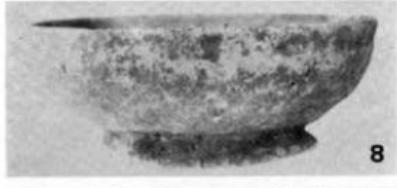
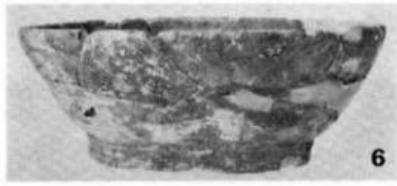
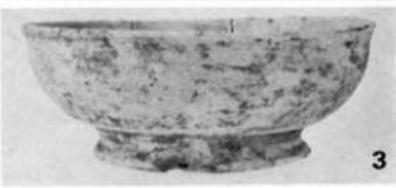
2 鉄釘出土状態(四壓側)



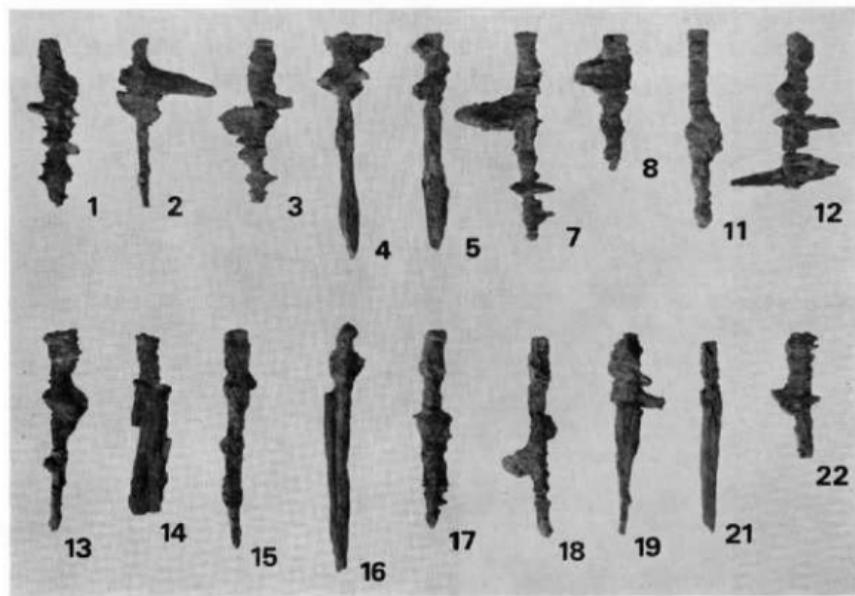
1 八稜鏡



2 鉄製柄頭・刀子



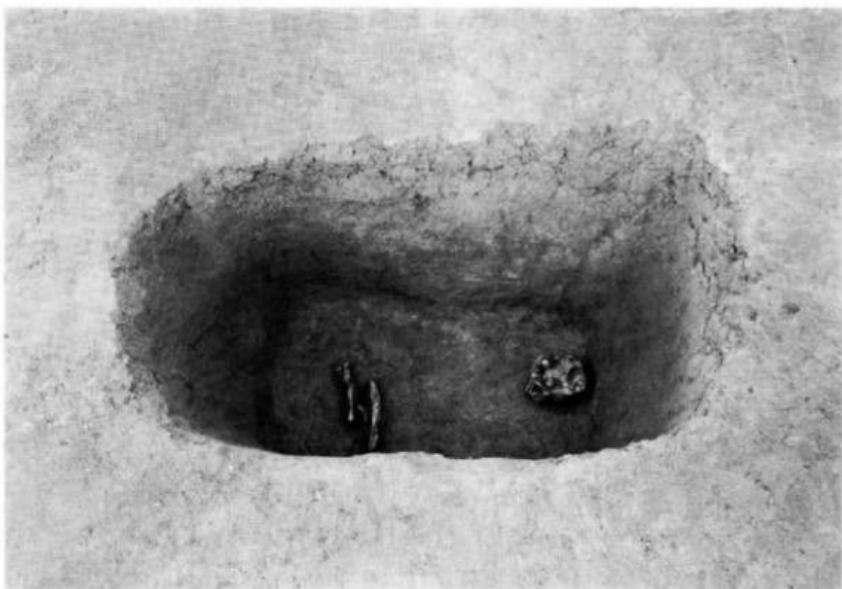
14



鉄釘・瓦・鉄滓



1 1号土壤窯（東から）



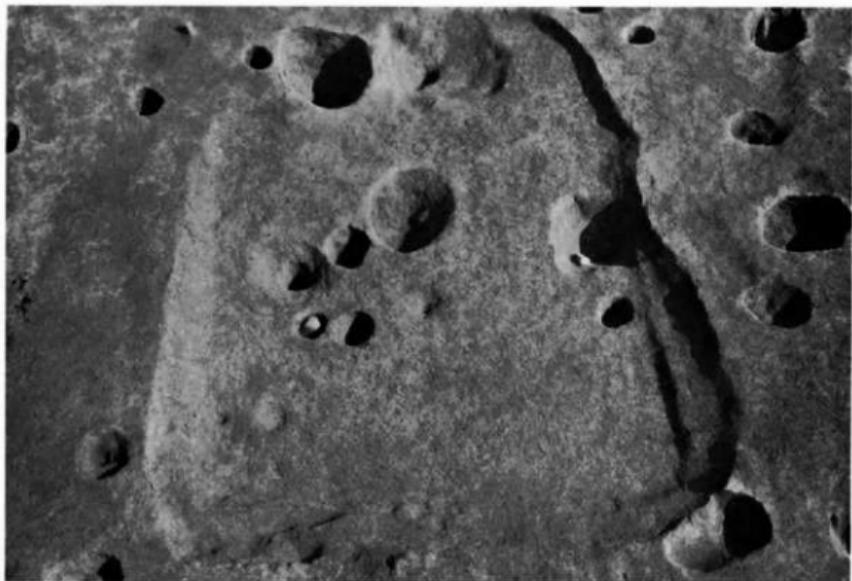
2 2号土壤窯（東から）



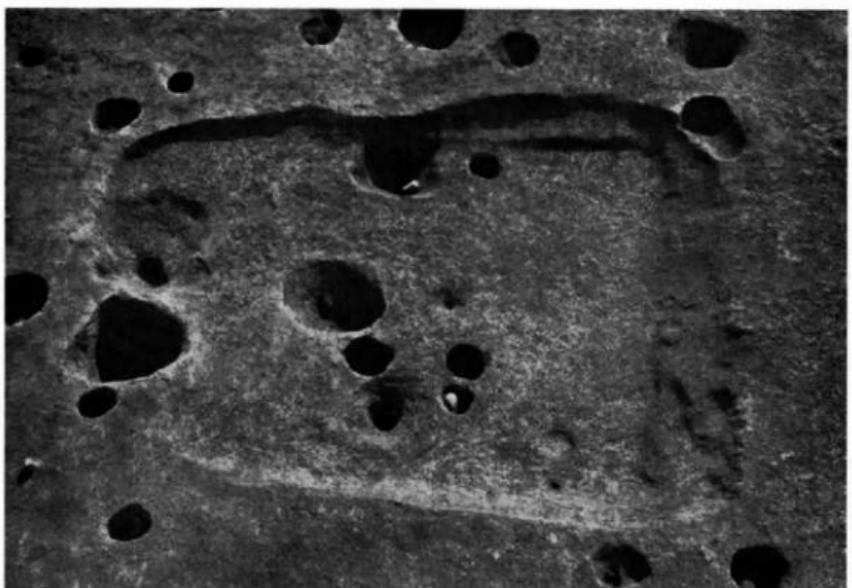
1 棚列・住居跡・掘立柱建物跡群全貌航空写真



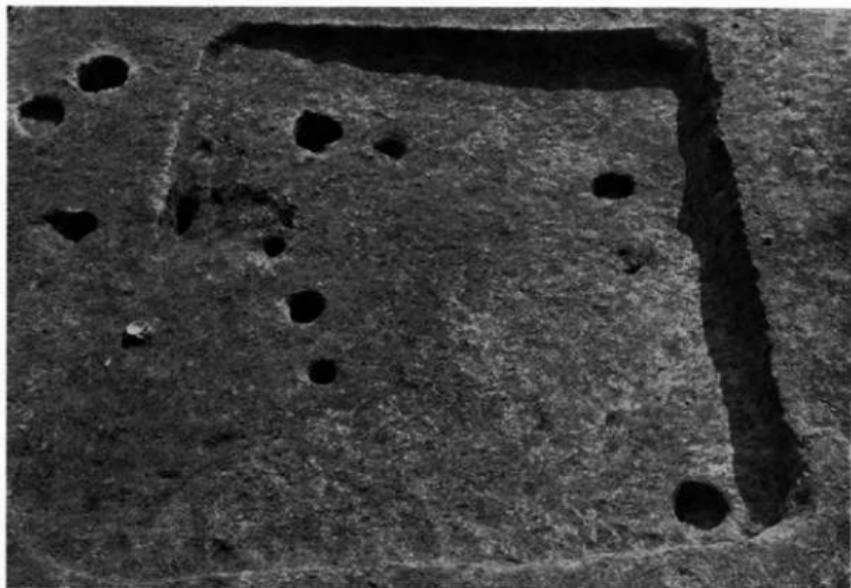
2 1号壁穴住居跡 (東から)



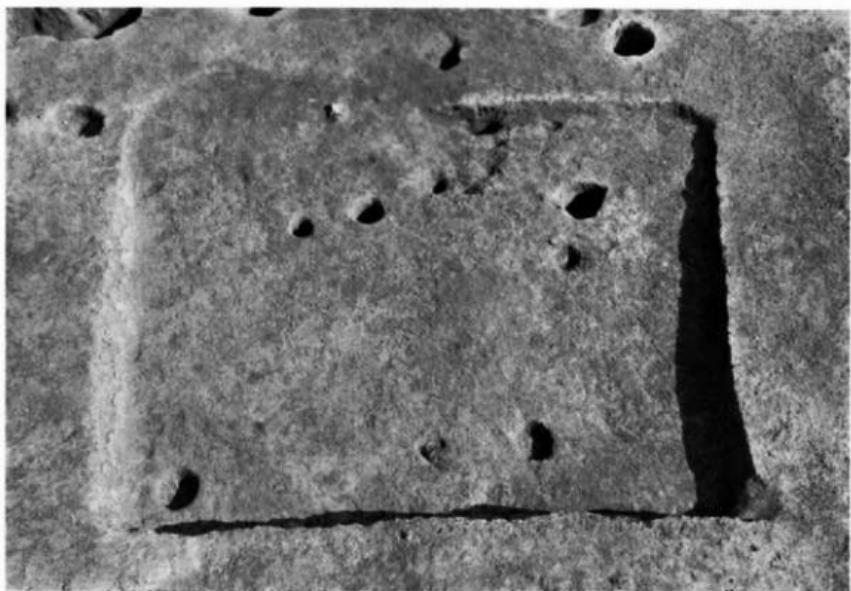
1 4号壁穴住居跡（西から）



2 4号壁穴住居跡（北から）



1 6月壁穴住居跡（南から）



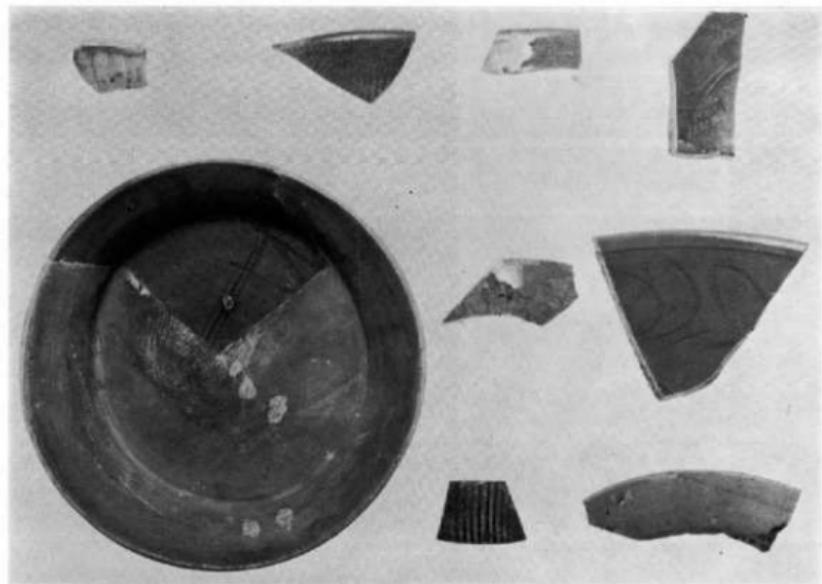
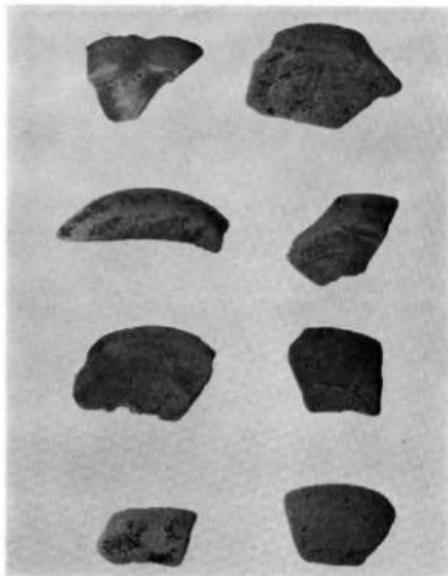
2 6月壁穴住居跡（東から）



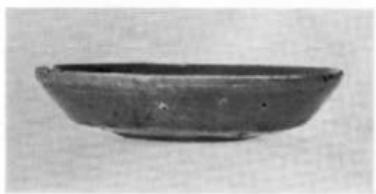
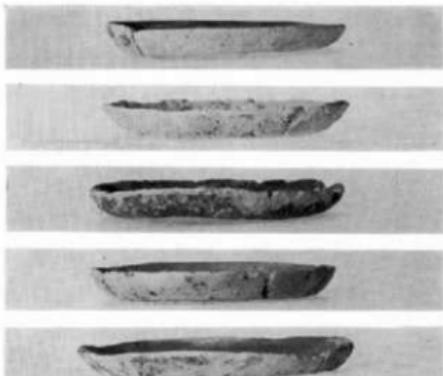
1 方形堅穴遺構全景（東から）



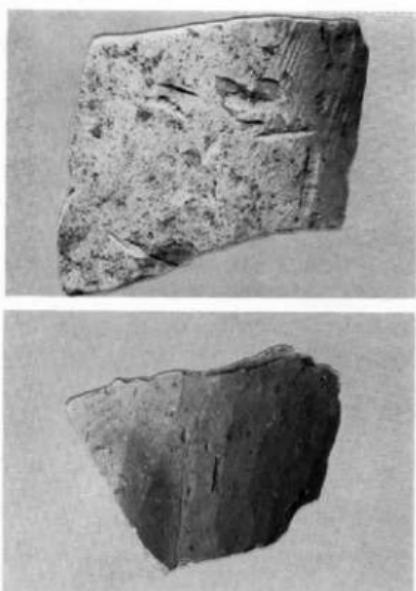
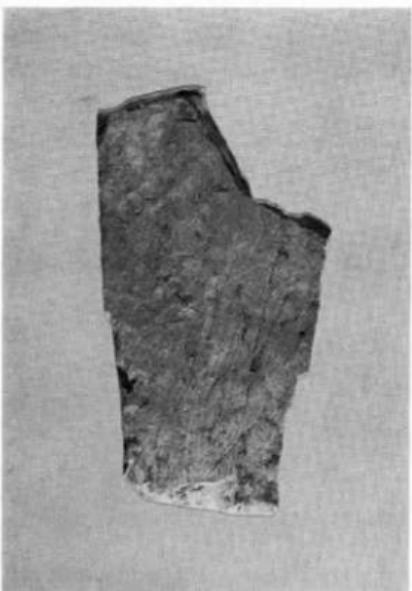
2 方形堅穴遺構内土器出土状態



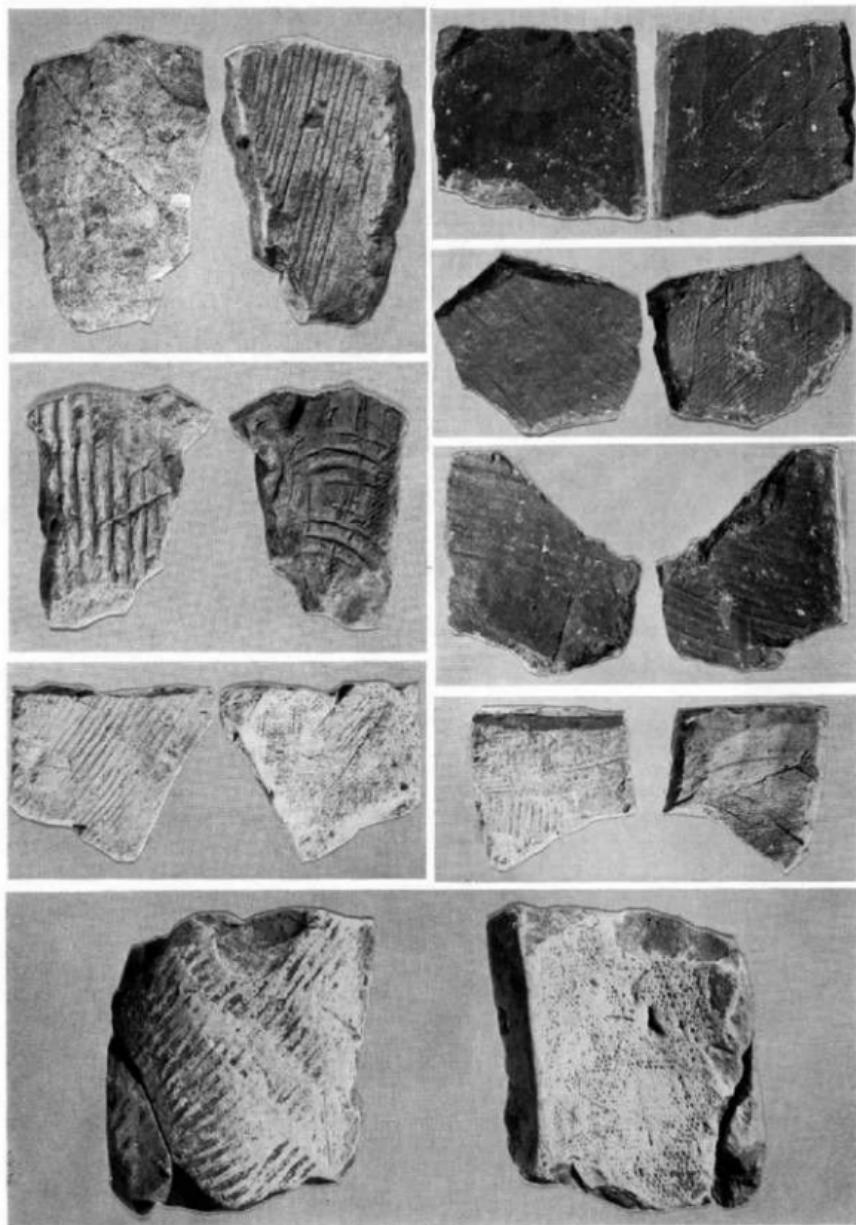
1・4号壁穴住居跡内出土土師器・磁器・鐵器



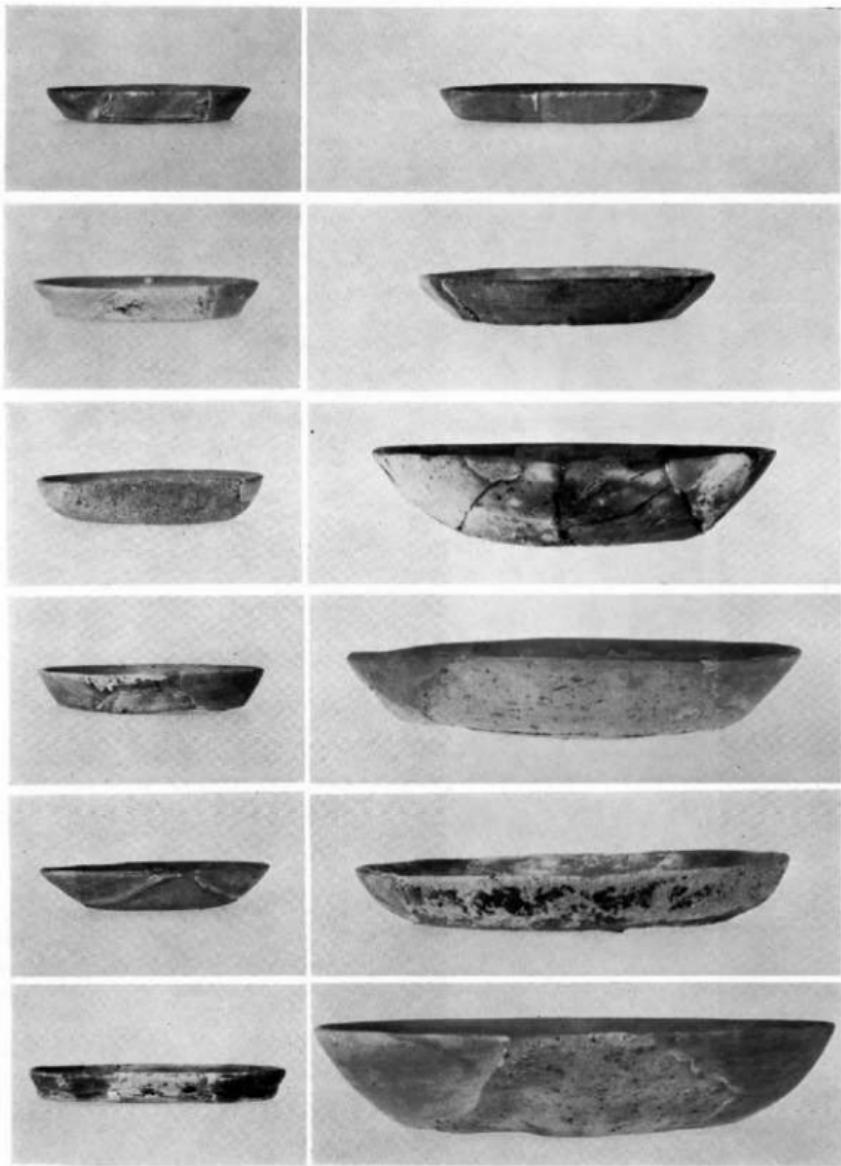
1 方形竪穴造構内出土土師器・磁器



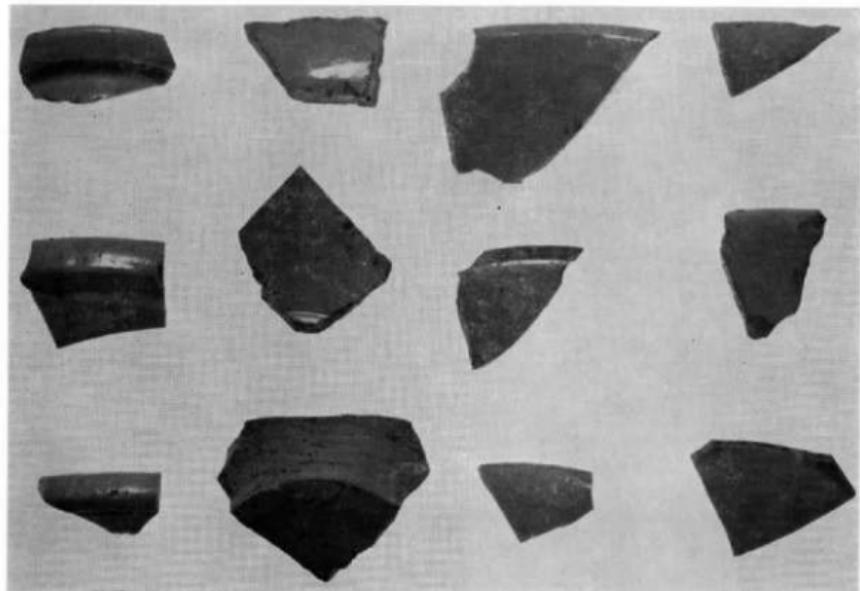
2 包含層出土瓦



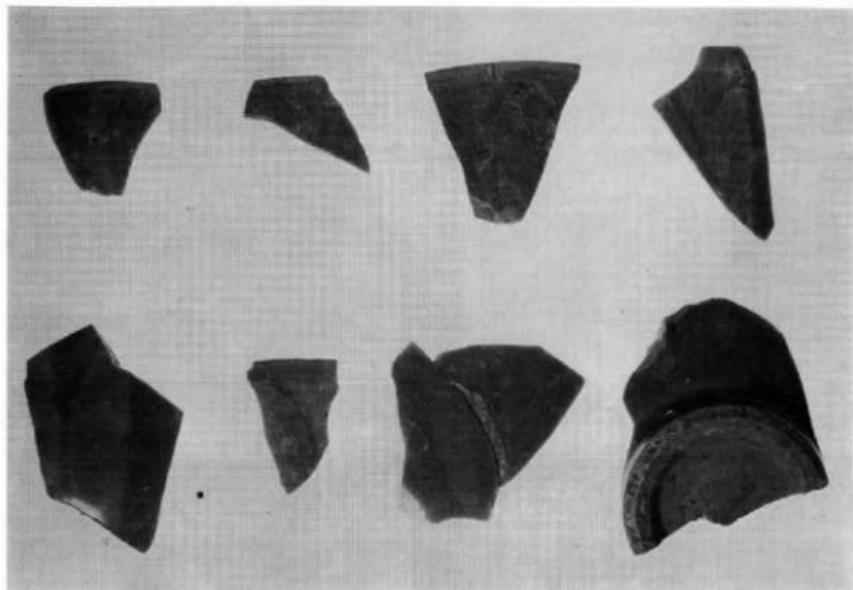
包含刷出土瓦



包含層出土土師器



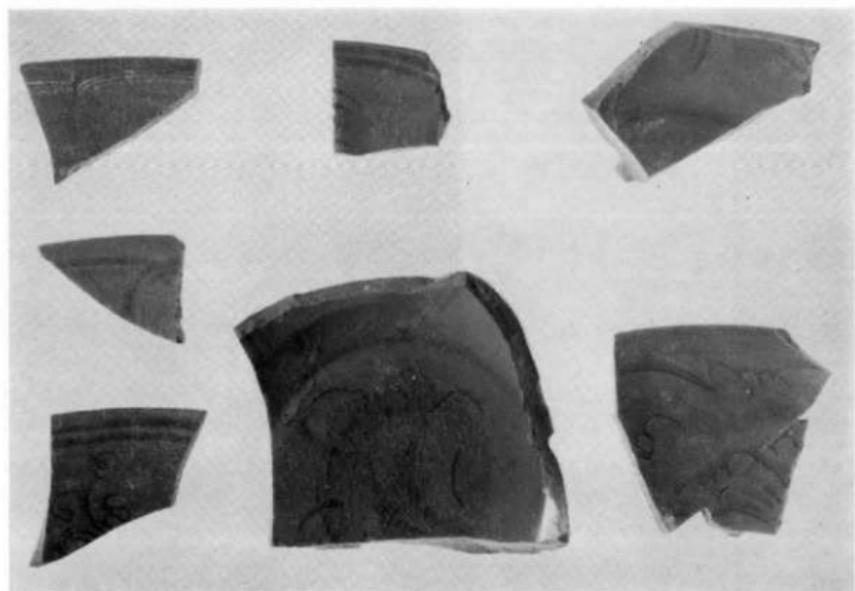
1 包含層出土白磁



2 包含層出土青磁（A類）



1 包含铜出土青磁 (C類)



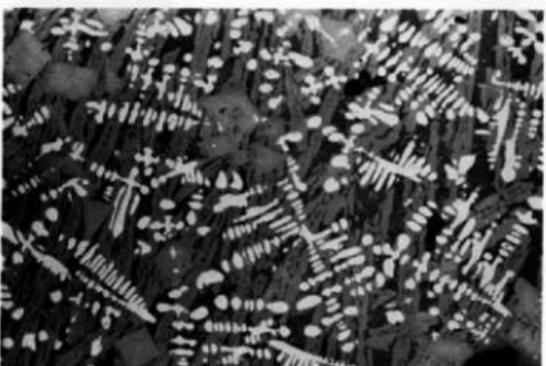
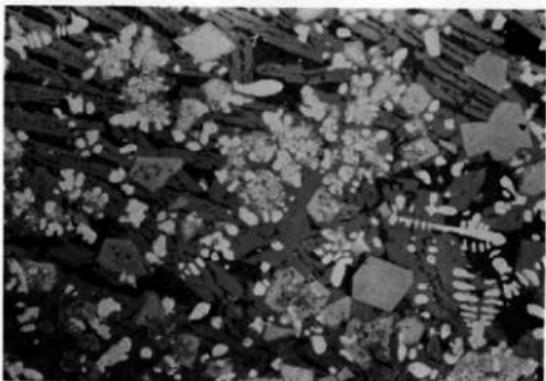
2 包含铜出土青磁 (D類・E類)



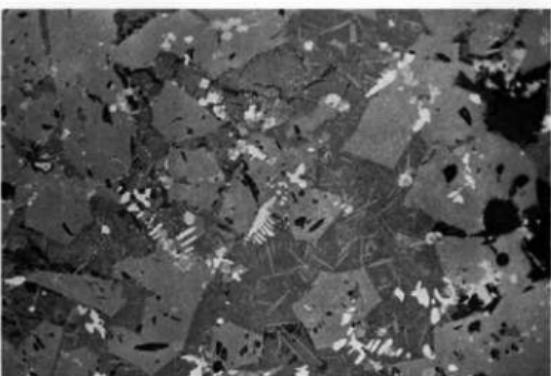
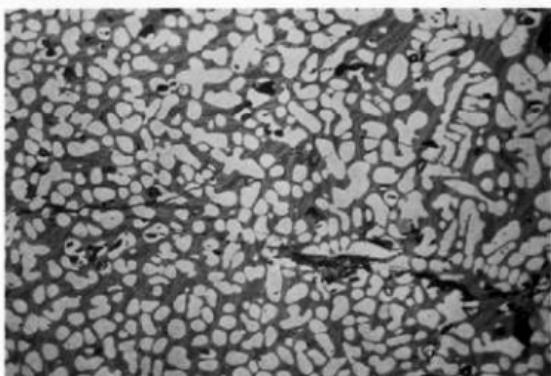
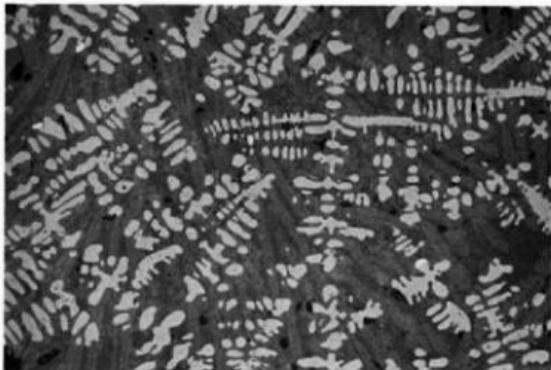
1 包含器出土青瓷(F组)



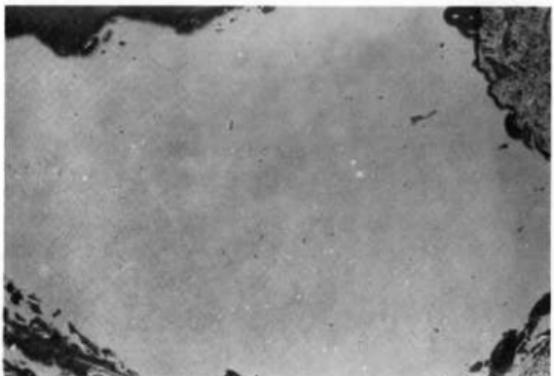
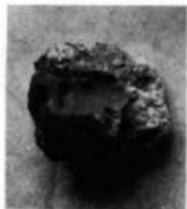
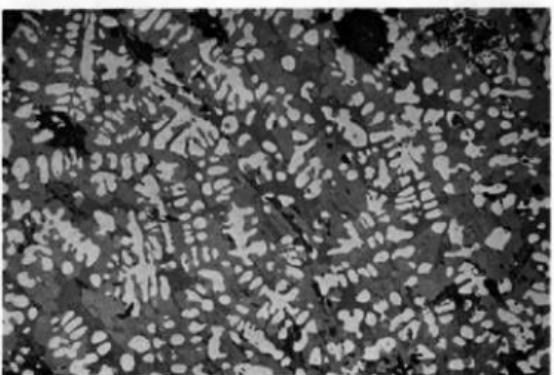
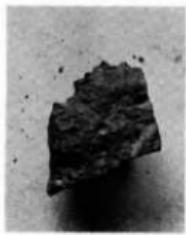
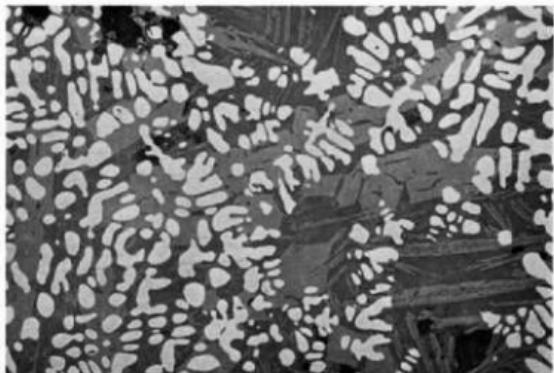
2 包含器近世火舍·古钱



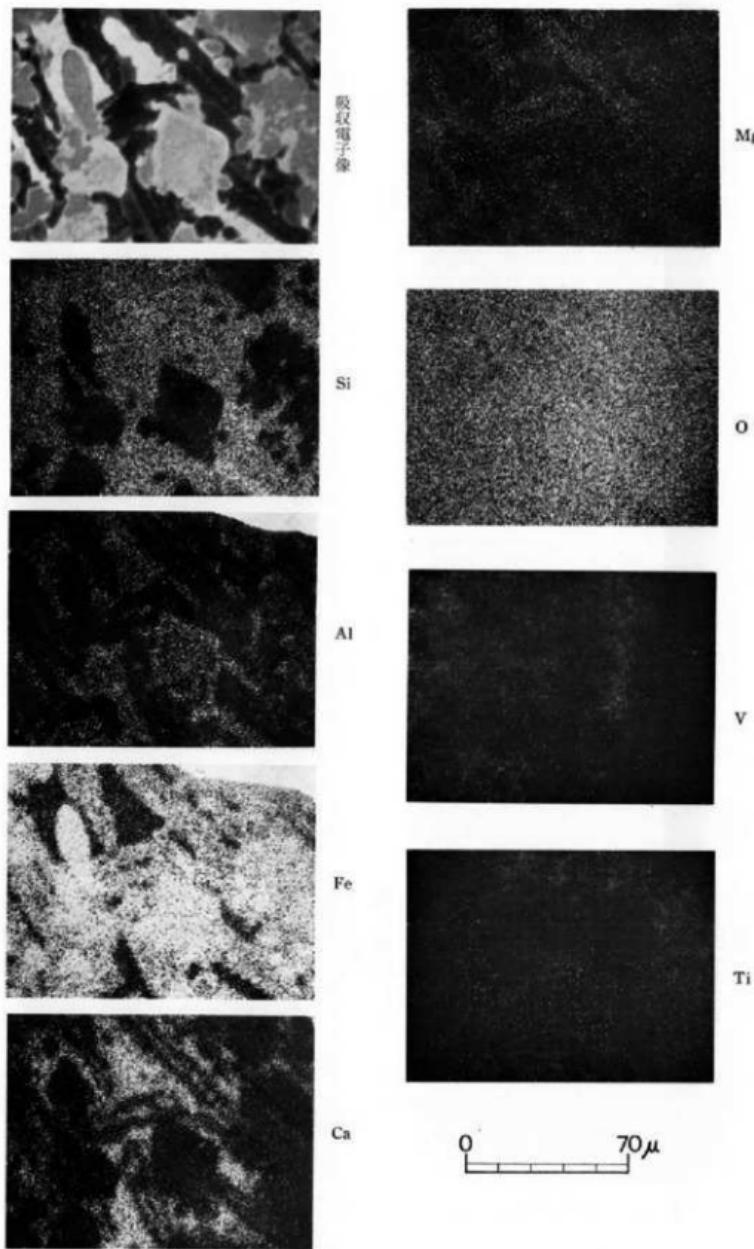
鉄滓の顯微鏡組織 ①



鉄片の顯微鏡組織 ⑤



鉄滓の顕微鏡組織 ③



鉄滓の B 6-1 の Electron Probe Microanalyser 写真 ($\times 700$)

III 下原遺跡の調査

春日市大字上白水字下原

本文 目 次

1. 調査の経過	177
2. 遺跡の立地	177
3. 遺構と遺物	178
(1) 穴住居跡	178
(2) 不整形窓穴	183
4. 包含層出土の遺物	186
(1) 縄文時代の遺物	186
(2) 弥生時代の遺物	188
(3) 古墳時代の遺物	189
(4) 歴史時代の遺物	191
5. まとめ	192
(1) 土師器について	192
(2) 土器組成比率について	194

図版 目次

本文对照頁

図版 1	(1) 下原遺跡と門田遺跡付近航空写真 南東から (井上裕弘撮影)	177
	(2) 下原遺跡・28地点発掘区全景 南から (宮小路賀宏撮影)	177
2	(1) 下原遺跡・29地点発掘区北半全景 南から (宮小路撮影)	178
	(2) 下原遺跡・29地点発掘区南半全景 西から (宮小路撮影)	178
3	(1) 下原遺跡・30地点発掘区全景 四から (宮小路撮影)	178
	(2) 下原遺跡・31地点発掘区全景 西から (宮小路撮影)	178
4	(1) 穴住居跡と不整形窓穴群 南から (宮小路撮影)	178
	(2) 穴住居跡 西から (宮小路撮影)	178
5	(1) 1号窓穴 東から (宮小路撮影)	183

(2) 3号竪穴 西から(宮小路撮影)	184
6 竪穴住居跡出土土師器・石器(石丸洋撮影)	178
7 不整形竪穴出土土師器(石丸撮影)	184
8 不整形竪穴・包含層出土土器(石丸撮影)	185
9 出出土師器の成形技法(井上撮影)	192

挿 図 目 次

第 1 図 下原遺跡地形図(日本国有鉄道原図 1:1,000 高田弘信製図)	折込み
第 2 図 造構配置図(宮小路賀宏・石田広美実測, 高田製図)	179
第 3 図 竪穴住居跡実測図(宮小路・石田実測, 高田製図)	180
第 4 図 竪穴住居跡出土土師器・石器実測図(1)(井上実測, 製図)	181
第 5 図 竪穴住居跡出土土師器実測図(2)(井上実測, 製図)	182
第 6 図 不整形竪穴実測図(宮小路・石田実測, 高田製図)	183
第 7 図 不整形竪穴出土土師器実測図(1)(井上実測, 製図)	185
第 8 図 不整形竪穴出土土師器実測図(2)(井上実測, 製図)	186
第 9 図 包含層出土縄文土器実測図(木下修実測, 製図)	187
第 10 図 包含層出土石器実測図(木下実測, 製図)	188
第 11 図 包含層出土弥生式土器・土師器実測図(井上実測, 製図)	190
第 12 図 包含層出土須恵器・土師器・土質實測図(井上実測, 製図)	191
第 13 図 土器組成比率関係図(井上作成)	195

表 目 次

表 1 土器組成比率(井上作成)	194
------------------------	-----

III 下原遺跡の調査

1. 調査の経過

この遺跡は、当初の分布調査では、弥生時代遺物、古墳時代遺物が散布する別々の4つの地点として畠の区画ごとに上げられていた（第1図）。しかし調査時に、同一段丘面に隣接して位置し、同様の遺物類を包含することなどから、同一遺跡として調査したものである。調査は、昭和46年11月22日から昭和47年2月29日までおこなった。これは第38地点（観音山2号墳）の調査、45・46・47地点（観音山4・5・6号墳）の調査、第39地点（井手ノ原遺跡の一部）の調査と一部並行する調査であった。

調査の結果、遺構として古墳時代前期の住居跡1軒と不整形竪穴3基が発見された。その他に縄文時代、歴史時代の遺物類が若干出土した。

庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主事	小川 浩一郎
	同	嘱託	吉村 源七
調査担当者	同	技術主査	堀 久彌郎
	同	技師	宮小路 賀宏
	同	同	井上裕弘
調査補助員			石田 広美

2. 遺跡の立地

遺跡は、福岡県春日市大字上白水字下原にあり、車両基地入口部西端に位置する。^{シラバタ}

福岡平野の西側を流れる那珂川の支流梶原川が形成した低位な河岸段丘東端上にあり、標高24mを測る。この段丘は南は中原集落付近までわずかに高度を増しながら続き、北は臼佐付近へと延びている。また、遺跡の北側には狭い谷が基地の奥部へと入りくみ、最奥部の観音山（標高169m）の侵蝕作用によって形成された八つ手状に延びる台地に挟まれている。その台地に深原遺跡・原古墳群・門田遺跡をはじめとする広大な遺跡群がのっている。

遺跡は、狭い谷を挟みその広大な門田遺跡に南接している（図版1、第1図）。その比高8

下原遺跡

mで、谷との比高は約1.6mを測る。また同一段丘上には縄文時代後期の集落が発見された柏田遺跡や、調文・弥生・古墳・奈良・平安時代にもわたる広大な複合遺跡である安徳中原遺跡群がある。本遺跡の主体である古墳時代前期の遺跡群は安徳大塚古墳・炭焼古墳群・原古墳群・ウトロ古墳・柏田遺跡・門田遺跡・安徳中原遺跡群・井河古墳群・恵子若山古墳群・老司古墳など多くの遺跡群がその周辺に集中している(註1)。

3. 遺構と遺物

遺跡はブドウ畠や水田として利用され、約1mの地下げが行われていたこともあり遺構の遺存状況は極めて悪く、わずかに北端(第29地点)で住居跡1軒と不整形窓穴3基が発見されたにすぎない(図版2、第2図)。それも上面は削平され、わずかにその姿をとどめていた程度で、他の遺構の発見はできなかった。

だが、遺物の量、分布等からみてさほど多くの遺構の存在は考えられない。住居跡及び不整形窓穴の時期は伴出遺物から古墳時代前期に比定できる。その他の遺物としては縄文式土器・土師器・土師質土器・須恵器・瓦・磁器破片が若干出土したのみである。

(1) 窒穴住居跡

南北5.30m×東西4.16mの開丸長方形を呈する窒穴住居跡である(図版4、第2・3図)。上面がかなり削平されていて壁高はわずか8cmを残すのみである。周溝は北東隅と南東隅の一部を欠く他は、5~10cmの溝がめぐらしている。柱穴らしきピットは西壁内側で検出された1個のみで他は不明である。炉跡についても発見されなかった。

遺物は南壁周溝内から完形の小型壺、東壁側中央部から完形の広口小梨壺が出土し、その他、甕・壺・小型壺・高杯・手握土器・砥石等多数が覆土中より検出された。

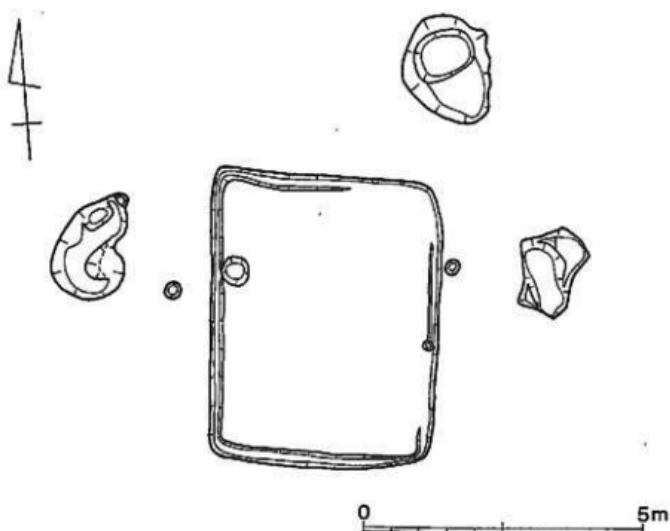
出土遺物

壺(第4図1) 底径約9.4cmの底部破片である。内底部は回転刷毛、体部外面をナデで仕上げ、底面は刷毛の後、軽くナデしている。色調は外面茶褐色、内面灰茶褐色を呈し、外面の一部に煤の付着がみられる。胎土・焼成とも良好である。

小型壺(図版6-3・5・6、第4図2~6) 2は口径11.2cmを測る口脣部破片である。強く外反した口縁部をもち、内外とも丁寧に運磨している。胎土・焼成とも良好である。色調は明茶褐色を呈す。3は底部を欠く資料で、口径11cmを測る。外反した口縁部に最大径をもつ壺で、体部外面は粗い刷毛の後、ナデ仕上げ、内面は笠削りのままで、口縁部はヨコナデによ



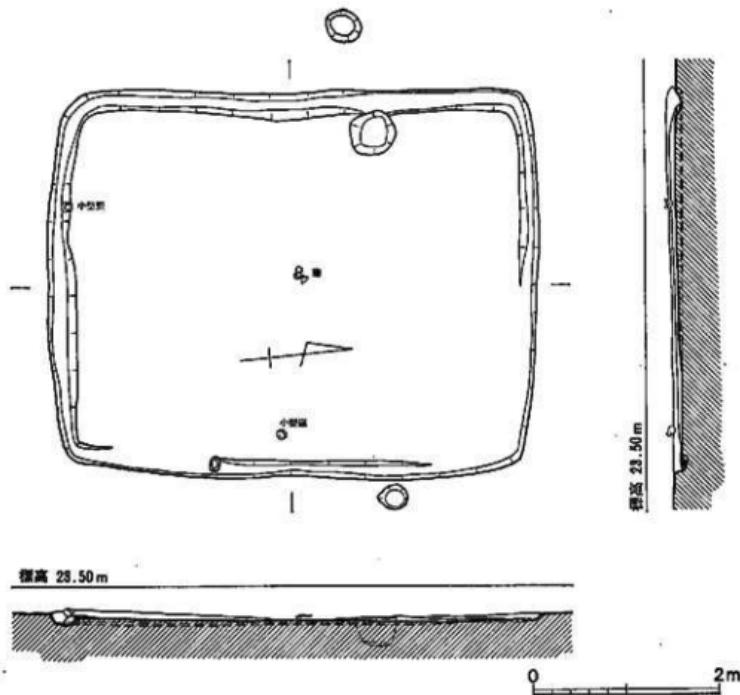
第1図 下原道路地形図(1/1,000)



第2図　造構面図(1/100)

り仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。4は口径10.4cmを測る口縁部破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。5は南壁脇溝内出土の資料である。口径9.2cm、器高8.4cmで球形の腹部にわずかに内彎気味の外反する口縁部がつく丸底の土器である。胸部外面は範削りの後、ナデ仕上げ、内面は範削りのままで、口縁部はヨコナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土にはかなりの細砂を含む。焼成もよくない。6はいわゆる広口の小型壺で、東壁脇中央部床面上で検出された完形品である。口径10.4cm、器高7.4cmで、球形の腹部に若干直立気味に外反した口縁部がつく丸みをおびた平底の土器である。色調は内面黄茶褐色、外面暗茶褐色を呈し、器面のはば全面に擦の付着が著しい。

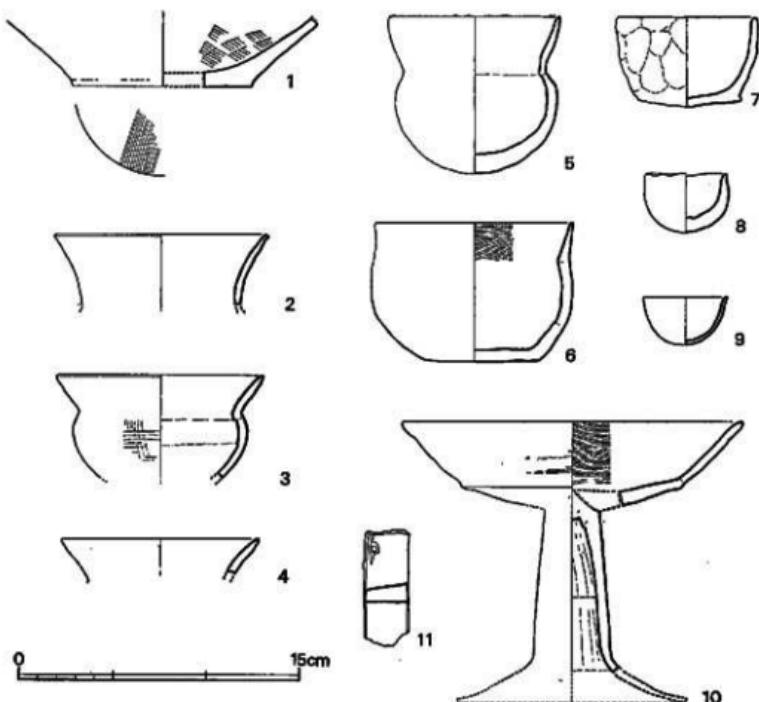
壺(図版6-15、第5図12~16) 12は口径15.6cmの肩部上半の破片資料である。肩部外面は刷毛の後、ナデを行い、内面を範削りしている。口縁部は内外ともヨコナデで仕上げている。色調は黄茶褐色を呈す。胎土にはかなりの細砂を含むが、焼成は良く堅緻である。外面は擦の付着が著しい。14は口径15.8cmの胴上半部の破片で、球形の腹部に内彎気味に外反する口縁部がつく。胸部外面は横位・斜位の刷毛整形で、内面は範削りしている。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。器面には擦の付着が著しい。13は肩部の破片資料である。肩部最大径を中位にもつ球形を呈する胴部、「く」の字状



第3図 穴住居跡実測図 (1/60)

に外反する口縁部がつくものと思われる。外面は縦位・斜位の刷毛で、下半部は部分的にナデで、内面は粗い篦削りしている。肩部は刷毛整形の後、ナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。胴部中位一帯に煤の付着が著しい。住居床面中心部で出土したものである。15は胴上半部の破片資料で、胴部最大径が中位にあり、29.6cmを測る大形の瓶である。胴部外面は斜位の刷毛整形で、内面は粗い篦削りである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には多くの細砂を含む。焼成普通。16は胴下半部の破片資料で、底部は球形を呈す。外面は縦位・斜位の刷毛整形で、底部付近は、さらにナデ仕上げしている。内面は篦削り。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの細砂を含む。焼成は普通。

高杯(図版6-10、第4図10) 杯底部と脚台部を欠く資料である。口径18.1cm、復原器高15cmを測る。柱状の脚部に、緩かな屈折をもつ浅い杯部がつく。杯底部はナデ、口縁部は刷毛の



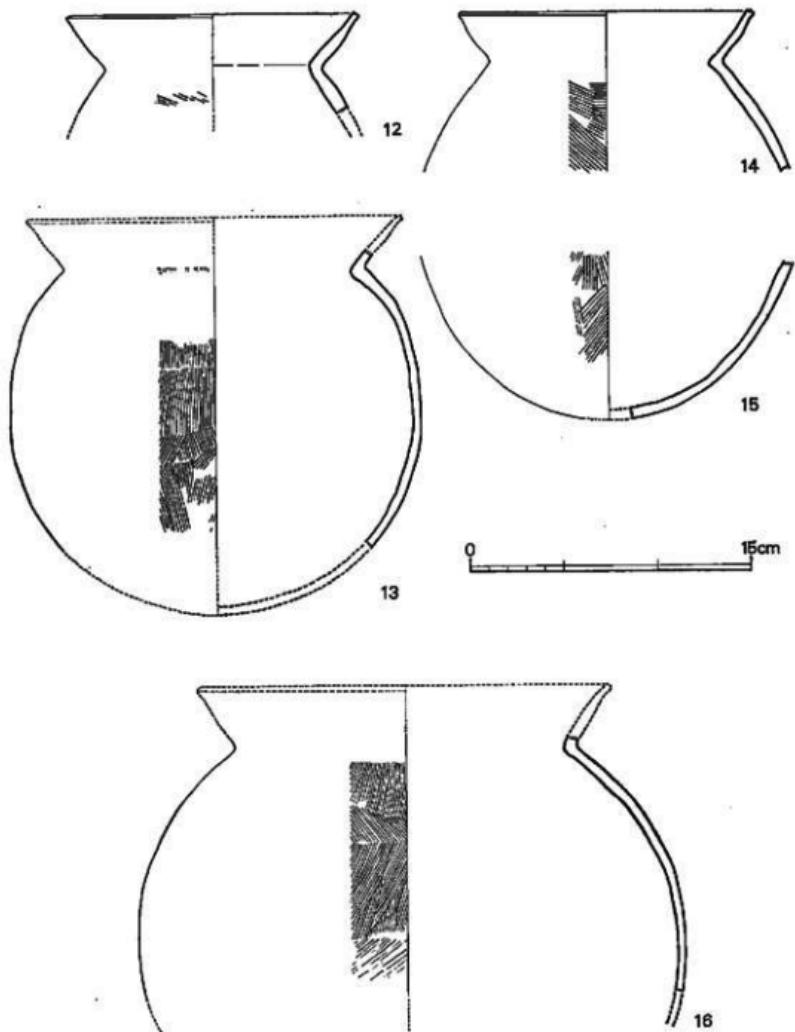
第4図 竪穴住居跡出土土師器・石器実測図(1) (1/3)

後、ナデで仕上げている。内底部は刷毛の後、ナデで内口縁は刷毛のままである。脚部外面は縦位の刷毛で整形した後、横位の砥磨きで仕上げている。内面はしぼりの後、ヨコナデしている。

手握椎 (図版6-7~9、第4図7~9) 7は口径7.2cm、器高4.8cmの完形品。内外とも指先でおさえた凹凸を残すつくりの粗いものである。色調は淡褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。8は口径4.3cm、器高3.1cmの完形品で、7と同様のつくりの粗いものである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも悪い。9は口径4.4cm、器高2.6cmを測り、つくりは7・8と同様。色調は淡黄褐色を呈す。胎土・焼成ともなかなか良い。

砥石 (図版6-11、第4図11) 全面を砥石面として使用したもので、左上部に糸懸けと思われる孔がある。

下原遺跡

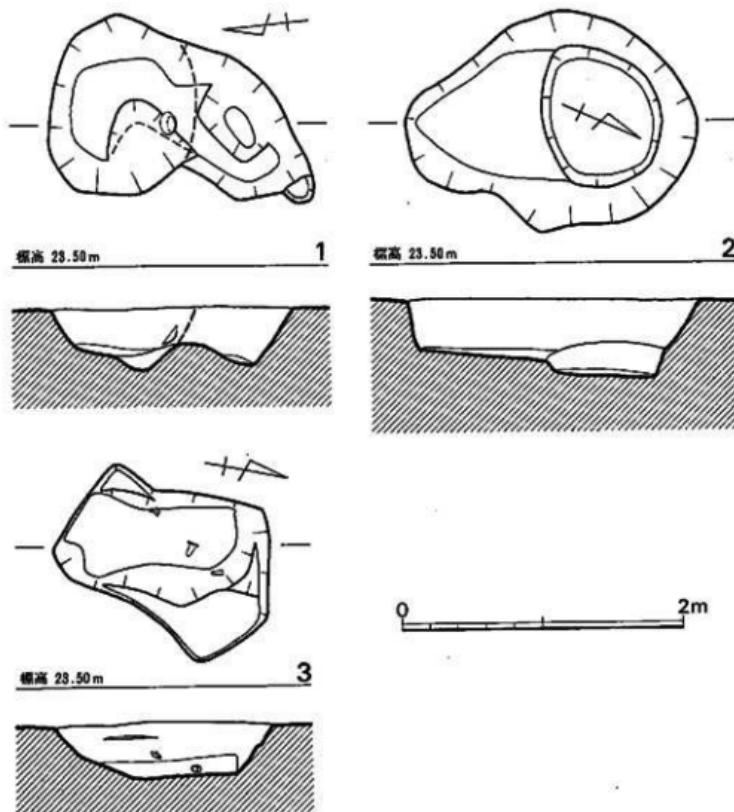


第5図 空穴住居出土土器実測図(2) (1/3)

(2) 不整形竪穴

住居跡の東側と西側、さらに北東側にそれぞ近接して3基検出された(図版4-1、第2図)。

1号竪穴(図版5-1、第6図1) 住居跡の西側に近接して検出されたもので、一部南側は他のピットと複合している。長径1.3m×短径約1mの楕円形を呈す。断面はU字形をなし、南北隅はさらに凹む。深さは浅い所で30cm、深い所で43cmを測る。出土遺物としては小型壺・甌・高杯・手提瓶等の破片土師器である。



第6図 不整形竪穴実測図(1/40)

下原遺跡

2号竪穴（図版6-2） 住居跡の北東隅に近接して検出されたもので、長径2.08m×短径1.54mの不整橢円形を呈す。断面は逆台形状をなし、底面北半でさらに凹みを持つ。浅い所で深さ34cm、深い所で54cmを測る。出土遺物としては、小型壺・窓破片のみである。

3号竪穴（図版5-2、第6図3） 住居跡の東側に近接して検出されたもので、長径1.5m×1mの不整長方形をなす。断面は緩かなU字状を呈し、深さ40cmを測る。出土遺物としては、壺・窓・杯・高杯等の破片である。

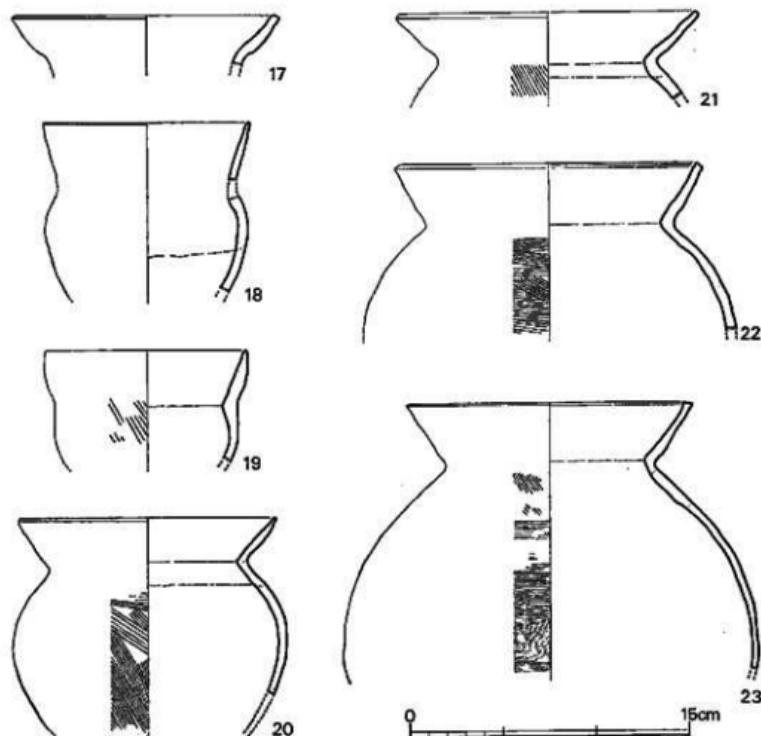
出土遺物

壺（第7図17） 緩かな複合状をなす口縁を持つ破片資料で、口径14.2cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、胎土にはかなりの細砂を含む。焼成は普通である。3号竪穴出土。

小型壺（図版7-18、第7図18・19） 18は底部と頸部の欠損した資料で、口径12cmを測る。若干肩に張った脣部に、わずかに外反する口縁がつく粗雑なつくりの広口小型壺である。脣部外面は鋸削りで、内面は指先によりナデ上げ、口縁部内外は指先でおさえた後、ヨコナデ仕上げを行っている。胎土にはかなりの細砂を含むが焼成は良い。1号竪穴出土。19は肩上半部の破片資料で、口径10.8cmを測る。2と同様な広口の小型壺で、口縁に最大径をもつ。2号竪穴出土。

壺（図版7-20・22・23、第7図20～23） 20は底部を欠く資料で、口径13.7cmの小形の窓である。わずかに張った脣部に「く」字状に外反した口縁部がつく。口縁端部はわずかにつまみ上げている。脣部外面は横位・斜位の刷毛、内面は鋸削りしている。口縁部内外と肩部はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。2号竪穴出土。21は肩部上半の破片資料で、口径16.3cmを測る。肩部外面は斜位の刷毛、内面は鋸削りで、口縁部内外をヨコナデしている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。外面全体に擦の付着が著しい。1号竪穴出土。22は肩上部の破片資料で、口径18.4cmを測る。球形の脣部にわずかに内唇気味の外反する口縁部がつく窓で、口縁端部上面と内面にわずかな凹線をもっている。脣部外面は横位・斜位の刷毛で、内面は鋸削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。1号竪穴出土。23は肩上半部の破片資料で、口径15.4cm、脣部最大径22.3cmを測る均整のとれた窓である。球形の脣部に内唇気味の口縁部がつき、口縁端部内面をわずかにつまみ上げている。脣部外面は横位・斜位の刷毛整形、内面は粗い鋸削りを行っている。口縁部内外はヨコナデし、肩部一帯も刷毛の上を軽くナデしている。脣部内面に指先によるおさえ痕がみられる。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。3号竪穴出土。

杯（図版7-24、第8図24・25） 24は底部を欠損した破片資料で、口径12.6cm、復原器高3.9cmを測る。内外とも丁寧に横削きをして、口唇部をヨコナデしている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好である。25も底部を欠く資料で、口径11.8cm、復原器高2.8cmを測る。内外ともナデ仕上げである。色調・胎土・焼成とも1と同様。両者とも3号竪穴出土。



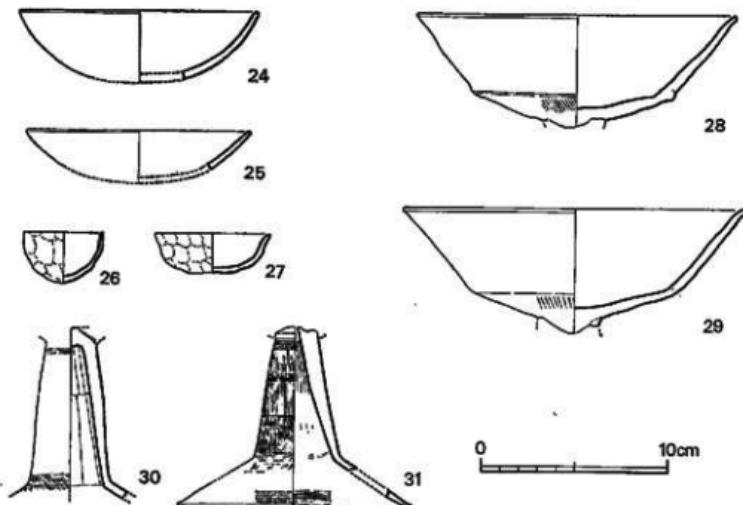
第7図 不整形整穴出土土器実測図(1) (1/3)

のものである。

手捏（図版7-26・27、第8図26・27） 26は口径4.2cm、器高2.7cm、27は口径6.2cm、器高2.1cmを測る破片資料で、指頭圧痕を頗著に残す手捏土器である。色調は黄茶褐色を呈し、胎土には多くの細砂を含むが、焼成は普通。两者とも1号整穴出土のものである。

高杯（図版8-28・29・31、第8図28～31） 28・29とも脚部を欠損した資料である。28は口径17.1cm、杯部器高5.6cmを測り、杯底部の屈折ははっきりしている。杯部外面は斜位の刷毛の後、丁寧に整磨している。杯底部は刷毛のままである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。29は口径18.3cm、杯部器高5.8cmを測り、杯底部の屈折はゆるやかである。杯部の内外は粗い刷毛整形後、ヨコナデ仕上げしていて、杯底部は刷毛のままである。色調は黄褐色

下原遺跡



第8図 不整形竪穴山土・土師器実測図(1) (1/3)

を呈し、胎土・焼成とも普通。両者とも1号竪穴出土。30は台部の大半を欠く柱状の脚部の資料である。外面は細い刷毛の後、丁寧に磨き磨き、内面は箝削りしている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好堅緻である。31は脚部の資料で、台部径12.6cm、脚高9cmを測る均整のとれたものである。外面は細い刷毛整形の後、丁寧な箝磨きを施し、脚部内面はしづらりの後、箝削りしている。脚部内面は刷毛を残している。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好堅緻である。30・31とも3号竪穴出土。

(井上裕弘)

4. 包含層出土の遺物

(1) 繩文時代の遺物

古墳時代の遺物と混在して縄文土器・石器が出土した。特に住居跡の覆土中に多く出土し、下部に包含層の存在が予想された。

a 土器 (第9図)

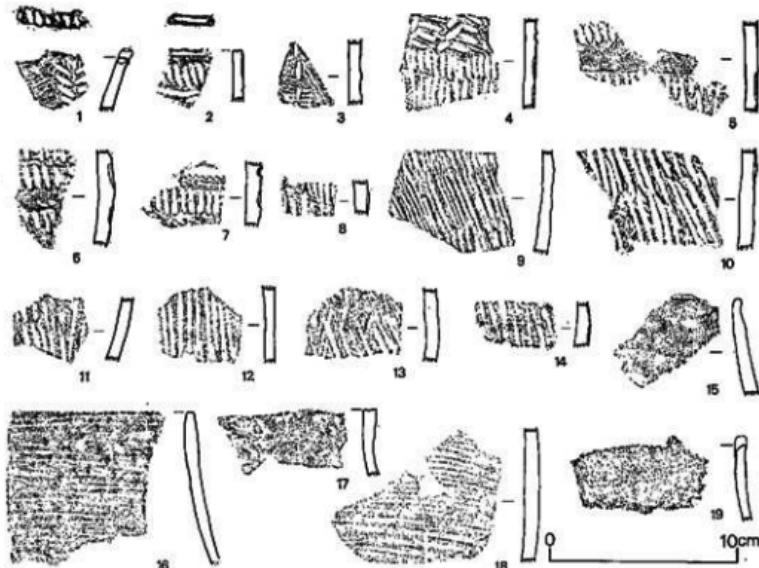
大きく3つに分類できる。1類は沈線文を主文様にするもので、短直線文と沈線文に細分さ

れる。

1a類 (1~8) 1は口縁部破片で小波状口縁になる。口縁部は外反し、口唇部に刻目を施す。表面は貝殻条痕文を地文とし逆ハ字状の短直線文が4段見られる。裏面は貝殻条痕文を施す。3は同一個体で縦方向の沈線。2は直口する口縁部の小破片で、口縁と直交した若干内彎ぎみの短直線文を這らし、その下に横方向の沈線文を施す。口唇部は「凹」状を呈す。4~7は同一個体の脛部破片で帶状に短直線文を施す。色調は1~3は赤褐色、他は茶褐色を呈す。

1b類 (9~14) いずれも脛部破片で沈線文を施す。13のように貝殻条痕文に似るものもある。9は門田遺跡谷地区の7層に類例が多い。1類はいわゆる繩文前期に属す普焼式土器で、裏面はいずれも貝殻条痕文がみられる。薄手で焼成の良い土器であるが、滑石は含んでいない。胎土に滑石を含まない普焼式土器は遠賀郡芦屋町山鹿貝塚(註2)や筑紫郡那珂川町深原遺跡(註3)など北部九州に比較的多く認められることは注意されよう。

2類 (15) 口唇部の若干外反し、脛部がやや膨る深鉢形の無文土器で、やはり前期に属するものであろう。



第9図 包含縄出土器実測図 (1/3)

3類(16~19) 後・晩期の土器を一括した。16・18は表面のみに貝殻条痕文を施した粗製土器で16は胴の脚子深鉢形土器で口唇部は平坦で口径34cm前後。17は口縁部の外反し、口唇部が平坦な鉢形土器。裏面は横方向の貝殻条痕が著しい。19は口唇部にリボン状突起をもつ浅鉢形土器で、器面は粗い。

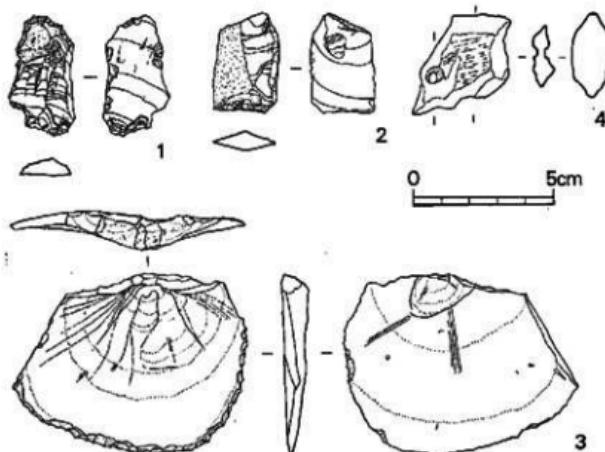
b 石器(第10図1~4)

1は黒曜石の剣片を利用したエンド・スクレイパーで、左側刃部にも二次加工を加え刃部を形成している。裏面にはバルブが残る。2は黒曜石製の刃器で下・右縁辺に使用による刃こぼれが観察される。3はサスカイトの大形の剣片を利用したスクレイパーの良品で、右縁辺上部を除いて調整を加え刃部を作っている。裏面には加工が見られない。4は滑石製の不明石器で、幅3.3cm。中央下寄りに、両側より径6mmほどの凹みを穿つ。

1・3のスクレイパーは曾畠式土器に伴なうが、2は時期が下る可能性もある。4について
は古墳時代住居跡に関連があるものかもしれない。
(木下 修)

(2) 弥生時代の遺物

壺(図版8-34、第11図32~34) 32・33とも口縁部の破片資料で、32は口径29.2cmを測る。卵形の肩部に「く」の字状に外反した口縁部がつくものと思われる。口縁部内面は刷毛、口唇



第10図 包含層出土石器実測図(1/2)

部から外面はヨコナデしている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも普通である。33は小片で口径を知り得ないが、ほぼ1と同様のものであろう。34は肩上半部の破片資料で、口径14cmを測る。卵形と思われる胸部に強く「く」の字状に外反した口縁部がつく壺である。胸部外面は斜位の刷毛（一部肩部付近に横位のタキの痕跡を残している）、内面も刷毛整形し、部分的にナデしている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。肩部中位に媒の付着がみられる。全て第2層出土のものである。時期は後期終末である。

(3) 古墳時代の遺物

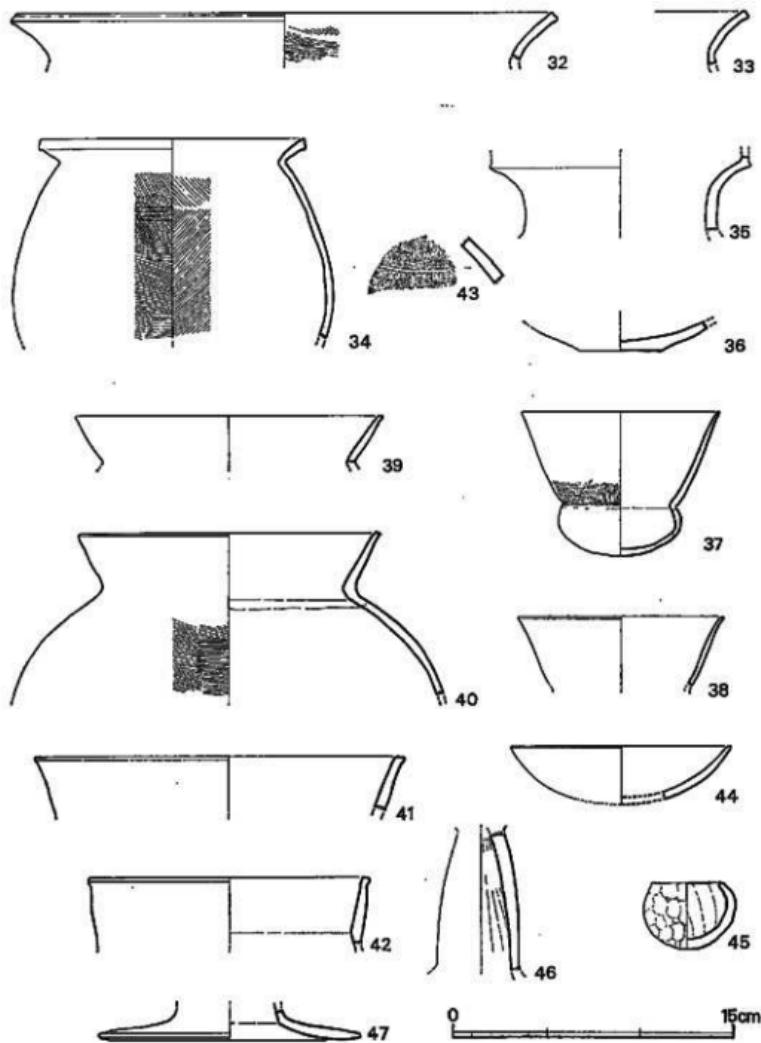
a. 土器

壺 (図版35・36) 35は複合口縁壺の口縁部破片で、口縁部を欠くため口径は不明であるが、ほぼ14cm内外と思われる。口縁部の屈折は明瞭で、直立気味の口縁がつくものであろう。内外ともヨコナデで仕上げたつくりの良いものである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好、堅緻である。36は底部の資料で、底径2.2cmを測るわずかに上げ底気味のものである。外面は丁寧に磨き上げている。内面の整形は剥落がはげしく不明であるが、一部に刷毛の痕跡を残している。色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。

小型壺 (図版8-37・9-d, 第11図37・38) 37はほぼ完形の資料で、口径10.6cm, 高さ7.7cmを測る。扁平な体部に、大きく開く口縁部をつけた土器である。体部に比して口縁の広がりが大きい丸底の均整のとれたつくりの良いものである。口縁部外面は細かい継位の刷毛の後、ヨコナデし、さらに丁寧に横位の細かい（笠先）箝磨きをしている。体部外面は細かい刷毛の後、箝削りし、その上を箝磨きしている。体部内面はナデ、口縁部内面は細かい刷毛の後、上半部はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好・堅緻なものである。外面片側全体に媒の付着が著しい。38は口縁部の破片資料で、口径10.8cmを測る。37と同様の器形を呈するものである。整形技法・色調・胎土・焼成とも同じである。

壺 (図版9-a, 第11図39~43) 39・41・42とも口縁部の破片で、40は肩上半部の破片、43は肩部破片資料である。39は口径16.4cmを測る「く」の字状に外反したもので、内外ともヨコナデしている。40は口径16.2cmを測る。球形の胸部に「く」の字状の口縁部がつくもので、口縁部を平滑にしている。胸部外面は横位・斜位の刷毛、内面は箝削りし、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。41は口径18.8cmを測る。40と同様の器形を呈するものである。42は口径17cmを測る口縁部が直立気味の壺である。口唇部は平滑で、内外ともヨコナデで仕上げている。43は肩部に一条の籠描き沈線の走る壺の破片である。外面は横位・継位の刷毛整形し、内面は箝削りしている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とともに良い。40・41が1層、39・42・43が2層出土。

下原遺跡



第 11 図 包含層出土弥生式土器・土器器実測図 (1/3)

杯（第11図44） 底部を欠く資料で、口径 11.6cm、復原器高 3.2cm を測る。内外ともヨコナデ仕上げで、色調は黄褐色を呈す。胎土・焼成とも普通。1層出土。

手捏（第11図45） 口径 3.8cm、器高 3.5cm を測る。外面は指先によるおさえの痕跡が明瞭で、内面は指先によるナデ上げで仕上げている。色調は黄褐色を呈す。1層出土。

高杯（第11図46・47） 46は柱状部、47は脚台部の破片資料である。46は柱状部中位がわずかにふくらみをもつ。外面は風化しているため整形は不明、内面にはしづりの跡がみられ、下半はヨコナデしている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成ともあまりよくない。47は台部径 13.8cm を測る。46と同様の柱状部がつくものであろう。46が 2 個、47が 1 層出土。

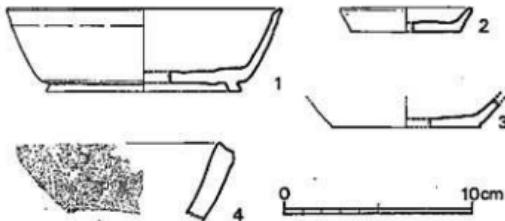
b. 須恵器

杯（図版8-1、第12図1） 口径 14.4cm、器高 4.5cm を測る。体部に近い位置に外方にのびる高台を付けるものである。体部はわずかに内側気味に外反し、口唇部にてわずかに外反している。体部内外はヨコナデ、底部内外は不定方向のナデ調整である。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。1層出土。須恵器 IV b 期に比定できる。

(4) 歴史時代の遺物

a. 土師器

皿（図版8-2・3、第12図2） 復原口径 6.9cm、器高 1.3cm の小皿である。内外ともヨコナデ、底部は糸切り離し手法を用いている。色調は暗茶色を呈し、胎土・焼成とも良い。2層出土。



第12図 包含層出土須恵器・土師器・土師質土器実測図 (1/3)

2層出土

b. 土師質土器

擂鉢（第12図4） 小片で全形は知り得ないが平底の擂鉢状を呈するものと思われる。内面には二条の横目条溝がみられる。体部外面は斜位の刷毛整形のあと、軽くヨコナデし、内面は横位の細かい刷毛整形を行っている。色調は黄褐色を呈し、胎土は細砂を多く含むが焼成は良い。

5. ま　と　め

遺跡の遺存状態は極めて悪く、わずかに古墳時代前期の竪穴住居跡1軒と不整形竪穴3基が発見されたにすぎない。それも前記したように上面は削平され、かすかにその姿をとどめる程度で、他の遺構等の発見もできなかった。だが、遺物の量・分布等からみてさほど多くの遺構の存在は考えられない。集落跡としては数軒という小規模なもので、さらに出土した土器群からみても極めて短期間に營まれたものと思われる。この地域でも近年の調査で、門田遺跡・柏田遺跡・安徳中原遺跡・原遺跡等の同時期の集落跡が発見され、土器編年、集落の実態、その間の相互関係等の作業が必須の時期にきている。しかし、いまだ資料的に充分でないため、ここでは、いくつかの問題点を指摘するにとどめ、後日、明らかにしていきたい。

(1) 土器について

ここでは本遺跡出土の古式土器について若干まとめてみたい。実測した資料は、43点でかなりずしも充分ではないが、ほぼ一時期のセットとして把握しうる土器群と思われる。各器種ごとにその特色を整理すると次のようになる。

壺 口頸部付近と底部の破片資料のみであるが、A・Bの二種がある。壺A(35)は、口縁部が明瞭に二段に屈曲するいわゆる複合口縁のもので頸部は直立気味である。内外ともヨコナデで仕上げたつくりのよいものである。壺B(17)は、わずかに肥厚し、一見複合状をなす内縁気味に外反する口縁部をもつものである。内外ともヨコナデ仕上げである。口径14.2cmを測る。底部としては、平底(1)とわずかに上げ底気味の平底(36)があり、(1)の内底面は刷毛、外面はナデで仕上げ、底部は刷毛のあとナデしている。(36)は内面刷毛。外面は箆磨きしたつくりのよい土器である。

小型壺 形態および調整手法から大きく三種に分けられる。小型壺A(2・37・38)は、体部が小さく扁平で、口縁部は大きく外反し、口縁部径が体部最大径よりも大きいものである。口縁部の立ちあがりは小型壺Bに比べて長い。口縁部外面は(37)のように細かい刷毛のあとヨコナデし、さらに横方向に箆で磨いて入念に仕上げる。体部外面は細かい刷毛のあと、箆削りし、その上を箆磨きしている。体部内面はナデ、口縁部内面は細かい刷毛のあと、上半部をヨコナデで仕上げた極めて丁寧な作りの良い土器である。

小型壺B(3・4・5・18) は体部が球形をなし、口縁部は小さく外反するもので、口縁部径は体部最大径に比べて小さいか同大である。口縁部の立ちあがりも、体部の高さに比べて著しく小さい。口縁部の内外面はヨコナデで仕上げ、体部外面は箆削りのままのものと、刷毛のあ

とナデ仕上げしたものがあり、内面も箒削りのものとナデ上げのものとがある。全体に小型壺Aに比べ、極めて粗雑な作りの土器で、箒磨きはみられない。

小型壺C (6・19) は、いわゆる広口壺といわれるものである。体部は球形をなし、口縁部は小さく外反するもので、口縁部径は体部最大径に比べ大きいが開口部である。(19) は口縁部内外を指先でおさえたあとヨコナデで仕上げているのに対し、(6) の内面は細かい刷毛調整で、外面には指先によりおさえた痕跡を残している。体部外面は(19) が粗い刷毛のあとナデ。(6) は箒削りのあとナデで仕上げている。内面は両者とも箒削りしている。(6) は平底であり、小型壺B と同様に粗雑な作りの土器である。

甕 内壁気味に外反する口縁部をもつ甕A (12・14・20~23・39・40) と直立気味に外反し、口唇部を肥厚させ平坦面をもつ甕B (41・42) に分けられる。甕Aには口縁端部の特徴により a・b の二種ある。a 類 (20・39・40) は端部が肥厚せず薄く尖って終り、b 類 (22・23) は端部を内側に肥厚させたものである。体部はいずれも球形の脇部に丸い底部をもつものと思われる。口縁部は内外ともヨコナデで、体部外面は刷毛で仕上げている。内面は箒削りのままである。ほかに体部外面をナデで仕上げた丁寧な作りの土器(図版9-c)と肩部に一条の沈線をもつ(43)もある。

杯 口径 11.7~12.7cm、復原器高 2.9~3.9cm を測る作りの良い土器 (24・25・44) である。内外とも丁寧なヨコナデで平滑に仕上げたもの (44) と、さらに箒磨きをして仕上げたもの (24・25) がある。小型壺A や高杯A と同様、丁寧な作りの土器である。

高杯 杯部の屈折が顕著な A と杯部の屈折が不明瞭で丸くななる B の二種がある。高杯A には調整手法の異なる作りの良い a 類と悪い b 類がある。a 類 (28) は、口縁部内外を刷毛のあと、ヨコナデし、さらに外面は丁寧に箒磨きをして仕上げている。杯部内底面は刷毛のあとナデで仕上げ、外面は刷毛のままである。b 類 (10) は杯部脇部とも外面は刷毛のあとナデで仕上げ、杯部内面は刷毛のままでの粗雑な作りの土器である。高杯B (29) は高杯A-a 類と同様な丁寧な作りのもので、調整手法も同じである。他に脇部として 4 点あるが、(46) は他と異なり中位にて若干脇の張るものである。また (31) の脇部は極めて作りの良好な資料で、調整手法の刷毛・胎土・焼成とも小型壺A (37) と酷似する土器である。

以上の土器群は成形技法・調整技法とも極めて共通したもので、基本的に同一様式として把握しても大過なかろう。しかし、一部、甕B と高杯 (46・47) は後出的にもみえる。ここでは、一応包括して考えておく。

これまで筑前におけるこの時期の編年作業は、室見川を中心とした早良平野での資料で行われている(註4)が、いまだ充分な確定をみていない状態である。

とりわけ、早良平野では、最近の調査で、野方中原遺跡(註5)、湯納遺跡(註6)などで、この時期の多くの資料が発見されている。近い将来、早良平野における編年体系が確立される

下原遺跡

ものと思われる。しかし、現在、那珂川・御笠川を中心とした福岡平野での資料は極めて少なく、編年的位置を与えることはかなり困難な状況である。ここでは、体系化されつつある早良平野の資料との比較にとどめ、将来、福岡平野での編年体系確立への資料としたい。本遺跡出土の土器群にもっとも近いものとして、湯納遺跡II-A、D5溝出土の土器群がある(註7)。本遺跡出土の土器群も、それとほぼ同じ時期を比定できよう。

(2) 土器組成比率について

以上のような遺存状態の悪い当遺跡において、遺存した資料から集落廃棄時の様相を把握することはかならずしも適切ではないが、廃棄された土器の組成比率を住居跡内・不整形窓穴内・包含層内に分け、比較・分析してみたい。

遺存した土器は数点の資料を除き全て破片資料である。壺18(32)・小型壺42(88)・甕83(1,380)・碗5(39)・杯19(29)・高杯8(63)個体で総個体数175個体である。個体数は口・頸部破片で行ったもので、()内は土器破片数を示したものである。これを図示したのが表1であり、それをグラフで表現したのが第13図である。そこで提出される問題を指摘すると次のようになる。

a 総計みると甕が83個体と多く、全体の47.43%を示す。次に小型壺42個体で24%を占め、杯10.86%・壺10.29%ではなく同率、高杯4.75%・碗2.86%とつづく。遺構別

表1 土器組成比率

	住居跡	不整形窓穴	包含層	計
甕	1個体(2点)		17個体(30点)	18個体(32点)
	[2]☆⑥ 5.6% 3.13%	[3]⑥ 16.4% 9.4%	[1]⑥ 16.04	10.29%
小型壺	11(27)	8(18)	23(43)	42(88)
	[2]① 26.2 34.38	[3]③ 19 21.62	[1]⑥ 44.8 21.70	24%
甕	14(162)	15(149)	54(1069)	83(1,380)
	[3]① 16.9 43.75	[2]① 18.1 40.54	[1]⑥ 65 50.94	47.43%
(手標を含む)	2(14)	1(7)	2(18)	5(39)
	[1]④ 40 6.25	[3]③ 20 2.70	[1]⑥ 40 1.87	2.86%
杯	3(3)	9(16)	7(10)	19(29)
	[3]⑥ 15.8 9.38	[1]⑨ 47.4 24.32	[2]④ 36.8 6.60	10.86%
高杯	1(14)	4(19)	3(30)	8(63)
	[3]⑥ 12.5 3.13	[1]④ 50 10.81	[2]⑥ 37.5 2.83	4.75%
	32(222)	37(209)	106(1,200)	175(1,631)

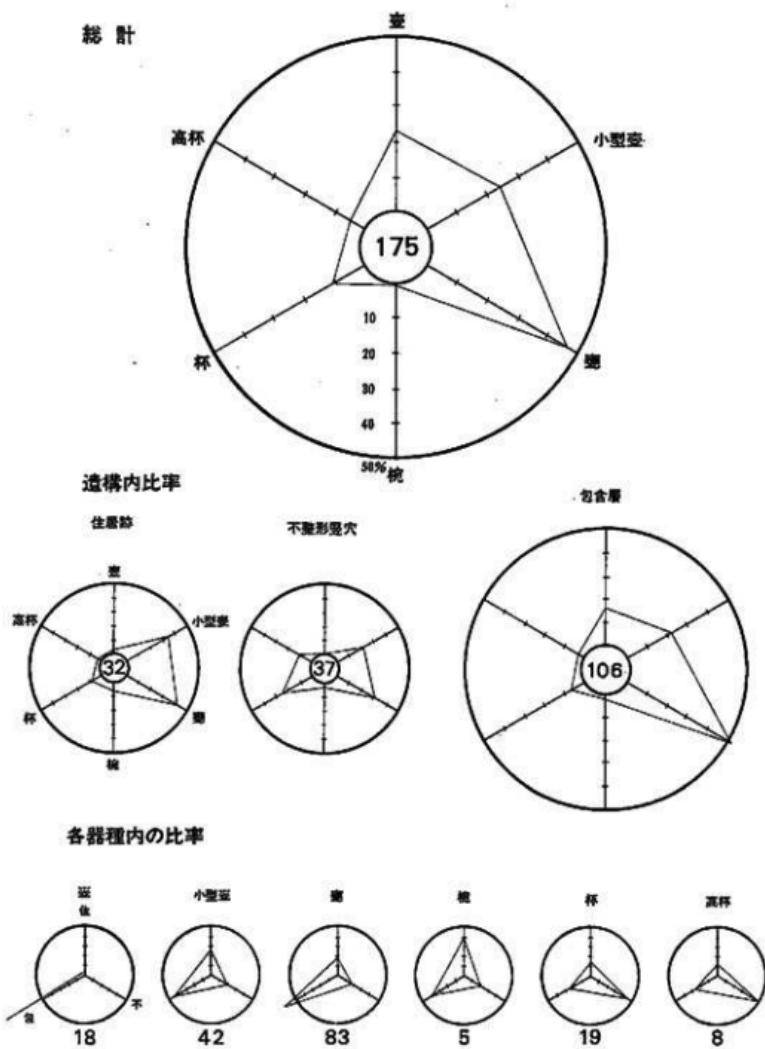
※各器種内の比率 ☆遺構内の比率

総計をみると住居跡32、不整形窓穴

37個体とほぼ同じであるが、包含層は106個体が多い。遺構内と包含層の比率は2:3である。

b 遺構別にみると、住居内の器種別比率は総計の比率と同様に甕が43.75%と多く、小型壺も34.38%と高い。次に杯9.38%・碗6.25%・高杯3.13%・壺3.13%とつづいている。いわゆる大型甕と高杯の比率が低位であることを示している。

不整形窓穴については、甕・小型壺は他とほぼ同様であるが、杯・高杯の比率が極めて高く



第 13 図 土器組成比率関係図(住:住居跡、不:不整形竪穴、合:合成器)

下原遺跡

特異な状態を示す。また、壺も欠いている。

包含層では、壺が過半数の 50.94% を占め、最も高く、遺構内の状況と共通する。しかし、壺の占める位置が高く総計18個体中の17個体が存在することが他と極めて異なる点である。

すでに指摘したように、住居跡と 3 基の不整形堅穴がほぼ同時期に存在した可能性は両者間の土器の接合関係からも判る。本遺跡出土の総個体数が 175 個体あり、その内、住居跡と不整形堅穴から出土したものが 69 個体になる。この 1 舛の住居跡と 3 基の不整形堅穴が不可分の関係で存在していたものならば、包含層出土の 106 個体は、この住居内住人の活動期の遺物とも理解できるし、他に住居跡が存在していたとしてもせいぜい 1 舛という極めて小単位の集落であったといえよう。また不整形堅穴の性格については明らかにしえないが、前記した杯・高杯の占める比率が他に比べ極めて高いことが何かを語るものかもしれない。（井上裕弘）

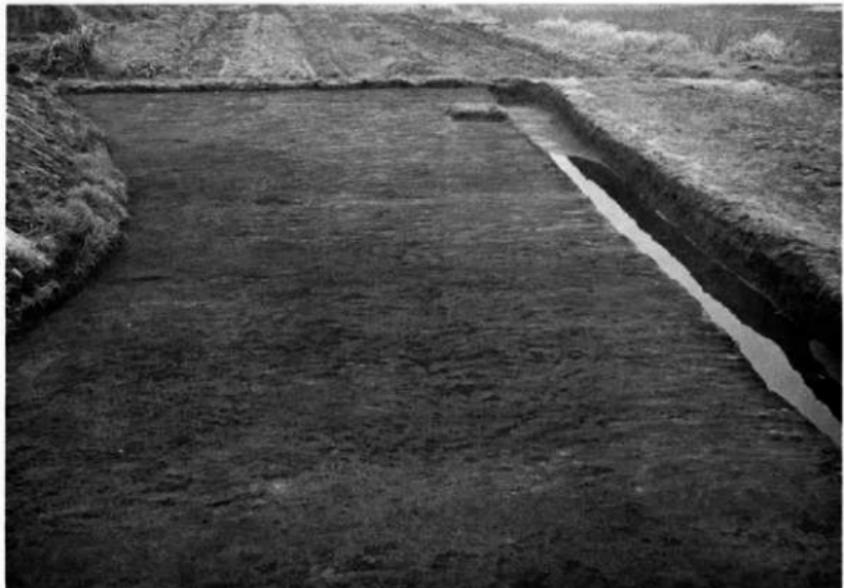
- 註 1 柳田康雄「古墳時代の遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会 1976
- 2 永井昌文・前川誠洋外「山鹿貝塚—福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査」山鹿貝塚調査団 1972
- 3 柳田康雄「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1975
- 4 小田富士雄他「有田遺跡」有田遺跡調査団 1968
小田富士雄他「孤塚遺跡」筑後市教育委員会 1970
- 5 下条信行他「宮の前遺跡（A～D 地点）」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971
- 6 柳田純孝他「財方中原遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』30 福岡市教育委員会 1974
- 7 著 6 と同じ
- 8 資料的に混在していると同時に、さらに細分が可能な土器群と思われる。

図 版

下 原 遺 跡



1 下原遺跡と門田遺跡付近航空写真（南東から）



2 下原遺跡・28地点(発掘区全景)（南から）



1 下原遺跡・29地点発掘区北半全景（南から）



2 下原遺跡・29地点発掘区南半全景（西から）



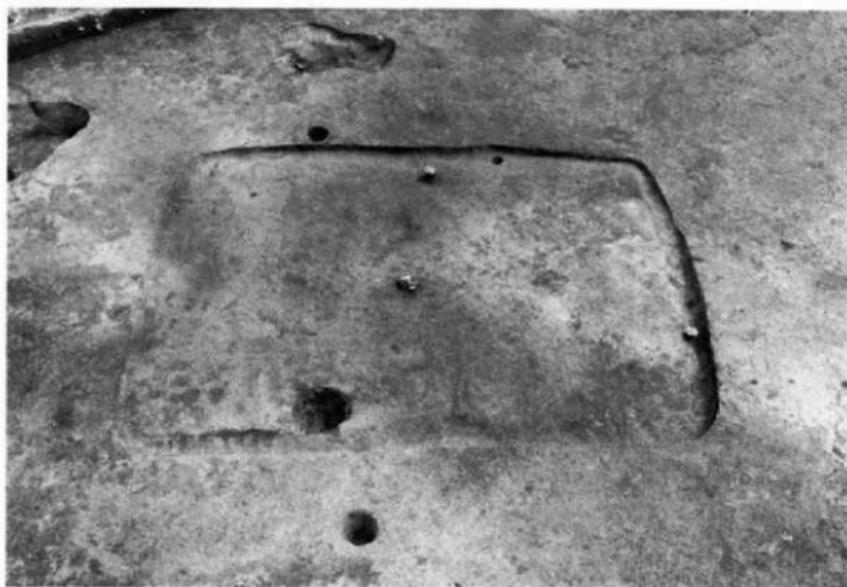
1 下原遺跡・30地点発掘区全景（西から）



2 下原遺跡・31地点発掘区全景（西から）



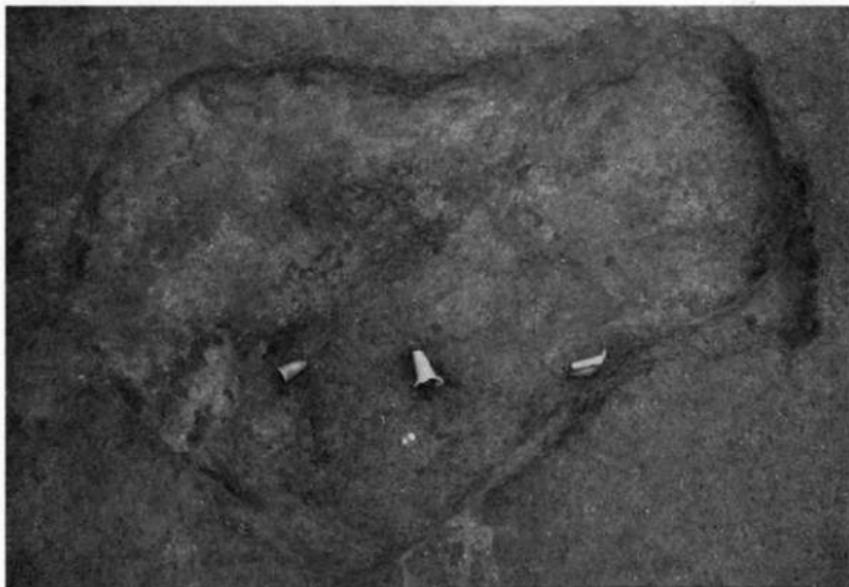
1 穹穴住居跡と不整形穹穴群 (南から)



2 穹穴住居跡 (西から)



1 1号竪穴（東から）



2 3号竪穴（西から）



3



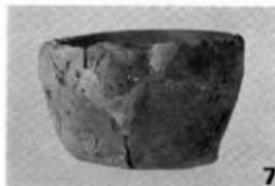
6



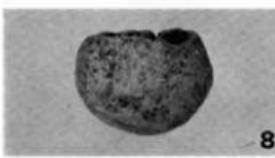
5



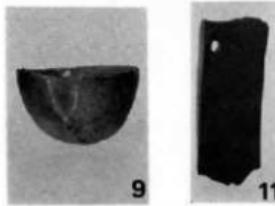
16



7



8



9



11



10

竪穴住居跡出土土師器・石器



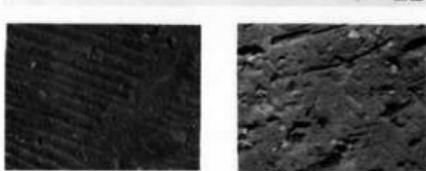
18



22



20



24



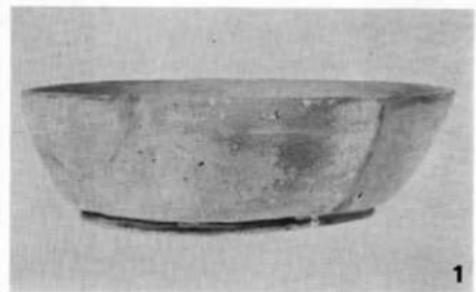
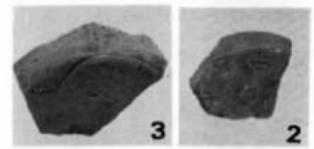
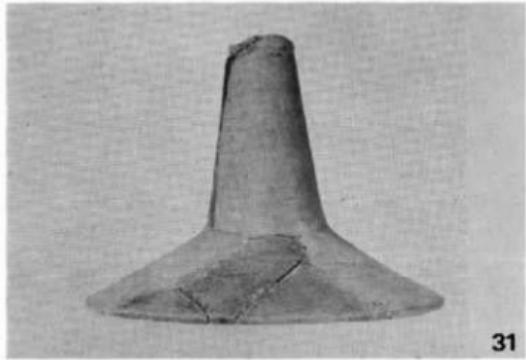
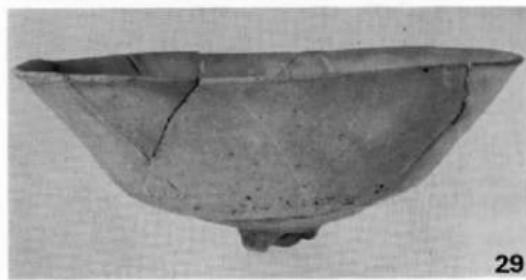
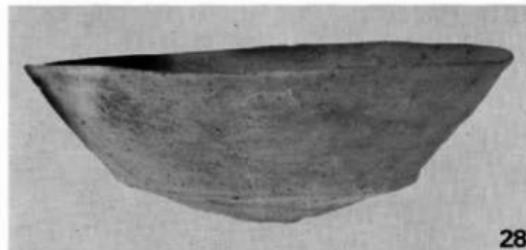
23



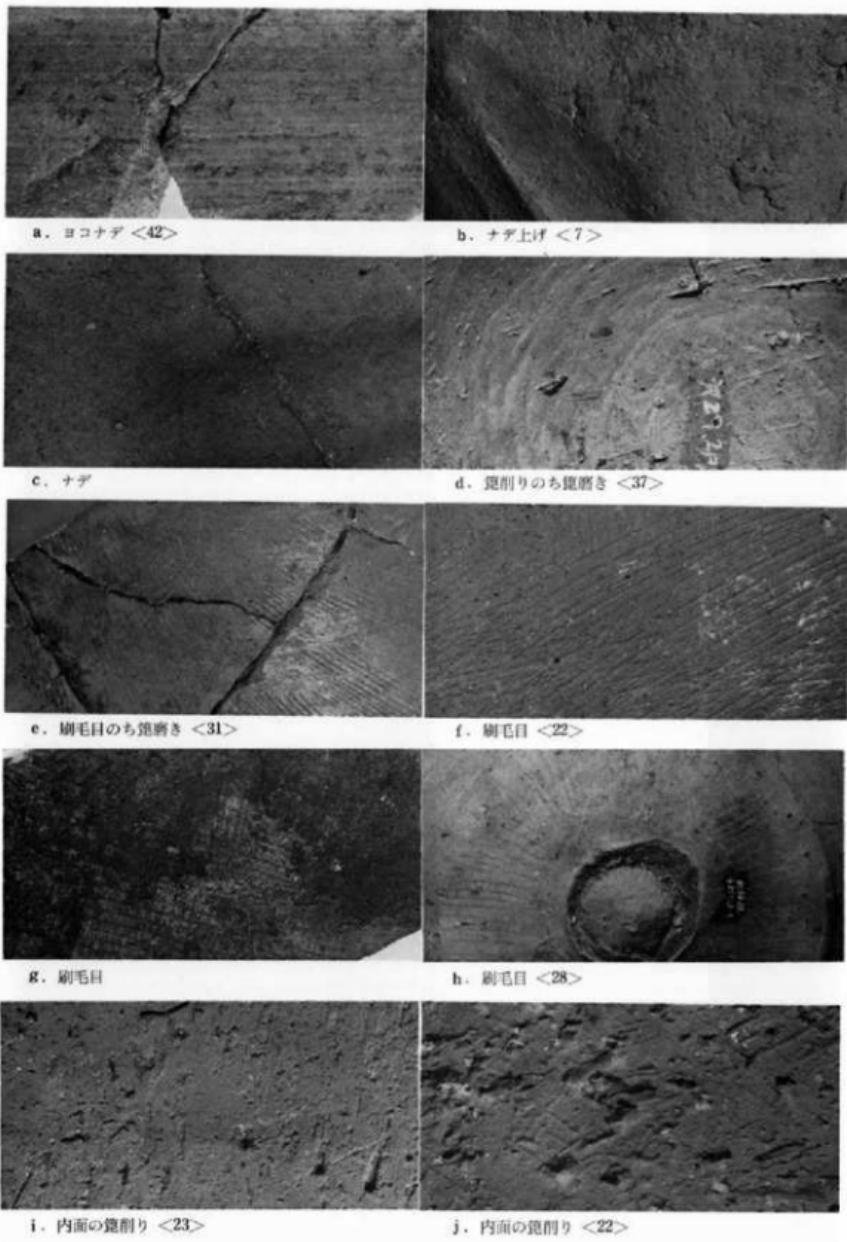
26



27



不整形堅穴・包含層出土土器



出土土師器の成形技法

IV 油田遺跡の調査

筑紫郡那珂川町大字中原字油田

本文目次

1. はじめに	197
2. 位置と環境	197
3. 調査経過	198
4. 調査概要	198
5. 遺構	199
(1) 墓柏塚	199
(2) 溝状遺構	199
6. 遺物	199
7. その他の遺物	201
8. 所見	202

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 油田遺跡航空写真 西から (井上裕弘撮影)	197
(2) 油田遺跡航空写真 北西から (井上撮影)	197
2 (1) 油田遺跡遠景 北から (井上撮影)	197
(2) 油田遺跡・32地点発掘区全景 南から (井上撮影)	197
3 (1) 発掘風景 (佐々木隆彦撮影)	198
(2) 油田遺跡・32-1地点発掘区全景 南から (佐々木撮影)	199
4 (1) 油田遺跡・32-1地点発掘区全景 北から (佐々木撮影)	199
(2) 墓柏塚 (佐々木撮影)	199
5 墓柏塚 (木下修撮影)	199

挿 図 目 次

第 1 図 油田遺跡地形図（日本国有鉄道原図 1:1,000, 高田製図）	折り込み
第 2 図 变形基・薄状遺構実測図 （佐々木隆彦・宮崎貴夫・三津井知廣実測, 佐々木製図）	200
第 3 図 施設実測図（佐々木実測, 製図）	折り込み
第 4 図 麦採遺物実測図（1）（佐々木実測, 製図）	202
第 5 図 麦採遺物実測図（2）（佐々木実測, 製図）	202

IV 油田遺跡の調査

1. はじめに

油田遺跡は、山陽新幹線車両基地工事に伴い、昭和48年度に表面調査及び予備調査を実施した。その結果、表土から埴輪の破片を探集し、予備調査のトレントからは、黒色の泥土を有する造構らしき落ち込みを検出した。その為、昭和49年5月下旬から本格的な調査を実施した。調査関係者は次のとおりである。

庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主事 加藤俊一
	同	嘱託 吉村源七
調査担当者	同	技師 佐々木隆彦
	同	嘱託 宮崎貴夫
調査補助員	三津井知廣	

なお調査にあたっては、上白水在住の諸氏に協力を頼った。記して深甚の謝意を表する。

2. 位置と環境

油田遺跡は、春日丘陵に所在する著名な遺跡群、須玖岡本・伯玄社・大南・西方・一の谷・立石・宮の下などの諸遺跡の南南西約3kmに位置し、筑紫都那河川町大字中原字油田に所在する。^{アラダ}

油田遺跡西側約1kmには、福岡平野を潤す那珂川が南北に流れ、南西約2kmには、油田古墳群(註1)が在る。南東約1kmには、標高169.7mの觀音山の裾部に古墳群が形成されていた(註2)。ほぼ南には、方形周溝墓などが確認された炭焼古墳群(註3)が約1kmの所に在り、南側1.6kmには、前方後円墳の安徳大塚古墳(註4)が位置し、北側500mには、弥生時代を中心とした門田遺跡がある。

油田遺跡は、炭焼古墳群・觀音山古墳群の麓の水田に囲まれ、梶原川によって形成された河岸段丘上の比高約2mの微高地につくられていた。

3. 調査経過

当初、32地点の発掘調査を昭和47年5月23日から5月27日まで実施した。その結果は概報に記載された様に、中世の火葬墓らしき遺構、時期不明の溝状造構、不整形ピット群などを検出した。その後32-1地点が追加され、昭和49年5月23日から6月1日まで発掘調査を実施した。以下は調査の実施経過である。

5月23日 発掘資材の搬入を行い、発掘区の南側から表土剥ぎを開始する。南側半分の表土剥ぎ終了。側道寄りで黒褐色の覆土を持つ溝状遺構を検出。

5月24日 南側半分の表土剥ぎを終了した時点で地山が明瞭でない為、中央部に1m×5mの任意トレンチを設定し、掘り下げる。遺構の検出なし。

5月25日 南側半分からは殆んど遺構確認ができなかった為、北半分の表土剥ぎに専念する。同時に側道わきの溝状遺構の検出に努める。北半分からは、東西に走る溝状造構と不整形円形の落ち込みを確認。

5月27日 北半分の表土剥ぎを続行。昨日確認した溝状造構の北西及び南東で、それぞれ1条の溝状造構を検出。他に不整形円形の造構を4基検出。

5月29日 溝状造構及び不整形円形の造構の発掘終了。発掘区の清掃及び写真撮影終了。側道わきの溝状造構の調査の為、発掘区を東側に拡張する。拡張区で溝状造構を切っている小児用廐棺を検出。廐棺の発掘を開始する。

5月30日 昨日検出した廐棺の発掘終了。写真撮影を終了し、実測を開始する。

5月31日 廐棺とそれに切られた溝状造構の実測終了。発掘区の平板実測開始。

6月1日 発掘区の平板実測終了。午前中に発掘調査を完了した。

4. 調査概要

油田遺跡は、昭和48年に予備調査を実施し、黒色の覆土を有する溝状造構の一部を確認した。また弥生時代後期の廐棺の破片を表面探集した。これらの状況から、後期の廐棺の出土を想定し、本格的な発掘調査を実施した。

発掘区西側は家庭建設により削平され、東側は新幹線車両基地工事に伴う側道の為、発掘不可能であった。南半分は、新たに整地されており、遺構は検出できなかった。わずかながら、側道わきは整地されておらず、黒褐色の覆土を有し、東西に走る1条の溝状造構を検出した。その為、発掘区を東側に拡張した結果、溝状造構を切った状態で小児用廐棺1基を検出した。一段高くなった北半分からは、黒色の覆土を持つ3条の溝状造構及び5基の不整形の造



第1図 油田地勢地形図 (1/1,000)

構らしき落ち込みを検出したが、いずれも埋土中から現代の投棄物が出土し、新たな落ち込みであることが判明した。

5. 遺構

(1) 壱棺墓（図版4-2、第2図）

壹棺墓は、南東に延びる溝状造構（第2図）を切っている。壹棺の主軸は、溝状造構の主軸にはほぼ一致している。墓墳は新幹線工事に伴う側道工事の為、かなりの削平を受けており、長軸110cm、短軸45cmを測り、長軸円形を呈している。主軸方位は、N74°Wであった。

壹棺も工事の為、かなり破碎されていたが、墓壇に対して水平に埋葬されていた。個体数は、3個体から構成されていた。つまり複合口縁を持つ壹形土器を真中にして、左右に壹形土器を使用している。左の壹形土器は、胸部下半を作成的に打ち欠いた壹形土器の打ち欠き面を覆口させている。右の壹形土器は壹形土器の口縁を覆口させており、特異な構成形態を呈している。3個体とも日常什器を転用したものである。壹棺内の遺物は、検出できなかった。

(2) 溝状造構（第2図）

壹棺墓に切られた深さ17cmの浅いU字形の溝状造構である。覆土は黒褐色を呈し、壹棺墓の西方で溝は終る。溝状造構が南東方向に延びる可能性があったが、側道工事で削平されていたため判明しなかった。遺物の検出は見受けられない。

6. 遺物

壹形土器（1）（図版5-1、第3図1） この壹形土器は、複合口縁の壹形土器を真中にして左側に使用していた。底部は削平を受けており欠損している。口径は22cmを測り、器高は35cm程度であろう。「く」字状に外反する口縁部は、緩やかなふくらみを有し、側面に細い沈線をめぐらした口縁端部へと続く。最大径が器体中央部にあり25.5cmを測る。底部は緩やかな張りを呈している。底部はやや丸みのある平底であろう。

調整手法は、器体内外面とも刷毛目を施している。器体外面は口縁部から器体中央部にかけ

抽田道路

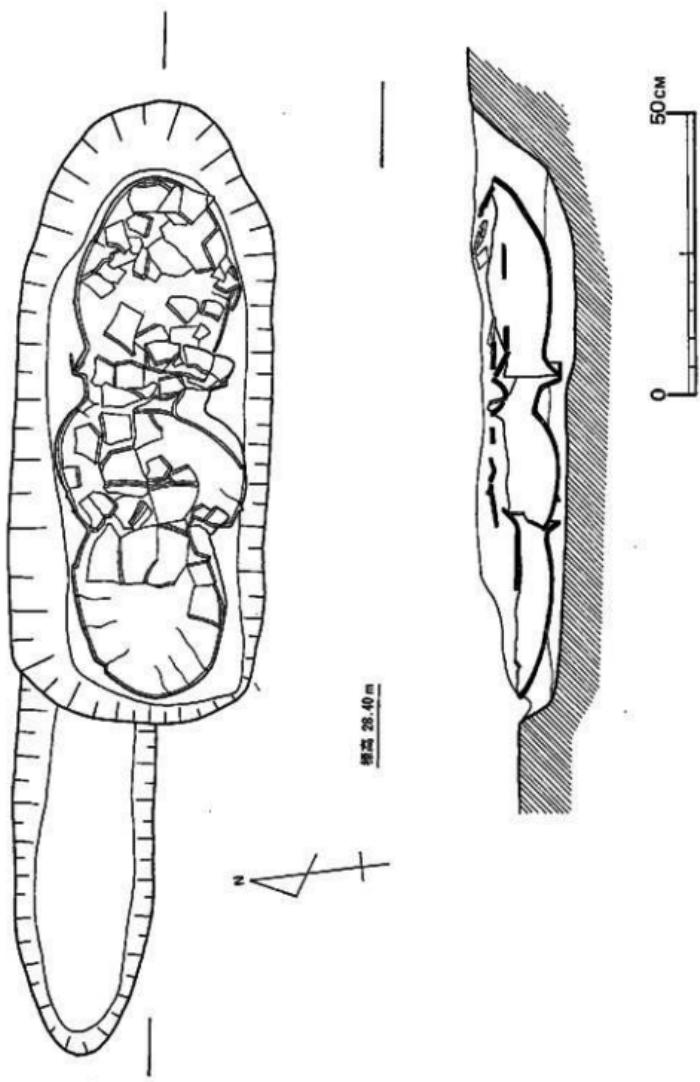


图 2 四 瓦格底·萨伏耶排水渠图 (1/10)

て粗い刷毛を施した後、細かい刷毛で仕上げを行い、器体下半部は、粗い刷毛のまま調整を行っている。器体内面の調整手法は、全面に細かい刷毛を密に施している。また部分的にススの付着を見る。焼成は良好である。胎土は黃色味の強い灰褐色を呈し、砂粒子及び金雲母を少許含む。時期は最古式土師器の範疇に含まれる。

壺形土器 (2) (図版5-2, 第3図) 真中の壺形土器に対して右側に使用していた壺形土器である。ほぼ完品に近いが、腹部の一部を欠損している。口径は22cmを測り、器高は38.6cmを測る。短く「く」字状に外反した口縁部は、(第3図1)の壺形土器と同様、側面に沈線を有した口縁端部へと続く。最大径が器高中央部にあり25.8cmを測る。器体は長胴形を呈している。底部は尖り気味の丸底を呈している。

器体外面の調整手法は、口縁部は横振でと粗い刷毛とで仕上げている。頸部から腹部にかけては、粗い刷毛仕上げをし、器体下半部は、撫で仕上げを行っている。器体内面は、口縁部に粗い横刷毛を施し、頸部の破を境に底部まで細かい刷毛を施した後、撫で仕上げを行っている。一部刷毛目の痕跡を残す。焼成は良好である。胎土は淡赤黃褐色を呈し、大粒の石英粒子をかなり含み金雲母を少量含むが、緻密である。時期は最古式土師器と考える。

壺形土器 (図版5-3, 第3図3) 口径23cmを測る所謂複合口縁の壺形土器である。腹部下半部を作為的に打ち欠いている。緩やかな凹凸を持つ頸部から大きく外反して疑口縁をなし、稜を境にほぼ直立した口縁部へと続く。口縁端部の平坦面には、沈線をめぐらしている。頸部から球形に大きく張った器体の下部には、下り気味の1条凸帯を貼り付けている。

調整は、口縁部内外面とも横振で仕上げをし、頸部から凸帯上部には、左下りの叩き目を施している。叩き目の上から細かい刷毛で調整をしている。凸帯の廻りは横振でを行い、凸帯を境に叩き目は消え、刷毛のみで仕上げている。下部は横振でをしている。内面は全面に刷毛仕上げを行っている。焼成は良好である。胎土は赤褐色を呈し、砂粒子を多く含む。内面には一部丹塗りの痕跡をとどめている。時期としては最古式土師器の範疇に入れるべきであろう。

7. その他の遺物

壺棺 (第4図) 口径77.6cmを測る壺棺の復原実測図である。胸部以下は欠損している。「く」字状に外反した口縁部は側面に一条の沈線をめぐらし、肥厚した口縁端部へと続く。頸部には一条凸帯を貼り付け、「×」状の斜行沈線文を二段に施している。口縁部外面から凸帯までは、横振でと刷毛で仕上げをし、内面も横振でと刷毛で仕上げている。また内面には、部分的に指頭圧痕が見受けられる。

焼成は良く、胎土は黄褐色を呈し、大粒の砂粒子を多く含む。時期は西新式に含まれる。

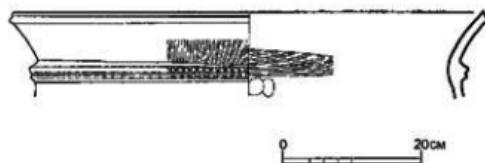
油田遺跡

変形土器（第5図1）

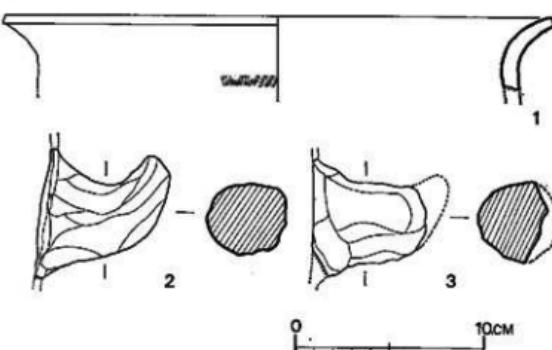
表面採集の土器である。口径29.2cmを測る復原実測の変形土器である。胴部以下は欠損している。口縁部は大きく外反し、平坦な側面の口縁端部へと続く。口縁部内外面とも横擦でを施し、頸部は細かい刷毛で仕上げている。焼成は良好。胎土は黄赤褐色を呈し、砂粒子を含むが、緻密である。

把手（第5図2・3）表面採集資料である。先端部を欠損している。全体に箇削り痕を残している。

る。焼成は不良。胎土は黄褐色を呈し、砂粒子を多く含み不良。部分的に二次的な火を受けている。



第4図 表面採集物実測図(1) (1/8)



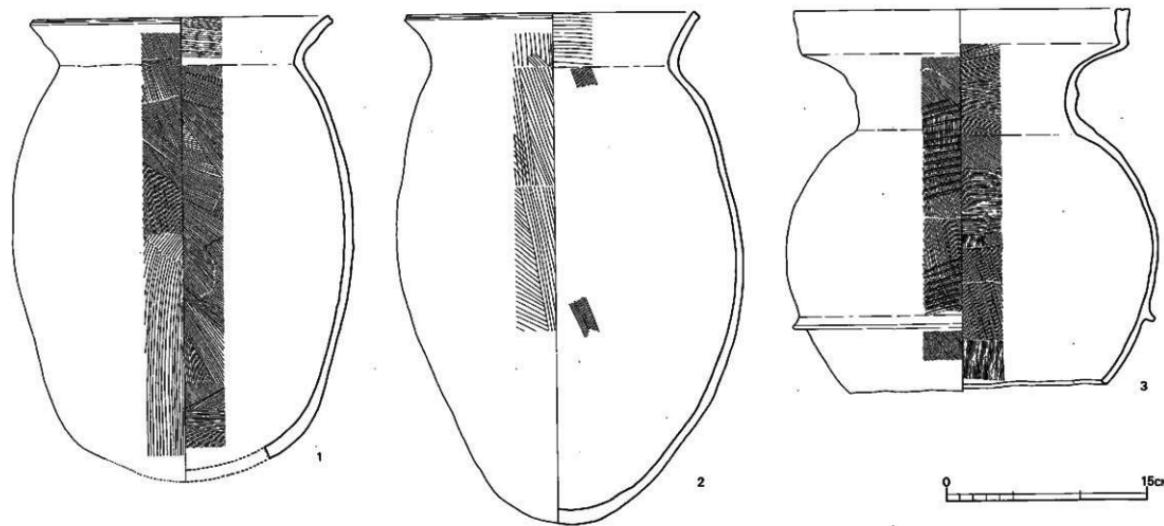
第5図 表面採集物実測図(2) (1/3)

8. 所 見

本遺跡出土の變形について若干ふれてみたい。

変形土器（第3図1）は、胴部の張り具合、丸みのあると思われる平底など弥生時代最終末の名残りを留めているが、口縁部のふくらみなど一部最古式土師器的様相を呈する。これに対して変形土器（第3図2）は、長胴の器体、尖り気味の丸底、焼成などから、より土師器的様相が強い。しかしこの段階では、2個体とも器体内面に刷毛を施し、内面箇削り手法の出現は見られない。

壺形土器（第3図3）は、内傾する口縁部から一段進んだほぼ直立する段階のものである。器体外面には、叩き目が見受けられるが、その上から刷毛で調整している。器体内面も刷毛で



第3圖 雜格實測圖(1/3)

仕上げており、内面削りは認められない。器体下部には凸帯を有し、弥生時代最終末の様相を留めているが、最古式土師器の範疇に入れたい。

以上の諸点からこの墓棺は、内面削りの出現段階の直前か或いは内面削りと共に存する段階の所産と考える。
（佐々木勝彦）

- 註 1 渡辺正氣・柳田康雄「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42 1969
2 井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1973
3 宮小路賀宏・柳田康雄「炭窯古墳群」『福岡県文化財調査報告書』37 1968
4 井上裕弘「安徳大塚古墳群の発掘調査」『教育福岡』No. 260 福岡県教育委員会 1971

図 版

油 田 遺 跡



1 油田遺跡航空写真（西から）



2 油田遺跡航空写真（北西から）



1 油田遺跡遠景（北から）



2 油田遺跡・32地点発掘区全景（南から）



1 充掘風景



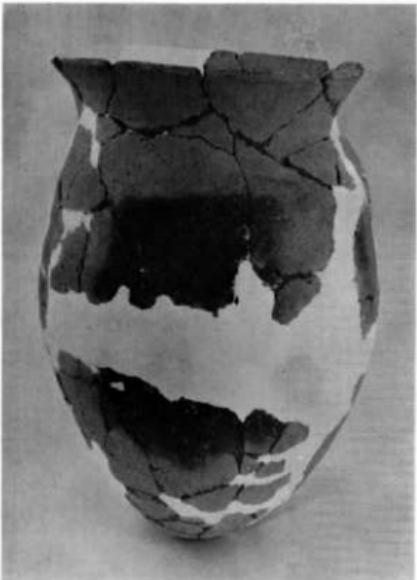
2 油田遺跡・32-1地点充掘全景（南から）



1 油田遺跡・32-1地点発掘区全景（北から）



2 窯枕基



復元

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 3 集

昭和 52 年 3 月 31 日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6-29

印 刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区那珂 142